

鎮守府出入り業者の俺

土管侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒かったり白かったり小さかったり大きかったり毒があつたりする様々な生物から鎮守府を守るため、可愛いあの娘や美人を守るため、俺は今日も戦うのだ。これはそんな俺の日常を綴った物語である。

とか言つて見るけど、実際は大した事ない日々に一喜一憂するだけのお話です。

目次

黒くて光ってる素早いアイツ	2
黄色いキラー集団	10
営業再開	19
触るとかぶれる毛むくじやら	26
ドクガ撃退作戦その1	34
ドクガ撃退作戦その2	42
百足	51
蝕まれる司令部	59
物陰注意報その1	68
物陰注意報その2	77
黒くて光ってる素早いアイツ	リターン
ズ	84

見た目はアレですけど悪いやつじゃない んです、信じて下さい	94
広樹、暗躍ス？	103
忍び寄る前歯	108
番外編 お出かけ	117
チャバネール戦争I	131
チャバネール戦争II	140
チャバネール戦争III	150
チャバネール戦争IV	160
後藤田広樹、とある休日にて	171
鎮守府の一夜	183
暗がりに潜む野生	196
甘味を求めてI	210

君は何の子？	ツチノ……	その2	
336			
君は何の子？	ツチノ……	その1	
			321
アブないやつら			
			308
土竜つて読める？	その3		
			300
土竜つて読める？	その2		
			288
生ゴミとかに集まって来ます			
			276
血い吸うたろうか			
			265
土竜つて読める？	その1		
			250
8本足が迫る			
			245
古新聞の記憶			
			234
探し物はなんですか			
			221
甘味を求めてII			

番外編 夏の鎮守府	その1		
455			
開発工廠 駆除作業日1			
441			
鳳翔さんのお店			
427			
アライグマ包囲網			
413			
399			
森の中には何がある？	いや、居る？		
			385
る その3			
			373
る その2			
			363
る その1			
			348
ハイイロだけど黒とか茶色だったりもす			
			348
ハイイロだけど黒とか茶色だったりもす			
			348

番外編	夏の鎮守府	その2	470		
カマドウーン	—	—	483		
物置の中ぜんぶ出す	—	—	497		
開発工廠	駆除作業日2	—	512		
百足、再び	—	—	527		
番外編	鎮守府公式チャンネル	—	543		
黒くて光ってる素早いアイツ	フォーエ	—	557		
バー	—	—	557		
開発工廠	駆除作業日3 (暫定最終日)	—	571		
旧棟・周辺調査	—	—	585		
蟻局を巻くモノ	—	—	598		
ヌメヌメしてますが何か (本人目線)	—	—			
					614
	旧棟・内部調査準備	—			628
	番外編	鎮守府公式チャンネル			深夜の
	鎮守府	—			640
	旧棟・内部調査1	—			655
	旧棟・内部調査2	—			669
	旧棟・内部調査3	—			683
	あなをほる1	—			698
	あなをほる2	—			711

黒くて光ってる素早いアイツ

やあ諸君、私の名前は後藤田広樹。苗字はあまり耳にしない言葉かも知れないが名前には有触れたものだ。

私が居るのは第十七鎮守府。近海の警備防衛や一般船舶の護衛、艦載機妖精の訓練等を主に担当している中規模の鎮守府である。

そんな所に居る私は当然、ここの提督……ではないんですよねこれが「すいませんねえ朝早く」

「いえいえ、何時もお世話になってますから」

俺は後藤田広樹。この鎮守府に程近い町で「害虫駆除」を生業にしている者だ。

目の前を歩くこの人が提督。総勢200名近い艦娘を束ねる大将さんである。

事の発端は今朝。「眠い」と唸る親父を叩き起こし、お袋の作った朝飯を食って店を開けた瞬間の電話だった。

「駆逐艦寮で黒いのが出ましてね。すいませんが来て頂けますか」

「承知しました、30分ほどで向かいます。なるべく人払いをしておいて下さい」

親父は一向にトイレから出て来ないので置いて来た。正門に店のワゴンで乗りつけ、

警備の人とやり取りして通して貰い、来客用の駐車場に停めた所で提督さんが出迎えに来てくれる。台車に荷物を載せてゴロゴロと駆逐艦寮に辿り着いた。寮に住んでいる娘たちで人だかりが出来ている。

「それで、遭遇したのはどなたで？」

「こっちの2人です」

青いロングヘアとビー玉のように透き通る目が綺麗な娘と、ピンク色のサイドテールをした娘が手を握り合って半べそのままカタカタ震えていた。

「後藤田プロテクトクリーンです。何所で何匹ぐらい見たか話して貰えますか」

2人とも支離滅裂にあうあう発言するだけで要領を得ない。仕方ないので一番上のお姉さんに通訳をお願いした。

「1階の洗面所で黒いのが3匹ぐらい……だそうです。うう……気持ち悪い」

確かこの娘は白露ちゃん……だったかな。仕事で来てる時はよく挨拶をしてくれる快活なイメージだ。

「なるほどね、了解。それじゃあ今から作業に入りますので火元責任者の方はご同行願えますか」

全員の視線がある娘に集中する。こっそり逃げようとした所を5人に捕まって引きずられて来た。確か駆逐艦の吹雪とか言う娘だったと思う。

「ほ、ほら吹雪ちゃん、お仕事だよ」

「さっすがふぶ姉、火元責任者なんて私には真似出来ないなあ」

「……どうぞ」

「ご……ごめんなさい、でもお姉ちゃんが、その、責任者だから」

「まっ、頑張んなさい」

「やだあく勘弁してえ〜」

「こつちも半べそだ。どうしたもんか…」

「あれでしたらもう少し年長の方も一緒に」

1人、手を挙げた者が居る。記憶が正しければ軽巡の娘だった筈だ。

「私で良ければ、一緒に行つてあげてもいいわよ〜」

何だか優しくそうだがそれ以上にえげつない殺気のようなものを感じる。とても奥底が見えないのが印象的だった。

「だづださんおでがいじまず」

火元責任者は泣きながらその人に抱き着いた。頭を撫でられて少し落ち着いたらしい。

「では行きましょうか」

「ひゃい」「はあ〜い」

3人は寮の中へと足を進める。中に入るのは初めてではないが、ここは案内をして貰う方が立場的にも良いだろう。

「洗面所はどこかな」

「……あつちです」

入り口から左の方を指差した。遠くの突き当たりらしい。初っ端から薬剤を撒くよりは冷凍スプレーの方が自分にもダメージが少ないから、仕事道具の方は温存する事にした。右手にスプレーを握ったまま洗面所の中を覗き込む。

「……いるいる」

一番手前の水場に3匹固まっている。そういう所集まるのは仕方のない事だ。何せ連中は髪の毛だつて……いや、これは言わないでおこう。スプレーにロングノズルのアタツチメントを装着して奴らにスプレーを向けた。

（頼むから動くなよ〜）

白い煙が一直線に噴出された。2匹は仕留められたが、1匹がそこから逃走を図る。狡猾い事に床へ飛び降りてこちら目掛け疾走して来た。火元責任者の吹雪が悲鳴を挙げるが、隣の彼女は微動打にしない。俺自身も思わず退いて易々と突破を許してしまつた。ヤツが彼女らの足をすり抜けようとした瞬間、突如として槍のような物が具現化され、走り抜ける奴に目掛けてそれが突き刺さつた。

「だづだざあん!!」

「あらく、自信は無かつたけど案外簡単だったわあ〜」

そう良いながらヤツの突き刺さった槍を床から引っこ抜く彼女は、まるで悪魔か何かのような微笑みを浮かべていた。恐怖が俺を支配していく。

「……………お、お見事です」

あれ、俺いらなくね? まあいい。後処理を済ませて乙女の花園から早々に退散を決め込んだ。凍り付いた2匹も彼女らの見えない所で天に召される。

「それではこの辺で失礼致します。料金については後ほど請求書をお送りさせて頂きますので、よろしく願います」

「ありがとうございます、何でしたらお茶でも如何ですか?」

「いやあ……普段病原菌を媒介するようなのと戦つてますからそれは」

「気にしないで下さい。奴らが出現しておいて言えた事じゃありませんが、これでも衛生関連には注意しているんです。どうぞどうぞ」

言われるがまま、俺は敷地内の甘味処へ連れて行かれた。店の前にはちゃんと消毒薬が置いてある。なるほど食品を扱う所には常備するべき物だ。両手に消毒薬を塗ってよく洗う。

「間宮さん、お茶と団子のセットを2つ」

「はい、いただきます」

「あ、支払いは」

「奢らせて下さい」

「いや、かし」

「まあまあ」

「お待ちせしましたー」

思わず一部分を凝視してしまいそうなのが視界に現れた。それを《なるべく》見ないようにしながら挨拶する。

「あら、確か業者の方でしたよね」

「ああ、はい、後藤田プロテクトクリーンの者です。何度かお邪魔させて頂いてます」
普段の癖か名刺を差し出してしまふ。ふんわりと漂ういい匂いが色々な物を刺激した。それは決して団子のおいではない。

「ありがとうございます。何かあったら頼りにさせて貰いますね」

「お待ちしてます。年一回の駆除剤もぜひうちを」

「後藤田さん、営業はその辺にして」

「え、あ……いや、これは失礼」

見た所、指輪はしてない。そんな下種な勘繰りを振り払って席に着いた。

「どうぞどうぞ、間宮自慢の一品です」

「いただきます」

団子を頬張る。上品な餡子の甘さが口に広がった。身の丈に合わない贅沢な時間を過ごしている気分になる。その後、十分にお礼を述べて鎮守府を後にした。

店に戻ると親父が床を這って移動しているのが目に入る。便器から立ち上がろうとした際に腰をやったそうさ。

「広樹、お父さん病院に連れてくから店の方は任せたまよ。捌き切れなかつたら断つてい
いからね」

「了解」

「イデアイデア」

これは暫く忙しくなりそうさ。休みも親父が復帰するまでは無いんだろうなとか思
うと気が滅入る。ため息しか出ない。

「……美味かったなあ」

団子の味が反芻される。それを動力源に今日を頑張る事にした。取りあえず予約の
入っていた訪問先に向け車を走らせる。行き先は普通の住宅街だ。平屋の一軒家でシ
ロアりに悩まされているらしい。

「どうも、後藤田プロテクトクリーンです」

迅速・的確・丁寧をモットー 地域に根ざした害虫駆除業者 後藤田プロテクトク
リーン 見積もりの方も無料で対応しております

あと……嫁さんもこっそり募集中です なんてね…

(間宮さんかあ……いやいや、俺には無理だ)

広樹です、ヘタレです

黄色いキラークラウン

やあ諸君、私の名前は後藤田広樹。この前も言ったからもう以下略で。

今日もまた提督さんからの電話で俺は鎮守府へ向かっていた。鎮守府敷地の外苑部で草刈をしていた別の業者さんがスズメバチに刺され、鎮守府から緊急搬送されたらしい。このままだと危険なので巣を除去して欲しいとの依頼だ。正直、俺も仕事で一回刺されているので次は死ぬかも知れないから怖いながらも仕事である。

俺、この仕事が終わったら間宮さんの所でまた団子を食べるんだ。

やべ、背筋に何か冷たいのが走った。とか思っていると鎮守府の正門に到着。警備の人とも殆ど顔見知りだが、一応形式的な確認作業だけ終えて中に入れて貰う。駐車場に車を停めると、提督さんと一緒に黒髪のロングヘアが綺麗なメガネをかけた娘が出迎えた。

「お世話になってます、後藤田さん」

「いつもありがとうございます」

そして横に居る娘の紹介が始まった。

「大抵は執務室に居るんですが今日は事情があつて、後藤田さんの仕事に同行したいと

言うので連れて来ました」

「初めまして。軽巡洋艦、大淀と申します。後藤田さんのお話は提督から何度かお聞きしていました。今回、当方の敷地内で怪我人を出してしまいましたので、その報告書作成のためにご同行させて下さい」

とても綺麗な声と雰囲気だ。まるで「清楚」がそのまま人の形になったような印象を受ける。思わず言葉に詰まったが、取りあえず名刺を差し出してその場を繋げた。

「ご丁寧ありがとうございます。改めまして後藤田と申します。一応、父が店主ですが最近腰を痛めまして、殆ど自分が経営者みたいな状態です。もし害虫害獣でお困りでしたら、こちらまでぜひご連絡を」

「後藤田さん、営業はその辺で」

「あ、いえ、これは失礼しました」

「ありがとうございます、何かありましたら頼らせて頂きますね」

提督さんの中で俺は「営業熱心な跡継ぎ」と言うイメージなんだろうがそれは大きな間違いである。男子高で3年を過ごした俺は、卒業する頃にはすっかり女性への免疫が無くなっていたのだ。近所の知り合いが一軒家等の仕事先はまだしも、女性の比率が9割以上を占める鎮守府は目に毒過ぎて、こうしてないと終始ニヤニヤしモジモジするだけの気持ち悪い生き物になってしまう。だから全てを仕事に全振りして耐えているの

だ。

おいおいそれに何だよそのスカートは。見えちゃいけない一部が見えちゃってるじゃんか。隠す気あるんですかそれ：

「では現場の方へお願いします」

3人でそこそこの距離を移動した。関係者以外が通っても問題ないルートを選んで進んでいく。その途中、3人の艦娘たちと出会った。

「あー害虫のお兄さんだ！」

何だかとても傷ついた気分になった。悪気はないんだろうけどそれは止めてくれ。せめて駆除まで言つて欲しかった。

「白露ちゃん、それは言葉が良くないから後藤田さんでいいよ」

「あ、そうだね、ごめんなさい」

バツの悪そうな顔で謝る。やはり素直な娘はいい。イツチバーン

「白露姉さん、誰だい？」

その後ろから、三つ編みの髪を前に流した見た事のない艦娘が現れた。更にその後ろから白髪の艦娘も顔を覗かせている。

「害虫駆除でよく鎮守府に来てる民間の人だよ。後藤田さん、こつちの2人は妹の時雨と夕立、よろしくね」

「あなたが後藤田さん？提督から何回か話は聞いてるので名前だけは知ってました。時雨です」

「夕立です！よろしくね後藤田さん！」

「よろしく。もし部屋に得体の知れない虫が出たら電話してくれ、すぐに行くし安くするよ」

「後藤田さん後藤田さん、名刺は結構です。そういう場合は私の方から連絡しますので」「あ、いや、毎度失礼を」

3人がはにかんだ。掴みは悪くない。取りあえずこの場は凌いだと言えよう。しかし右を見ても左を見ても何で艦娘はみんな容姿だけじゃなく性格までレベルが高いんだ。俺のような男には居づらい場所だ。そんなこんなで敷地のかなり外周部に到着。鬱蒼とした木々の生い茂る倉庫の裏手に入っていった。そして…

「あれです」

「……これは中々の」

壁と屋根の接合部分に、直径1mはあろうかと言う巨大な蜂の巣があった。しかも国内最強と恐れられるキイロスズメバチである。ブンブンと不快な音が10m以上離れていても聞こえて来た。

「……分かりました。すいませんが一旦戻りましょう」

「おや、どうしました」

「同業者を呼びます。あの大きさはちよつと1人では厳しいんですよ。それに自分は仕事の最中に一回刺されてるんで、次やられると危ないんですよ」

方々に電話を掛けまくった結果、4人の同業者が駆けつけてくれた。全員親父の知り合いである。梯子の係、殺虫剤を巣に直接噴霧する係、巣の周囲で殺虫剤を撒いて蜂の行動を制限する係、巣を切り落とす係と、役割分担を決める。自分は行動を制限する係として防護服に身を包んだ。まるで化学消防隊のような格好をした5人が集結する。

「広樹ちゃん一回やられてるもんな、ここは任してよ」

「親父さんの腰治った？今度集まって飲もうって伝えてくれや」

「でっけえなあおい、大物だわ」

「あれ酒に漬けるといいのが出来上がるんだよなあ、楽しみだ」

「ありがとうございます、終わったら甘い物でもどうですか」

なんて世間話をしながら仕事を進めた。巣まで伸びる梯子を掛ける前から周りをブンブン飛んで威嚇し始める。殺虫剤をこれでもかと撒いて巣の外に居る蜂を次々に撃墜。巣穴に掃除機が突っ込まれて中の蜂を可能な限り吸い出し、最後に殺虫剤を巣穴に直接散布していく。粗方の駆除が終わり、周りを飛んでいる蜂も殆ど居なくなった。防護服を脱いで休憩モードに入った所へ、大淀さんが冷たい麦茶を持って来てくれた。

「皆さんお疲れ様です。お茶をお持ちしましたので、少しお休みになって下さいね」

おじさんたちも大淀さんの雰囲気にてられてニヤニヤし始めた。おい止める。荒れ果てた荒野に咲く一輪の花に手を触れるんじゃないスケベ親父どもが。

「先輩方、あんまり度が過ぎるとご自宅に報告しますよ」

「いやそれは勘弁!」

「止めてよ広樹ちゃん!」

「冗談キツイぜ!」

「お助け!」

おじさんたちの態度が急変した事により場の空気が変わった。だが大淀さんはあんまりそれを理解していなかったらしく、不思議そうな顔をしている。すると、何所からともなく嫌な羽音が聞こえて来た。瞬間的に辺りを見回すと、弱々しく飛ぶ一匹のスズメバチが視界に入る。今にも落ちそうだが只ならぬ雰囲気をもとつて見えるように見えた。複雑な軌道を描きながら大淀さんの背後に近付いていく。考えるよりも先に体が動いていた。

「大淀さん!」

両者の間に割って入った。左手で思いっ切り弾き落としたつもりだったが、チクツとした痛みが嫌な予感を残す。草むらにポトリと落ちるスズメバチを余所に、左手を襲う

鈍痛で息が遠くなった。

「ぐう」

「後藤田さん!？」

ああ……やっちゃまった。あの時と同じ痛みがやって来る。膝を着いて苦しむ俺に大淀さんが必死で呼び掛けてくれた。そんな綺麗な声で名前を呼ばれたら、何かもう幸せな気分になってしまおう。肉親以外の女性にここまで必死に名前を呼ばれるなんて俺の人生には今まで無い事だった。

「大淀さん……大丈夫ですか」

「何をしてるんですか！一声言ってくればそれで済んだのに！」

段々と気分が悪くなり、意識が遠のいていく。ごめんな親父、お袋。跡も継げないバカ息子を許してくれ。

「広樹ちゃん!!」

そんな事を思っていたら、おじさんたちが群がって来た。スズメバチにやられた際、アナフィラキシーショックの症状で気道が狭くなって窒息するのを防ぐ「ショック体位」と呼ばれる姿勢にされる。嬉しい事ではあったが、正直おじさんたちに無理やり組み敷かれるのはいい気分ではなかった。

「しつかりしろ、俺の声が聴こえるか？」

「救急車お願いします！」

「荷物の中にキットがあるから早く取って来い！」

「任せろ！」

そこから先は、流動的に時間が流れていった。ショック体位のまま木陰に運ばれ、吸引キットで毒と針を吸い出して貰い、汲んで来た水で患部を冷やし続ける。それから鎮守府正門に駆け付けた救急車で病院に搬送された。あまり多くの自覚症状は無かったが、大事をとって数日入院となる。後から見舞いに来た大淀さんが左手を優しく握ってくれた時は「惚れてまうやろー！」なんて叫びそうになったがそれは当然抑えた。

そして鎮守府からの連絡で駆け付けた母親に「もつと考えて仕事をやれ」と理不尽に怒られた。しかしその言葉は最もである。前に出ないでも出来る事はもつとあつた筈だ。それに安全確認を怠つたのも自分の責任だし、鎮守府側としっかり打ち合わせしないでこつちの主観で仕事を進めてしまった事も良くない。

頭の中が仕事の事で埋め尽くされて嫌な気分になって来たので今日はもう寝る事にした。どうせ10分もしない内に消灯だ。布団を引き上げて眠りに入ろうとする。

後藤田プロテクトクリーン 臨時休業のお知らせ

「まことに勝手ながら当店店主のぎつくり腰と従業員の入院に伴いまして、人手不足と

なりましたので数日間ではあります但し休業とさせて頂きます
（広樹です、まだちょっと痛いです）

営業再開

おつす、後藤田広樹つす。無事退院しました。親父の腰も治ったので本日より営業再開となります。

それから暫くは溜まっていた仕事や先延ばしにしてしまった駆除の案件を片付ける事に忙殺され、気付けば2週間近い日々が過ぎ去っていた。あれ以来、鎮守府からの依頼は無い。まあそう何度も何度も呼び出されるようじゃ、あそこは害虫の王国である。こつちとしては売り上げに繋がるし美味しい甘味を味わえるチャンスでもあるから嬉しいが、そつちばっかりしてられないのが零細企業の辛い所だ。

今日の店番はお袋。親父と俺は車か徒歩の訪問駆除や見積もり、実状調査や営業を当番制でこなす。今日は俺が足で営業に行く日だ。朝起きて身支度を済ませ、親父とのトイレ争奪戦で勝ったり負けたりしたら仕事が始まる。最初の行き先は数百メートルで行ける距離の隣町にある会社だ。

「失礼致します。昨日にお電話を頂きました後藤田プロテクトクリーンと申しますが」「あー、お待ちしてました。どうぞこちらへ」

初老の男性が出迎えた。オフィスは机が10個も入らない小さな会社だ。壁は書類

の棚で埋め尽くされている。

「申し遅れました。当社の取締役をしております井口です」

2日前にここから電話があつた。一ヶ月ほど前にGが出現し、くん煙剤や毒エサを撒いているにも関わらず数が減らないとの相談である。こういうのは直接目で見た方が分かりやすいので訪問と相成つた。

「後藤田です。よろしくお願い致します」

名刺交換をして現場へと向かつた。場所は奥まつた所にある給湯室。換気扇はあるが窓は無い。そして生ごみのおいがした。

「餌の設置からどれぐらいの時間が経つてますか」

「一か月ぐらいだと思ふんですがね、効果があるんだかないんだか。あ、今そこに居ますね」

シンクと冷蔵庫の隙間に何か飛び込んでいった。見間違ふ筈がない。奴らだ。

「では色々調べてみます。業務の方にお戻り頂いて大丈夫ですよ」

「よろしく願ひします」

こんな感じで仕事をしている。別に面白くないでしょ？

(ああ……間宮さんの羊羹が食いたい)

先日の騒動で、提督さんからお詫びと見舞いを兼ねた菓子折りが届いた。とても丁寧

に包装された箱を紐解くと、美しく輝く【間宮謹製】と書かれた羊羹が収められていたのである。この前に食べた団子と同じ小豆を使っているらしく、一口含んだだけで芳醇な甘みが広がっていった。ここ最近のおやつはとても贅沢な時間となっている。

(そっぴいやもう半分食っちゃまったなあ……少し節約するか)

そんな事を思いながらシンクの下を開けた。お茶菓子やら食器やらが詰まっている。そして、片隅に散乱する黒くて小さな粒が目にとまった。

(あー……これは間違ひなく排泄物)

さらに奥へ分け入ると、チョコの欠片か何かのような黒くて丸い物を発見。しかしそれは、誤って口にしようものなら大惨事を招くブツだ。そう、これは奴等の卵である。(……やりたい放題って訳か)

すでにここは連中の巢窟だ。よく見ると、チョコよりは小さいが米粒よりは大きい物もある。これは2種のゴキさんが存在している証拠だった。

(長期戦だなこりゃ)

取りあえず日付を選んで貰って業務を止めた状態で薬剤散布が妥当な所だろう。その前にもやる事は多そうだ。オフィスまで戻ってクライアントと話を進める。

「どんな感じでしょう」

「非常に手強いですね。申し訳ありませんが今日明日でどうにかなる状況ではございま

せん。こちらとしましては、御社の業務を一旦停止させた状態で薬剤等の散布を行うのが宜しいかと思えます」

「そ、そんなに手強いんですか」

「あまり詳細に申し上げますと気分を悪くされると思いますので、噛み砕いて御説明します。二種類の種族がお互いに勢力を広めあっている状態と言えば想像し易いかと思います。しかも片方は小さくて数が多く、繁殖力も尋常ではありません」

その後、一斉駆除の日程について打ち合わせが続いた。その前に生ごみの移動や風通しをよくする事を指示し、可能な限り事前に数を減らす努力をして貰った。サービスとして、民生品だがいわゆる撃退用のスプレーも3つばかり贈与する。思ったよりも時間を食ったので一度帰宅した。昼飯である。

「たでーまあ」

「さっさと食べて次行つといで。何軒ぐらい回つたの」

「まだ1軒だよ。かなり手強い状態で時間食っちゃまった」

テーブルに置かれた昼食を腹に収め、お茶を飲んで一息ついた。間宮さんの羊羹は後でお楽しみに取っておく。午後の営業再開だ。

「お世話になっております、後藤田プロテクトクリーンです」

「後藤田プロテクトクリーンです。機材の点検に伺いました」

「失礼致します。後藤田プロテクトクリーンと申しますが、事務の宮岡様はいらっしゃいますでしょうか」

そんなこんなで夕方になった。歩き回ったお陰で足が痛い。明日は親父が何と言おうが車を使わせて貰おう。家の引き戸を開けると、見慣れない靴が4つばかり並んでいた。そして甲高い笑い声が聞こえる。町内会のおばさんたちのようだ。

（あの人たち苦手なんだよなあ〜）

そう思いながらソロソロりと廊下を歩いて自室へ向かうが、おばちゃんたちの対人探知能力は正にGと肩を並べるほど尋常ではなかった。

「あら広樹ちゃん！暫くね！」

「やだ広樹ちゃん大きくなつて！」

「まーまー広樹ちゃん！最近見ないけど元気!？」

「ちよつと広樹ちゃん！いつになつたらうちの水回りにネズミ用の罠仕掛けに来てくれるのよ！」

ギャー見つけたー！　そしてお袋も現れる。

「広樹、アンタこんない羊羹どこで買ったのよ」

聞きたくない言葉と考えるとくれない未来が見えた。俺の羊羹が…

「アー……モライモノデス」

「何てお店？何所にあるの？」

「イツパンジンハフダンタチイレナイトコロノオミセデス」

「……何でそんな片言なのよ」

「ナンデデシヨウネ」

ああ……羊羹……　ちくせう

その後、お袋に対する俺の冷戦は水面下で半月ばかり続いた。家庭内不和を起こさないレベルの小さなサボタージユを繰り返す。いい歳して何をも思ってたが、さすがに許せなかった。そんな折、久しぶりに提督さんから依頼が飛び込んだ。

「すいません。どうもネズミらしき生物が居るようでして、何かのついでとかで良いので一度見に来て頂けませんか」

「分かりました、今は何も案件が無いのでこれからお伺いします」

車は親父が使ってるから自転車で行く事にした。店から鎮守府までは少し距離がある。町と鎮守府の間には小さな山があり、その山のトンネルを抜けると高台になっている。そこからは海と鎮守府が一望出来るのだ。ここから見える景色が俺は好きだった。

「……どれ、行きましようかね」

風を切りながら坂道を一気に下るのがとても気持ちよかった。頭が切り替わったように、羊羹の件に関するわだかまりのような物が消えていくのを感じる。今度は名前と『要確認』とか張り紙をしておこう。そうすれば事故は防げる……といいなあ

(広樹です、自分用の小さい冷蔵庫を買おうか悩んでいます)

触るとかぶれる毛むくじやら

第十七鎮守府 共有棟裏手 自然区画

「……………うへえ」

毛虫だらけの植木は見ていて気分が良いものではないですね。毎度、後藤田です。暫くぶりの鎮守府訪問。まあ仕事ですがね。

「どうですか後藤田さん」

「そうですね、これは早急に手を打たないと拙いかと」

今居るここは植物が植えられた長さ100mの緑豊かな自然区画。春になれば桜が咲き、夏になれば草木が青々と生い茂り、秋は紅葉に包まれ、冬は物憂げな枯れ木が立ち並ぶ。ベンチや小さいテーブル。東屋が等間隔に設置され、駆逐艦娘たちがここで菓子を広げたり、飲兵衛たちがこの自然を肴に酒を呷ったり、鎮守府と言う限定された区画において憩いの場となっていた。

事の発端は昨日の午後。自然区画にあるベンチでお喋りをしていた4人の艦娘たちが遭遇した出来事だった。

「見て見て、変な芋虫が居るわ」

物珍しそうな声で植木に近付くのは、暁型駆逐艦のネームシッブこと暁だ。長女であるものの、その言動は幼くて妹たちの方が大人らしく見える事もある。

「暁、蝶の幼虫は触ると変な臭いを出すのもいるから、無闇に触っちゃダメだよ」

そんな姉を窘める銀髪の艦娘。すぐ下の妹こと2番艦の響だ。ドライな印象だが、とても姉妹思いで強い心を持っている。

「わー、フサフサしてる」

暁の放ったその一言が引つ掛かった響が手元を見ると、明らかに毛虫の類を指先で撫でている光景が目に見え込んだ。反射的に手首を掴んで体ごと引き剥がす。

「な！何するのよ！」

「早く手を洗って！今触っていたのは蛾か何かの幼虫だ！」

2人が大声を出した事に驚いた雷と電がベンチから走って来た。3人で暁を手洗い場まで引つ張り、指先を念入りに洗ったが次第に症状が現れ始め、赤く腫れ上がった指先を襲う痛痒さに暁は苦しめられているようだ。響も暁の手首を掴んだ際、目に見えない小ささの毛が手の甲に刺さったらしく、同じような症状が出ていると聴く。そして今に至る訳だ。

「で、お手伝いをしてくれると言うのは」

「雷よ！カミナリじゃないわ！そこん所もよろしく頼むわね！」

ゴム手袋を嵌めて元気良く名乗ったその子は暁型の3番艦こと雷……3番艦の筈だ。やる気満々のようだが、下手に仕事を任せて怪我をされてはたまったもんじゃない。

「あー、申し訳ないんだけどね雷ちゃん。毛虫と直接やり合うのは俺だから、君は他の植木にも同じような虫が居ないか探してくれるかな」

「何よそれ！私にもお仕事手伝わせてくれたっていいじゃない！」

「雷、後藤田さんはどの植木に毛虫が居るか全部は把握してないんだ。さきに雷がそれを見つければ、後藤田さんの仕事は少し楽になる。それも立派なお手伝いだぞ」

なんか娘を諭すお父さんのような言動だ。そういえばお互い年齢の話なんてした事がなかったけど、提督さんは何歳ぐらいなんだろうか。少なくとも20代ではない気がする。30代後半か40代前半か…… まあいいや

「うん、そうしてくれると凄く助かるんだ。だからお願いするよ」

「分かったわ！やってあげる！」

そう言っただけで彼女は走り出した。元気なのは良い事だがこの場に置いてはその限りではない。なんて言っても俺なんかじゃ説得力ないね。取りあえず仕事しますか。

「ではそろそろ始めます。かなり強力な薬剤を使用しますので、虫が全滅するまでは近付かないようにして下さい」

「分かりました、よろしくお願いします」

いざ始めてみると、かなり広範囲が侵食されている事が判明した。持って来た薬剤では到底足りないレベルである。取りあえず雷ちゃんが見つけてくれた所も半分ぐらいは終わったが、これは明日、いやもしかすると明後日ぐらいまで必要でないかとも思つた。提督さんとその旨を話し合い、最大で明後日、それ以降は要相談との作業期間を設けた。明日は親父も連れて来る事にしよう。

2日目

「行くぞ親父」

「お前の得意先か。一度拝んで見たかつたんだ」

「言つとくけど下世話な発言したら毛虫だらけの植木に叩き込むからな」

昨日より大目の薬剤を積み込んで出発。山道とトンネルを抜けた先の鎮守府を見た親父の目は丸くなっていた。そのまま正門へと車を進め、警備の人とお馴染みの挨拶を交わす。

「後藤田プロテクトクリーンです、毎度お世話になります」

「おはようございます。お手数ですがこちらに御記入と免許証の提示をお願いします」

ポカーンとする親父を余所に手続きを進めていく。すると警備の人が助手席の親父に気付き、少しだけ表情が固くなった。

「失礼ですが、そちらの方は？」

「ああ、すいません。父です。ガラにもなく緊張してるようですよ」

人形になってている親父の懐から財布を取り出して免許証を見せる。そして俺は見逃さなかった。気付かない内に助手席側の方へもう一人居る警備の人が回り込み、微笑のような真顔のような顔で自動小銃を下向きに構えているのを……

「これは失礼しました、第十七鎮守府によろしく。広樹さんには大変お世話になっております」

そう言いながら目配せすると、助手席側に回り込んだ警備の人は音も無くいつもの定位置に戻っていた。顔つきもにこやかな表情に戻っている。何だかんだ出入りして慣れたつもりでいたが、やはりここは一般人がおいそれと立ち入っていない場所ではない事を思い知った。背筋が思わずピンとなってしまう。

「驚かせて申し訳ありませんが、広樹さんを利用して鎮守府に入ろうと目論む不貞な輩が居ないとも限りません。どうかお気をつけを」

「……善処します」

何て言っているかわからなかった。相変わらず固まってる親父を余所に車を敷地内へと進める。来客用の駐車場には、生ける清楚ごと大淀さんが来て待っていた。

「ご無沙汰してます、後藤田さん。もう手は大丈夫ですか？」

「ああ、もうすっかり治りました。わざわざ病室まで来て下さってありがとうございます。ごきげいませ」

親父の顔に生気が戻った。ぎっくり腰で寝ている間に入院していた一人息子の所へ、こんな美人が見舞いに来た事へ興味が湧いたようだ。

「……お前やるな」

「変な事言うな。俺が勝手にやらかした時に間近に居たから心配してくれただけだ」

「あの一、そちらは」

「申し遅れました、コイツの父親です」

「ほら早くしないと日が暮れるぞ。かなりの重労働だから覚悟しとけ」

その場を無理やり収めた。あの流れだと大淀さんが「お父様ですか？」なんて言うに決まってる。あの美声で「お父様」なんて言われたら親父に変なスイツチが入ってしまうだろう。そうなたらウザ絡みが増えて家にも居辛くなる。そんなのは御免だ。

昼のサイレンと共に午前の作業が終わる。背負ってるタンクを置いて薬剤を補充し、一度車まで戻った。そこへ一人の艦娘が現れる。物陰からこっそりとこちらへ声を掛けて来た。

「え、えっと、あの、後藤田さん……ですか？」

「はい?」

2人で反応してしまった。親子の悲しい性である。

「はわわわ!どっちも後藤田さんなのです!」

あー、これは俺に用があるんだろうな。腑に落ちない表情の親父を下がらせて前に出た。

「ごめんごめん、いつもの後藤田さんは俺だよ。こっちは親父」

「あ、そ、そうなのですね」

「何か用かな?えーと…」

そういえばこの子とはまだ話した事もなかった。それを察したらしく向こうから名乗り始める。

「い、電です。暁型駆逐艦の4番艦なのです。提督さんから、お昼を一緒にどうぞですかと伝えて欲しいと言われて、その言伝をしに…あの」

是非も無いお誘いだ。前々から鎮守府の食堂で飯を食って見たいと思っていたのだ。これはチャンスである。

「ありがとう、こちらこそ是非お願いしたい所だ。連れてつてくれるかい?」

「は、はい!こちらへどうぞなのです!」

可愛い。こういう妹が欲しかった。まあリアルに居たらこうはならんだろうけど…

その後、食堂で提督さんと昼食を共にして仕事に戻る。結局あの区画にある7割近い植木へ薬剤を撒く事になり、その後のメンテナンスも含めて大仕事になってしまった。メンテナンスを口実にまた鎮守府へ出入りする機会が増えた事で、食堂のメニューと宮さんの甘味を同時に味わう贅沢な日々が続く。しかしそれも束の間、新事実が発覚した事で、更なる大仕事へと膨れ上がっていくのだった。

ドクガ撃退作戦その1

薬剤散布のメンテをする傍らで耳にしたが、夜な夜な巨大蛾が群を成して飛び回っているとの目撃情報が相次いでいるらしい。依頼のあった場所はもう殆ど毛虫の駆除に成功しているから、何所か他の場所にも群生している可能性がありそうだ。これは調べなくてはならない。

応接室

「と言う訳でお願いなんですが、もう少し広範囲を調べさせて頂けませんか」
「なるほど……少し考えさせて下さい」

害虫駆除とは言え、民間の人間が入り込んでいい場所なんて限られているだろう。そうなってくると、予想されるのは自分たちの方からも人員を出して搜索の範囲を広げる方法だ。

（あれ……そうすると俺は大勢の艦娘に囲まれて1人ぼっち？）

やばい、正気を保てるだろうか。いや変な意味ではなく、いつものように振舞えないかも知れない。駆逐艦はまだしも巡洋艦や戦艦の美女に囲まれたらどうなってしまうのだろうか。

「こちらからも人員を出します。説明会を行いますので会議室に集合させますね。大淀と一緒に資料の作成をお願い出来ますか」

「分かりました、ありがとうございます」

え、大淀さんと一緒に資料の作成？ちよつと待て。男子校だった俺が喉から手が出るほど欲しかった高校時代の青春「女子との共同作業」が実現されようとしているだど？

「大淀、後藤田さんと一緒に資料を作ってくれ。秘書艦は加賀と交代だ」

「了解致しました。後藤田さん、こちらへどうぞ」

応接室を出て敷地内の図書館へ移動した。ここは所属艦娘が利用するための場所。一般開放はされていない。歴史書や洋書、かつての大戦の資料、小説や絵本に漫画まで備わっていた。

「凄いですねこれは」

「一般的な自治体の図書館と遜色ないレベルの量が揃っています。虫に関しては確か……」

案内図を見つめる大淀さん。とても美しいです。

「えーと、あつちですね。奥の方です」

奥へと進んでいく。そこには日本だけでなく世界中の虫に関する資料が収められていた。その中から「ドクガ」に関する物を探し出す。今この鎮守府の草木を侵食してい

るのはドクガと呼ばれるオレンジ色の蛾だ。成虫の見た目はまあまあ可愛いかも知れないが、触れると赤く腫れ上がって痒みが一ヶ月近く続く厄介な虫である。

「あつた、ドクガ。こいつです」

「じゃあコピーして来ますね」

コピーした写真を元に文章化と画像データを作成していく。2人で行う共同作業。とても充実した小1時間でした。

会議室

集められたのは吹雪型や綾波型、白露型に朝潮型、陽炎型の各長女たちとその妹が数人である。まるで中学校の教室のような光景だ。

「では行きましょう」

提督さん、大淀さん、俺の順番で会議室へ入る。さすがに長女勢だ。何も言われずとも立ち上がって行かう敬礼が美しい。妹たちも真面目そうな面子が揃っている。俺の姿を認識した白露ちゃんや二カつと笑みを浮かべたが、取りあえず今は軽い会釈だけで済ませた。

「最近敷地内で夜間に多数の巨大な蛾が飛び回っていると言う報告が出ているが、これに関連して幼虫が群生している草木の搜索を行う運びとなった。知ってる者も多いと思うが、こちらに居るのは害虫駆除でいつもお世話になっている後藤田さんだ。民間の

方なため、機密に触れる施設や敷地への立ち入りが難しい事から、皆にも駆除を手伝って貰いたい。詳しくは後藤田さんからどうぞ」

彼女たちが居る所より一段高い壇上に立つ。教育実習にでも来たような感覚に襲われた。大淀さんの資料が行き渡るのを待ってから話し始める。

「何人かは顔見知りと思いますが、改めまして後藤田プロテクトクリーンから参りました後藤田広樹です。敷地内の自然区画で発生した毛虫の駆除を行いました。どうやら他にも群生している可能性が高い事が判明しました。既に成虫となった個体に関してはまず置いといて、営巣している草木を刈り取る事でこれ以上の増加を阻止する駆除を行います」

プロジェクトが起動してホワイトボードに鎮守府の地図が映し出された。大淀さんへバトンタッチする。

「捜索を行うのは自然区画から半径100mに渡った範囲です。この周辺では蛾の目撃情報が多く寄せられています。草木には無闇に手で触れず、必ず手袋や火箸のような物を使って下さい。必要な道具に関しては全て用意しますから、見つけたら私の方まで報告をお願いします」

と言う訳で準備が進んでいった。提督さんは業務があるので一旦戻り、立会いとして1人の艦娘が現れた。サイドテールに青い袴が特徴的である。

「航空母艦、加賀です。後藤田さんのお話は常々伺っています。私の事はあまり気にせず、全体の指示に専念して下さい」

よく分からないが抜き身の日本刀のような冷たい空気が駆け抜けた。目付きは鋭いし声色も低い。何もしていないのに思わず謝ってしまいそうだ。

「ご、後藤田広樹です。よろしくお願いします」

そんな所へ空気を読まずに白露ちゃん参上！

「後藤田さん！一緒に捜そうよ！」

「あー……ごめんね、俺は第一報に備えてここに居ないといけないから」

「えーいいじゃん！今日は白露型の半分が来てるんだよ！一緒に捜そ！」

そういう彼女の後ろには、この前に会った時雨と夕立に、見た事のない亜麻色のツイントールとゴキブリの件で話を聞いたピンク色のサイドテール等が勢揃いしていた。

「あ、あの、ちょっと前にお世話になりました春雨です」

「村雨よ。後藤田さん、よろしくね」

君のその色気は本当に駆逐艦なのかと聞きたくなるが今は何も言うまい。取りあえずの挨拶を済ませると、加賀さんが全方位へ睨みを利かせて駆逐艦たちを追い払った。侵食されている木々の搜索が開始される。無線機を持つ大淀さんとベンチに座って地図を広げた。

「加賀さんっていつもあんな感じなんですか」

このぐらいの質問なら別に機密どうこうはないだろう。当たり障りない感じで大淀さんとのコミュニケーションを図る。

「提督が着任されたかなり初期の頃から一緒だったそうですから、御自分が規律を正す事で全体を纏める役割をされているそうです。私も最初の頃はお小言を何度か頂きました」

「ははあ……なるほど」

なんてやり取りをしている所へ第一報が飛び込んだ。綾波型の娘たちが資材倉庫の裏で毛虫が群生する植木を発見。入っても構わない敷地らしいので大急ぎで向かった。1人の艦娘が手を振って場所を知らせてくれる。

「おーい、こつちこつち」

「ありがとう、えーと君は」

「綾波型2番艦の敷波、以後よろしく。この奥だよ」

倉庫と倉庫の間を通って裏手に出る。そこには更に2人の艦娘が居て、毛虫に食い荒らされている植木の数を数えていた。

「どれぐらいあるかな」

「数えただけで10はありますね。あ、私は綾波型7番艦の朧です。よろしくお願いし

ます」

「綾波型1番艦、綾波と申します。いつもありがとうございます」

とても礼儀正しい娘たちだ。近所のガキンちよ共もこうなら可愛げがあるのにか
思う。

「皆ありがとう。枝きりとマジックハンドがあるから、これで根本から伐つて表に運び
出そう」

割烹着のような防護服と枝きりを装備した。2人にはマジックハンドで少し離れた
場所から植木の根本を固定して貰う。伐ったらそのままゆっくりと表に運んでいけば
大丈夫だ。取りあえず1本目の伐採に成功する。

「誰か表にビニールシートを広げてくれるかな。これをそこに置きたいんだ」
「OK、任せて」

様子を窺っていた敷波ちゃんが表に走って行った。バサバサと広げる音が聞こえ、通
りの一部に敷かれたビニールシートに食い荒らされた植木をそつと安置する。作業を
行っている間にも大淀さんから矢継ぎ早に発見の情報が飛び込んで来た。これでは体
がいくつあっても足りない。作業が一旦終わった段階で大淀さんに連絡を取る。

「思っていたよりもかなり多いですね。用意していたプランを実行しましょう」
「分かりました、通達を出しますね」

全員にマニュアルを広げるよう指示した。彼女たちだけでも同じ作業を行えるように記した物である。これによって俺一人が奔走しなくても各所で作業が進んでいくのだ。最初からこうすれば良かったかも知れない……

その後、かなりの時間を掛けて作業は終了した。駐車場にはいくつものビニールシートが広げられ、50近い数の食い荒らされた植木が置かれている。これらを処分すればドクガを増やす事は避けられるだろう。成虫にはまた別のプランがあるから夜になったら実行する予定だ。取りあえず少し休ませてくれ。

ドクガ撃退作戦その2

駐車場に並ぶビニールシートと食い荒らされた植木を尻目に車の中で横になろうとした時、加賀さんがやって来た。何故だかサボっている所を見られたような気分になって思わず背筋が伸びる。

「な、何か御用でしょうか」

「もし良ければ鎮守府の浴場を使って頂いて結構ですと提督が仰っています。希望されるのでしたらこのまま伝えますが如何でしょうか」

各鎮守府によって差はあれど、風呂場はかなり大きいと聞いた事がある。これは体験しないと損だ。

「是非ともお願いしたいです」

「分かりました。別の者が案内に来るまでお待ち下さい」

そう言うど加賀さんは踵を返して戻って行った。この間に家へ電話して、帰るのは夜中か明日になる事を伝えておく。

「後藤田さん、お待たせしました」

聞きなれた声だ。ここ最近は何度もお邪魔して血糖値やら何やらが少し気になって

来たけど、美味しいからやめられない甘味を作り出す間宮さんである。

「ああ、お邪魔しております」

「浴場の方にご案内しますね」

間宮さんに連れられて、駐車場から再び敷地の奥へと進んで行った。

「お店の方はいいんですか？」

「今日はもう閉めさせて頂きました。夜に備えて私も厨房の方へ手伝いにいかないといけませんから」

今夜は敷地内の街灯に集まるであろうドクガ軍団を駆除する作戦が行われる予定だ。そのために夜食や色々準備が必要なのだろう。なんて考えている間に浴場のある区画へ辿り着いた。

「こちらです」

案内された所は銭湯ぐらいの大きさがありそうな建物だった。もっと大きいと思っていたが実際はこんなものだろうか。

「男性の職員や来客用のお風呂です。まだ入浴の時間じゃないのでゆっくり出来ると思えますよ。お着替えはどうしましょうか」

「あー、出来れば替えの下着なんかは欲しいかと」

「では後ほど持って行かせますね。分かりやすくするためにこのカゴを使って下さい」

赤いタグの着けられた脱衣カゴを貰った。中にはタオルも入っている。

「ありがとうございます、それじゃあお風呂を頂きます」

「ごゆっくりどうぞ」

【湯】と書かれた青い暖簾を潜って中に入る。間宮さんが背中を流してくれるようなイベントでも起きないかなんてゲスい事を考える自分に自己嫌悪しながら服を脱いで湯殿へ足を踏み入れた。

「おー、結構立派だ」

大きな風呂が1つ、ジャグジーが4つ、洗い場は10程度、サウナと小さな露天もあつた。そこまで大きくない旅館の浴場と同じぐらいの設備である。取りあえず体を洗ってから湯に浸かり、日中の疲れを癒す事にした。これで風呂上りにビールでもなんて思わずにはいられないが、ここには仕事で来てるのであつて宿泊しに来た訳ではないのだ。

1時間ほど貸しきり状態を堪能して風呂から上がる。脱衣カゴには替えの下着と浴衣が置いてあり、俺の作業着一式は姿を消していた。少し戸惑いいつも浴衣に着替えて外へ出ると、間宮さんが待つてくれていた。

「如何でしたか？」

「堪能させて頂きました。所で作業着一式が見当たらないんですが…」

「夜までまだ時間がありますから、風に当てさせて貰つてます。肌着は洗濯に出しましたので、お帰りの際に交換して下さい」

もう一度言う。ここには仕事で来てるのであつて宿泊しに来た訳ではない。しかしこの持成しは本当にここが鎮守府なのか疑いたくなる。

「提督が夕食を一緒にと仰つていますから、それまで少しお休み下さい。休憩室の方にご案内しますね」

案内された休憩室で3時間ほど昼寝した。休憩室（意味深）なんて事が浮かんで来るクズな脳みそでゴメンなさい。今後はその一切を控えさせて頂きます。

「……はあ」

軽いため息と共に起き上がると、しっかりと畳まれた作業着が鎮座していた。浴衣を脱いでそれに着替え、仕事モードへと自分を移行させていく。その後は提督さんと夕食を共にし、作戦への準備を開始した。

「それでは、撃退作戦の説明を後藤田さんよりお願いします」

大淀さんからバトンタッチされた俺は、大勢の駆逐艦娘と少数の重軽巡を前に説明を行う。上手くいけば朝には帰れる段取りだ。仮眠もしたから体力は十分である。

「まず目撃情報の多い一帯を集中的に監視。人員の多数はここに配置し、他は特定の地域を受け持たずに巡回して見つけ次第に対処をお願いします。もし可能なら他に営巢

している場所も見つけない所ですが、これについては最優先事項ではありません」

大淀さんと加賀さんが殺虫スプレーの詰まった箱を開けて1人ずつに渡し始めた。防御手段としてはマスクとゴーグルも配布する。

「業務用の殺虫剤ですので、マスクとゴーグルは必需品となります。少量なら吸い込んでも問題ありませんが、もし目に入ってしまった場合は早急に水で洗い流してから医師の診察を受けて下さい」

彼女たちの場合、医師と発言していいかよく分からなかったが、特に気にされていないようで安心した。説明を終えた事を提督さんに伝えると、作戦開始の号令が行われた。

「これより蛾の撃退作戦を開始する。各自、十分に注意して望んで貰いたい。以上だ」

作戦が始まった。陣容としては吹雪型と綾波型、朝潮型が目撃情報の多い地帯を担当し、それ以外は遊撃となっている。まず自分も主戦力の方へ着いて行き、状況を確認したら遊撃の方を見て回る事にした。

「朝潮型一番艦！朝潮です！ご指導よろしく願います！」

見た目は近所に居る小学生の女の子みたいなのにとても礼儀正しい。でもそんなに畏まって敬礼しなくてもいいと思うんだが…

「大潮です！よろしくどうぞ！」

同じく近所に居る以下略な感じだ。元気が溢れている。

「満潮よ」

そんな怖い目で見ないで下さい。まあ、人見知りなだけかも知れない。

「荒潮よお、今日は朝まで頑張りましょうねえ」

まーた村雨ちゃんみたいな異常に色気のある娘が現れた。大人になるのが楽しみです。いや変な意味じゃないよ？

「皆よろしく。殺虫スプレーは結構遠くからでも届くから、あんまり近付かなくても大丈夫だからね。十分距離を取ってから使ってくれ」

太陽は完全に沈んで暗くなつた。街灯の明かりも煌々と輝いている。監視を始めて10分ばかり経った頃、吹雪ちゃんに声を掛けられた。

「後藤田さん、あれ違いますか？」

「どれどれ」

街灯の1本に数匹の何かが群がっている。ゆっくり近付いてから目を凝らすと、確かにそれはドクガの群だった。特徴的な色と形である。

「あいつだ、本来なら群れて集まるのは珍しいんだけどね」

「どうします」

「もう少し待とう。数が増えた所を一斉に叩いて一網打尽にするんだ」

今しばらく様子を窺う。するとあちらこちらから1匹2匹と増え始め、かなりの数が街灯に群がり始めていた。少々辟易するような光景である。ふと、朝潮型の娘たちが俺の周りに集まっている事に気付いた。

「あれ、どうかした？」

「この不肖朝潮！やれと言われればやりますが虫は少し苦手でした！」

「お、大潮も、あまり近付きたくない、です」

「な！何よ！誰だつて嫌いな物の1つや2つ！」

「あら、1匹なら何とかなるけど、あんなに数が多いと少しね〜」

近所の小学生な風貌の娘たちに囲まれて不思議な気分だ。しかし気にしている暇はない。

「よーし！始めてくれ！」

街灯に群がるドクガへ向けて皆が殺虫剤を撒き始めた。バタバタと不規則な軌道で飛び回るドクガが、殺虫剤を浴びて更に出鱈目な飛び方で地面に落ちていく。何人かは足元に落ちたドクガがしぶとく動き回るせいで驚いて悲鳴を上げていた。

「うわあ！びつくりしたー！」

「きゃあー！」

「なにそれ!?意味分かんない!!」

「はにゃ〜!」

何とも微笑ましい光景だ。ここは彼女たちに任せても大丈夫だろう。リーダー格の吹雪ちゃんにその旨を伝えてここを離れた。遊撃に回っている方の様子を見に行く。

「後藤田さんつかまえた!」

また白露ちゃんに見つかってしまった。どうにもこの娘たちに絡まれるのはどうしてなのだろうか。

「後藤田さんも一緒に遊撃するっほい!」

「はいはい、後藤田さんも私たちと遊撃しましょ」

言われるがまま一緒に回る事となった。だがこれを逆に利用してあちこちの遊撃チームとすれ違いながら様子を見る事が出来た。全員順調そうである。

「屍骸には手を触れないで箒か何かで集めてくれ。処理はこつちでやるから、皆にはそこまでをお願いするよ」

それから数時間ばかりが経過し、かなりの数が駆除された。ゴム手袋をはめて屍骸を塵取りに集め、ビニール袋に収めていく。最終的には大き目のビニール袋が3つ鎮座する事になった。

「よし終わりだ、皆ありがとう」

短い時間だが激しい駆除作戦だった。気化し切っていない殺虫剤が街灯の灯りでま

だ見えている。

「後藤田さん、お疲れ様です」

「いえこちらこそ、ご協力ありがとうございました」

提督さんと握手を交わす。今回はかなりの大仕事だった。殺虫剤とマスクやゴーグルを回収し、車に乗せ終わった所で食堂に招かれ、皆で一緒に夜食を食べて解散となる。手を振る駆逐艦たちに別れを告げて鎮守府を後にした。時間はもう夜中。親父とお袋はもう寝ているだろうから、俺もさっさと寝る事とする。

（広樹です、下着はちゃんと交換して来ました）

百足

お世話になっております、後藤田広樹です。平素より皆様には格別のご高配を……めんどくせ

今日も俺は鎮守府に来ていた。車から降りた所に冷たい空気が襲い掛かり、軍人でもないのに思わず直立不動の姿勢になる。

「ご無沙汰しています、後藤田さん」

「おはようございます加賀さん」

見えない日本刀が俺の首に刃を突きつけている。動こうものなら一瞬で斬られるだろう。

「提督さんはお忙しいようですね」

「別件で動き回っていますので今日は私が案内させて頂きます。こちらへどうぞ」

既に何度も通った事のある道筋で敷地の奥へと進んでいく。今日の舞台は寮の区画だった。

「因みにですけど、今回は何が出たんでしょうか」

「重巡寮で得体の知れない何かが高速で床を這い回っていると連絡がありました。申し

訳ありませんが正体はまだ分かっていません」

うーむ、Gだろうか。いや、重巡と言えばそれなりに肝の据わった集団の筈だ。G如きで騒いだりはしないだろう。そうすると何が出たのだろうか。

「着きました」

「案内、ありがとうございます」

重巡察に到着。駆逐艦の察より小さいが近代的な建物だ。しかし気になるのは裏手が雑木林である事だった。もしかすると：

「加賀さん、各部屋の点検終わりました。居るとすれば残りは共同区画じゃないかと」

そう言いながら察から出て来たのはセーラー服姿の娘だった。どうやら言動的にリーダーらしいのを感じる。

「こちら、害虫駆除業者の後藤田さんです。内部の案内は任せます」

「了解です。では中へどうぞ」

連れられるまま察の中へと入っていった。駆逐艦の察に比べやはり全てが新しい。

「改めまして、重巡古鷹と申します。よろしくお願ひしますね」

「ご存知と思いますが後藤田です。毎度お世話になっております」

何かこう、普通な感じの娘だ。年相応と言うか街中に居そうな印象である。重巡が全員これぐらいだったら気兼ねしないで済むなんてのが甘い考えだったのを思い知る事

となった。

「あら古鷹、業者さん？」

「お待ちしました〜」

でかい。とつてもでかい。F以上は確実にあるだろう。そんなのが目の前に4つも現れた。しかも部屋着らしくどうにも露出が高い。

「2人ともそんな格好で人前に出ないで下さい！せめて上に何か着て下さい！」

古鷹はそう言いながら2人を奥へ引つ込ませていった。若干の体格差があるにも関わらずかなりのパワーである。

「あー……出直しましょうか？」

「ちよつと待つてて下さいね！皆に報せて来ますから！」

どうやら俺は真の意味で男子禁制の場所に足を踏み入れたらしい。放置されて15分が経過した頃、古鷹は息を整えながら戻って来た。

「お待ちせしました……奥へどうぞ」

「あつ、はい」

奥地へと足を踏み入れていく。すると、さつきの2人が待ち構えていた。上着を着ているがその下から自己主張するものが大きいため余計に際立っている。

「さつきは御免なさいね、重巡の高雄です」

「私は愛宕よ、よろしく」

黒髪ショート巨乳と金髪ロング巨乳とか世の男性の多くが理想とする姿ではありませんか。いや俺はどちらかと言うと大淀さんみたいな方が……って危ない危ない。

「後藤田です。不躰にお邪魔してしまい申し訳ありません」

そして俺に対する包囲網は急速に狭まっていった。

「青葉です！あなたが後藤田さんですか!?!民間の方と接する機会が少ないもので宜しければ少しお話聴かせて下さい！」

「ちよつと青葉！やめなさいって！」

「あれえ〜どうしへこんなほころにおとこのひほが〜」

「もうポララ！業者さんが来てるんだからそんなはしたない格好しないの！」

「お主が後藤田か！早くあの高速移動物体を何とかして欲しいのじゃ！」

「貴様が件の業者だな。提督から話は聴いている、ひとつ頼んだぞ」

俺は一瞬にして美女と美少女に包囲されてしまった。ほんのり香るいい匂いと容姿端麗な女性たちに取り囲まれ、精神が思わず堅物仕事モードへ切り替わる。

「後藤田と申します。平素より弊社をご利用頂き誠にありがとうございます」

「うむ、いい面構えだ。今後とも臍尻にさせて貰おう」

加賀さんよりも長いサイドテールで身長も高い上にめっちゃ美人なこの人は、何故に

武士のような雰囲気を纏っているのでしょうか。加賀さんはどちらかと言うと新撰組のような尖った雰囲気だけど、この人は対照的に大らかで旗本か何かみたいに思えた。

「皆その辺にして下さい。あとは私が案内しますから」

硬直しかけた思考が古鷹によつて取り戻される。俺は彼女に連れられて皆の輪を抜け、寮の奥へと足を進めた。

「すみません。提督以外の男性は少ないので、皆どうにも興味があるらしくて……」

「……まあ、大丈夫です。それで話を元に戻しますが、何が出たんですか?」

「えーと……足が沢山あつて、とてもすばしっこくて、こつちが驚いてる隙に何処かへ行っちゃうんで、誰もしつかり見てないんですよ」

その情報に該当しそうな虫と言えば、恐らくアイツかも知れない。この寮の裏に雑木林がある事も考えると、ほぼ正解を叩き出した可能性が高かった。

「あ、居ました。あそこです」

古鷹が指差した先には、廊下の隅にへばり付いてジツとしている赤黒くて細長いのが居た。

「……………アカズムカデか」

見た目も不快な上にハチの毒に似た成分の毒素を持つ強力なムカデだ。本来なら手出しさえしなければ問題ないが、こうやって人の領地に足を踏み入れてしまうと、どう

しても敵視せざるを得ない。裏手の雑木林に棲んでいたのがウロウロしている間にここへ入り込んでしまったのだろう。

「寝ている間に身に覚えのない怪我をしたとか、体の何所かが痛いとか痺れの症状を訴えた方は居ませんか」

「それは大丈夫です。全員の所在と無事は確認済みです」

「目撃情報は複数ですか？」

「えーと……最初は妙高さんたちが見つけて、その後に摩耶ちゃんと鳥海ちゃんが見つけて……でも同じ時間帯に別の場所で見たと話す話は聴いてませんね」

と言う事は恐らくだが犯人はアイツだけだ。仕留め損なえば手痛い反撃を食らいかねない。殺虫剤はすぐに効果が出ないから、ここは久々に冷凍スプレーの出番だろう。

「では作業に入ります。少し離れて下さい」

冷凍スプレーを構えてジリジリと近付く。頭は向こうなのでこっちは見えていない筈だ。ゆっくりりゅっくり距離を縮め、スプレーに特注の延長ノズルを取り付けた。これならある程度まで近付けば届くから無理に接近する必要はない。

(食らえっ)

スプレーのトリガーを引いた。冷凍剤がヤツに勢いよく噴霧され、その体を凍らせていく。しかし俺はヤツの生命力を侮っていた。凍っていく下半身を引き千切って、上半

身が逃走を図ったのだ。

「嘘だろおい」

驚く俺を余所に上半身は凄まじい速度で遁走。曲がり角の向こうへと姿を消してしまった。慌てて追いかけるも、既にその姿は何処へである。

「畜生、逃がさんぞ」

追撃を開始。これで逃がしてはウチの信用に関わる。大急ぎで曲がり角まで走ると、廊下の真ん中を逃げる上半身を見つけた。体が半分になったせいで余計にすばしっこい動きである。それに追い継るも、所詮は運動不足の成人男性。20mばかり突っ走った所で息が上がってしまった。おまけに左足首へ激痛が走り、足がもつれそのまま勢い余ってすっ転んでしまう。

そして俺は、逃げる上半身に対して上空から覆い被さる形で廊下に墜落した。ビターンと言う音と同時に、何かが潰れる嫌な音も耳にしている。手から抜け落ちた冷凍スプレーが床を転がって行くのを現実逃避するように見つめた。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

追いついた古鷹が心配そうに声を掛けて来た。どう説明したらいいものか……

「……ガムテープと捨てても良い雑巾を2枚お願いします。1枚は水で濡らして貰えますか」

その後、作業着にへばりつくのを雑巾で隠して上からガムテープで固定。もう一枚の濡らした雑巾で床を掃除し、冷凍スプレーで凍った下半身を処分した。

「ではこれで失礼します」

「気にするな、貴様はよくやったのだ。誰も咎めたりはせん」

「お主の働きは覚えておくぞ。また来るがよい」

「よ、良かったら洗濯していきませんか？そのままだと気持ち悪いんじや……」

古鷹の優しさが身に染みた。お言葉に甘えて洗濯機と乾燥機を借り、雑巾とガムテープ諸ともに屍骸を処分する。綺麗になった作業着を身に纏い、俺は鎮守府を後にした。

（広樹です、情けないとです…）

蝕まれる司令部

毎度、後藤田プロテクトクリーンで御座います。親父が店の車を運転中に、道路脇へ寄りすぎて側溝にタイヤを嵌めやがりました。ドライブシャフトも折れたので修理に出したら「今混んでるから時間掛かる」と言われて早3日。久々の原付に跨って営業中です。

「あー……腰いてえ」

バイクには背中を預ける物がないので体が痛くなる。あと何日これで回らないといけないのだろうか。糞親父め、そろそろ車もう1台買えるぐらいの金はウチに十分ある筈だぞ。軽でいいから1台増強してくれ。

「あと2軒あと2軒」

とつとと済ませて今日はもう店仕舞いだ。帰って熱い風呂に入り、筋肉をよくほぐさないといけなだろう。

数日後、車が午後に戻って来ると言う時に鎮守府から電話が入った。急ぎで来て欲しいとの事なので、取りあえず俺は原付をかつ飛ばす。

「後藤田プロテクトクリーンです、お世話になります」

「おや、原付とは珍しいですね。こちらいつものお願ひします」

正門で警備の人いつものやり取りを終え、敷地の中へと入って行つた。来客用駐車場の脇に原付を停めると、麗しき大淀さんが出迎えに来てくれる。

「おはようございます、後藤田さん」

「おはようございます。今日はどうぞされましたか」

「少々面倒なお仕事になるかも知れませんが、取りあえずこちらへどうぞ」

少々……ね。ここで起きた仕事で簡単な物は少ないと思うが、まあ状況を見てから判断するでしょう。そして俺は大淀さんに連れられるまま、施設の中へ足を踏み入れた。

「……あの、ここつて一般人は立ち入れないんじゃない」

「今日は特別に許可が下りました。まず見て貰わないと、私たちにも事態の度合いが分かりませんから」

なんと今日は絶対に入れる事はないと思つていた司令部施設に、お墨付きで入る事が出来るようだ。こういう時は周りをキョロキョロしない方がいいと何かの映画で見た気がする。前を歩く大淀さんの後姿だけを追いかけた。いや、別にやましい気持ちはこれっぽっちも……

「提督、後藤田さんをお連れしました」

「こんな所で申し訳ありません。今日は折り入って、是非にでも見て頂きたいものでして」

「何でしょうか」

「これなんですが……」

しやがみ込む提督さんの横で、俺も同様にしやがんだ。そこには壁に埋め込まれた立派な木の支柱がある。提督さんはその根元を指差した。木が一部剥げ落ちており、中には何かが良い荒らしたような痕跡が残っている。

「……シロアリですね」

「なるほど、やはりそうですか」

「この建物は全て木造ですか？」

「一部を除いて、ほぼ木造です。となるとこれは厄介だな……」

提督さんと大淀さんは2人して難しい顔をした。シロアリの痕跡が見られると言う事は、その建物は既に【末期症状】である事を意味する。

「道理で最近、あちこち建て付けが悪かった訳だ」

「如何致しましょう。司令部棟建て替えの話は昨年から論議されていましたが、こここの順番が回って来るのももう少し後になります」

「仕方ない。上申して一刻も早く工事の順番を回して貰うよう手配するしか」

「建て替えに關してどうこう言える立場ではありませんが、対処療法で良ければ幾つか策があります。ただし、もう駆除が出来る段階でない事はご理解下さい」

話し合いの場を応接室に移した俺たちは、入念なやり取りを進めた。結果として、向こう一週間程度の間だけ建物が持てばいいとの結論に達し、取りあえずその間だけ司令部棟を生かすための算段を始める事となった。

「では一度戻つて準備を整えます。司令部棟の家財道具や私物は今からでも移動を始めた方が良いでしょう」

警備の人に一旦戻る事を伝えた俺は、店に帰つて諸々の準備を始めた。

「親父、車戻つて来たらこのリストのヤツ積み込んで鎮守府まで来てくれ」

「お、またあそこで仕事か。結構結構」

持てるだけの道具を持ち、また鎮守府へとんぼ返りする。予め伝えておいたので正門のやり取りはスルーだ。本当は良くないんだらうけど……

「お待たせしました。では作業の説明を致します」

「人手は有り余つてますので、存分にお使い下さい」

そう言う提督さんの後ろには、駆逐艦軍団が勢ぞろいしていた。殆どが既に顔馴染みだが、知らない娘たちもチラホラと見受けられる。その大勢を前に話し出す俺も、少しはこの環境に慣れて来たのを実感していた。

「今から行うのは、司令部棟の基礎部分にシロアリの通り道、もしくは卵が産み付けられていないかの調査になります。発見次第、位置を確認してゴム手袋を装着の上で殺虫剤を撒いて下さい。後の処分に関してはこちらで行います」

艦娘たちが一斉にバラける。茂みを分け入り、木々の隙間に入り込み、足元にある基礎部分をくまなく探していった。殺虫剤を撒く音があちこちから聴こえて来る。

「既にかんりの群が入り込んでいます。取りあえず、これ以上の新しい集団を形成しないようにします」

「また大仕事をお願いしてしまつて恐縮です」

スプレー音が段々と聴こえなくなつた辺りで、基礎に蔓延る通路や卵の処分に向かつた。金属製のヘラでガリガリと削ぎ落としていく。

「……腰が痛い」

中腰での作業がとても辛い。座つた方が楽なので、土の上に腰掛けて作業を続行する。黙々と処理をしている内に、ふと誰かの話し声が聴こえた。

「オ、アイツガゴトウダツテヤツダナ」

「ホウツトケ、ドウセオレタチノコトナンテカンジトレナイサ」

何とも言えない高音且つ電子音のような声だ。辺りを見回すが、近くには誰も居ない。

「ナンダオマエ、オレタチノコエガキコエルノカ」

「オーイ、ココダ、ミエルカ？」

と言われても姿形を確認する事が出来ない。気のせいか何かだと思い直した俺は、作業に意識を戻していった。そんな俺の背後から忍び寄る影が1つ存在する。

「今お仕事中でしかも腰が痛いんだ。頼むから脅かさないでくれ」

「あーもー何で気付かれたかな！つてか後藤田さん空気読んでよ！」

毎度お馴染みの白露ちゃんでした。そうは言われてもこれで驚かされたら恐らく腰が天に召されてしまうだろう。それだけは勘弁してくれ。

「自分だつて何かしてる最中に驚かされたくないだろ？そういう事だよ」

作業が一段落した俺は、どうしても悪戯を仕掛けたい白露ちゃんを牽制しつつ他の場所へ向かった。1時間ばかり掛けて基礎部分の通路と卵の除去作業が完了する。

「取りあえず、第1段階は終了しました。基礎への追加殺虫剤噴霧はまた皆でお願い出来ますか」

「分かりました。次はどうしましょう」

「中を探ります。どの辺が棲息範囲なのかを調べます」

司令部棟の中へ戻り、支柱や床と壁の接合部分をくまなく調べ回った。シロアリは見つけ次第、発見した場所を見取り図に書き込んでいく。

「奴らが居る所は床を踏み抜いたり一部崩壊したりする危険があります。印をつけた所には近付かないようにして下さい」

こうなると、司令部棟で安全な場所は少なそうだ。早めに物を運び出す必要性もあるが、大きな家財道具を移動中に何所か壊れる事も考えられる。何ともやり難い相手だ。

「……これはかなり危険な状態ですね」

数時間後、見取り図に書き込んだ印は全体の80%に上った。これでは殆どの場所が危険である。

「大淀、取りあえずでも動かせる物を大至急で運び出そう。下手すると倒壊する恐れもある」

「分かりました。表に居る皆を呼び寄せます」

その後、約2時間を費やしてある程度は物の運び出しが終わった。外に置いた柵や家具からパラパラとシロアリが顔を出したので、それらには殺虫剤を容赦なく掛けていく。

「ありがとうございます。後はこちらで処理しますので、今日はもう大丈夫です」

「余りお役に立てず申し訳ありません。もっと早い発見だったら、何とか出来たのですが」

「何れは建て替える予定でしたので、その前倒しだと思いう事にします。他に何かやって

「おかないといけない事はありますか？」

「ある程度の段階は過ぎてしまったと思いますが、成長すると羽蟻になって外へ出ます。そこからあちこちへ飛んで別の集団を形成する恐れがありますので、取り壊しの直前まで建物とその周辺に殺虫剤を撒き続けて下さい」

「分かりました。そのように致します」

今日はこれでお終いだ。結局、親父の出番は無かったので家に連絡を入れておく。撤収準備をしていると、後ろから近付く存在を察知した。

「だから勘弁してくれって」

「今度こそと思ったのに！」

また白露ちゃんだった。と、ここで謎の声を思い出した俺は、質問を投げ掛ける。

「ちよつと質問いいかな」

「なーに」

「電子音声と言うか、妙に甲高い声をここで聴いた事ないかい？ここじゃあ皆の方が長いし、俺だけそれを聴くつても変な話だからさ」

それを言うとう白露ちゃんの顔が引き攣った。汗がタラーつと落ちていく。

「……なに」

「私の口からは申し上げられません」

「どうして」

「言えませんか！」

逃げられてしまった。まあもしかすると幽霊的な存在かも知れないし、実はここではかなり有名な怪談話がある可能性も捨てきれ

「キョウハオワリカ、ゴクロウサン」

「スマンナ、モットハヤクミテモラエバヨカッタ」

耳元でまたあの声が聴こえた。今度こそ聞き間違いないが、余りにも急すぎてビックリした俺は、勢いそのまま原付を発進させて逃げ出した。

「あれ、今日は終わりですか」

「お疲れ様です！またその内に！」

警備の人との別れもそこそこに俺は家路を急いだ。家では一切そんなのが聴こえないから、やはりあれは幽霊か何かの仕業なんだろう。次行く時は土地の神様へ十分に挨拶を済ませてから仕事をする事を誓った。

(広樹です、ご無礼をお許し下さい。命だけのご勘弁を)

物陰注意報その1

お疲れ様です、後藤田です。本日付で2台目の社用車が納入されました。軽自動車ですが小回りが利くんで自分的には嬉しい事です。一応、元々あつたワゴンは親父用でこっちは自分用として貰つてます。

「さーて、新車で初仕事といくか」

自分用の車とだけあつて思い入れも一入である。いつものワゴンと比べて車高が低いので変な感覚になつたが、すぐに慣れた。今日はこれであちこち回る予定だ。

夕方に帰宅すると、町内会のおばさん軍団が家から出て来た所に遭遇。絡まれる俺である。

「広樹ちゃん車買ったの？」

「仕事用です。自分の物じゃないですよ」

「ちよつと広樹ちゃん、あんたお見合いしてみる気ない？」

何を言っているか理解出来なかつた。何で俺？

「店の経済状況がもう少しよくなるないと嫁さんなんて夢のまた夢ですよ」

「いいじゃないの跡継ぎなんだし。それだけでも向こうにはメリットになるんだから」

「こんな所の社長夫人にさせる方が可哀想ですよ。ぶつちやけお袋が実質的な経営者なんですから」

「あらやだウチの馬鹿息子が減らず口を」

「イデデデデ！」

耳を引つ張られて連行された。小言をグググ言われながら在庫整理をする。

「……嫁さんねえ」

もし例えばだが……間宮さんが嫁に来てくれたら

「……近所で噂話の種にされそうだな。だったら2人だけで住みたいわ」

もう1人……大淀さん？

「………いいかも、しれない」

下らない妄想を振り払って仕事に専念する。店の電話が鳴ったので出ると、なんと大淀さんだった。

「お忙しい所を失礼致します。お時間よろしいですか？」

「大丈夫でせうよ、どうしました」

びつくりしたせいで言葉が少しおかしいが気しない。話を聞いていると、どうやら今回も手強そうな相手だ。まず実物を見に行く事とし、鎮守府まで車を走らせる。

「後藤田プロテクトクリーンです、お世話になります」

「おや、新車ですか？」

「店用ですけどね。今後はこの車でお邪魔すると思います」

毎度のやり取りを終え、駐車場に車を停めた。駐車場には既に、小さい子達を従えた大淀さんが待っている。

「早速ですが、実物を拝見致します」

「はい、こちらです」

駆逐艦よりも小さな子達に取り囲まれた俺は、前回の件で建て替えの終わった司令部棟の裏手にある物置やらコンテナが林立した場所に辿り着いた。

「廃材置き場みたいな場所なんですけど、この子たちが変な蜘蛛を見た」と

「何所で見えたか教えてくれるかな？」

「ひーあ、あのー！ごめんなさい！はうう」

怖い人に絡まれたみたいなの拒絶の反応に思わず傷つく。その子を抱き上げる大淀さんが聖母のように眩しいです。

「松輪ちゃん。誰も怒ってないから、何所でその蜘蛛を見たか教えてくれる？」

「……奥の方です」

彼女が指差した方へ向けて足を進めた。地面に直接置かれて鎮座するコンテナの中を歩く。

「そ、そのコンテナです」

件のコンテナをよく見回す。ふと、ドラム缶が置かれている事に気付いた。そのドラム缶とコンテナの接する部分を見てみる。

「……………なるほど」

「どうですか？」

「取りあえずこの子らを遠ざけて下さい。次いで、この一帯に誰も立ち入らないよう警告をお願いします」

皆を連れ、提督さんの所へ向かった。まず報告をしなければならぬ。

「……………セアカゴケグモですか。まあ何時か出るんじゃないかと思つてましたが」

鎮守府と言う立地上、外国船籍の船や各国の軍艦が停泊する事もあり、そこから何かしらの外来種が入り込む可能性は常に付き纏っているだろう。

「ちよつと前に欧州方面から物資を受け入れた時、もしかしたら何所かにくつ付いていたのかも知れませんか」

「3週間も前の話だな。所でコイツはどれぐらいの間隔で増えるんですか？」

「そうですね、一般的には3〜4ヶ月程度と言われています。ですので、まだそこまで広範囲に生息域を広げてはいないと思われます」

今ならまだ、搜索の範囲を限定的に絞つて探せるだろう。1人でも十分に対処出来る

筈だ。

「では海防艦の子達にも手伝わせましょう。あの辺は彼女らの遊び場みたいな所でして」

提督さんが呼び掛けると、さっきの小さい子達がゾロゾロ入って来た。

「択捉型海防艦1番艦の択捉です！よろしくお願います！」

どうやら1番上のお姉さんらしい。しっかりとそうだ。

「あ、あの……松輪……です」

何故か怖い人認定されてしまったようだ。そこそこ傷つく。

「択捉型3番艦の佐渡さまだ。よろしく頼むぜ」

あーこれは近所によく居るタイプの……

「対馬です。つ・し・ま、です」

出ました謎の色気枠。荒潮ちゃんや村雨ちゃんの教育でも受けてるんですかね。

「……てつきり関係者か何かのお子さん達かと思っていました」

「まあ無理もないでしょう。こう見えて立派な艦娘たちですよ」

それでは仕事に取り掛かるとしよう。しかしその前に……

「すみません、この敷地内に神社か何かはありますか」

俺の発した言葉を提督さんも大淀さんも理解出来ていなかった。ポカーンとした2

人を前に話を続ける。

「えーとですね、この前にお邪魔した際、どうやら土地の神様か何かの気分を害してしまつたようでして、耳元で変な声が聴こえたんですよ。妙に甲高くて、まるで電子音声みたいな声なんですけどね。仕事の前にご挨拶しておこうかと思ひまして」

そう言うとお淀さんが笑いを堪え始めた。何故だろうか。不思議に思っていると、提督さんが苦笑いしつつ説明してくれた。

「後藤田さん、妖精の存在はご存知ですか？」

「はい。艦載機を操縦したり色々と手伝つてくれるんですよ？ 提督の素質を持つてないとその姿を見たり声を聴いたりする事は出来ないと言われてる、あの妖精ですね」

「実はですね、その妖精は鎮守府の土地に宿る一種の靈力的なパワーに長く触れていると、一般の方でも声を聴いたり姿を見たりする事があるんです。もしくは、妖精の側が興味を示した存在に近付いて自ら存在をアピールしたりもします。後藤田さんの場合、よく来て下さっている事で向こうが興味を持ったのと、長く敷地内に居た事で妖精の存在を感知出来る状態になった二重の条件が重なつたのでしょうか」

言われて見ればこの鎮守府には仕事でしょっちゅう来ているし、日を跨いで帰つた事もある。幽霊でない事が分かつて安心したが、あんな声を出す存在に絡まれるのが良い

事なのかはなんとも言えなかった。

「ヨウニイチャン、マタキテクレタノカ」

「シヨツチュウヨンデモウシワケナイナ」

唐突に耳元で聴こえた声に俺は飛び上がった。姿形は見えないが、何とも心臓に悪い連中である。

「仕事の邪魔をするな。暫く控えていなさい」

「シツケイシツケイ」

「マタアトデナ」

提督さんが一喝すると声が聴こえなくなった。一安心と思つていいのだろうか…

「申し訳ありません、何せ気分屋な連中が多くて」

「ああいえ、ありがとうございます」

そんなこんなで、俺は仕事の準備を進めた。諸事情で人手をあまり用意出来ないと言われたが、それでも10人近い艦娘たちが手伝いのため集まってくれる。大淀さんが用意してくれた資料を配布して、軽い説明を始めた。

「これはセアカゴケグモと言う毒蜘蛛で、海外では死亡例もある危険な種類です。このコンテナがある一帯に棲みつき始めてまだ間もない筈ですので、10匹や20匹居るなんて事はないと思いますが、用心しつつの搜索を心掛けて下さい」

発見した所にはカラーコーンを置いて待機してて貰うから、こっちが見つけ次第に対処すればいい。そもそもが約50m四方の空間なので、1人で動き回っていても見落とすはしないだろう。

「さてと、始めるか」

すっかり顔馴染みの吹雪型や白露型とすれ違いつつ、セアカゴケグモが居そうな物陰やコンテナに掛けられたシートの裏側を見ていく。物の数分でカラーコーンは3つも置かれていた。

「後藤田さーん、ここに居るっぽい」

「こっちにも居るわよ後藤田さん」

夕立村雨コンビに声を掛けられた。どうにも珍しい組み合わせに感じる。

「後でやるから取りあえず捜し続けてくれ。そう言や今日は白露ちゃん居ないんだね」

「出払ってるから今日は居ないっぽい」

「あー？もしかして姉さんに会いたいですかー？」

その中学生が友達の恋仲を疑うような目付きは止めなさい。

「遭遇率が高いから居ない事が不思議に感じたただだよ。変な事を勘繰ってないで続けた続けた」

狭い空間の割りに意外と捜す場所が多いのは盲点だった。しかもカラーコーンが1

0分単位で増えていく。どうしてここの仕事で相手をするのはいつも手強い連中ばかりなんだろうか。

「あー……ちよつと疲れたな」

気付けば1時間が経過していた。この時点で置かれたカラーコーンは合計14個。まあまあ数が群生しているらしい。無情な光景を眺めていると、大淀さんが近付いて来た。

「休憩されますか？」

「そうしましょう。皆を呼び戻して下さい」

休憩（意味深）と言う発想に直結する自分の脳をどうにかしたくなかった。畜生め。

「お疲れ様です。間宮の方で軽食を用意していますので、召し上がって下さい」

提督さんから嬉しい言葉が聞こえて来た。体重とか色々と気になり出してからは控えていたので、久々の訪問である。

「ありがとうございます。でも他の子達は」

「そちらは別で用意がありますのでご安心下さい。大淀、少し任せるぞ」

「了解致しました」

こうして俺は提督さんに連れられて間宮へと向かった。いやまあ、いいんだけどね、出来れば間宮さんとお話を楽しみたかったなあなんて……うん

物陰注意報その2

間宮にて

「あら後藤田さん、お久しぶりです」

「ご無沙汰しております」

「さあどうぞ。間宮さん、頼んでいたのをお願いします」

「はい。お掛けになってお待ち下さい」

手洗いを済ませ、テーブル席に提督さんと腰掛けた。若干だがムサイ光景に見えてそれで気が引ける。当たり障りない会話をしていると、間宮さんが何かを運んで来た。

「新商品のホットドックです。外のお客さんでお出しするのは後藤田さんが第1号ですよ」

ケチャップとマスタードの掛かったオーソドックスなタイプだ。意外な登場に戸惑うも、小腹の空いた胃が「早く寄越せ」と言っつきかない。

「これは美味そうですね。しかし、お店の雰囲気とはちよつと合わないような」

「ええ、なので持ち帰り専用のメニューにしています」

「タイミングが合えば挨拶させようと思っていますが、アメリカから来ている艦娘が居

ましてね。彼女の故郷から親族が大量の材料を送って来たんですよ。自分だけじゃ消費仕切れないからと相談されました、部内だけの限定メニューにした訳です」

アメリカから来ている？会いたいような会いたくないようなと言った感じだ。まあ取りあえず、このホットドックが冷めない内に頂こうと思う。

「じゃあ、いただきます」

結論だけ言う。メチャクチャ美味かった。日本で作られたのとは根本的に違うように感じる。心地いい満足感を味わいつつ、俺は作業再開のためにコンテナ地帯へと舞い戻った。皆も休憩を終えたようで、背伸びしたり柔軟体操をしている。

「そろそろ再開するぞー」

「カラーコーン増やしておきました。それと手伝いの応援です」

そう言う大淀さんの後ろには、見慣れない4人組が立っていた。服装を見るに姉妹2組と言った感じである。

「伊勢型1番艦の伊勢よ。航空戦艦……って言ってもよく分かんないか」

取っ付きやすそうな雰囲気だ。子供の頃、近所に居た中学生の姉貴分を思い出した。

「2番艦の日向だ。提督から話はよく聴いている。不肖ながら手伝わせて貰おう」

姉とはまた違う雰囲気纏っている。だが落ち着きがあつて話しやすそうだ。

「高速戦艦、榛名と申します。ご迷惑でなければ、お手伝いさせて下さい」

あ、はい。どうも。よろしくおながいします。すまんがあまり近付かんでおくれ、ワシには刺激が強すぎる。

「霧島です。金剛型では一番下の妹です。よろしく願いますね」

何だろう、普通にどつかの会社で働いてそんな雰囲気だ。まあ俺のような人間にはそちらのご令嬢より話しやすそうで助かるんですがね。

「後藤田と申します。いつもお世話になっております」

取りあえず資料を渡して説明した。4人にも加わって貰い作業を再開する。そう言えば戦艦と話をしたのは初めてだ。恐らく加賀さんが一番最初に絡んだ、いわゆる大型艦艇と呼ばれる存在だろう。

「後藤田さん、ここに居るクモは違いますか？」

「見せて下さい」

「ご令嬢の横にしゃがんだ。いい匂いが漂って来て思わず思考が停止する。」

（あかん、これはあかん）

仕草にも表情にも出さず気合を入れて振り切る。超堅物モードに移行した。

「間違いありませんね。では他に居ないか引き続きよろしく願います」

「はい、ありがとうございます」

純真無垢。大和撫子。どれだけの言葉を尽くしても表現するには足りない気がする。

俺のような男だらけの青春を過ごした人間にはやはり刺激が強すぎて辛いっす。

「ねえ、ちよつと手伝って」

伊勢と日向がコンテナに掛けられたブルーシートを剥がそうとしていた。それを手伝っている、作業に少し飽きたらしい佐渡さまが松輪を追い掛け回しているのが目に飛び込んだ。

「まつく、サドゴケグモだぞく」

「や、やめて、来ないで」

そんな光景を尻目にブルーシートを剥がし終わる。するとここだけ10匹近くが群生している事が判明。思わず辟易する光景だ。

「うわ、どうしてこんなに沢山」

「凄い数だな。出来れば直視したくないが」

「気色悪いわね。カラーコーンで囲みましょう」

コンテナの周りにカラーコーンを置いていると、後ろから何かがぶつかって来た。前かがみだったせいでバランスが取れず、クモが数匹へばり付いているコンテナへ突っ込んでしまう。

「げあ!!」

変な声が出た。同時に両腕を思いつ切り引つ張られてコンテナから剥がされる。伊

勢と日向が助けてくれたらしい。

「大丈夫か！」

「コラ！佐渡！何やってんのアンタ！」

どうやら俺はサドゴケグモにぶつかられたようだ。幸いにも体にクモは着いておらず、寿命が縮む思いで済んだ。

「ご、ごめんなさい！はうう」

追い掛けられていた松輪を残して佐渡は逃走。伊勢は飛行甲板を展開させて何機かの水上機を発艦させた。見つけ出して捕まえる気なのだろうか。

「あーびつくりした」

「済まない。誰かを海防艦のまとめ役にするべきだった。怪我はないか？」

氣遣つてくれる日向に思わずときめく俺が居た。男の自分よりもしっかりした体格の女性にそんな事を言われるとは情けない限りである。

「だ、大丈夫です。ありがとうございます」

「ごめんね。後で謝らせに行くから」

これが戦艦の器の大きさかと思う。今まで駆逐艦や巡洋艦の、自分と年相応かそれに近い存在と触れ合っていただけに、この触れ合いは大きな衝撃だった。

「ナンダオマエ、ホレツポイタイシツカ？」

「ニイチヤン、センカンハイイゾ、ミンナムネオオキイゾ」

うるせえ、ほっとけ。聴こえないふりして作業再開だ。30分ばかり掛けて搜索が終了し、業務用殺虫剤を撒いて一匹ずつ息絶えていくのを見届ける。屍骸も回収した。

「駆除は終わりました。後は忌避剤を撒きますので、まだ暫くはこの辺に出入りしない方が安全かと思われませう」

忌避剤を皆に渡し、セアカゴケグモの居たコンテナに噴霧して回った。これも一通り終了したので作業は取りあえずこれでお終いだ。

「ほら、ちゃんと謝んなさい」

「ゾ、ゾめんなさいい」

佐渡さまは瑞雲と二式水戦に追い掛け回されて、力尽きた所で加賀さんのお縄を頂戴した。まるで母親に怒られるやんちゃ盛りの子供のようである。ちよつと悪戯心が生まれた俺は、意地悪な発言をして見た。

「よーし、じゃあ罰としてこのクモの屍骸を食べて貰おうかな」

「勘弁してくれ！もう2度とやんないからあ！」

どうやらすっかり反省しているらしい。絶望の淵に立たされたような顔が悪いけど少し面白かった。

「では、この辺で失礼致します」

「ありがとうございます」

道具を纏めて駐車場へ向かう。バックドアを開けて積み込みを終え、俺は鎮守府を後にした。翌日、料金に関して連絡を入れた時、佐渡さまの言動が少し大人しくなったと聞いた。まあいい薬になったんじゃないだろうか。

(広樹です、クモは暫く見たくないとです)

黒くて光ってる素早いアイツ リターンズ

その日、俺は鎮守府でゴキの定期駆除を行っていた。

「どっ（ハ）こつよ」

水周りの隙間に仕掛けた業務用ゴキブリホイホイを回収する。おぞましい光景を何も考えない事による無の境地で乗り切った。脱出するも力尽きたらしい屍骸を小さい箒で集め、これも回収。新しいホイホイを設置するのを繰り返した。

「こいつらが人間の生活圏から居なくなるには、人類の数が減らないとダメなんかね」

おっと、こんな所で発言していい事じゃないな。しかしだ、当の駆除業者である自分の家にすら何かしら出現するのを考えると、そう思うのも仕方ないかも知れない。実際、商店街の裏手なんてのはここより酷いもんだ。

「えーと、屍骸回収良し。新しい罠の設置良し。毒餌も良しと」

まあそんな訳で、俺たちのような人間は生活が出来ているし、需要があるってのは有難い事である。

「さてと……お次は重巡察か」

今居るのは潜水艦寮だ。全員出払っているため、寮長の大鯨……だいたい？ おおく

じら？ とか言う責任者らしい艦娘の書置きが残されている。チェックリストをその横に置いた俺は、立会いしている古鷹と共に次の目的地である重巡寮へと足を向けた。「今日は静かですね」

素人目でも分かる鎮守府内の平穏な空気に、古鷹は遠慮気味に話し始めた。

「後藤田さんは民間の方なので機密に触れるような事は言えないんですが、ちよつとあちこちで色々あつて、その調整で皆出払つてまして……」

そりやそうか。いくら皆と親しくなつても、俺は所詮外部の人間である。正門で段々と顔パスが利くようになって、それは向こうの信頼によつて成り立っているだけだ。立場を弁えなければ、一瞬にして崩れ去つてしまうだろう。

「なるほど、道理で人氣が殆どない訳だ」

「今この敷地内に居るのは、恐らく総勢10人も居ないと思います。もし何かあつても直ぐには駆け付けられないので、慎重に行動して下さいね」

「了解です。じゃあ始めますので後はお任せ下さい」

「はい、よろしくお願ひします」

重巡寮でも一仕事を終え、諸々の詰まった袋を担いで一旦駐車場を目指した。良い子にも悪い子にも平等に害虫の死骸を与える、嫌なサンタクロースと言う変な存在が頭の中に浮かび上がる。

「……お仕事お仕事」

しよーもない想像を振り払って車のバックドアを開け、袋を中に放り込んだ。今日は久々にワゴンで来ているため積載量の大きさが嬉しい。次に行くのは駆逐艦寮なので、仕事道具を気持ち多めに持って行く事にした。何しろ駆逐艦寮は大きさ広さ共に最大である。簡単に弾切れするようでは無駄な疲労を増やすだけだ。

「さてと、行きますかね」

一歩踏み出した所で鼻先に冷たい雫が落ちた。今日は曇天が低く垂れ下がっている割に、降水確率30%と言う何とも中途半端な天気である。

「くそ、降り出したか。急がないと」

足早に駆逐艦寮へと向かう。雨足は次第に激しくなり、寮に到着する頃には見通しが利かないほどの大雨になっていた。お陰でずぶ濡れである。

「うーわ、どんだけ降るんだよ」

雨音も一層激しさを増し、建物を叩く音で自分の声すらよく聞こえなかった。取りあえずドアを開けて中にお邪魔する。

「後藤田です。誰か居ませんか」

シーンと静まり返っている。まるで誰も居ないようだ。これは外部の人間にとつてあまり好ましくない。いくら最高責任者のお墨付きとは言え、他人の敷地で好き勝手に

動き回っていい訳ではないだろう。

「……すいませーん」

返事はない。この雰囲気は大昔に見た映画を思い出す。そう、夏休みを目前に控えた子供達が、小学校の旧校舎に入り込んで怪異に遭遇するあの映画だ。

「どうすつかなあ」

古鷹の話では、この敷地内には自分を含めて10人も居ないとの事だった。下手するとこの建物には自分しか居ない可能性も高い。

「…そうだ、火元責任者が管理室に居る筈だ」

管理室は1階ロビーの近くにある。そこなら誰かしら居るだろうと思い、荷物を置いて近付いた。

「後藤田ですけども、誰か居たりしませんか」

数秒後、ドアが開いた。煎餅を啜えた白露が驚いた表情で出迎える。

「ふえ、ふおふおふあふあん？」

「おす。定期駆除に来たぞ」

取りあえず管理室に上がらせて貰った。大きめのタオルを借りて水気を拭い、白露が煎れたお茶を啜る。

「留守番？」

「まあね。火元責任者は各艦のネームシップで持ち回りだから、今日はたまたま私の番だったって事」

「そう言いながら白露はテレビのチャンネルを変えつつ煎餅に齧り付く。ボリボリといい音が室内に響いた。」

「贅沢な時間を邪魔して申し訳ありませんがね、一緒に来て貰いましょうか」

「えー、いいじゃん別に立会いなんてしなくても。委細お任せ致します」

「そう言う訳にはいかんの。第一、ここは基本的に男子禁制だろ？」

「明日の朝まではこの白露しか居りません。ですので勝手にやって頂いて結構です」

「悪いけど提督さんとの契約書があるんだ。従って貰いますぞお嬢さん」

「ぐぬぬ」

兄妹のようなやり取りをしつつ、2人は雨音の支配する世界へと踏み出した。別に口マンチズムを感じるような気取った人間ではないが、まるで世界に2人だけ取り残されたような雰囲気である。

「……メツチャ降るな」

「こんなの海の上でスコールにぶち当たった時よりはマシだよ？」

「マジかよ。艦娘ってすげえな」

まずは1階の水回りからだ。洗面所や給湯室に仕掛けてある業務用ホイホイを回収

し、毒餌も新しいのに取り替えていく。時間を追うごとに数を増していくビニール袋を白露は辟易した表情で見ている。触りたくないオーラが全身から滲み出ている。

「ウソでしょ、ここだけでこんなに居るの……」

「いや、これは単純に設置する罠の数が多いだけだ。連中の通り道や溜まり場は一箇所じゃない。だからこうやって数で勝負するのがいいんだよ。若干は予算を圧迫するけどね」

とは言うが、ここの仕事は金が良いのでこちらとしても力を入れるのは仕方ない。本来なら大企業レベルので駆除を要求される場所に、俺のような零細企業が入り出しているのは築き上げた信頼に他ならないのだ。と思いたい。

「えーと、これで最後だな」

仕掛けていた最後の業務用ホイホイを持ち上げた瞬間、中からそこそこ大きい元気なヤツが飛び出して来た。

「だあ！何で生きてんだよ！」

「ひいー！」

ヤツは俺と白露ちゃんの足元から目にも留まらぬ速さで逃げ出した。追い駆けようとしたが、驚いた白露ちゃんが俺に飛び乗って動けなくなる。

「降りてくれ！ヤツの行き先だけでも！」

「やだ！絶対やだ！」

「足元には居ないから安心しろ！頼むから降りてくれ！つてか海の上で化け物と戦ってるのにあんな小さいの怖くないだろ！」

「それとこれは別！」

追い駆けるのは諦め、取りあえず彼女を落ち着かせる事にした。おんぶするような状態で一旦管理室へと撤退する。

「もういいだろ。降りてくれ」

「……居ないよね？」

「ドアが閉まってたから少なくともさっきのは入り込んでない筈だ」

渋々と言った感じでようやく解放された。重かったと口走りそうになるのを寸前で飲み込む。

「ここに居ていいぞ。後はやっておくから」

「アレが徘徊している状態で1人にされるのはちよつと……」

いつもは明るいのに珍しく弱気だ。まあ確かに何所で遭遇するか分からない状態では心細いだろう。それに今、この寮には彼女1人しか居ないのだ。

「それじゃあ早く終わらせるから手伝ってくれ。このビニール袋を必要な時に広げてくれるだけでいいから」

と言う訳で、大急ぎで終わらせる事になった。一気に上階へと駆け上がり、回収と再設置を繰り返す。

「ここって何階建てだっけ」

「4階建て。次で終わりだよ」

「よし、さっさと済ませよう」

階段を上がって4階に到達する。ここも同じく回収と再設置を素早く行った。

「これで全部だな。後は薬剤を撒くから少し離れててくれ」

しかし、肝心の薬剤を下の階に置き忘れていた事に気付いた。取りに行こうとしたその瞬間、白露ちゃんが大声を出す。

「足！後藤田さん！足！」

足？何のこつちやと思つて自分の足を見ると、ヤツが作業服にくっ付いているのが見えた。

「うおっ！」

驚いて思わず足を大きく動かす。振り払ったかどうかは分からなかったが、俺はそのお陰でバランスを崩し盛大に床へ転んだ。痛みを堪えつつ目を開けると、視界の数cm先に遁走を図ろうとするヤツが見えた。

(……………逃がすか)

右手を大きく振り上げ、逃げ出す寸前のヤツへ向けて叩き付けた。手の中の形容し難い感触に絶望を感じつつ、仕留められた満足感をも味わう。

「……大丈夫？」

「……捨ててもいい雑巾があれば貰えるかな。水で濡らして固く絞って来てくれると嬉しい」

「あ、うん、分かった。ちょっと待ってて」

終わった。次に来る時、俺は手でGを叩き潰した男として有名になっているだろう。もう皆、以前のように接してくれないかも知れない。それこそ本当の意味で「害虫のお兄さん」扱いされてしまうだろう。

「はい、これ」

雑巾を受け取り、諸々の処理を終えてすっかり手洗いした。白露ちゃんはやはり何所か余所余所しい。

「……誰にも言わないからさ、気にしないでいいよ」

どうやら俺が色々深く傷ついたと思っただけらしい。その優しさが有難かった。

「今度来た時は間宮さんで何か奢ってあげるからさ」

「いや、口止め料的な意味で俺が出すべきだよ」

「だから誰にも言わないって」

気付くと、雨は上がっていた。全てを回収してワゴンに乗つける。

「じゃあまたその内」

「うん、じゃあね」

車を出す。バックミラーには手を振る彼女の姿が見えた。色々痛い目にあっただけ、距離感が縮まったのは嬉しい事である。

(……もしかして堅物よりこういうたまにドジやる方が受けるのかな)

「イヤアソレハトキトバアイニヨルダロ」

「オマエサンノカタブツハソレデイガイニウケガイイゾ」

急に耳元へ飛び込んだその声で危うく変な方向へハンドルを切りそうになった。敷地内で事故つては提督さんと大淀さんに迷惑が掛かってしまう。

「静かにしろ！急に現れるな！あと脳内の声を勝手に拾うな！」

「シキチナイカラデレバキエルカラアトチョットツキアエヨ」

「タマニハオレラトモコウリユウシヨウゼ」

ええい鬱陶しい。無視だ無視。さっさと帰るぞ畜生。

(広樹です。白露ちゃんに飛び乗られた時まあその……いい感触がしたとです)

見た目はアレですけど悪いやつじゃないんです、信じて下さい

本日の業務。業務ってほどのモンでもないんだけど、近所の保育園からある相談を受けていた俺は、その敷地内に立っていた。

「えーと、職員室……いや事務所か？」

来客用の駐車場に軽自動車を止め、敷地内をウロウロする。作業服を着ているから不審者とは思われないうろろがどうにも落ち着かない。取りあえず依頼主に電話すると、60代ぐらいのおじさんが姿を現した。

「ああどうも。園長の渡井と申します」

「後藤田です。早速ですが現場を拝見致します」

連れられて暫し歩く。辿り着いたのは、園舎の裏手にあるゴミ置き場だった。

「ここです。まあ職業柄どうしても女性が多いものでして、人によつては動けなくなってしまう方も居るんですね」

陽が当たらないから薄暗い上に地面が湿っぽい。ゴミ置き場を囲む壁も汚れている。視界に目を凝らしていると、何かが壁をウゾウゾと這っているのが見えた。

「あー……カマドウマですか」

基本的に害は持たないが、見た目の嫌悪感から避けられている虫だ。いわゆる「不快害虫」である。

「湿っぽい上に生ゴミがあるんじゃないやあ、連中にとっては天国ですね」

「何とかならないもんでしょうか」

「忌避剤を撒くことで一時的に遠ざける事は可能ですが、ゴミ置き場を替えるかこの環境を改善しない限りまたやって来るでしょう。何所か場所を用意して、しっかりしたゴミ置き場を作った方が宜しいかと思えます」

取りあえず場所を移して話し合った。完全な駆除は難しいとの結論に達し、提案した通りゴミ置き場の新設と言う事で落とし所となる。今回は無料相談の範疇だったので料金は取らなかつたが、次に繋げる意味も兼ねて業務用の忌避剤をサービスした。用務員が居るなら扱いには苦勞しないだろう。

それから数日後。営業周り中に提督さんからの連絡を受けた俺は、そのまま車を鎮守府へと向かわせた。

「どうも、後藤田プロテクトクリーンです」

「お世話になります。こちらいつもの記入を」

毎度のやり取りを終えて敷地内へ車を進める。駐車場では、提督さんに間宮さん。そ

して暁型姉妹が待っていた。

「後藤田さん、お久しぶりなのです」

「雷よ、忘れてないでしょうね」

「ああ覚えてるよ。電ちゃんも久しぶり」

2人の更に隣に居るのは、恐らく話で聴いていた暁と響だろう。どっちがどっちなのかは分からないが……

「Здравствуйте、響だ。よろしく」

ず……なに？

「ちよつと響、それは余所の人に言わない約束でしょ」

「失礼。こんには後藤田さん。今のはロシア語だ。気にしなくていい」

どうやら彼女の冗談か何からしい。雷ちゃんが窘めるのを横目に、最後の1人が前に出る。

「暁よ。私が一番上のお姉さんだから」

ああ、毛虫を触って指がかぶれたのはこの子だったか。それにしても、一番上のお姉さんと言う割には一番幼く見えるのは気のせいだろうか。

「またお世話になります。ちよつと間宮の方で困った事がありました」

「はあ、どうされましたか」

隣に立つ間宮さんの顔色は幾分か悪い。何が起きたのか分からないが、相当に参っているようだ。

「お恥ずかしい話なんです、是非とも後藤田さんのお力が欲しくて」

そこまで言われてはやらない訳にはいかないだろう。手前のような男が間宮さんみたいな美しい方のお役に立てるならば、火の中やら水の中やらだ。

「取りあえず、こちらの方へどうぞ」

ゾロゾロと移動を開始。行き先は、間宮の裏手だった。近づくに連れて暁ちゃんの表情が固くなり始め、響ちゃんの後ろに隠れるような行動が目立つ。

「暁、怖いならお店の方に居ていいんだよ」

「こっ、怖くなんかないわよ。それに、1人にされてアレが出たらそれこそ怖いじゃない」

アレ、とは何だろうか。まあ取りあえず、現物を見るまでは黙ってしよう。

「私の趣味みたいなものなんです、たまに和菓子作り教室を開いていまして、今日はこの子たちに教えていたんです」

間宮さんの和菓子作り教室だと？それって一般人は参加出来るんでしょうか。

「始める前のゴミ出しを暁ちゃんとしていたんですが、得体の知れない虫が無数に現れて動けなくなっていました」

間宮の裏手に到着。鬱蒼としている訳ではないが、それなりの自然で満ちており、何が居てもおかしくない環境ではあった。

「……どんな感じの形状でした？色とか大きさとか」

「その……あ、足がたくさんあって」

間宮さんの視線が何かを捉えた。顔色が悪くなると同時に、後ずさりを始めて俺の後ろに回りこんだ。

「ま、間宮さん？」

「上……上に」

言われるがまま上を向いた。そこは間宮の外壁で、屋根にまで行かない所に何かワサワサしたそこそこ大きい物がへばり付いているのが見える。同時に誰かが走り去り、それを追いつける足音も聞こえた。

「暁、何所へ行くんだい」

「怖い怖い！やつぱり向こうで待ってる！」

「こら2人共、ちよつとすいません」

提督さんが2人を追い掛けていった。取り残される4人である。

「あー……なるほど、確かにコイツは女性には怖いでしょうね」

あれは俗に言う、ゲジゲジだ。正式名はゲジだったと思う。しかし困った。コイツも

カマドウマと同じで、見た目の嫌悪感から避けられている【不快害虫】である。そのお陰であまり知られていないが、何とコイツはGを食ってくれる虫でもあるのだ。基本的に大人しく、こつちからちよつかいを出さなければ何も問題はない。

(うーん、どうしようかな)

「ご、後藤田さん。あつちにも」

よく見ると、3匹ぐらいが居るようだ。間宮さんはすつかり閉口し、俺の背中にびつたりくっついて離れようとしなない。これはこれで役得だが、それでは状況は進まないだろう。

「後藤田さん。あれも悪い虫さんのですか？」

「あんな見た目してるのよ、害虫に決まってるじゃない」

その認識は少し改めて欲しい所だ。取りあえず、場所を移してお話の場を設ける必要がある。

「一旦引き揚げましょう。少しお話があります」

つて訳で場所を移す。提督さんも今は時間が空いているとの事なので、執務室で話をさせて貰った。本日の秘書艦である加賀さんが発する冷たい殺気を感じつつ喋る。

「申し訳ありませんが、今回駆除はしません。あれはあんな見た目をしていきますが、ゴキブリ等を捕食してくれる存在なんです。見つけたら距離を取って居なくなるのを待つ

か、長い筈か何かで追っ払えば問題ありません」

「曉ちゃんはこの世の終わりのような顔をしていた。あんなのが害虫でないと言う事実には打ちのめされているらしい。」

「家の軒下には、遅かれ早かれ何かしら住み着くものです。それと人の行動範囲が被ってしまうのは仕方ない事なんです。何回か間宮さんの厨房を色々調べさせて貰いましたが、ゴキブリを含む他の害虫の痕跡が見つかりませんでした。間宮さんがお店を清潔にされている結果だと思いますが、あれらが住み着く前に捕食してくれている可能性もあります」

「加賀さんが興味深そうにこっちを見ているのに気付く。若干だが喋りづらくなった。「気味が悪いからとやたらに殺せば、生態系は傷ついてしまいます。もし噛まれたり、お店の方に出るようになった場合はまたご連絡下さい。今回は勝手口周辺やお店側に忌避剤を撒く作業だけにしようと考えています」

「ずーんとした空気が漂った。ただまあ妥協点として、今現在動き回っているのだけは回収しようと思う。」

「しかし、間宮さんが精神的に参ってしまったているのも事実です。取りあえず、お店の周りで動き回っている個体だけ捕獲して、それらは自然に返す事にしましょう」

「曉ちゃんは微妙に受け入れ難い表情だが、他は納得してくれたようだ。と言う訳で早

速だが、捕獲作業に入る。火箸でヒヨイヒヨイと捕まえて黒いビニール袋に入れ、口を固く縛った。上の方に居るのは箒で叩き落とし、ピクピクしている隙に捕まえていく。

「そのまま殺虫剤を撒いてしまうとと言う選択肢もあると思うのだけれど」

急に現れた加賀さんに驚く。あれ、執務室で無言で領いていたように見えたのは気のせいだったのだろうか。

「空き地の石を引っくり返して何か居たからって殺虫剤撒いてたら自然が壊れちまいますよ。俺の仕事は、異常に増えすぎてしまったのや人間の生活圏に踏み込んでしまった部分を削り取って、線引きを直す事だと思ってます。あ、その考えを人間と深海棲艦に結びつけるのはナシですよ？」

「そこまで無理強いはいしないわ。ごめんなさい、頻繁に出入りしているせいで、あなたが一般人である事を失念してたわ。さっきの発言は忘れて頂戴」

「いえいえ、滅相もない」

「所で、全部終わったら相談があるのだけれど、いいかしら」

「はあ。じゃあ後ほど」

「執務室で待っています。この件は提督にも了承済みですから、そのつもりで」

加賀さんはそう言い残して去って行った。はて、なんの相談だろうか。提督さんが了承済みと言う事は、仕事の話である可能性が高い。取りあえずこつちを終わらせる事に

102 見た目はアレですけど悪いやつじゃないんです、信じて下さい

専念しよう。

広樹、暗躍ス？

間宮で諸々の作業を終え、後始末を済ませた俺は執務室へと引き返した。暁型姉妹の姿は既になく、間宮さんもお店に戻ったのでここには居ない。

「お待たせしました。それで相談とは」

「ソファに座って待っていて。今、関係者を呼びます」

加賀さんに言われるままソファに座る。何処かへ内線を掛けているようだ。数分した後、3人の艦娘が執務室を訪れ、俺の前へと座った。

「航空母艦、赤城です。お噂はかねがね伺っております」

「航空母艦、飛龍よ。期待してるからね」

「同じく航空母艦、蒼龍。よろしくね」

あ、やばい。良家のお嬢様な雰囲気黒髪美人は俺の心に刺さるんですよ。これに加え今風の女子大生的なこっちの2人も暗い青春を過ごした俺には眩しすぎる。

「平素よりお世話になっております、後藤田と申します」

人数分のお茶を持った加賀さんが赤城さんの横に座った。こうして見ると凄まじいビジュアルだ。美人が2人に可愛い系が2人。花園そのものと言っていいかも知れな

い。

「相談は他でもなく、仕事の話です。実はあなたがこの鎮守府に出入りするようになる前から、私たち空母が寝起きしている寮で少々深刻な事態が起きていました。あなたのこれまでの仕事ぶりと人柄が信頼に値するかを長らく見させて貰っていたけれど、どうやら問題無さそうとの結論に至ったので正式に依頼をしたいと思えます」

やだ何それ怖い。だから俺に対して常に抜き身の日本刀のような視線を浴びせていたのか。

「内容はネズミ退治です。期限は設けません。そちらのスケジュールを優先して構わないわ」

おっとこれはまた手強いのが出て来たな。この業界じゃGと並んで一二を争う依頼案件の持ち主だ。簡単にいかないのは目に見えている。

「長い戦いになると思いますが、それでも宜しいですか」

「既に私たちはそれを繰り返して来ました。ですが、そろそろ素人の手には追えないレベルになりつつあります。あなたはこれで長期的に安定した依頼をこなせるし、私たちは私生活が安全になる。お互いに利益がある事じゃないかしら」

なーんか零細の弱みを握られたみたいでちよつと納得いかないが、逆を言えばこれはウチだけじゃなく町全体の利益になり得る事だと思った。何かしらの提案で町に経済

効果を得られるかも知れない。

「委細は承知しました。それでこつちも一つ提案と言うか相談なんですが……」

「なに?」

「あー……この仕事は確かにいい金額で取り引きさせて貰っていますけれど、ウチだけが利益を得るのは申し訳ないんで、例えばこの皆が休日とかに町へ出掛けてお金を使って貰えたりなんかすると、有難いなあと」

自慢じゃないが、町には一応でもアーケード街や中規模のデパートがある。卸売り市場や美味しい店だってままあるし、ちよつと歩けば自然も多い。大人になってから移り住むと少々物足りないと感じるだろうが、ここで生まれ育った人間には十分過ぎる環境だった。

「二個人にしては差し出がましいお願いだと思いますし、保安上の都合なんかもあるでしょうが、ご検討頂けないでしょうか」

うーん、営業マンになつた覚えはないんだが、彼らの仕事はこんな感じなんだろうか。ウチは基本的に依頼や相談があれば駆け付けけるタイプの業種なので、こつちから売り込みにいく事はないからよく分からんけど……

「……そのお年で素晴らしい考えをお持ちですね。いや、感服致しました」

急に提督さんが喋り出した。いえ違うんですよ。これで店の改装なんかすると、商店

街の連中に「どっから儲けた」とか言われるんで、町の金回りが全体的に良くなれば隠れ蓑になるんじゃないかってそんなゲスい事を思ってたなんて言える訳ないデスヨネー

「他でもない後藤田さんのお願いです。近い内に少人数ずつで町の方へ行かせて頂きますよう」

すると、赤城さんの目の色が変わった。それを見た加賀さんは呆れ顔になる。

「赤城さん、お店に迷惑をかけないよう自重して下さいね」

「え、あ、は、はい、もちろん」

しどろもどろになる赤城さんがとてもカワイイです。しかし、なぜ急にそんな仕草になったのだろうか。

「あのお、不躰ですが、黒川食堂さんを利用された事はありますか?」

「ああ、トンカツの美味しい店ですよ。揚げ物全般はクオリティが高いですね」

「み、三好屋さんは」

「金目の煮付けが最高ですね。刺身も美味しいです」

「松田製麺さんは」

「本場香川で修業した親父さんが作る讃岐うどんは絶品ですよ」

「赤城さん、その辺にして」

「あ、はい」

シユンとなった赤城さんもカワイイです。もしかして、かなりの食通なのでは…

「ごめんなさい、この人は美味しいものに目がないのよ。前々から外のお店に行きたがってたの。色々あつて実現出来なかつたから舞い上がっちゃったみたいね」

「す、すみません」

「ねえねえ、オススメの居酒屋とかない？」

「大盛りサービスのお店ある？」

空気を読まずに飛龍と蒼龍が口走った。加賀さんの目付きが険しくなる。やばい、このままでは俺もとぼっちりを食らいそうだ。

「あー、じゃあ軽くりストアップしたのを後で渡しますんで、取りあえず現場を見せて貰えますかね」

「そうね。じゃあ行きましょう」

取りあえず難を逃れた。現場を見たら一旦店に戻って装備を整える傍ら、地域情報誌を持ち出して来る事にしようと思う。

忍び寄る前歯

執務室を後にした我々は、空母寮を目指して歩き出した。通り慣れた道を歩いて数分。目的地に辿り着く。

「ここが私たちの空母寮。寮長は私なので悪しからず」

心なしか偉そうに振舞う加賀さんであった。

「中へどうぞ。居る者だけでもご挨拶させようと思つて、集めています」

赤城さんに促され、ついに俺は空母寮へと足を踏み入れた。これまではGが定期的に出没する施設だけしか入った事がないので、ここは初めてである。

「失礼致します」

1階ロビーでは何人かの艦娘が待っていた。見るからに外人さんも居る。ちよつと怖い。

「見た事や聞いた事があると思うけど、こちらが後藤田さんよ。これまでの経緯を含めて、正式に依頼をするに至りました」

加賀さんの紹介で皆が立ち上がった。あかん、全員美人や。

「翔鶴と申します。この度は私たちの依頼を受け入れて頂き、ありがとうございます」

「妹の瑞鶴よ。大いに期待してるから、是非お願いします」

「こんな姉妹が近所に居たら俺の人生はもう少し変わって……ないか。」

「アキラでーす、イタリヤから来ましたー」

「私はイントレピッド、アメリカから来たわ」

「あー、日本語お上手ですこと。」

「後藤田です。お世話になっております」

細かいことは抜きにして、ネズミ共が好き勝手にしているらしい現場の視察を始めた。場所は共同の炊事場で、見た感じではかなり綺麗にしているようだ。しかし……

「……臭いますね」

「あら、流石は本職ね。私たちはもうこの臭いとうんざりしてるけど」

臭う。そう、これは連中が撒き散らす尿の臭いだ。恐らく、動かせない器具類の裏側や重い家電製品の下を自分たちのパラダイスにしているのだろう。一筋縄でいかない相手なのは明白だ。

「捕獲用の罠なんかは設置していますか？」

「色んな隙間にこれでもかかってぐらいの回数で仕掛けて来たわ。その都度に交換しても、掛かっているのは精々が一匹か二匹。毒の入った餌もあちこちに置いてあるけど、一ヶ月に数匹が引っくり返ってる程度で根本的な解決にはなっていないわね」

「なるほど。ちよつと失礼しますよ」

懐からペンライトを取り出して、隙間という隙間を調べ回った。業務用冷蔵庫の裏側を覗いた時、長い尻尾が消えていくのを目撃した。おまけに小さなお土産まで置いてある。邪魔してしまつたようだ。

「……………ふーむ」

作業着の腕ポケットに入っている、もう1つのライトを取り出す。これは特注品のブラックライトだ。ネズミの尿には蛍光性のある物質が含まれている。しかも連中は用を足しながら歩き回るので、このライトを使えば足跡を見つける事が出来るのだ。

「加賀さん、気分を悪くする可能性があるので外に出て頂けますか。出来れば皆さんも一緒に」

「……………そうね」

ゾロゾロと空母の皆が外に出て、炊事場には自分だけが残った。そしてブラックライトを照らした瞬間、炊事場中に無数の足跡が浮かび上がった。床だけでなく壁、流し台、冷蔵庫、天井に至るまで足跡で満たされていた。

「……………うへえ」

これでは掃除しても掃除しても焼け石に水だろう。どう伝えるべきか悩みつつその場を後にした。腕を組んで待つ加賀さんと対峙する。

「どうかしら」

「単刀直入に申しますと、駆除が終わるまで出入りしない事をオススメします。ここはどうしても使わなければならぬ場所ですか？」

「他の寮を借りればここを使わないという手もあるわ。まあ、私たちも使う前は念入りに掃除をしてからにしているけど」

「でしたら、暫くの間は使用を控えて下さい。これから店に戻って色々持って来ます。その間に皆さんは、年末レベルの大掃除準備をしておいて下さい。まずここを綺麗にして、連中の行動範囲を絞り込みます」

提督さんにも断りを入れ、一度店に戻った。倉庫からあれやこれやを持ち出し、店の在庫からも色々と車に積み込んだ。また鎮守府に戻ろうとする矢先、忘れ物を思い出す。

「おっと、赤城さんに渡すやつを持ってかないと」

居間の新聞紙置き場から今月の地域情報誌を引っこ抜き、パラパラと捲って目ぼしい店に赤丸をつけた。話が纏まったら、店の方にも一言伝えておいた方がいいだろうと思いつつ、車に乗り込んで鎮守府へと舞い戻った。

「お待たせしま………凄い格好ですね加賀さん」

「あなただつてスズメバチと戦う時はこんな感じでしょう？」

化学消防隊のような防護服に身を包んだ彼女たちが出迎えた。これが炊事場を掃除する時のユニフォームらしい。

「化学防護部隊で使用されているスーツで、余り物を回して貰ったんです。空調機能までついた優れ物ですよ。何時間動き回っても汗だくにならないんです」

何所となく嬉しそうに話す赤城さんに、例の地域情報誌を手渡した。目の輝きが増す。

「赤城さん、中を見るのは終わってからにしてね」

「……分かってますよそんなの」

あ、ちよつといじけた。思ったより面白いなこの2人組。

「では、掃除の前に忌避剤を撒きます。業務用のかなり強力な薬剤ですので、吸い込むと危険ですがその格好なら大丈夫ですね」

全員に先んじて炊事場に足を踏み入れ、隙間に忌避剤を送り込んだ。これはネズミが本能的に危険と感じる匂いがあるもので、行動範囲を押さえ込む事が出来る。その効果で大人しくしている間に掃除して、こちらの領土を広げてしまう作戦だ。

「……おお、元気に走り回ってるな。だが、いつまで持つか勝負だ」

水場や家電の裏側でバタバタと動く音が聴こえる。可哀想かも知れないが、こうしたいと病気を媒介してしまうからお互いのためにならない。人間が居なくなれば、それは

それで連中の食料となる物が無くなるから餓死してしまう。自然に帰ったとしても、適応出来ない個体は淘汰されていくだけだろう。

「OKです。掃除は天井の方からお願ひします」

防護スーツに身を包んだ皆がドカドカと入って来た。脚立を立てたりモップを使ったりして、まず天井の掃除が始まる。俺は邪魔になるから一旦外に出た。

「さて、色々と準備をするか」

掃除が終わったから仕掛ける罠の準備を始めた。廊下で店を広げていると、2人の艦娘が近付いて来た。

「もしかして、後藤田さんですか?」

どうにも幼い声と容姿だ。彼女も空母なのだろうか…

「ああ、お邪魔しております。後藤田です」

「軽空母の瑞鳳です。ネズミ退治に来てくれたんですね」

はて、軽空母とは? 加賀さんや赤城さん達とは違うと言う事か。

「かなり深刻な状態ですが、まだ取り返せる範囲です。長い期間の駆除になると思いますが、一つよろしくお願ひします」

「はい。あ、こっちの娘は私と同じ軽空母の大鷹ちゃんです」

「かすがま……な、何でもありません。大鷹と言います。よろしくお願ひします」

また違う系譜の幼さを感じる娘だ、何か言いかけたようだが気にしないでおこう。

「取りあえず、作業が終わるまで近付かないで下さい。因みにここ以外でネズミを見た事はありますかね」

「多分ここから出て来たのが入り口とか共同スペースをウロチョロしているのは何回か見えます。一応、個人の部屋に出たっていうのはまだ聴いてないですね」

「隼鷹さんがゴミ捨て場でネズミが屯してるのを見たって、ちよつと前に聴きました」

ほう、餌を求めてあちこち移動しているのか。これは本格的に長期戦の構えになりそうだ。

「蒼龍、動かないで」

「え、何ですか加賀さん」

「蒼龍！じつとしてて！」

急に騒がしくなった。中を覗き込むと、誰かの防護スーツの上にチョコンとネズミが乗っていた。冷蔵庫の上とかから飛び移ったのだろう。

「どうしたの皆、顔怖いよ？」

「頭の上にネズミが乗ってるわ。動かないで」

「え!?!」

しかし、彼女は動いてしまった。床に落ちたネズミが出口を求めて疾走して来る。

「はいはい、悪いけどこっからは逃がさないぞ」

忌避剤を進行方向に撒く。一瞬だけ「チユツ」と呻ると、その場に立ち尽してしまった。次第に蹲り、動かなくなった所で掴み上げる。当然、手袋をした状態だ。

「ドブネズミですね。小さく見えるでしょうがこれで十分成体です」

特殊加工された金網の袋に放り込んだ。ネズミが齧っても切れない金属で出来ている。

「……………どうしました?」

気付くと、何だか距離を取られていた。皆が遠巻きにこちらを見ている。

「……………何でもないわ」

「よ、よく掴めますね?」

「気持ち悪くないの?」

「齧られちゃうじゃん」

「この手袋は齧られても破れない繊維で出来ているから平気です。仕事の前後にはちゃんと消毒もしてますよ。あれだったらウチで発注して皆さんに配りましょうか?」

「「結構です」」

うん。何か引かれたのは分かった。以後気をつけようと思う。

「そ、そろそろ交代にするわ。飛龍、五航戦と海外組を呼んで来て」

「了解です」

人員を入れ替えて掃除は続行された。3時間ばかりが経過し、再び炊事場にブラックライトを照らしてみる。

「……綺麗になりましたね。ありがとうございます」

ここからは俺の出番だ。まず薬剤を隙間に流し込み、連中を奥の奥まで追いやる。続いてネズミ捕りを仕掛け、奴らが出没しそうな場所に毒餌を設置。通り道になりそうな場所には忌避剤を撒いた。

「そしてコイツもだ」

炊事場の入り口に、超音波を発生させる機械を取り付けた。この類の超音波発生器は、ネズミが慣れてしまうと効果を発揮しなくなるのだが、これは俺と商店街の電気屋で共同開発した代物で、周波数をランダムに変えて慣れさせる暇を与えないようにしている。中のユニットを交換すれば、全く違う周波数帯の音を出す事も出来るのだ。

「現状で出来る事は以上になります。別のブラックライトを置いておきますので、日に1回ほど連中が動き回ってるかどうか観察をお願いします」

その後、廊下や共同スペースにも忌避剤を撒いて回った。ゴミ捨て場にはネズミ捕りと毒餌を設置。後は経過を見てその都度に対応していこうと思う。

こうして、長い戦いの幕は切って落とされたのだった。

番外編 お出かけ

某県某所

第17 鎮守府 執務室

「それでは、第一陣として君たちを送り出す。迷惑を掛けるような行為は絶対に認められない。加え、何かあれば協力は惜しまない姿勢を貫いて欲しい。以上だ。楽しんで来てくれ」

場違いな場所に場違いな格好の女性が6人居た。白い軍服を着た男性に敬礼をする。と、彼はそれに対して答礼を行った。6人はゾロゾロとその場から立ち去り、敷地の外へと向かう。

「では、スケジュールを再確認します」

6人の中でも幾分かフォーマルよりな格好をしているのは、纏め役の加賀だ。彼女を筆頭に、赤城から飛龍と蒼龍、翔鶴と瑞鶴の5人がそれぞれ私服姿で付き従っている。

「まず、最寄のバス停からバスに乗ってアーケード前で降ります。その後は事前で作成したスケジュールの中で動き続け、夜になる前に同じバス停から乗って鎮守府へ戻ります。異論はないわね？」

「加賀さん、哨戒任務じゃないんだからもう少し気楽に行きましようよ」

「そうそう。司令もああ言ってたんだから、楽しまなくちゃ」

「ラフな格好の飛龍と蒼龍がニコニコしながら言った。しかし、加賀は表情を崩さない。

「私たちは記念すべき第一陣に選ばれました。それはつまり、ここの顔として赴く事です。私たちの言動次第で、次に行く子たちが受け入れられないような事態は避けねばなりません」

「加賀さん、それもいいんだけど赤城さん何とかしてよ」

瑞鶴が指差す先には、満面の笑みを浮かべて地域情報誌を眺めたまま、棒立ちになっている赤城の姿があった。翔鶴が必死に呼びかけて現実へ引き戻そうとするも、全く聴こえていないらしい。

「赤城さん！赤城さん！まだ鎮守府を出てもいないのにトリップしないで下さい！」

加賀が足を進め、赤城の手から情報誌を取り上げた。同時に目の色が戻る。

「……………あれ、私は何を」

「赤城さん、行きますよ」

「あ、はい」

「……………翔鶴、フォローは頼むわね」

「はい！お任せ下さい！」

こうして6人はバスに乗り込み、町へ向かったのだった。最初の目的地は赤城たつての希望こと黒川食堂だ。アーケード前からはちよつと離れているが、歩いて10分かそこらの距離である。

アーケード前

そこそこ発展した地方都市独特の街並みが続いている。バスから降りた6人は、初めて訪れた中心部を前にそれぞれ目を輝かせた。

「ねえ飛龍、あの角の居酒屋とか結構狙い目っぽいよ」

「あつちの洋食屋も美味しそう」

「二航戦、それは次の機会にね」

「加賀さんだつてあそこの本屋さんに行きたそうな目してるくせに」

「黙りなさい五航戦の妹の方」

「赤城さん赤城さん、あのショーウィンドウの服屋さん素敵ですね」

「ええ、そうね」

翔鶴の声に答えつつ、内心は自分の欲望の事しか考えてない赤城だった。そんなこんなで6人は、早めの昼食を取るため移動を始めた。

黒川食堂

突如として現れた謎の美女6人に、同じく早めの昼飯をと入店していたサラリーマンたちは困惑した。こんな揚げ物メインの店には似つかわしくない集団である。それに構わず60代の女将はにこやかに受け入れた。

「はい、いらつしやい。もしかして鎮守府の皆さんかな？」

「お邪魔致します。本日の纏め役をしております、加賀と申します」

「あらあらご丁寧に。こっちのテーブルにどうぞ」

事前に根回しをしているお陰でスムーズな入店となった。今日中に行く予定の店は全て連絡が行き渡っているのです、比較的出入りし易くなっている。

席に着いた6人はメニューをめくり、想像以上の品数に迷いつつも何とか選び抜いた。

「シーフードミックスフライ定食をお願いします」

「ピフカツ定食お願いします！ご飯大盛りで！」

「厚切りチキンステーキ定食、同じくご飯大盛り。あとお味噌汁を海鮮汁に変更で」

加賀、蒼龍、飛龍ともに思い思いの注文だ。続いて五航戦の瑞鶴と翔鶴。

「メンチカツ定食で」

「えーと、そうね。サーモンフライの定食でお願いします」

そして赤城……

「あのお、この数量限定の三元豚厚切りロースカツ定食はまだありますか？」

「今日はまだ注文されていないから大丈夫だよ。それでいいかな？」

「はい、お願いします」ニパー

この店の看板メニューでもある定食を頼んだ赤城の極上の笑顔に対して、全員が苦笑いを浮かべた。それに対し、飯を掻っ込んでいたサラリーマンたちは赤城の笑顔に胸を射抜かれ、箸を進めるのも忘れて見入っている。

「おい、なんだあの娘ら。こんな小汚い所に集団で来るなんてどういう事だよ」

「知るか。それにしても全員レベル高いな」

「そこのお2人さん、明日から出禁にされたくないや静かにね」

「あ、サーセン。単品だから揚げお願いします。それで勘弁を」

「こつちも白身フライ追加で」

「はい毎度」

かなり図太く商売しているようだ。その後、運ばれて来た定食に6人は舌鼓を打ち、大満足の表情で会計を済ませた。

「ご馳走様でした。またお世話になると思います」

「今度はもつと大人数でおいでよ。待ってるからね」

「はい、ありがとうございます」

「「「ご馳走様でした」」」

「ありがとうね」

店を後にし、次の目的地へと向かう。ここからバス停まで戻り、アーケード街の中に入った。

「次は誰の要望かしら」

「はーい」

飛龍と蒼龍が同時に返事をした。見た目だけなら大学生風の2人が行きたいと言っていたのは、アーケード街にある小物雑貨の店だ。

雑貨屋『わだつみ』

「こんにちはー」

「お邪魔します」

臆せず堂々と入る二航戦。ある意味で最も肝が据わっているのはこの2人ではないだろうか。

「いらっしやい。ゆっくり見てっておくれ」

店主は80近いお婆さんだった。店内は観光地のお土産屋のような雰囲気だが、落ちて置いて居心地がいい。

「初めまして。纏め役の加賀と申します」

「こんな所に大人数でありがとうね。気に入るような物があればいいけれど」

暫し、店内を散策する。飛龍と蒼龍は透明な水晶玉の置物に目を奪われていた。

「すっごく綺麗」

「部屋に飾っちゃおう?」

3つほど向こうの棚では翔鶴と瑞鶴が巾着を物色中。

「これ可愛いわね、こっちのもお洒落な模様で素敵」

「うーん、私はシンプルな無地の方が好きかなあ」

店の最も奥にある一画にて、赤城が小瓶を手を取っていた。

「赤城さん、それは?」

「香水みたい。いい香りね」

「赤城さんにはハッキリと分かる香りよりも、ほのかに漂う感じの方が似合うんじゃないかな」

「かしら」

「でも私にはちよつと」

「(う)ういのはどう?」

別の小瓶を取った加賀は、それを赤城に渡した。

「……結構いいかも」

「私も何か1つ買おうかしら」

約1時間後、それぞれお買い上げして店を出たのであった。次の目的地は翔鶴希望の場所だ。

「瑞鶴は行きたい所ないの？」

突拍子もなく訊ねる飛龍。

「私は町に来てみたかっただけだからねえ。まあ気に入った所があればまた来ようかな」

本当は可愛いぬいぐるみが沢山あるお店に行きたかったのだが、このメンバーである事を考えてまた今度にする瑞鶴なのでした。ズイズイ

ブティック『Southern Cross』

定食屋、雑貨屋と来たが、最もハードルの高そうな店に着いてしまった一同。

「……翔鶴」

「はい？」

「かなりレベルの高そうなお店だけど」

「大丈夫ですよ。加賀さんも一緒にどうですか?」

因みに他の4人は店の雰囲気に圧倒され「ちよつと」と言う事で隣の本屋に逃げた。加賀の服装が幾分かフォーマルより、翔鶴がシンプルながらも大人っぽいスタイルなので、場違い感はないと思える。

「……仕方ないわね」

「じゃあ行きましょう♪」

連れ立って店に入る。まず出迎えたのは、長身で着こなしも抜群なイケおじ店主だった。

「いらつしやいませ。鎮守府の皆さんですね。ようこそおいで下さいました」

「初めまして。飛翔の翔に鶴と書いて、翔鶴と申します。こちら、纏め役の加賀さんです。字は加賀かがのくに国の加賀と書きます」

「ご丁寧にありがとうございます、店長の本多です。向こうに居るのは妻です。ご要望があればどちらにでも遠慮なくお声掛け下さい」

スラつとしたスキニーを穿いた細身の美人妻が手を振っていた。旦那に負けずお洒落である。

「本日は皆さんがいらつしやる間だけ貸切にしてありますのでごゆっくりお楽しみを。そう言えば6人とお聴きしていましたが、他の皆さんはどうされましたか?」

その質問で2人は苦笑いになった。隣の本屋から4人を連行し、問答無用で店に押し込む。

「「お、お邪魔します」」

縮こまった4人が合流した所で、店の入り口には『貸切』の看板がぶら下がった。約2時間後、それぞれが2〜3着を購入して店を後にする。

「またのご利用をお待ちしております」

「ありがとうございます。また来ますね」

「お気をつけてお帰り下さい」

店から『貸切』の看板が取り払われた。同時に数名の客が店へと入っていく。

「人気店なんですね。また来ましようね加賀さん」

「私は暫くいいかしら……」

殆ど翔鶴の独壇場だった。仕舞いには店主の妻と一緒に全員のコーディネートを始め、自分そつちの形で店員のような状態になっていた。

「結構な額だったね」

「でもまあ、いい買い物だったじゃん」

二航戦はご満悦。瑞鶴は苦笑いだが、新しい領域に踏み込んだ気分ではあった。

「買っちゃいましたねえ、着る機会があるかどうか」

「白いワンピース、似合ってたわよ。赤城さん」

「赤城さん、私が選んだカーディガン普段使い出来ると思うので、着て下さいね」
何だか微笑ましい光景である。そして6人は、最後の目的地へ辿り着いた。

喫茶店『銀河』

ここは加賀の要望だった。美味しいコーヒーが飲めるらしく、ケーキも頂けちゃうお店だ。

「いらつしやい。テーブルへどうぞ」

「いらつしやいませー」

おじさん2人が出迎える。どうやら兄弟らしい。

「兄ちゃん、お冷6つ」

「はいよー」

独特な雰囲気だ。6人はテーブルに着き、メニューを捲る。さつきのブティックで気疲れしたのか、甘い物を体が求めている。ケーキも食べたい所である。

「お決まりですか」

真つ先に頼んだのは元気が残ってる飛龍と蒼龍。

「アイス抹茶ラテとホワイトケーキのセットで」

「カフェオレにチーズケーキお願いします」

続いて加賀。

「オリジナルブレンドコーヒー、それとおからクッキーを」

渋いチョイスだ。そして翔鶴に瑞鶴。

「アイスカプチーノとブラックチョコケーキのセットをお願いします」

「ん、ココアとスイートポテトセット」

最後は赤城…

「アイスコーヒーとスペシャルバナナパフェをお願いします」ニンマリ

さすがです。

「はいはい、少々お時間頂きますねー」

フロアが弟でカウンターが兄のようだ。待っている間に加賀が挨拶を済ませる。

「第17鎮守府から参りました。纏め役の加賀と申します」

「ああ、会長から聴いています。あんまり気にしないでゆっくりしてって下さい」

「飲みモンだけ先に頼むわー」

「はい。どうぞお席へ」

テーブルへ戻ると同時に、それぞれが注文した飲み物が並んだ。程なくして食べ物も

到着する。

「チーズケーキおいしー」

「一口ちようだい一口」

「いい香りね、心が安らぎます」

「ビターで美味しいわ、このケーキ」

「あゝ、ココアとスイートポテトで口の中がとろける」

「おいひいゝ」

一息着いた感じだ。時刻は既に夕方。そろそろ帰る頃合である。

「じゃあそろそろ帰りましょう。忘れ物のないように」

会計を済ませてバス停を目指す。学校帰りの学生や、定時上がりのサラリーマンたちがチラホラと目立ち始めるバスへ乗り込んだ。

「あー、いいー日だったね蒼龍」

「ねー」

今度は夜の町へ呑みに来たいと思う二航戦であった。

「瑞鶴、次は大人っぽく纏めてみましょう。また行こうね」

「んゝ、ま、また今度ね」

着せ替え人形は御免だけど新しい自分を発見してみたい気はする瑞鶴。そして次こ

そはぬいぐるみの店に行くとは決心した。

「ちよつと眠くなつて来ました」

「我慢して赤城さん。夜に寝れなくなるわ」

バスは町の中心を抜けて郊外へ。山を越えて鎮守府へ到着した。バスから降りた6人は提督に報告を済ませて寮へと戻る。こうして最初のお出かけは無事に幕を下ろしたのだった。

チヤバネール戦争Ⅰ

凄まじい日差しが照り付ける中、俺は定期駆除ではなくちよつと久しぶりの依頼で鎮守府へ来ていた。

「……………あじい」

日差しはどうしようもないが車の中は冷房が利いていて快適だ。その空間から出た瞬間、灼熱地獄が襲い掛かって何もかもが嫌になる。

「よっこいせ」

仕事道具を纏めて俺は一路、台車を押しながら司令部施設へと向かう。道順はとつくの昔に覚えていた。炎天下で走り回る駆逐艦たちと挨拶を交わしながら歩く。

「鳥海く、溶けちまうよく」

「もう摩耶ったら。中に入ればクーラーで涼しいのに」

「なあんか好きになれねえんだよクーラーってく」

軒先の日陰で水の入った桶に足を突っ込んで、グツタリしている艦娘が居た。窓からはもう一人が顔を出して何か話している。

「お、何だお前。侵入者かあ？」

急にこつちを見たと思ったら侵入者扱いされた。酷い。

「害虫駆除の後藤田プロテクトクリーンと申します。提督さんには鼻屑にさせて頂いて
おります」

「あーお前かあ後藤田つてのは。アタシは摩耶。こつちは鳥海。高雄姉と愛宕姉から聴
いてたわあ」

「初めまして。鳥海と申します」

眼鏡に黒髪で礼儀正しい。こんな後輩が居たら好きになつていたかも知れない。い
や落ち着け俺。つてか摩耶さん？足開きすぎつス。

「よろしくお願ひします。何か用向きでしたら提督さんに一言お伝え下さい。そうすれ
ば駆け付けますんで」

「おーう、その内に世話になるかもなあ」

取りあえずその場から立ち去った。いやしかし、ショート巨乳もいいもんですね。

「……お仕事お仕事」

頭を切り替えて歩く。司令部施設に到着すると、半袖の大淀さんと一緒に見た事のない
艦娘が待つていた。大淀さんと同じような黒髪のロングヘアーが特徴的である。

「お疲れ様です、後藤田さん。大荷物ですね」

「ご無沙汰しています。今回の相手はこれぐらいじゃないと対処仕切れないですよ」

ああ、半袖の大淀さんも乙なものですな。こんな娘と一緒に委員会の仕事とかする高校時代が欲しかった。何か結構前にも同じような事を考えた気がするけどまあいいや。

「ほら阿賀野。事情を説明して」

大淀さんが「阿賀野」と呼ぶ艦娘は、ばつの悪い顔で恥ずかしそうに喋り出した。

「阿賀野型軽巡洋艦の阿賀野です。来てくれてありがとうございます」

「ご存知と思いますが後藤田です。相当に手強い相手なのは承知しています。何か背景みたいなものがあればご説明願えますか」

「えーと、私その、結構お菓子とか好きで。でも食べると眠くなっちゃって、ゴミとかそのままだったんですけど。最初は妹の能代が片付けてくれてただけど、能代が最近になって別の鎮守府への出張が多くなっちゃって、部屋がその……あの」

まあこれ以上は聴くまい。大方、何かの拍子で入り込んだのが正しく楽園を見つけて大繁殖してしまったんだろう。

「取りあえず現場に向かいますよ。ここで話し込んでたら熱中症になりますよ」

と言う訳で移動する。日陰を選んで進むので、今まで通った事のない道筋で新鮮な気分だった。

5分ばかり歩いて目的地に到着。白い外壁の、正しく寮と呼ぶべき建物が目の前に現れる。

「私たち軽巡が寝起きしている寮です。他には、補助艦艇に分類される娘たちも居ます」
「とつても綺麗なの。艦種別の寮清潔度ランキングで、いつも1位だったんだから」

そういう阿賀野を冷たい視線で睨み付ける大淀さん。その目、素敵です。

「あ、えつと、綺麗な時もありました。今は最下位です。ごめんなさい」

「まったく。これに懲りたら少しは自立した生活をしてよね」

「善処します」

仲間にフランクな大淀さん。いいね。

「では、中に入って下さい。お手伝いの人員も確保済みです」

ここは初めてだった。ちよつとだけドキドキしながら軽巡察へと足を踏み入れる。

「みんなー、後藤田さんがいらつしやいました。挨拶をお願いします」

立ち上がったのは総勢10名の艦娘たち。どの娘たちも非常に容姿端麗な上に外人

さんまでいらつしやいます。

「球磨型軽巡洋艦、木曾だ。本業の手を借りられるとは有難い。頼りにしてるぜ」

「同じく球磨型軽巡洋艦、大井よ。大井川の大井だから間違えないでね」

「な、長良型軽巡洋艦、名取と言います。よ、よろしくお願いします」

「長良型軽巡洋艦、由良です。よろしくお願いします」

「川内型軽巡洋艦、神通です。ご足労頂き、ありがとうございます」

「ルイージ・デイ……えーと、アブルツツイとお呼び下さいね」

「あー、あたしはガリバルデイでいいぞ。よろしくな」

「水上機母艦、瑞穂と申します。何かお手伝い出来る事があれば幸いです」

「給油艦、速吸です。頑張つてサポートしますね」

「Bonjour、水上機母艦、Commandant Teste、です。どうぞ、よろしくお願い致します」

「おかしいなあ、俺は女子校にでも迷い込んだのだろうか。つてか軽巡つてあれだね、重巡よりも少女らしい感じがするから好きな人は好きだろうね。そして明らかに「海外から来ました」感満載の美女まで居る上に、妙に着込んだ和風美人と、君は高校生ですか？と聴きたくなるそのあなた。すまんがあまり近付かんでおくれ。ワシには刺激が（ry

「どうかされました？」

「やめて大淀さん、急に視界へ入って来ないで下さい。ドギマギしてしまいます。」

「ああ、いえ。軽巡の方は殆ど大淀さんしか接点がなかったもので、こんなに居るんだと正直驚いています」

「そう言えば駆逐艦寮でGを串刺しにしたあの方は不在のようだ。何か怖いのであるべく会いたくないから居なくて安心した。」

「大淀は副官業務もあるから他の軽巡と違って内勤が多いのさ。俺たちとお前がこうして初めて会うのは必然だ」

木曾さんでしたっけ？イケメンな上にイケボとか男として自信無くしそうですわ。まあ元々無いけど……

「それでは、例の場所へ案内を願います。状況を判断した上で、何か任せられる作業があれば割り振りたいと思います」

「はい。じゃあ阿賀野、案内して」

「へ、へい」

この状況を作り出したであろう張本人は、寮の中では低姿勢に振舞っていた。寝起きする全員に迷惑を掛けているのなら仕方ない事だろう。

「こちらでござえます」

場所は寮の3階。他の部屋は換気のためか、ドアがちよつと開いている。しかし、それと違ってドアがしっかりと締められた部屋が4つ存在した。異様な雰囲気を感じられる。

「……あそこですね」

「最初は阿賀野の部屋。次に隣にある妹の能代の部屋。続いてその下の妹こと矢矧、最後に酒匂。4姉妹の部屋全てがやられてしまったんです」

「まっこと申し訳なく」

ゆつくりと近付く。一番手前にあるドア隙間から、小さくて茶色い何かが這い出て来た。だがこちらの気配を察知したのか、また隙間の奥へと戻って行った。

「……………やつぱりチャバネか」

正直、仕事でもあんまり相手にしたくない存在だ。繁殖力が普通のGに比べて尋常じゃないくらいに早く、ちよつと時間が経つと殺した以上の数に膨れ上がっていく厄介な敵である。しかもサイズが小さく、並のGなら入っていけない隙間でも悠々と入り込み、そこを巢にして爆発的に増える恐ろしい相手なのだ。

「どれぐらいの日数が経ちましたか？」

「阿賀野の部屋に出たのがほぼ一ヶ月前。その後は一週間毎に隣の部屋と広がっていき
ました」

「って事はあつちで増えてこつちで増えて、寿命になった個体の数を補完しながらも総数は上回りつつ勢力を広げたって訳か」

これは悩み所だ。ネズミと同じく1回や2回でどうとなる相手じゃない。空母寮のネズミも一旦は数を減らしたが、まだまだ油断の出来ない状態なのは変わらなかつた。

「戻りましょう。どうもっていか話し合いをしたいです」

って訳で花園とでも呼ぶべきロビーへ戻る。何所となくいい香りが漂っているけど

私は気にしません。

「集合して下さい。後藤田さんからお話があります」

大淀さんの掛け声で全員が素早く集まる。阿賀野は端の方で少し小さくなっていた。

「えー、恐らく数回に分けた駆除になると思われます。どうしても1回で何とかしたいのであれば、方法はなくありません。ですが、皆さんにかなりの協力をお願いする事になります。1度、其方でのご検討もお願ひしたいです」

その言葉で、彼女たちの話し合いが始まった。混ざろうとした阿賀野は木曾に摘み出されて涙目になっている。

「……ほわぁ」

思わず漏れ出る大欠伸。何か眠くなつて来た。どうして人間は暑いと眠くなるのだろうか。

「後藤田さん、お待たせしました」

話し合いが終わった。結論としては、1回で殲滅すべしとの方向で固まったようだ。阿賀野もその方が後腐れなくていいだろうとの事でもあるらしい。

「みんなありがと〜」

「全部終わったらアンタに掃除の仕方を徹底的に教え込むからね。またこんな事を引き起こしたら酸素魚雷ブチ込むわよ」

「もうしません」

土下座する阿賀野の前で仁王立ちになる大井であつた。何か借金取りに平謝りしているようにも見える。

「では、なるだけ一回で全滅させるよう努力します。アフターケアも十分に行いますので、もしまた出て来たらご連絡下さい」

「はい。重ね重ね、よろしくお願い致します」

では仕事の準備に取り掛かろう。ロビーの一画に店を広げさせて貰い、仕事道具を鎮座させていった。

チャバネール戦争Ⅱ

仕事道具を広げ終わった俺は、暫し考えた。誰に何を手伝って貰うかを割り振らねばならない。メインは無論、自分がやるとして彼女たちの役割分担が重要だ。4部屋の駆除を行うには自分だけじゃ荷が重過ぎる

(……性格も考えるとやはり)

イケ木曾さんと、ボーイツシュだけど立派なのをお持ちなガリバルデイさんに戦力的な手伝いを頼もうと思う。どちらかと言えば男性よりの雰囲気なので接しやすいだろ

う。
(それ以外である程度は任せられそうなのは……)

と、ここで1つの考えが浮かんだ。せっかく人手を用意してくれたのに、こつちから仕事を割り振るのはどうなのだろうか。向こうの意見も尊重した上で、任せられそうな場合はそのままお願いし、難しそうなら別の仕事をお願いする方がお互いの理解を深めるのではないか。そんな考えが浮かぶ。

「……はて、どうしたもんか」

取りあえず何の仕事が発生するか考え直す事にした。まず、全部屋を覆うためのビ

ニールシートを展開する係が必要だ。これは他の部屋へ燻煙剤が流れないようにするためと、殺虫効果を上げるために是非ともやって置きたい仕事である。

「まずこれを……3人ばかりで」

次に、チャバネール共を一時的にドア付近から遠ざけるため、ドアの隙間から部屋内部へ殺虫スプレーを流し込む係が1人ずつ。これは誰でも出来るし、2人でも十分だ。

「そしてお次は……」

ドアを開け放ち、中に業務用燻煙剤を押し込む担当が必要だ。これはドアを開けるのに1人、中に入れるのに1人ずつ居ればいい。こつちも同じく、2人で1部屋ずつやっていっても問題ないだろう。

「最後は人海戦術だな」

燻煙剤が十分に浸透した頃合を見計らって、防護装備に身を包んだ突入部隊が踏み込む。あとは見つけた個体や家具の隙間へ手当たり次第に殺虫スプレーをぶちまけていけば、粗方はいいだろう。最後に中の物を運び出し、徹底的に駆除すれば良い。だがそれは、彼女たちだけでも出来る事だ。日が暮れば人手も増えるだろうし、自分が最後まで居る必要は無い。

(こんな所かな、取りあえず提案するか)

考えた事を紙に箇条書きした。これを持って大淀さんの下へ向かう。

「ざっくりですが、これぐらいの仕事が発生します。兼用も十分に可能ですが、まず皆さんの希望を募ろうかと」

「分かりました。こちらで検討しますね」

その一覽に全員が目を通す。名取の顔色が少しづつ悪くなり、アワアワしながら何かを指差していた。恐らくだが、ビニールを展開する係を選んだのだろう。それからまた少し、時間が流れる。

「お待たせしました。これが全員分の希望です」

紙を受け取って内容を検める。ビニール展開係は名取・速吸・瑞穂となった。殺虫剤を部屋の中へ送り込む係は由良とコマندانテスト。燻煙剤を押し込む係にガリバルデイ。ドアの開け閉めについては由良が兼任するらしい。

(んで残りは……)

大井・木曾・神通・アブルツツイの4人で突入部隊を編成。大淀さんは適時、人手の必要な所を手伝ってくれる。阿賀野は1階で待機と言う名の戦力外通告が出ているようだ。

「確認しました。自分が先頭に立ちますので、この希望通りお願いします」

てな訳で、まずビニール展開係の3人を率いて上階へ辿り着いた。

「このビニールは害虫の逃走を阻止すると同時に、薬剤を充満させてその効果を高める

ための物です。また、関係ない場所へ薬剤が流れていかないようにするのに必要となり
ます」

持ち込んだ脚立を使ってビニールを天上から床まで展開し、養生テープで止めてい
く。これが下準備の中で最も時間が掛かるだろう。

「速吸ちゃん、下は押さえてるからね」

「あー名取さん、上まで届かないのでもう少し緩めて下さい」

「養生テープが凄い勢いで減っていきますね。勿体無くはありませんか?」

「全部使い捨てなんで大丈夫です。再利用は経費がちよつとあれでして」

終始ほんわかした雰囲気で作業が進む。展開させるのは廊下を半分に仕切った所か
ら部屋までの空間だ。これでもし部屋からチャバネールどもが飛び出して来ても、別の
部屋に入っていく事は出来ない筈である。

「その調子でお願いします。一箇所だけ開けといて下さいね。出入りが出来なくなりま
すから」

「はい! 速吸にお任せ下さい!」

まあ張り切ってくれるのは嬉しいんだけど、空回りしない事を祈るだけだ。

この場を3人に任せ、一度ロビーまで戻る。次は下準備その2で、部屋に予め殺虫剤
を流し込む係へ説明を始めた。

「えーと、日本語でよろしいですか？」

「ハイ。日常会話程度なら、問題ありマセン」

「伝わってなさそうでしたら、私がフォローしますね」

「おや？ 気のせいかな、2人の声が似ている気がする。まあ世の中には声が似てる人が何人か居るよね。多分。」

「ドアの下には、スプレーノズルが入れるだけの空間があります。そこにノズルを突っ込んで、10秒間の散布を何回か繰り返します。あまり長くやっていると、スプレー缶が冷たくなって来るので注意して下さい。ここまでは大丈夫ですか？」

「ハイ」

「では続けます。ノズルが入ると言う事は、中に居る虫たちも当然ですが出入りが出来てしまいます。もし散布している最中に出て来てしまった場合は自分に対応しますので、お2人は集中して貰って構いません」

「ここで業務用殺虫剤を2人の前に置いた。市販よりも強力な薬剤なので、ゴーグルやマスク、グローブも必要になる。」

「作業中はこれ等の装着をお願いします。目安としては、1部屋に1本分を流し込めば十分です」

「なので殺虫剤は計4本となった。これだけあれば問題ないだろう。」

「何か疑問や質問は大丈夫ですかね」

「えーと……飛んで来たりとかは」

「飛ぶ？ voler dans le ciel？」

すまねえ、フランス語はさっぱりなんだ。日本語すら怪しいのにね……

「これから駆除する種類のは、羽が退化しているので飛べません。大丈夫ですよ」

「あゝ、そうなんです。良かった……」

「私、頑張りマスネ」

うん、笑顔が眩しいとはこの事か。しかしまあ、こんな美人が地方都市の街中を歩いてたら目立って仕方ないだろうな。苦労してないといいいけど……

「それでは次に、ドアの開け閉めと燻煙剤を押し込む件についてですが」

「お、あたしの役回りだな」

視界の中に立派なのが映り込む。それ重力に逆らってませんか？

「ドアの開け閉めはその時間が短ければ短いほど、連中の逃走を防げるので好ましいです。ただ燻煙剤を押し込む関係上、かなり大きくドアを開け放つ必要があります。これは経験上の話ですが、そこそこ大きい個体がドアの隙間から逃げようとして、開けた瞬間に上から落ちて来る事もありました」

それを聴いた瞬間、由良の顔が少しだけ青くなつた。

「そういう事もありませんので、自分がその際はフォローします。ドアを開けると同時に殺虫剤を上から下へ撒きますから、それでドア周辺の個体は一掃出来るでしょう。この瞬間を逃さず、燻煙剤を部屋の奥へ一気に押し込んで下さい」

件の燻煙剤を取り出す。市販の物より一回り大きく、強力な材料を使っている。家具の隙間や家電の中に入り込んでいる個体にも有効だから、相当数を駆除出来る筈だ。

「押し込む際はこの棒を使つて下さい。先端にあるU字の部分に挟めば倒したりせずに済みますし、引き抜く際もスムーズに戻せます」

これは自分で作った物だ。プラスチック製の棒に、同じくプラスチック製のU字を描いたパイプをパテでくっ付けただけの、簡素な手作り道具である。

「へー、これって何所かで売つてるのか？」

「手作りですよ。ホームセンターで適当に見繕つて作りました。仕事に使う物は何所かに発注するより、自分で作った方が安上がりだったりします」

まあ後は商店街の発展に貢献するため、色んな店と共同で何かしら作つたりもしている。この前は豆腐屋と一緒に、ネズミ退治用の豆腐毒団子なんてのをこさえた。意外に効果があったので、空母寮のネズミ駆除でも使おうと思う。

「何か質問はありませんかね」

特にないようだ。最後に、突入部隊を志願した4人へ説明を行う。

「燻煙剤が充満する中では、マスクとゴーグル、グローブ等の防護装備が必需品となります。加えて、皮膚を守るために長袖の服も必要です。何か汚れてもいい服はありますか？」

4人共、微妙な表情になった。まあ女性に汚れていい服なんて無いだろう。予め持って来た作業着（新品）の用意があると言おうとした瞬間、大淀さんから提案があった。「工廠の方で使っている作業着でしたら、すぐに用意が出来ます。持って来て貰いますね」

ロビーの電話で何所かに内線をかけ始めた。その間に作業の説明を進めていると、正面入り口から1人の艦娘が入って来た。

「大淀ー、居るー?」

「こつちこつち」

手に作業着を携えた、ピンク色のロングヘアが特徴的な艦娘だ。大淀さんと同じく、そこは隠した方がいいのではと思えるスカートである。

「紹介しますね。鎮守府の整備や開発に携わっている、工作艦の明石です。こちら、後藤田さんよ」

「明石です。お初にお目にかかります。大淀や加賀さんからお話は伺っております」

「どうも、後藤田と申します」

気のせいかな、ジロジロと見られている気がする。何か珍しいのだろうか。

「あの一、何か？」

「いえいえ、中々に使い込まれてますね。私も工場では作業着なので」

ああ、そこにシンパシーを感じたのね。まあ悪い気はしないけどさ。

「そのベルトって何所のメーカーですか？」

「これですか？ これは近所の作業用品店で作って貰ったやつで、ベースは〇〇ってメーカーだったかと」

「へー、いいですねえ。あ、その安全靴って××の製品ですよ。私も好きで使ってるんです」

「これ動きやすくいいんですよ。値段もそこそこですし」

「明石、仕事で来て貰ってるんだからそういう談義はまたにして」

「あ、ゴメンゴメン。じゃあこの作業着は使い終わったら衛生の方に回しといてね。じゃあ、後藤田さん、私はこれで戻ります。今度来られた時にでもゆっくりお話ししましょう」

こっちのリアクションを余所に、彼女は戻って行った。うーん？ 何かフラグ発生した？ いやそんなまさか。まさかね……

「……それでは着替えの方をお願いします。ちよつと上の様子を見て来ますね」

階段を上がりながら、気持ちを整理した。いや、ない。勘違いはいけない。うん。
(広樹です……………よく分からんとです)

チャバネール戦争Ⅲ

発生したのかどうかも分からないフラグ（？）を頭の中で否定した俺は、ビニール展開係の3人が居る所へ向かった。

「どんな感じでしょうか」

3人は、ぼつの悪そうな顔をしていた。どうしたのだろうか……

「あ、あの、やってしまいました」

「はい？」

暑さとは違う汗をタラ〜と流す速吸を尻目に、ビニールで仕切られた廊下を見渡す。何所からどう見ても完璧な状態だ。しかしそこには、ある筈のものが無かった。

「あー……全部塞いじやったんですね」

出入りするため一箇所だけ開けておいてと伝えたのだが、全部塞いでしまったようだ。

「ご、ごめんなさい〜」

「申し訳ありません」

「つい夢中に……」

「まあまあ、どっか切りましょう。それで大丈夫です」

腰物からハサミを取り出し、適当な場所を切った。これで塞いだ場所と廊下間の出入りが可能になる。切った部分のビニールが汗でくっついて鬱陶しかった。

「これで良しと。では次の段階に移ります。人手が必要になったらまた手伝って頂きますので、取りあえず休憩して下さい」

3人を引き連れてロビーへ戻る。次は部屋の中に殺虫剤を流し込む作業だ。それが終われば直ぐに燻煙剤を部屋に入れる作業を行うため、防護装備を着けて待機していた由良・コマンダンテスト・ガリバルデイと共に上階へまた戻った。

「おー、すげえな。ゾンビ映画とかでこういう仕切り見た事あるぞ」

艦娘もゾンビ映画なんて見るのか……

「それじゃあ、お2人は打ち合わせの通りお願いします。ガリバルデイさんはその間、作業の再確認をします」

「お任せクダサイ」

「はい、何かあれば呼びますね」

2人がビニールで仕切られた空間に入っていく。俺はガリバルデイさんに近付こうとして2人とすれ違った。その瞬間、言葉では言い表せない素敵な匂いがしました。

(……………くそ、ここに長居は出来ないな)

何でこんないい匂いがあちこちからするんですかねえ。ちよつとつらいです。

「で、そいつを押し込めばいいんだな？」

いかんいかん、説明に集中しなくては。

「そうです。中の線まで水を入れて、この筒状のやつを垂直に落とし込みます。1分ほどで煙が出始めるので、その前に部屋へ押し込んで下さい。加熱して容器も熱くなるので十分に注意をお願いします」

「分かったぜ。任せてくれ」

イメージトレーニングを始めた彼女を横目に、ビニールで仕切られた空間へ足を踏み入れた。2人はドアの下にノズルを突っ込んでスプレアの噴射を繰り返している。

「大丈夫ですか？」

「ハイ。スプレー缶が冷たくなって来ましたが、問題はアリマセン」

「あの……さつきからカサカサと聞こえるんですけど」

そう言いながらこつちを見ている由良の足元へ、下の隙間から出て来た1匹が近付くのを発見。俺は素早く接近し、軍手を嵌めている右手をチャバネールの上からそつと押し付けた。

「ああ、気にしないで下さい。作業に集中して貰って大丈夫です」

右手を握り締め、床から離す。ヤツの姿形は無かった。この手の中に居る事は間違い

ない。

「……もしかして今」

「ちよつと急だったもんで、粗末なフォローになつてしまいました。軍手諸共にウチで処分しますのでご安心を」

そう言いつつ軍手を右手ごと黒いビニール袋に突つ込み、しっかりと口を閉めた。両手は念のため除菌シートでしっかりと拭き、新しい軍手を取り出して余りの殺虫スプレーも握り締め準備完了である。

「では改めてフォローに入ります。気にせずに引き続きお願いします」

由良は何か言いたげだったが、諦めたらしく作業を続けた。その後は幸いにドアの間から出て来る事はなく、4部屋に1本ずつの殺虫剤を流し込む事に成功する。

「腰が痛くなつちやいマシタ」

「同じ姿勢ですしね。私も背中がちよつと」

「よーし、あたしの出番だな」

いよいよ、部屋に燻煙剤を押し込む所まで来た。これが終われば、部屋に出入り出来るようになるまでは少し時間が掛かるので、そこを休憩時間出来るだろう。最後の仕上げは大仕事だろうから、そのために体力を回復させる時間は欲しかった。涼みたいと言ふ気持ちも強い。

「開ける、噴霧、押し込む、引き抜く、閉める。ゆっくりでいいので、正確にやっていきましょう。準備はいいですか？」

「任せてくれ」

「は、はい」

由良がドアノブを握り、ドアの前でガリバルデイが待機。コマンダンテはその間、他の部屋から這い出て来るのが居ないか見張っている。

「いきます。5、4、3、2、1」

ドアが開いた。殺虫剤のせいで若干煙いが、気にしている暇は無い。ドアの上や仕切り部分に張り付いたのが飛び出して来ないよう、殺虫剤を上下に勢いよく噴霧した。

「行くぜー」

容器には予め水が入れてあった。そこに燻煙剤の本体を落とし込み、煙が発生する前に手作りの棒で容器ごと部屋へ押し込んだ。

「閉めて下さいー」

「はいー」

ドアは再び閉じられた。いい出だしである。この感じで一気にやっていきたい所だ。「いい感じですよ。このまま行きましょう」

残りの部屋は3つ。順調に同じ事を繰り返し、無事に作業を終える事が出来た。これ

で残るは部屋への突入のみだ。

「じゃあ一度、休憩にしましょう。再開は1時間後とします」

「ふう、緊張した」

「お見事デス」

「ああ……疲れましたねえ」

1階のロビーへ戻る。いい匂いがした。今度は食べ物の方だ。

「お疲れ様です。こちらで休憩して下さい」

テーブルには、色んな種類のサンドイッチが鎮座していた。もしかして大淀さんが作っただろうか。

「おお、ちやうど小腹が空いてたんだ。有難いぜ」

「綺麗な飾り付けデスネ」

「誰が作っただんですか？」

「阿賀野よ。手伝えないなら、これをその代わりにつて」

なるほど。罪滅ぼしとまではいかないが、別の形で貢献しようとした訳か。とてもいい事だと思います。

「みんなー、阿賀野特製のサンドイッチ、どんどん食べてね」

「凝った料理は出来ないくせにこういうのは得意なのよねーアンタ」

「大井さん、それ貶してます?」

「褒めてるつもりだけど?」

何だか微笑ましい光景だ。女子校の昼休みはこんな感じなんだろうかと、勝手な妄想が駆け巡る。

「後藤田さん、どれがいいですか?」

小皿を持った大淀さんが訊ねる。何と贅沢な事だろうか。見目麗しいあなたに取り分けて貰えるとは歓喜の極み。

「それじゃあ卵サンドとハムサンドを2つずつお願いします」

「いっぱいあるから、遠慮しないでね」

いや、あんまり食うと後でキツいんですけど……

って皆さん結構お食べになるんですね、こんな暑いのに……

1時間後

「ではそろそろ再開しましょう。ここからが最も大変な作業になりますが、夜には一段落すると思います。宜しいですね?」

突入部隊の4人は完全装備だ。俺も同じような格好である。

「おう、いつでもいいぜ」

「やってやろうじゃないの」

「万事、お任せ下さい」

「nessun problema、行きましょう」

再び上階へ向けて足を進める。すると、ビニール展開係の3人が待っていた。

「お水やお茶をご用意しました。椅子もあるので、疲れたらこちらで休んで下さいね」

瑞穂さん、あなたは時代劇に出て来るお茶屋さんか何かの一人娘ですか？ とでも言

わんばかりの雰囲気纏っていた。

「ああ、これは嬉しいですね。ありがとうございます」

「扇風機もありますよ。気分が悪くなったら当たって下さい」

速吸と名取が廊下に扇風機を用意していた。風が生暖かくても、無いよりはマシな筈だ。

「感謝します。では始めましょう」

1つ目の部屋に取り付いた。ドアを開けると、まだ気化仕切っていない薬剤が白い煙となつてモクモクと出て来る。

「ゴーグルとマスクは絶対に外さないで下さい。目と喉をやられます」

先導して中に踏み込んだ。当然仕事でだが、女性の部屋に入るのは何度か経験がある。ここはよく片付けられた綺麗な部屋だったのだろう。それがチャパネールの侵攻によつて無残な事になっていた。床は死骸だらけで米粒のような物が沢山ある。そう、

これは連中の卵だ。

「居たぞー！」

イケ木曾さんが叫ぶ。カバー付きの衣装掛けを3匹ばかりが下に向けて這っていた。

「食らいなさいー！」

「逃がしません」

大井・神通ペアが素早く殺虫スプレーで排除。俺も床でまだピクピクしているのを集中的に駆除していった。

「オラオラ！ 隠れてんじゃねえぜー！」

「さあ、出て来なさいー！」

木曾さん絶好調のようです。家具の隙間にノズルを突っ込んで追い立てて、逃げ出して来た所をアブルツツイが無駄なく仕留めた。

「なあ、この小さくて黒い粒は何だ？ 沢山あるが」

しゃがんだ木曾が何かを指差す。砂か何かのようだがそれは……

「ああ……それ、糞です」

「……本当か？」

「はい」

マスク越しに木曾の顔が青ざめた。まあ無理もないか。

「お、恐ろしい連中だ」

「油断ならない奴らです。気を抜かないで下さい」

「ベッドも台無しじゃないのこれ。能代が見たら泣くわね」

大井さんが死骸と糞だらけのベッドを嘆いた。ああ、綺麗好きな妹さんの部屋でしたか。誠に残念な事で。

「こちら、大方は終わりました。他に敵影ありません」

「いい感じですね。次へ行きますか？」

「全ての隙間に殺虫剤を撒いて下さい。それでもまだ安心出来ませんが、大分マシになる筈です」

そこまで広くない1人部屋に5人が轟く。体を器用に入れ替えて位置を変え、隈なく殺虫剤をぶち撒けていった。何回かアブルツツイさんの胸が当たりそうになるのを全力で回避する場面に遭遇するも、事故は起こさずに済む。

「これぐらいですかね。では外へ出しましょう。体に引っ付いてないかよく確認して下さい」

互いの体を全員で確認し合った。何所にもへばり付いてはいないので一安心である。そして我々は、ビニールで仕切られた空間へと一時的に帰還を果たした。

チャバネール戦争Ⅳ

1つ目の部屋から出た5人は、休憩コーナーで水分補給や涼をとっていた。マスクとゴーグルの下は汗だくである。

「あー、涼しいわー」

「生暖かいな……無いよりはマシか」

大井と木曾は扇風機の風に当たっている。神通とアブルツツイは椅子に腰掛け、常温の水を口に運んでいた。

「冷たいのが飲みたいわねえ」

「暑い時は常温の方が体に良いそうです。冷たい物は体は無駄に冷やして、新陳代謝を下げると言われています」

そんな会話を横目に、帰ったら風呂に入ってビールでも呷りたいなあと思いつつ、温風を送り出す扇風機の風に当たる。

「10分後に再開しましょう。燻煙剤が十分に広まって、効果が最も発揮されている頃に踏み込みますから、次の部屋はもう少し楽だと思えます」

「じゃあ、生きているのは少ないって訳だな？」

「その通りです」

「さっさと終わらせましょう。やる気が無くなる前にね」

休憩後、2つ目の部屋へと我々は踏み込んだ。予想していた通り、動き回っているのはさつきよりも少なかった。これなら次もそこまで面倒ではないだろう。だが、死骸の数が多くなっているのが厄介である。

「ちよつと掃除機を取って来ます。1つ目の時と同じ感じで作業をお願いしますね」

「おお、任せろ」

掃除機は車の中だ。少し距離はあるが、炎天下の中を駐車場まで小走りで向かう。

「あら、サボりかしら」

「何を仰いますか。しつかり仕事してますよ」

道中で加賀さんに遭遇。相変わらず冷たい空気を纏っていた。ただ、表情は以前に比べて柔らかくなった気がする。

駐車場へ辿り着き、車のバックドアを開けて掃除機を引っ張り出していると、正門からゾロゾロと帰って来る集団を見つける。白露型御一行だ。

「あー、後藤田さんみーつけ」

「お久しぶりっぽーい」

「おやまあ勢ぞろいで。どっか行って来たの?」

「皆でプールに行つて来ました。泳ぐのも楽しいですね」

白露、夕立、時雨を筆頭の白露型たち。一見すると普通の女子中学生集団だ。しかも全員私服なので、知らなければ彼女たちが艦娘だと思われる事もないだろう。

「すっかり日焼けしちやったわ。でも、大人っぽくていいでしょ?」

村雨さんや、あなたは何を目指しているのでせうか?

「今日も何かお仕事ですか?」

うん、時雨ちゃんも清涼感があっていいね。

「まあ……軽巡寮の方でちよつとね」

そう言った瞬間、全員の顔が「あー」と言う表情になった。どうやら完璧に知れ渡っているらしい。

「能代さん早く帰つて来て欲しいっほいー」

「長期出張だもんねー。流石に無理だったかー」

「あら、みんな知ってるんだ」

「知らない方がおかしいわよ。不動の寮清潔度ランキング1位が崩れたつて皆で噂してたんだから」

「なあなあ、アタイと山風姉はこの兄ちゃん知らないんだけど誰だよ」

急に口を挟んで来たのは、確か五月雨?と似たようで違う娘だった。その後ろで緑の

髪をした娘が、怖い物を見るようにこちらを窺っている。

「民間の人だよ。害虫駆除業者の後藤田さん」

時雨ちゃんが紹介してくれる。何だか白露ちゃんよりもお姉さんに思えた。落ち着いていいるからだろうか。

「後藤田です、お邪魔してます」

「おお、兄ちゃんが噂の後藤田か。アタイは涼風。後ろに居るのは山風姉。よろしくな」

姉？ 本当に？ 妹さんじゃなく？

「……あの……山風……です」

頭しか見えないんですけど……

「2人は最近まで別の鎮守府で色々と手伝いをしてて、数日前に戻って来たばかりなんです。山風ちゃん、外の人には凄く人見知りなんで、慣れるまで待つてあげて下さいね」

「山風姉のそれは病気だけ。人慣れした野良猫すら怖がるんだ」

「だって……勝手に近付いて来るし」

なんかこうやって姉妹がわちゃわちゃしてるのはほっこりするなあ。いかん、ちよつと陽が傾いて来た。仕事に戻らねば。

「んじゃあ俺はこの辺で。またその内」

手を振る彼女等を尻目に掃除機を抱え、軽巡察まで戻って来た。すると、新しい顔ぶれが出迎えた。

「あー、後藤田さんだっけ？ あたし、北上。大井つちと木曾のお姉ちゃんです」

「いつぞやは妹の龍田が世話になったそうだな。俺は天龍。一番艦の天龍だ」

ああ、世話になったのはこっちの方みたいなものだったが、そういう事にしておこう。目の前の彼女より、あの方を怒らせてはいけなないと俺の本能が警告している。北上のよな感じは話しやすそうで個人的に有難いです。

「どうも、後藤田です。お初にお目に掛かります」

「あの部屋を何とかしてくれるのは願ったり叶ったりだぜ。阿賀野のやつ、暫くは部屋で物食うの禁止だな」

「まあ、あたしは実害無けりやいいけどね」

「俺が真向かいの部屋なの知ってるんだろ。廊下で何回もあのちまいヤツ見てんだよこつちは」

「あ、でしたら諸々が終わるまで部屋に戻られるのはちよつと」

「俺も手伝うぜ。早く終われば部屋でのんびり出来るしな。外へ出る時に一々警戒しなくて済む日々を取り戻すならこれぐらい」

「人手が要るようになったら呼んで下さい、ここで待つてるよ」

北上はあまり手伝う気がないようだ。現状、人手は足りているので家具の運び出しまでは控えていて貰ってもいいだろう。

「それでは天龍さん、防護装備を身に付けたら上まで来て下さい」
「待つてろ、すぐに行くからな」

掃除機を抱えて上階へ向かう。どうやら2つ目の部屋も終わったらしく、3つ目のドアが開いていた。そこから大井さんが出て来る。

「お待たせしました。どんな感じでしょう」

「ここも終わったわよ。1つ目の大変さがウソみたいね」

言葉に疲労が感じられないのでスムーズに進んでいるようだ。これなら4つ目もお任せにして、死骸の掃除と家具の運び出しを始めていいかも知れない。

「では4つ目もお願います。死骸の掃除をしますから、終わった部屋から家具の運び出しもしてしましましょう」

「はい！ 速吸が皆を呼んで来ます！」

人数を指定しないまま飛び出してしまった。全員連れて来られても仕方ないので追い掛ける。

「クマー、力仕事は任せるクマー」

「だるいな、まあいいけどさあ」

「コンディションは最高よ！ 任せといて！」

また見た事のない2人が現れた。でかいアホ毛が特徴的で語尾に「クマ」がつく艦娘と、大昔のスポ根アニメから飛び出して来たようなセーラー服とハチマキの艦娘である。その2人の間を北上がやる気なく歩いていった。

「お、後藤田さんクマ？ 球磨型1番艦の球磨だクマ。北上と大井、木曾のお姉ちゃんだクマ」

「長良です。名取と由良は私の妹です。よろしくお願いしますね」

「どうも後藤田です。えーと、すいませんがまだ死骸の掃除が終わってないので、もう少し待っていて下さい。それに家具を運び出すにはもう少し人手が」

「あく大丈夫大丈夫、球磨姉と長良たちは重巡組にも負けず劣らずのかいりむごお」

球磨が北上にアイアンクローをかけた。

「今度余計な事を言うとか口を縫い合わすクマよ」

「ぐおめんままい」（ごめんなさい）

「もお球磨ったら、その辺にしてあげなって」

そう仰る長良さまも何ゆえに右手をゴキゴキ鳴らしているのでありましようか……

解放された北上の顔は凄い事になっていた。

「むあえがみえめえ」（前が見えねえ）

「じゃあ準備が終わったら呼んで欲しいクマ」

「ウォームアップして待ってますねー」

脅威は去った。いや、これは失礼だな。取りあえず、掃除を急がねば。

「来てやったぞ。敵は何所だ」

「こつちだこつち」

合流した天龍を木曾が手招きする。何かこの2人、ビジュアルもキャラも似ているよな気がした。

(急げ急げ)

1つ目の部屋を掃除機で綺麗にした。2つ目に取り掛かった所で球磨と長良を呼び出し、家具の運び出しを始めて貰う。

「朝飯前だクマー」

「軽い軽い」

続々と運び出される家具が廊下に鎮座していった。1階で待機している人員を召集し、中身を全て開け放つての掃除と殺虫剤噴霧が繰り返される。

「あら、能代ったら意外に大胆なの持つてるわね」

「このブラウスはクリーニングですね。ある程度綺麗にしたら間宮さんをお願いしましょう。結構高いんですよ、これ。でも能代さんがどう思うか……」

「ちよつとさあ、このスカートは短すぎるんじゃない？」

「もう皆！ 能代の服を広げてあれこれ言わないで！」

廊下で大井・大淀・北上・阿賀野が何かで盛り上がっている。聴こえないフリをするのも大変だよ全く。

しかし、大淀さんの言う通り連中のアレで汚れてしまった服は、クリーニングしてま
で着たいだろうか。俺ならちよつと遠慮したいが、まあ2度と手に入らないような物な
ら時間を置いてから着るかも、と個人的に思った。

「……つてこれじゃ廊下に出れねえよ」

いや、恐れるな俺。仕事で来てるんだから何も怖がる事はない。堂々と出ていいん
だ。

「そちらどうですか」

4人が居る方向を見ずに廊下へ出た。4つ目の部屋へ向かう。

「終わったぞ。殆ど死骸だけだったから何もしてないに近いがな」

「くそ、もつと早く来てりや良かったぜ」

俺が外に出た事で、4人の顔が「あつ」となった。あからさまにバタバタし始める。

「では、後処理はそちらでお願い致します。掃除機掛けと諸々の回収が終わったらお
とましますね」

廊下に張ったビニールを全て剥がし、部屋の中に残った燻煙剤の空容器を回収。空になった殺虫スプレーを掻き集め、死骸も黒いビニール袋に集約した。貸し出した手袋やゴーグル等の装備も纏め、部屋を水拭きして最後に忌避効果のある薬剤を部屋と廊下に噴霧する。

「この作業で完全に駆除出来たなら、もう姿は現さないでしょう。一応ですが、全階の廊下に同じ薬剤を撒いていきます」

1階ロビーから最上階まで全ての廊下に撒いて回った。窓からは傾いた太陽が強烈な日差しを送り込んで来る。言葉は悪いがクソ暑い。

「うー、疲れた」

後片付けも全て完了。撤収準備OKだ。外はゆっくりと暗くなり出している。

「ではこの辺で失礼します。何かあればご連絡下さい」

「寮長として、深く感謝致します。ありがとうございます」

夕陽が照らす大淀さんはまるで何かのアニメのヒロインのようですな。とても美しい。

「ありがとうございます、これで妹たちに顔向けが出来ます」

「その前に私たちにも感謝してよね」

「あ、その件につきましては大変な協力を頂いて恐悦至極に存じます」（早口）

阿賀野はもう大井に頭が上がらないようだ。謎の主従関係が出来ているらしい。

「請求書は後ほどお送りしますのでご確認下さい。ではこれで」

「はい、お気を付けて」

ガラガラと荷台を押して駐車場へ向かう。車にあれやこれやを押し込み、敷地を出て帰路に着いた。今日のビールはとて美味そうな気がする。

(広樹です……………親父が全部飲んでやがりました。ちよつと海に沈めて来ます)

後藤田広樹、とある休日にて

平素より後藤田プロテクトクリーンをご利用頂き誠にありがとうございます。当店は朝10時から開店し、19時までを営業時間とさせて頂いております。定休日は基本的に毎週木曜日と、第2第4週の金曜日になりますのでご了承下さい。繁忙期に關してはその限りではございません。また夜間における駆除作業も行っておりますので、どうぞ相談下さいませ。

「……………んがっ」

休みの朝だ。今日は某月の第2週なので、明日も休みである。特にする事はないけどね…………

「広樹ー、早くご飯食べちゃってー」

「へーい」

下階からする母親の呼びかけに答える。これではオチオチ寝てもいられない。1人暮らしも考えた事はあるが、実家に出勤すると言うよく分からない状態になるので、俺は考えるのを止めた。

「おざーす」

「ほら、冷めるから早く」

「いただきます」

でもまあ、衣食住が保障されているのはいいね。一通り自分でも出来るけど、誰かがやってくれているのは有難い事だと思う。

「ごちそうさんでした」

「食器そこに置いといてね。作業着は洗濯カゴに入れた？ 部屋のハンガーに掛けっ放しにしないでしようね」

「入れてございます。ご安心下さい」

「ああそうそう。発注した駆除剤やら何やらがお昼前に届くから受け取っというてね。その時だけシャッター開けていいから」

「承知」

「散歩行ってくるわ」

「あ、ちよつとお父さん。あれだったら車にガソリン入れて来てくれる？」

「えー、それ散歩じゃないじゃん」

「ついでに買い物して来て。メールでリスト送るから」

母、無双。

「広樹ー、在庫の確認しというて。足りない物あったら業者さんに口頭で発注してね」

俺の休みはこんな感じである。定休日って何だっけって状態だ。それが自営業のつらい所だが、普通の会社と違って余計なしがらみや人間関係に悩まされる事はない。まあ、仕事が完全に分担されているのは羨ましいと思う。とは考えるものの結局、隣の芝生は何とやらって話だ。

「どれ、在庫の確認をば」

店舗側の在庫置き場に入った。これと言つて不足している物はないが、ネズミ捕りの数が減っているのでこれを少し発注しておく事にしよう。

「他はいいかな。おっと、忌避剤が残り少ないな。これも発注と……」

これぐらいの事は営業日にやつておけば、定休日にやる必要はないのではないかと思つた。親父が帰つて来たら改善を訴えてやろう。俺が外回りしているのをいい事に楽しているだろうから、これぐらいはやつて貰わないと幾ら店長と言えど給料泥棒である。

(……じゃあお前やれとか言われそうだな)

嫌になつて来た。それなりの稼ぎを叩き出しているんだから、そろそろ事務でバイトの1人や2人雇えばいいのにも思う。お袋だつてずっと家に居る訳じゃないし、親父も俺が居ない間に依頼が入れば店を無人にせざるを得ない。そう考えると、誰か居てくれると有難いのだがしかし……

「後藤田さーん、南海製菓でーす」

シャツターを叩かれる。何だよ10時半なのにもう来たのか。

「はーい、開けまーす」

ガラガラとシャツターを押し上げた。いつもの配送人から諸々を受け取る。

「何か発注の方はありますか?」

「このリスト分をですな」

さつきまで書いていた一覧を手渡した。内容の確認を待つ。

「承知しました。では近い内にお伺いします」

「よろしくお願ひします」

走り去るトラックを見届け、俺は店のシャツターを下ろした。受け取った諸々を在庫置き場で仕分けし、それが終わると大あくびをしながら居住空間へ戻った。

「終わりやしたー。ちよつと横になりまーす」

「広樹ー、お昼はどうする?」

「あー……うどん等で宜しいかと」

「じゃあ松田製麺に行こうか。お父さん戻って来たらそのまま直行しちやおう」

「へい。ちと横になりやす」

部屋に引き揚げて布団に寝転んだ。携帯を手に取ると、滅多に來ないメールが入って

いる事に気付く。

「……あら」

学生時代の同級生から久々に連絡が入っていた。大体半年ぶりぐらいである。他県で働いていたヤツが戻つて来たから、そいつを交えて久々に集まろうと言う事だった。

「えーと日時は……今日かよ」

せっかちな連中である。まあ休みだからいいや。

「店は任せるぞー……つと」

適当に返信した。親父が戻るまで暫しボーつとする。

その後、戻つて来た親父の車に乗り込んでうどん屋へ向かった。何でか運転させられる羽目になり、時間外労働を請求してやろうかなんて考えつつ車を走らせる。

松田製麺

混み出す前に到着したので、まだ人はまばらだった。本場四国で修行した店主の作るうどんは大好評で、昼時は行列も出来る人気店である。

「いらつしゃい」

「月見山かけ、中盛りで」

と親父。

「すだちおろしの並とかしわ天を」

これはお袋。

「たぬきネギ多め、中盛りで」

広樹です。

「毎度ー」

家族3人で好みバラバラだ。中学の頃「お前って親に似てないな」と同級生たちに言われたのを思い出す。

食い終わって会計を済ませる。何となくだがブラブラしたくなつたので、帰りの運転は拒否した。「薄情者ー」とか言う親父を無視し、アーケードの方へ足を伸ばしてみる。

「本屋でも寄って……金下ろして散歩しながら帰るか」

アーケードの本屋に寄った。これと言って何かを買おうとした訳でもないが、大分前に1巻だけ買った漫画が気付けば10巻も出ていたので、取りあえず2巻を購入して店を出る。その後は銀行で夜のための金を下ろし、見慣れた町をウロウロしながら帰宅した。

「……少し寝ますかね」

飲みに行く事は伝えたので、家を出る時間まで横になる。目が覚めると、外はすっかり暗くなっていた。

「んじゃあ出て来るわ。風呂は追い炊きしますので気にしないで下され」

「珍しいねえ。気を付けるんだよ」

「お土産頼むぞー」

「お断りします」

施錠して家を出た。場所はアーケード街のちよつと引つ込んだ所にある居酒屋だ。歩いてでも20分掛からない。

海鮮居酒屋 三好屋

学生時代から世話になっている店だ。馴染みと言う程も利用していないが、店長とは子供の頃から面識がある。ガラスの引き戸を開けると、居酒屋特有の匂いに包まれた。

「広樹ー、こつちだ」

「よお害虫駆除業者の倅」

「黙れ葬儀屋の息子め」

「久しぶりだな広樹」

中学高校とつるんでいた連中だ。基本的に、お互い遠慮はない。

「ビールでいいか？」

「ウーロンハイだな」

「ホッピーのセットで」

「黒ビールにするわ」

ビールは直ぐに腹が膨れるので苦手だ。ウーロンハイをチビチビやるのが好きだから、初手でビールは選ばない。個人的にだけど。

宴が始まり1時間が立った。話の内容は自然と、お互いの仕事がメインになっていく。

「お前の方は最近どうだ」

「最近……鎮守府でよく仕事してるわ」

「鎮守府ってお前……あの鎮守府か？」

「あの鎮守府だよ。世界の海を荒らし回る深海棲艦から、我ら人類を護ってくれる艦娘が集まるあの鎮守府だ」

「マジかお前！ テレビで何回か見たけど可愛い子いっぱい居るじゃんか！ それ所か絶世の美女揃いだろ！」

まあ、それは否定しない。みんな美人だしみんな可愛いし。

「ここで言うような事じゃないけど出るモンは出るんだよ。月に2回は定期チェックで行ってるかな」

「誰かと話したりするの？」

うーん、これは顧客の個人情報流出になるのだろうか？ 当たり障りなければいいのか？

「……………いやあ、基本的に事務の人としか話さないな。まあ遠目で見た事はあるけど、それが誰なのかは分かん」

上手くはぐらかした。内心穏やかじゃない俺を余所に、3人は好みの艦娘について語り出す。

「赤城だっけ？ 美人だよなあ。俺あんな感じの大好き」

意外にお茶目で食いしん坊（常人よりは）だけどね。

「いや、俺は加賀の方がいいな。クールな表情だけど、あれは2人きりになった絶対にデレるタイプだ」

そんな事を目の前で口走ったら文字通り真つ二つにされるだろうな。いや、縦横で四等分にされるかも…………

「俺はそうだな…………鈴谷って言うギャルっぽい子がいいなあ」

うん？ 鈴谷？ まだ会った事がないな。ギャルっぽいとか言われると先入観が生まれて実際にあつた時に話し辛そうだ。意識しないようにしないと。

しかしあれだ。仕事で出入りしているとは言え、内部の人間しか分からないような事を知っているのにちよつとだけ優越感を覚えそうだ。

「店長！ 店長！」

「何だ大声出して。お客さんに迷惑だろう」

「店長！ トイレにアレが出たんです！ お客さんが1人出られなくなってます！」

何か騒がしい。店員の女の子と店長の声が聞こえる。

「え、本当？ 参ったなあ営業中に」

あ、何か嫌な予感がする。とか思っていると、店長がこっちのテーブルに来た。

「ひ、ろ、き、ちゃん」

「今日と明日は定休日です。俺もオフです」

「そんな冷たい事言わないでよ。好きなお酒とつまみ1つずつサービスするからさあ」

「こっちだつて慈善事業じゃないんですよ」

「頼むよお、同じ町内会じゃないの。地域の貢献だと思つてさ」

あー面倒くせえ。じゃあ高いヤツを頼んでやろう。それで手打ちだ。

「分かりました。それじゃ店長がオススメに載せてるあの酒を2合ばかり貰いましょう

か。あとマグロのハチを一皿下さい」

店長の顔が歪むのを尻目に席を立った。店員の女の子に話し掛ける。

「すみません、バケツと食器用洗剤お借り出来ますか？」

「え、あ、はい。持って来ますね」

右手に洗剤、左手にバケツを持った俺は、アレが出たトイレ（女性用）にやって来た。「客で来ていた業者のモンでーす、入りまーす」

声高らかに宣言した。中に入ると、OLらしき風貌の女性がトイレの一番奥で固まっているのが見えた。彼女と俺の中間ぐらいに、黒いのが物言わず鎮座している。

「そのまま待ち下さい。それにバケツ被せますんで」

ゆつくりと近寄る。ある程度まで接近した所で、ヤツの周囲を囲むように洗剤を撒いた。空気の流れを感じ取ったヤツが逃げ出そうとするも、目の前に撒かれた洗剤を触った瞬間に動きが止まる。それを見逃さず、上からバケツを被せた。

「はい、どうぞ外へ出て下さい。あとはやっておきます」

「す、すいません」

フラ付きながら出て行く彼女を見届けると、俺は後処理を開始した。詳細は語らないでおく。

「終わりました。それじゃ、酒とつまみお願いします」

「……分かったよ」

渋々と言った感じの店長からサービスの品々を受け取る。みんなで上手い酒と刺身を堪能し、店を後にした。

「じゃあなー」

「またその内」

「うおーす」

「さいならー」

サクツと別れた。夜風を感じながら寝静まった家に帰宅し、風呂に入ってあとは寝るだけである。

「……ま、こんな休みもいいのかな」

明日はまあ、ゆっくり出来るといいな。どうか分からんけど。

鎮守府の一夜

某日。俺は、溜まっていた領収書の精算やら、今度予定している駆除作業の日程調整だの、あちこち出入りしている企業向けに作った防虫対策ポスターを発注している制作会社とのやり取り等に忙殺されたまま、鎮守府で定期チェックを行っていた。

空母寮

「最近はどうですか」

「そうね、姿は見なくなつたかしら。臭いもしなくなつたと思うわ」

寮長であらせられる加賀様はそう仰つた。確かに「ブルーライト」であちこち照らしても、連中の足跡が見つからない。

「ネズミ捕りの方は掛かっていますか？」

「例の嫌いな音を出す機械のお陰か全く掛からないわ。一度くつ付いて逃げ出した形跡もないから、本当にこつちへ出て来ていないみたいね」

しかし、まだ見えない場所に潜んでいる可能性は捨て切れない。これはもう少しばかり様子を見るべきだろう。そんな所で、携帯が鳴り出した。

「ああ、すいません。ちよつと失礼します」

寮から出て懐のメモ帳を広げる。番号は再来週に駆除を行う予定の会社からだった。

「お世話になっております、後藤田プロテクトクリーンです」

ワイヤレスのイヤホンマイクで通話しつつメモ帳へ書き込む姿を、行き交う艦娘たちが物珍しそうに見ていた。私はこれでもちゃんと働いているんですよ。勘違いして貰っては困ります。

「承知しました。ではその日程でお願い致します。失礼します」

通話終了。諸々を片付けて空母寮へと戻る。

「すいません、お待たせしました」

「忙しいみたいね」

「まあ、自営業はこんなモンですよ」

その後は軽巡察でチャバネールの残党調査や、駆逐寮で業務用ホイホイの交換も行った。気付けば時刻は15時近くになっており、ちよつとずつ陽が傾き出している。

「やばいなあ……家に帰ると色々間に合わんぞ」

残務処理が大量にある状態で家に帰ると、不思議と仕事を妨害する力（親父のウザ絡み・急な駆除依頼とか）が強まるのだ。出来るなら鎮守府に居る間に色々片付けてしまいたい所である。

「ちよつとお願ひしてみるか……」

提督さんに電話した。雑務がしたいので、ちよつと場所を貸して欲しいとお願いしてみる。すると、司令部棟の一画に来訪者用の書き物スペースがあると案内された。俺は早速そこで店を広げ、ノートPCを立ち上げて雑務を始める。

「えーと、あっちの駆除日はこれでいいから……これはちよつと調整しないとな。げ、これ何の領収書だっけ。あー、こつちの見積もりもしないと」

ひい、忙しいよお。

「お忙しい所を失礼致します。後藤田プロテクトクリーンと申します」

日程調整よし。

「お世話になっております、後藤田です」

駆除日のブッキングが起こってないかの確認よし。

「ええ、はい。では料金の方はその額と言う事で。はい、ありがとうございます」

料金確定。

「……終わった」

作業終了。顧客関係書類に不備なし。日程調整も問題なし。経理（お袋）への提出書類も完成だ。

「あ、やべ。眠い」

安堵感からか、眠気が押し寄せて来た。今日はもう予定はないから、ここで少しだけ

寝かせて貰おう。携帯のタイマーを1時間後にセットした俺は、近くにあるソファで横になった。

「……さん、……田さん」

誰かに呼ばれている。ボーっとした意識のまま体を起こすと、右腕に「当番」の腕章を嵌めた吹雪ちゃんがちらを見ていた。

「……………あれ、いま何時？」

「えーと……………21時ですね」

やらかした。4〜5時間も爆睡していたようだ。携帯には家からの着信が何件か入っている。

「……………すぐに帰ります。とんだご迷惑を」

「あ、今は外に出ない方がいいかと」

「へ？」

「市内全域で停電が起きています。ここは自家発電で明るいんですけど、町の方は信号も消えていて混乱が広がっているとニュースでやっていました」

外の景色を見た。敷地内は明るい所もあるが、街灯が何箇所か消えている。道路の方は送電が止まっているせい、照明は全部消えてしまっていた。

「……マジか」

「復旧は朝になるらしいです。もし良かったら、今日はここに泊まっていきますか？」

信号まで消えているとなると、無事に家まで帰れる保障はない。警察が出張っているだろうが、何時もより危険になっているのは間違いないだろう。

「うーん、提督さんが宜しいのなら一晩お世話になるか」

つて訳で、執務室までご挨拶にやってきました。

「申し訳ありません。寝過ぎした挙句、ご厄介になるとは」

「いえいえ。何かで恩返し出来ないかと思っていましたので、これぐらいどうって事はありませんよ」

取りあえず夕飯をとられたので、提督さんと食堂へ向かった。その途中、廊下で古鷹ちゃんと出くわす。

「こんな時間から作業ですか？」

「いや、仕事は終わつたよ。残務処理してて寝ちやつてさ。起きたらこの時間でしかも停電だつて言うもんだから、今日は一晩お世話になる事にしたんだ」

「ああ、そうなんですね。確かに町の方へこの状態で帰るのは危ないですからね」

食堂へ到着。点いてない照明が幾つかあるが、そこまで暗い訳ではなかった。床のルート案内通りに進み、窓口へ並ぶ。

「あら、後藤田さん。今日はどうされましたか」

間宮さんはいつつ見てもお美しいです。

「いやあ残務処理でそのまま寝てしまいました。それで起きたらこんな状況ですので、一晩ご厄介になる事になりました」

寝る場所は司令部棟にある客室を宛がって貰った。有難い限りである。

「復旧は朝らしいですものね。交通誘導があるとは言え、信号のない町中は危険でしょうから、賢明な判断だと思います。朝食はどうされますか？」

「食べに来ますから大丈夫ですよ」

「では朝の9時までに来て下さいね。ああそうそう、ご注文をどうぞ」

「そうですね、日替わり夜定でお願いします」

ここは何を食べても基本的に美味しい。だが昼間しか利用した事がないので、日替わりの夜定は初めての注文だ。

「あつれえ、何でこんな時間に居るの？」

「こんばんばいばい」

白露&夕立コンビのご登場である。

「寝過ごしして起きてみりや停電でね。信号の消えた道を帰るのは危ないから一晩お世話になる事にしたんだ」

「あー、車だと危ないもんねー」

「間宮さーん、オススメC定食お願いっぽーい」

「はーい」

オススメC定？ 何所に書いてあるんだそんなの。

「あ、そうだ。この後って食べてお風呂入って寝るだけだよな？」

「まあそうだな。する事もないし」

「じゃあさ、日付けが変わるちよつと前ぐらいに駆逐艦寮へ来てよ。みんなで面白い事する予定なんだ」

「間宮さーん、追加でお刺身と茶碗蒸しもお願いっぽーい」

面白い事？ 何だそれは。ってか見た目は女子中学生の集団に、男が1人混じってる状況つてのはあんまり宜しくないんじゃないですかね。ってか夕立ちやん結構食うなおい。

「……お邪魔して問題ないなら行かせて貰うよ」

「はい決定ー。みんなには言っておくからね」

何だか丸め込まれたような気分になる。そして夕飯と風呂を済ませた俺は、寝巻きとして借りた浴衣を着た状態で、23時半頃に駆逐艦寮を訪れた。

「いんばんはー」

「よつす。久しぶり」

「お久しぶりです」

ほっぺがムニムニしている2人組みと遭遇。敷波と綾波だったかな。

「暫くだね。んで、今日は何かがあるか教えて貰えるかな」

「それはまだ秘密だね」

「秘密です」

ちよつと怖くなって来た。予想が出来ないから色々と考えてしまう。そこへ、お菓子が沢山入った皿を抱える吹雪と時雨がやって来た。

「あ、来ちゃったんですか……」

「姉さんが無理強いたみたいで、すいません」

「え、何かやばい？ あれだったら早々に退散するけど」

「あーいえいえ、居辛くなければゆっくりしてって下さい」

「取りあえず、ご案内しますね」

ニヤニヤする綾波と敷波を尻目に、俺は時雨ちゃんの家内で部屋に通された。そこはかなり大きい部屋で、30人近い艦娘たちが屯している。

「ようこそ後藤田さん。駆逐艦寮月1恒例、怖い話大会の会場はこちらですぜ。ひっひっひ」

不敵な笑みを浮かべた白露ちゃんが出迎える。なるほど、そういう事か。「怖い話ねえ。俺、別にネタとか持つてないんだけど」

「まあ何か思い出したらでいいよ。もしくは適当に見繕つてもいいしね。じゃあみんな、そろそろ始めるよー」

電気が消される。灯りは数本の蝋燭だけだ。

「じゃあトップバッター、誰かない？」

「ん、とつておきのヤツ」

黒髪のロングヘアで眠そうな顔の艦娘が手を挙げた。確か、初雪だったかな？ ちゃんと会話した事はない気がする。

「ある所に、携帯ゲームの好きな人が居ました。そのゲームは課金する事でレアなアイテムが貰えたり、レアキャラを手に入れたりする事が出来ます。ある日、その人は道端で課金のカードを拾いました。調べた所、まああの金額がチャージされている事が分かります。誰の物か分からないなら、使つてしまおうと考えたその人は、そのカードを使つてゲームに課金します。するとどうでしょう、幾ら課金しても額が減らないのです。これに気を良くし、その人は毎日のように課金し続けました。しかし、同時にその人は体調不良や精神の乱れを感じるようになります。でもゲームを辞める気はありませんでした。具合が悪い中、今日もやるぞと思つて課金すると、その人は意識を失いま

した。結果、そのまま死んでしまったのです。死因は一切不明で、そしてそのカードも同時に姿を消しました。そう、それは持った人の寿命を削ってゲームに課金する、呪いのカードだったんです。今は誰が持っているのか、それは分かりません」

話し終わった初雪は満足そうな顔だ。しかし、これは怖いだろうか？ その手のゲームはあんまりしないからどうにも……

「漣！ アンタそういうゲームしてないでしょうね！」

「は、初雪ちゃん？ 最近やってるゲームってそういうのなの？」

ええ、怖がってるよ。確か曙と白雪だったか？ どう考えても作り話だろこれ。

「作り話だから心配しなくていい。課金は専らキャリア決済だし」

「プリペイドカードはお店に行かないといけないから面倒でござる。漣もキャリア決済ですぞ」

何か異様に生々しい一面を見てしまった。忘れようと思う。

「まあまあかなー。次は誰かない？」

お菓子をつまみながら、何人かが怖い話をし続けた。真に迫る物もあれば、幼稚すぎて怖くも何ともない物まで色々だ。

「そして、お爺さんは言いました。お前の後ろにだああああああ！」

「ひいー！」

「ひゃあー！」

あー、うん。何か微笑ましいなあ。

「はい、じゃあこの辺でスペシャルゲストの後藤田さんにも何かお話しして貰いましょうか」

ここでキラークラスを出すか白露嬢め。どうしてくれよう。

「……じゃあ、一つだけ」

立ち上がって、全員を前にして座り直した。視線が集まるのを感じつつ、話を始める。「これは本当にあった出来事です。ヨーロッパのある国で深夜、森の中で撮影をする2人の男性が居ました。彼らはこんな時間に聞こえて来る不思議な音の謎を探るため、森の中を探索しています。すると、地面に白い羽のような物が落ちていたのを、映像に収めました。2人はその後も、森の中へどんどん進んでいきます。映像自体からその不思議な音は聞こえませんが、2人には確かに聞こえているようです。そしてある程度まで足を進めた時、カメラを持つ男性は暗闇の中で座り込む、異形の存在を捉えました。指で音を鳴らして見た所、ソイツはこちらを振り返って画面越しに目が合います。その目は煌々と光っていますが、同時にやせ細った骸骨のような見た目をしたその存在に驚いた2人は、一目散に逃げ出しました。これが、その時の映像です」

懐から携帯を取り出し、件の映像を全画面で再生させた。全員が目食い入るように

集中する。そしてヤツが振り向いて目が光った瞬間、部屋は悲鳴で支配された。

「映像はつきは卑怯よ！ トイレに行けなくなるじゃない！ このクスー！」

「何て物を見せるのよバカあ！ これじゃ眠れないわよ！」

「ねえ！ 敷波が目を開けたまま気絶してる！」

「ちよと不知火！ くっ付きすぎよ！」

うーん、これはやり過ぎたなあ。

「あー、ごめん。ちよつとこれは卑怯だったね。じゃあ俺はそろそろ」

浴衣の袖を引つ張られた。隣に居た司会者の白露ちゃんが俯いている。

「おや？ どつた？」

「……………立てない」

「……………え？」

「腰が抜けて立てない」

えーと、どうするべきかしら。

「……………今日は皆で寝ようか」

大勢が頷いた。因みにこの映像は本物かフェイクか定かではない。しかし、何人かは信じてしまったようだ。

「ほら姉さん、僕に掴まって」

「だらしないうぼーい、映像なんだからそんな怖くないよー」

「あらあら、後藤田さんに落とされちゃったの？」

「そういう発言はしないでくれますかね村雨ちゃん」

「ごめんなさーい」

ゾロゾロと、参加した全員が自室から布団を持ち込んで来る。俺も客間から布団を運び込み、隅の方で寝る事にした。

「はーい、じゃあ電気消すよー」

修学旅行の引率の先生か俺は……

「「おやすみなさーい」」

無事、就寝。だが、何人かにトイレの付き添いを頼まれたせいでちよつと寝不足だ。まあ、自分で蒔いた種だから文句は言いません。

暗がりに潜む野生

広樹です。仕事中とです。

「ではこちらの方にサインをお願い致します。後ほど請求書をお送りしますのでご確認下さい」

「ありがとうございます、経過はまたご連絡します」

今日は隣の市まで来ていた。古めの雑貨店にネズミが出没するというので、侵入経路を見つけ出してそこに罠を仕掛け、毒餌や忌避剤を散布。これで少し様子見だ。

「さてと……どつかで昼飯にするかな」

時刻は11時前。今なら人気のある店でも空いている筈だ。携帯で評価の高い店を探す。

「ラーメンは昨日食ったし……お、海鮮丼いいね」

美味そうなのでそこに決めた。車を走らせ、店の近くにあるコインパーキングに停めて少し歩く。

「……あらあ」

昨今は珍しい物が落ちていた。この年になればどうって事ないが、昔はこれを拾う事

に命を掛けたもんだ。思い返せば恥ずかしいが、男なら誰もが通る道だと信じた。

「道端の エロ本尻目に 先急ぐ、字余り」

今は昼飯が最優先だ。しょーもない事を口走りながら足を進める。人もまばらうちに入店し、海鮮丼を堪能して車へ戻った。

「食った食った」

午後のスケジュールを確認する。今日はこのまま地元へ戻り、定期チェックを5件ばかり回れば後はフリーだ。夕べは寝付きが悪かったから、今日は早めに店仕舞いして早寝するのもいいかなんて考えつつ、車を出した。

そして残りの定期チェックが終わって帰る途中に大淀さんから連絡を受けたので、車を鎮守府へ向けました。正門でいつものやり取りを済ませます。

「お疲れ様です。今日はどうされました」

「はあ、ちよつと見て欲しいと連絡がありました」

電話口で詳細を聞けなかったので、取りあえず車を停めて司令部棟へ向かう。その途中、凄い長身の美女2人と遭遇した。

「あら、間違ったらゴメンなさいね。後藤田さんかしら？」

「はい、そうです」

「そうか、君が後藤田か。ウチの者たちが色々世話になつてゐるそうだな」

この雰囲気、空母や重巡じゃないな。まさか戦艦？

「長門型戦艦1番艦、長門だ。以後よろしく頼む」

「2番艦の陸奥よ。姉ともども、よろしくね」

うーん、戦艦で会つた事があるのは確か伊勢・日向・榛名・霧島だけか。あつちはまだ一般人っぽい雰囲気があるけど、この2人は独特のオーラを放つていて正直少し近寄り難いです。

「ご丁寧にありがとうございます。提督さんには懇意にさせて頂いております」

「これからも皆と仲良くしてやってくれ。それでは失礼する」

「じゃあね〜」

長門さんの方はもし男だったら、俺なんかは足元にも及ばない美男子になるだろうな。陸奥さんはまあ、あれが完成しているように思えるからそうはならない気がする。

「よろしく願います」

2人を尻目に足を進める。司令部棟の前では、既に大淀さんが待つてくれていた。

「お疲れ様です。何時もすいません」

「まあまあ、自営業としてはこういう風にリピートして頂けるのは大変に有難い事です。

それで詳細をお聴き出来ないのですが、何がありました」

「上手く説明出来ないんですが、何か居るのは間違いないんです。取りあえず、着いて来て下さい」

何か居る。はて、何が居るのだろうか。

先導する大淀さんの後を着いて行く。途中で吹雪型一同や重巡勢とすれ違いつつ。敷地の奥へと足を勧めていった。

「あの倉庫です」

大淀さんが指差す先には、引き戸式の大きな倉庫群があつた。同じようなのが軒を連ねている中、一つだけドアがポツカリ開いているのが不思議と怖く感じる。

「……ここの中ですか」

「はい。それ程は広くないですけど、照明機器とかは無いので足元に注意して下さい」

胸ポケットのペンライトを取り出して中に踏み込んだ。埃っぽいのに混じって、獣の臭いが漂っている。それに壁と床の接合部分には動物らしき足跡も確認出来る上、コロコロした糞もあつた。強敵の予感がする。

「……で、何が出るんですしたつけ」

「ちゃんと確認出来た人は居ません。ここに出入りする者だけが目撃していて、情報ではとてもすばしっこいとか。それとこのように臭いが強くて、糞もあちこちに」

積み上げられた段ボールや鉄製の箱の隙間を照らしていく。すると、何か光りの中

を横ぎるのが見えた。

「……うーん、もしかしたらイタチの類かも知れませんか。そうなるとちよつと面倒ですな」

「そうなんですか？」

「ええ、自治体への申請やら鳥獣保護法やらでかなり面倒です。自分の所で出来るのは、精々が追い払うぐらいですね」

とは言え、呼ばれた以上は無視する訳にもいかない。取りあえず実態の把握に努め、知り合いのツテを頼って資格のある専門家を呼ぶ事にしよう。

「まず正体を確かめましょう。その上で、知り合いから専門家を紹介して貰おうと思います。下手に追っ払えば別の所に潜り込む可能性もありますからね」

「分かりました、ありがとうございます」

さて、何が居るのかその正体を暴いてやろう。取りあえず、もつと奥へ進んでみるか。同時刻。見回り中で倉庫の外を歩いていた加賀は、開けっ放しになっているドアが気に掛かった。

「全く、用が済んだら閉めなさいと何度言えば分かるのかしら」

引き戸のドアがガラガラと音を立てて動き、倉庫を閉め切った。しつかり施錠もして、加賀は見回りへと戻って行く。

「……今、閉められましたか？」

「そ、そうみたいですわね」

一気に薄暗くなり、中に居た我々は青ざめた。入り口まで戻って確認するが、ドアは施錠されていてビクともしない。ベタな展開だが、これは冷静に考えると非常に怖い。しかも中には、まだ正体の分からない「もう一匹」が存在するのだ。

「……内鍵とかは」

「無いですわねえ」

「何か連絡手段」

「すみません。すぐ済むと思って何も……」

「携帯……車か」

まあ落ち着け。取りあえず回りを見渡そうぜ。

「……この窓は」

出入り口の左右には、曇りガラスの窓があった。そこから僅かな光が差し込んでい

る。
「鉄格子が入っています。そう簡単には……」

地面はコンクリートだ。掘って脱出する事も出来ない。

「……………どうしましょうねえ」

「そうですねえ」

大淀さんも苦笑いである。密室で大淀さんと2人つきりになれるとは嬉しいが、今は仕事なので俺は動じない。

「この辺は誰かよく通りますか？」

「用のある者以外はあんまり……誰か通り掛かってくれるといいのですが」

今は静まり返っているが、ここに潜んでいるヤツを刺激しないように、下手な事はしない方がいいかもしれない。大きな音でも出してビックリされると、混乱してこつちに襲い掛かって来る可能性もある。

「1分おきにドアを叩きましよう。下手に大声を出すと、威嚇されていると勘違いして襲って来るかもしれません」

「は、はい」

薄暗い中、交替でドアを叩き付けた。しかし反応は全くない。どうしたものか……
「しかし臭いますね。窓を開けて換気しましょう」

気付けば鼻を突くような獣臭いのが充満している。これは宜しくありません。

窓を開けると、立派な鉄格子が現れた。新鮮な風が入って来て獣の臭いが薄れていく。同時に俺は、鉄格子の隙間から喋りながら外を歩いている3人組を発見した。

「……むう」

思わず呻る。それもそうだ。だってその3人組の内、2人は村雨ちゃんに荒潮ちゃんと言う、謎の色気を発する駆逐艦（詐欺）だからだ。そして、2人の間に居る緑色のロングヘアでいかにもギャルっぽい感じの艦娘。恐らく、この前やった飲み会で仲間の1人が言っていた鈴谷である可能性が高い。

（……）はお願ひするか

男の声で呼び掛けるのは警戒心を与える可能性がある。女性の声ならば、危機感へ直結して気付いてくれるかもしれない。

「大淀さん、誰か居ます」

「本当ですか?」

もう片方の窓を開けた大淀さんは、3人の姿を確認すると呼び掛けを始めた。思惑通り、すぐに気付いてくれる。

「鈴谷さーん、ここです」

ああ、やっぱり鈴谷なのね……

キョロキョロする3人は、鉄格子から手を振る大淀さんを見つけると駆け寄って来た。

「淀つちじゃん！ 何してんの!」

「誰かが鍵を閉めてしまったようです。すいませんが、執務室からここの鍵を持って来

てくれませんか」

「オツケ！ 急いで持って来るね！」

そう言うのと鈴谷は駆け出した。村雨と荒潮をこの場に置いて……

「あらあら大変、どうしちゃったのかしら」

「やだ後藤田さんったら。大淀さんを密室に連れ込んで何をやる気だったの？」

「牢屋に居るみたいで弁明するのも気が引けるけど仕事で来てるからね！ 俺は!!」

「そんな格好じゃあ説得力ないわよ」

「いけない後藤田さんは、このままここで服役して貰いましょうね」

嗚呼、誰でもいいから話の分かる子が来てくれ……頼む……

「もう何でもいいから助けてくれ」

「鈴谷さんが鍵を持って来るから、もう少し待つてね」

ニンマリする荒潮ちゃんであった。

その時、不意に気配を感じた。後ろを振り向くと、細長くて茶色いのが舌打ちのような鳴き声を出しながら近付いて来るのが見えた。間違いない。コイツはイタチだ。あの鳴き声は威嚇だろう。

「マジか……これはヤバイぞ」

可愛い見た目の割に獯猛で爪も鋭く、拳句にすばしっこい。コイツと一戦交えるのは

御免だ。こつちが大怪我してしまう。

「ご、後藤田さん」

「動かないで下さい。刺激しないで」

周りに何か無いか見渡す。残念だが何も無かった。ちくせう……

（……おつ）

胸ポケットに固い物があつた。定期チェックで最後に行つた会社の担当者に渡しそびれた、試供品の小型殺虫スプレーが入っていたのを思い出す。万一の時はこれで何とかなるかもしれない。

「……来いよイタ公。虫に効くつてのは、回りまわつて哺乳類にも効くんぞぞ」

折り曲げ式のノズルを展開させる。この試供品は成分が強く、1〜2秒の噴射で民生品が5秒噴射した量に相当する威力があるのだ。間違いなく撃退出来るだろう。

「ギャツギャツギャー！」

イタチの威嚇する声が響く。小さいクセに凄まじい威圧感だ。

「淀つち！ 今開けるね！」

「大丈夫ですか！」

提督さんもやつて来たようだ。ご迷惑をお掛けして申し訳ないです。

「ギャツギャー！」

ジリジリと距離が詰まる。こっちが抵抗する仕草を見せないからいい気になってい
るようだ。

「なにくそー！」

コンクリートの床を思いつ切り足で叩いて大きな音を出した。ビクツとなったが、あ
まり効果はないらしい。

「開けるよー！」

ドアが開いた。まず大淀さんを逃がすため、イタチの前面に殺虫剤を撒く。

「ギイー！」

倉庫の奥へと一目散に逃げていった。鋭敏な嗅覚を逆手に取れたようだ。大淀さん
も俺も外に出たので一安心である。

「早く閉めないとー！」

「ああ、すいませんがそれは止めて下さい。意図的に閉じ込めたりすると、法令に引
かれますので」

「え、そうなの」

「雌は狩猟禁止なので意図的な閉じ込めや捕獲が出来ないんです。あれが雄なら狩猟対
象になるので閉じ込めも出来ますが、残念ながらどっちか分かりません。ですので、ド
アは開けておいて下さい」

俺自身、危ない目に遭ったので納得は出来ないが、法令は遵守しなければ商売出来ない。なるのでここは割り切る事にしよう。

「ご迷惑をお掛けしました」

「いえいえ、無事で何よりですよ」

取りあえず正体は分かったので、親父の知り合いで害獣駆除の専門業者をしている人間に連絡を着けた。駆除日を仲介し、当日の立会いもする事で一旦この場を収める。

数日後……

「こちらが自治体への申請書です。ご確認ください」

「拝見します」

提督さんが専門業者の渡した書類の内容を検める。俺はその光景を見つめていたが、誰かに肩を叩かれた。

「チツス、この前はちゃんと自己紹介出来なかったね。最上型巡洋艦、3番艦の鈴谷だよ」

「ああ、後藤田です。と言ってもここ皆さんは大体ご存知ですよね」

「あがのんが原因で軽巡寮が戦国時代になったのを平定した有名人だもん。名前だけは轟いてるよ」

あれ、ギャルっぽいと言う情報もあつたが、何だか気さくで意外に話しやすい。つてか戦国時代つて……

「確認しました、よろしくお願ひします」

「では作業の方を始めさせて頂きます」

鈴谷に断りを入れて、俺も手伝いのために加わつた。まずイタ公を燻り出すため、中に煙幕を発生させる機械を設置する。それが終わると、出入り口に仕掛ける大きな罠を用意した。

「でつかいですねこれは」

「本来は猪なんかを捕獲するヤツだからな。これなら逃がさないさ」

煙幕の機械を作動させ、充満する前に外へ出た。罠を出入り口に置いて準備は完了である。

「おーおー、暴れてやがる」

中で走り回る音が聞こえた。1つしかない出口を求め、イタ公は罠の中へと真つ直ぐ飛び込んで来る。見事に捕獲成功だ。

「なんかあつけないね。あんなにバタバタしてたのが嘘みたい」

「まあ、色々あつたからね」

片づけを済ませ、業者は相変わらず威嚇を繰り返すイタ公の収まる罠を携えて撤収し

た。俺はと言うと……

「ほんとーに何もなかったの〜？」

「正直に話しちやいなさいよ〜」

「だから仕事であそこに居ただけだってば」

小腹が空いたので間宮さんにお邪魔していたら、村雨&荒潮に見つかって根掘り葉掘り聞かれる羽目になった。ここって持ち帰りとかしてないんですかねえ……

（広樹です。イタ公と威嚇しあってる時、大淀さんが作業着を摘んで来たのは墓場の下まで持っていく秘密にします）

甘味を求めて I

ウツス、後藤田広樹です。今、市民センターに来ています。狩猟免許の講習会があるんです。

「……分かつてはいたが、この年齢層の差よ」

どうやら20代は俺だけのようだ。あとは40〜50代のおじさん方で埋め尽くされている。ぶっちゃけ、居辛いです。

(これも店のため。事業拡大のためじゃ)

この前みたいに、自分の手に負えない存在にも今後は可能な限り対処出来るようになるため、俺は狩猟免許の取得に踏み切った。

と言っても、俺が取ろうとしているのは猟銃や空気銃の方ではなく、わな猟の免許だ。さすがに鎮守府の敷地内とは言え銃をぶつ放すのは宜しくないだろうと考え、労力も経費も少なくする方法を模索した結果だった。いずれは親父にも取って貰う予定だ。

「兄ちゃん若いねえ、幾つだい」

おじさんに急に話し掛けられた。何ですかいきなり。

「四捨五入したら30ですね」

「随分と範囲が広いね。そしたらおじさんは四捨五入したら70だな」

取りとめもない世間話をしているとアナウンスが鳴った。それぞれ受ける講習の種類が違うので、教室も必然的に別々となる。おじさんと別れ、その日の講習を終えた俺は家に帰った。

後日

午前中の外回りを終え、家に帰って昼飯を済ませ問題集を捲っている時、誰かが俺を訪ねて来た。

「えーと……次の写真の内、使用可能猟具と禁止猟具を振り分けよ。1、くくり罠。2、トラバサミ」

「おーい広樹。お客さんだぞ」

「午後交替まであと1時間ありますが」

「お前にお客さんだ」

「……ええ？」

誰ですか一体。取りあえず立ち上がり、店の方へ出る。すると、入り口に女性が立っているではないですか。可愛いと綺麗がいい感じに混ざっていて美しいです。しかし、そのスカートはちょっと短すぎるんじゃないですかね……

「……どのようなご用件で」

「姉が大変なご迷惑をお掛けしたと聞き及び、そのお礼に参りました。誠にありがとうございます」

「はい、ごます」

「姉？ どちらの？」

「……失礼ですがお名前は」

「あ、申し遅れました。阿賀野型軽巡洋艦 2 番艦、能代と申します」

能代？ ああ、例の妹か。容姿は何となく似てるけど性格が全く違うのね。

「あーあー、その後は問題ありませんか？」

「はい。その場に居なかつたもので、どんな状況だったのかは解りかねますが、現在は特に問題ありません」

まあ、知らない方がいい事もあるでしょう。俺の口からは何も言えません。

「もし何かあればご連絡下さい。可能な限り速やかに対応しますんで」

「ありがとうございます。こちら、もしかしたら食べ慣れてらっしゃるかも知れませんが、宜しければどうぞ」

両手で提げていた紙袋を差し出された。これはアーケード街の方にあるデパートの独自ブランドで、そこそこいい値段のする和菓子だ。

「ご丁寧ありがとうございます。頂きます」

有難く頂戴した。大事に食べます。

「ではこれでお暇させて頂きます。お仕事中、失礼致しました」

「いえいえ。寮の皆さんに宜しくお伝え下さい」

互いに会釈し、彼女は立ち去った。俺も菓子折りを抱えて店に戻る。

「お、美味そうだな」

「まず俺が貰うからな」

取りあえず冷蔵庫に仕舞った。

「いやあそれにしても可愛い娘だった。どんな関係だ？」

「鎮守府絡み」

「また鎮守府か。あんなに可愛い娘がゴロゴロしてるなら、お前もちよつとは一步踏み出して関係を進めてみる。この甲斐性なしめ」

「喧しいわ」

よくよく考えてみれば、機密の塊そのものと言える艦娘と交際なんて出来るのだろうか。分からんとです。

(……そう言えば間宮さんって人間？ 艦娘？)

うん、考えてはいけない事だな。止めておこう。それよりお勉強お勉強つと。

数日後。鎮守府から相談したい事があるとの連絡を受け、俺は車を走らせた。正門で

毎度のやり取りを終え、駐車場に車を停めて降りる。色白で長い黒髪に、何所がとは言わないがご立派なのをお持ちの方が待っていた。

「扶桑型戦艦、一番艦の扶桑と申します。ご足労頂き、ありがとうございます」

老舗料亭の女将かと思うような雰囲気だ。話す早さもゆっくりで、何所となく上品な気がする。

「初めまして、後藤田と申します。本日はどう言った案件でしょうか」

「私どもの寮でお話しを致しますね。こちらへどうぞ」

「何だろう。消え入りそうな儂いものを感じる。古い映画とかで、病床に臥せっているヒロインのようなイメージが浮かんだ。」

そうしている内に辿り着いたのは、戦艦寮だった。あちこちの窓が開け放たれており、布団が垂れ下がっている所も多い。掃除でもしているのだろうか。

「中へお入り下さい」

「お邪魔致します」

戦艦寮には初めて足を踏み入れる。通されたのは、小さな会議室っぽい部屋だ。そこには、4人の艦娘が座って待っており、その内2人は見覚えがあった。と言うこの前会ったばかりだ。

「よく来てくれた。まあ、取りあえず座ってくれ」

「お茶を淹れてくるから、ちょっと待っててね」

長門と陸奥の事はまだ記憶に新しい。残りの2人は面識がなかった。

「大和型戦艦1番艦、大和と申します」

「2番艦の武蔵だ。武勇伝は聞いてるぞ」

「後藤田です。武勇伝なんて滅相もない事で」

椅子に座る。ほお、この2人が大和型か。かつて世界最大最強と謳われた戦艦。幾ら俺がアホでもそのぐらいは知ってるぞ。

全員にお茶が行き渡った所で、例の相談を聴く事になった。長門が話を進める。

「実はだな、2日後に視察の予定があるんだ。そのための掃除をしている最中に発覚したんだが、炊事場の一角に大量のアリが入り込んでいる事が分かった。備品の殺虫剤を撒いたんだが、次から次へと姿を現すので辟易してしまつてな。そこで君の知恵を借りたいんだ」

「アリですか。因みに色は」

「黒だな。外でもよく見掛ける種類だと思う」

「つて事はまずシロアリの線は無いな。それはそれで一安心だ。」

「ふーむ、何か餌になるような物が放置されていたりは」

それを口走った瞬間、大和の顔が赤くなつた。どうやら原因は彼女にあるらしい。

「まあ、そうだな。大和」

「あ……ご説明します」

長門に名指しされた大和が、恥ずかしそうに話し始める。

「えーとですね……お菓子を作るのがその、趣味と言いましうか、なんです。この前、ケーキの生地を作っていて、ボウルを誤って落としてしまいました。それで一部が冷蔵庫とかの隙間に入り込んで、多分その掃除が不十分だったために、何所からがアリさんが入り込んで」

「ああ、その辺で結構です。大体分かりました」

美女がモジモジしながら話すのは可愛いですね。いい物が見れました。

「そうですね。恐らくそれが原因の1つと考えていいでしょう。話しを掘り下げて申し訳ありませんが、過去にも何度か同じ事をしていませんか？」

「……ええと……はい」

真つ赤になって俯く大和を見て、陸奥がクスツと笑った。うん。可愛いですね。

「では現場の方を見ても宜しいでしょうか」

「ああ、行こうか」

炊事場へゾロゾロと向かう。俺は4人の中心に挟まれて歩いた。

(……何となく分かってたけどさ、皆さん大きいですね)

四人とも男性の平均身長より頭一つ抜けて大きい。そしてとても立派です。何所とは言わないが……

そうしている内に、炊事場へ辿り着く。一見、綺麗にはされているようだ。

「どの辺ですか」

「あの大きな冷蔵庫と食器棚の辺りだ」

巨大な業務用冷蔵庫が鎮座している。戦艦の皆さんも結構な量を食べられるようですね。

「ちよつと失礼します」

件の場所へ近付いていく。すると、目に見えて動き回っているのが確認出来た。結構な数である。

「これは中々の数ですね。外から入って来てるのも居るでしょうが、何所かに巣を作っている可能性もあります」

「巢か、それは厄介だな。視察の日までに何とか出来るだろうか」

「取りあえず、動かせる物を動かして何所まで侵入されてるか調べましょう」

「よし、力仕事は任せて貰おう」

武蔵が指の骨を鳴らしながら前に出た。軽々とは言わないまでも、それなりの力を使って棚を少しずつ動かし、等間隔に空間を作っていた。

「棚ってあんな簡単に動くモンだったかなあ……」

「どうした。これで調べられるだろう?」

「ああ、すみません。ありがとうございます」

ペンライトを取り出して隙間を照らす。食器棚は手前から数えて4つあるが、アリを確認出来なかったのは1つ目までだった。2つ目からはチラホラ、3つ目はそれなりに、4つ目はどう言葉にしていいいものかと迷うぐらいの状態になっていた。

「失礼ですが大和さん、この辺でよく落としていませんか?」

「……そうですね、ケーキの生地を冷やすために冷蔵庫へ入れようとして、何度か落としました事」

まあ、隙間に飛び込んだ物は掃除し難いでしょう。何回かやってるなら、尚更にこびり付いて固まってる事だろう。それを偶然にでも入り込んだアリが見つければ、一部でも持ち帰れば後は団体さんとなって押し寄せるのは当然だ。

「分かりました。まずは燻煙剤か何かでこれ等を除去し、一度徹底的に掃除する事をオススメします。加えてアリの棲息地を特定し、ここへ入って来れないようにする対策も必要でしょうね」

さて、今回は「相談」で鎮守府に来ました。無料なのはここまでなんです。

「如何されますか。今回は相談ですので、申し訳ありませんが作業となると料金が発生

します」

因みに前回のイタチ騒動の時もお金は取っていない。あれはそもそも業務適応外の案件だし。

「そうだな。時間があればこちらでも出来るが、何せ2日しか時間がない。ここはお願いしようと思うが、皆はどう思う」

「私は賛成よ。と言うか、私たちだけじゃこれは手に負えないわ。相応の知識と技術を持った人に頼むべきね」

「私も同感だ。ここで51cmをぶっ放した所で、一掃出来る訳でもないだろう」

うん？ 51cm？ 何の話ですか？

「是非お願いします。私もお手伝いしますので」

「うむ。では正式に仕事として依頼しよう。2日で何とかして貰えるだろうか」

「そうですね、上手くいけば中に入らせないように出来るでしょう。取りあえず、道具を持って来ますので一旦失礼させて頂きます」

お仕事決定だ。店に戻って、色々必要な道具をピックアップする事にしよう。

「提督にはこちらから話しをしておこう。重ね重ね、よろしく願います」

「頼むわね」

「分かりました、お任せ下さい」

こうして俺は戦艦寮から一旦出て、車に乗り込んで店に戻った。道具を積んでから鎮守府へとんぼ返りする。

甘味を求めてⅡ

一旦店に戻り、必要な道具やら何やらを車に積み込んでから鎮守府へ引き返した。それを台車に乗せて戦艦寮までの道のりをガラガラ進んでいる所で、加賀さんと遭遇する。

「この前はごめんなさいね。確認不足だったわ」

「ああいえ、こちらも色々と不十分でした。今度は看板か何かを用意します」

「それで、大淀とは仲良くなったのかしら？」

「……何を仰っているのかさっぱり」

そんな余裕はありませんでしたよ畜生。

「あら、倉庫閉じ込めイベントは男女の仲を深めると雑誌か何かで読んだのだけれど」

「そんなゴシップ記事は忘れて下さい。不健全です」

まさか計算してやった？ いや、考えすぎだろう。

「急ぎます故、御免」

何でお待のような口調になったのかは自分でも分からないです。

取りあえず足を進め、戦艦寮に辿り着くと金髪の綺麗な美人が仁王立ちしていた。角

度的に見えてしまいそうなのを意識しないようにします。

「Guten Tag、私はドイツで生まれたビスマルク型戦艦1番艦、ビスマルクよ。あなたが Herr 後藤田ね。1度顔を拝んでおきたかったの」

「やっべー、超人やん。もしかして元女優さんだったりされますか？」

「えー、はい、自分が後藤田です。定期的に入入りさせて頂いております」

「何かお願いする機会があるかも知れないから、その時はよろしく頼むわね。じゃあ、ちよつと用事があるからこれで失礼するわ」

「道中お気を付けて下さい」

ビスマルクは去って行った。風になびく髪から良い匂いがしましたが、今は仕事モードなので気にしません。

寮に入ると、見た事のある服装だけど顔は知らない2人組に遭遇した。ブラウンの口ングヘアとショートヘアの組み合わせだ。ショートヘアの方から話し掛けられる。

「あ、もしかして後藤田さんですか？」

「ええ、そうです。お初にお目に掛かります」

「金剛型戦艦2番艦、比叡と言います。榛名と霧島からはちよつと前にお話だけ聞いておりました」

「nice to meet you、英国で生まれた金剛型戦艦の1番艦、金剛デス」

むう？ 顔に見合わず海外の方のようですね。イントネーションもちよつと違う。不思議なもんだ。

「後藤田と申します。お見知りおき下さい」

「ハイ、妹たちの事もよろしく」

「邪魔するぞ。後藤田さんは居るか？」

「テイトクウー……!!!」

寮に提督さんが現れた瞬間、目にハートを浮かべて走り出した。さつきまでの落ち着いた感じが吹き飛ぶ。

「コラ、お客さんの前で止めんか！」

「何時になったら私の愛を受け止めてくれるのデスカー！」

二重人格か何かですかね……

「……えーと、あれでしたらそちらを優先して頂いて構いませんので」

「すみません！ 出直します！」

「提督ウ！ 逃げないで下サーイ！」

金剛は寮から立ち去ろうとする提督さんに引き摺られたまま消えて行った。何だっただんですかね今は……

「……………では作業に戻りますのでこれで」

「あ、はい。お見苦しい所を」

「いえいえ、失礼します」

何も考えません。何もね。

炊事場に戻ると、大和型の2人が待っていた。長門さんと陸奥さんはどうしたのだろうか。

「遅くなりました。あれ、長門さんと陸奥さんはどうされました」

「2人は別の仕事で席を外した。くれぐれも宜しくとの事だ」

「頑張ってお手伝いさせて頂きますね」

美女2人を従える男。聞こえはいいが見た目は姫2人と下僕の方がお似合いだ。

「それではまず、この手袋をして下さい。アリはその体に見合わず、噛まれると結構痛いんです。アレルギー症状を起こす可能性もあるのでご注意下さい」

皮製の手袋を渡した。他にはゴーグルとマスクも用意している。

「髪は出来れば纏めて頂いた方が安全です。床に接した部分からア리가上って来るかも知れません」

「じゃあ、一旦自室の方へ失礼しますね。すぐに戻りますから」

「私はこのままで構わんが」

「長門さんから指示には従えって言われてるでしょ。早く行くわよ」

2人は自室へ引き揚げて行った。ポツーンと残されたまま俺は準備を進める。数分後、2人は髪を纏めた上から帽子を被って戻って来た。

「お待たせしました」

残った装備を整え、作業開始となる。まず工程の説明からだ。

「取りあえず、目に見える範囲のアリを除去しましょう。それが終わったら、棚を1つずつ移動させて綺麗にしていきます。棚が無くなった所も順次清掃し、一応ですが巣が出来ていないかを確認しようと思います」

業務用殺虫スプレーを手渡す。これを使ってアリの駆除を開始した。

「アリさんごめんなさい。私の不注意でこんな事に」

「止せ大和。建物の外に居るならいざ知らず、こうなつてはやるしかないだろう」

何だか心を痛めてらっしやるようですが、アリって結構見境ない連中なんですぜお嬢さん。食える物は何でも食うし、田舎じゃ知らない内に玄関へ入り込んで家の中まで踏み入って来る厄介な奴らなんですよ。

「原因が人為的な物とは言え、一旦テリトリーを侵したらそれは害虫となります。これを放つておくと、外で生活してる無害なアリまで入り込んでお互いに良くない状況を作り出します。ですので、あんまり気にしないで下さい」

「そ、そうですね。では、参ります」

スプレーの噴霧が始まる。アリたちは異常に気付いて動きが早くなるも、次第に緩慢な動作になっていった。気付けば引っくり返ってピクピクしているアリで床が埋め尽くされていく。

「一旦、掃除機を掛けます。場所を空けて下さい」

これで死骸を吸引し、こちらの領土を広げていった。10分ほどを掛けて目に見える範囲の駆除が終了する。

「どうでしょうか」

「ええ。十分だと思えます。では柵を廊下に移動させて綺麗にしていきましょう」

「また私の出番だな。任せて貰おう」

再び武蔵が柵の移動を始めた。1つずつ廊下に運び出し、張り付いているアリが居ないかを確認してアルコール除菌のウェットティッシュで拭いていった。俺はその間、柵が無くなった所に巣が出来ていないか調べていく。

「……………あらあ」

壁と床の境目に隙間がある。そこからアリが出入りしているのを見つけてしまいました。した。

「こりゃあ泊り込みかな」

それはそれで間宮さんのご飯が食べられるので良いが、この仕事があと2日で片付く

かは微妙なラインになつて来た。

「取りあえず薬剤を流し込むとして……これどうすつかな」

隙間の周辺に殺虫剤を撒いた。続いて、この隙間をどうするか考えなくてはいけない。

「考えてても始まらない。ここは先住者に相談か」

と言う訳で、2人に状況を伝えた。下手すると内装業者の登場かとも思われたが、大和さんが何所かに内線を掛け始める。何となく、彼女が来る事が予想された。

数分後……

「ご無沙汰しています、後藤田さん」

「お久しぶりです」

明石の登場である。何に使うのか分からない道具が沢山入った腰物を着けていた。

「それで、隙間つてのは何所ですか？」

「ここなんですがね」

件の隙間を指差した。相変わらずアリアが出入りしているものの、殺虫剤に阻まれてそれ以上は進めないでいる。

「あー、楽勝です。お任せ下さい」

明石は隙間を埋める準備を始めた。彼女の仕事は開発がメインだったと聞いていたが、普段はこんな事までやってるのだろうか。

「こういう事もやるんですね」

「私が好きでやってるだけです。修理も仕事のひとつなので、何でも経験値になるんですよ」

「なるほど。あ、埋める前に薬剤を流し込ませて下さい」

隙間へ薬剤をこれでもかど流し込んだ。今回はその場凌ぎだが、後でまた本格的な駆除も考えるべきだろう。室内の数をこれ以上増やさないため、取りあえずこの穴を塞ぐのが先決だ。

「ではお願いします」

「了解ですっ」

彼女はそう言うと、仕事を手際よく終わらせてしまった。思わず見惚れるぐらいの手さばきに感動する。

「これで完了です。もう部屋の中には入って来れないですよ」

「ありがとうございます。これで作業が続けられます」

「じゃあこれで失礼しますね。またゆっくりお話ししましょう」

「え、ああ、では」

硬直する俺を余所に明石は去って行った。うん？ え？ いやいやまさか。だから無いつてば。自惚れるな俺。

「……仕事しよ」

全てを頭の中から打ち消して仕事に集中する。棚は全て運び出され、掃除もほぼ終わり掛けていた。残るは巨大な業務用冷蔵庫だけだ。

「これ、動かしていい物ですか？」

「流石に私だけではちよつと無理だな。大和、一緒に運び出そう」

「廊下には出さないで、隅の方へ移動させましょう。これを廊下に出すと皆が通れなくなるわ」

2人は冷蔵庫を挟むように立った。本当に持ち上がるのだろうかと半信半疑に見守っていると、意外と軽そうに冷蔵庫が持ち上がる。マジか……

「よし、ここらでいいな」

「私たちは掃除を続けますね」

冷蔵庫があつた所の床は、かなり酷く汚れていた。ケーキの生地が固まったと思しき塊が幾つも確認出来る。

「これを綺麗にすれば、取りあえずはいい筈だ」

何匹かアリが残っているのでまずそれを駆除した。ガムテープで死骸を取り除き、鉄

へらで固まった生地を剥がしていく。かなり頑固にこびり付いて、中々に骨の折れる作業だ。

「腕が痛えな畜生。もう少しもう少し」

約20分が過ぎ去り、全ての生地を剥がし終わった。綺麗に水拭きもして跡を拭き取り、殺虫と忌避効果のある薬剤を満遍なく噴霧する。

「これでいいな。そつちは大丈夫ですか」

振り返ると、斜めにされた冷蔵庫を武蔵が支え、大和が底部を掃除している光景が目飛び込んだ。何とも力強い場面である。

「大和よ、まだか。中々重いぞこれは」

「もうちよつと待って」

やがてその掃除も終わり、冷蔵庫は再び垂直に戻った。棚や冷蔵庫を元々あった位置に戻し、一応これで全ての工程は終了となる。後は少しでもだけ調べたい事があった。

「この炊事場が面している所の屋外には、何がありますか？」

「ええと……確か小さな花壇がありますね」

花壇か。と言う事は、元々そこに居たアリが中に入って来た可能性もあるな。

「見に行っても構いませんか？」

「大丈夫だと思いますけど……ちよつと待って下さいね」

「管理している者が居るんだ。一応、伺いを立てよう」

3人でその管理者の部屋へと向かった。階段を上がって2階へ行き、1つの部屋へ辿り着く。

「山城さん、大和です。いらつしやいますか？」

ノックから数秒後、ドアが開いた。扶桑さんと同じような格好をしているがショートヘアで儂げな美人が顔を出す。

「……なに」

「ちよつと花壇を見させて頂けますか？ 実は炊事場にアリが入り込んでいたのが分かりまして、もしかすると山城さんが手入れされている花壇の方からやって来た可能性が」

「……いいわよ。一応、その辺については配慮してたつもりだったけど、不備があったのなら謝るわ」

「いえ不備だなんて、そんな」

「後でどうだったか教えて頂戴。相応に対策を練るから」

「はい、ありがとうございます」

ドアが閉まる。随分とぶつきらぼうな態度だが、決して冷たい訳ではないようだ。

「………今のは」

「扶桑さんの妹さんです。不幸が口癖でして、提督が何か不幸だと思わないようになる事をすれば良いとアドバイスされた所、花壇の手入れを始められたんです」

「手を掛ければ草花は相応に答えてくれる。お陰で、その口癖も1日10回から2〜3回に減った」

そんな効果があるとは驚きだ。確かに園芸療法と言うのがあるが、表面化するほどに効果のある事だったとは知らなかった。まあ取りあえず、これで花壇を調べる事が出来る。

寮を出て裏手に回ると、そこには確かに小さいながらも立派な花壇が存在していた。花の種類は詳しくないが、どれも綺麗に咲いている。

「ではアリの有無を調べましょう。自分は壁の方を見ますので、お2人は周辺をお願いします」

二手に別れて搜索を開始。だが炊事場が丁度向こう側にあるであろう壁の一带にアリの姿は確認出来なかった。

「外れかな。そつちはどうです」

「大きさが違う。中に居るのは別種のようだ」

ふーむ、ここから導き出される答えとしては、床下に居たのが屋内に上がって来た可能性が高そうだ。隙間は埋めて貰ったから、1日2日ぐらいは凌げるだろう。だがその

後も継続的に様子を見る必要がありそうだ。

「取りあえずこれで様子を見ましよう。明日またお伺いします」

「苦労を掛けるな。こちらでも手が空いた時に何度か見ておくとしよう」

「アリさん、そんな所でどうしたの？ お家に帰れないの？」

大和は花壇を囲むレンガの外で右往左往しているアリを指先に乗せ、花の傍にある巢の近くへ降ろしてあげていた。

「はい、これで大丈夫ね。バイバイ、アリさん」

ああ、うん。可愛いなあと思いました。はい。体の割りにとか言ったら当然失礼なんだろうけど、どうにも言動が幼くなる時がありますね。

「……えー、今日はこの辺で失礼致します」

「あ、はい。ありがとうございます」

「では戻ろうか。長門や陸奥にも今日は終わつたと伝えておく」

一度、寮に戻って道具を纏めた。そそくさと駐車場まで引き揚げるも、まだ夕方にもなっていないので久しぶりに間宮さんの所へ顔を出す事にした。

探し物はなんですか

翌日、俺は再び戦艦寮に居た。入念に掃除して巢も塞いだお陰か、アリの姿は確認出来た。同行している長門と陸奥にも報告した。

「大丈夫みたいですね。視察の方が終わってからもし余裕があればですが、床下の状況も確認された方が良いかも知れません。目に付いてないだけで他にも入って来ている可能性があります」

「ありがとう、これで無事にその時を迎えられそうだ」

「1日で片付けちゃうなんて流石は本職ね」

美女に感謝されるのはむしろ痒いです。これが1回だけの訪問ならまだしも、ここに入りしている事で顔を合わせる機会が増えると思うと、本当はだらしない自分が居る事を知られるのが少し怖くなります。

「請求書の方は提督さん宛てにお送りしますので、必要でしたらご確認下さい。ではこれで失礼致します」

2人と別れて戦艦寮を後にした。そう言えば空母寮のネズミがどうなったか気になったので、そっちへ寄り道をする。

空母寮

「ごめんください」

「あら、ご無沙汰しております」

入り口から出て来た赤城さんに遭遇した。彼女はご無沙汰と言うが、俺は町中で休日
を過ごしているであろう姿を何度か見掛けている。その多くは車中からなので問題な
いが、徒歩だった場合は視界に入らないようそそくさと逃げていた。

だって外で会ったら何か気まずいじゃないっすか……

それにこんな美女が俺に話し掛けているような光景を知り合いにでも見られたら、面
倒な事が起きそうだし……

「畏の様子を見に来たんですが、お邪魔して宜しいでしょうか」

「ええ、どうぞ。炊事場に誰か居ても気にされなくて結構ですから」

そう言われると気にしてしまいそうだが、取りあえずお邪魔した。炊事場には幸い誰
も居ないが、空き巣か何かと間違われるのは嫌なので折畳み式の安全柵を設置する。こ
れは商店街の金物屋に作って貰った物で、「害虫駆除作業中」と印字されていた。何をし
ているか一目瞭然である。

「さてと、畏の様子はどうか」

「あちこちの隙間に設置したネズミ捕りや粘着シートを確認する。死体は見つけられなかったのでブラックライトを取り出し、炊事場全体を照らして見た、
「……どうやら追い出せたっぽいな」

足跡も一切確認出来ない。この炊事場におけるネズミの活動は終息したようだ。油断は出来ないが、大きく前進した事は間違いないだろう。

「他の場所に移動して営業されないようにしないとな。その調査はまた今度にしますかね」

「なあ兄ちゃん、ちよつと入ってもいいかな。冷蔵庫に用があつてさあ」

入り口から特徴的な髪型をした艦娘が覗き込んでいた。巫女のような服装も目を引く。

「ああ、もう大丈夫ですよ。片付けますね」

外に出て安全柵を回収する。彼女はまだ見た事のない艦娘だった。

「悪いねえ兄ちゃん。あたしは隼鷹つてんだ。ネズミ退治ご苦労さん」

「後藤田です。そう言えば以前、ゴミ捨て場の方でネズミを見られたとか」

「ああ、あつちは最近見ないねえ。どつか鞍替えしちまったんじゃないかな。ま、こつちは嬉しい限りだけどね。それじゃ失礼」

何か分からないが、ちよつと酒臭かった。こんな時間から大層な事でございますね。

空母寮を引き払うと、今度は駆逐艦寮が頭に浮かんだ。定期駆除は先々週に行ったものの、Gのしぶときはネズミに匹敵するので確認しておいた方がいいだろう。つて訳で駆逐艦寮を目指したものの……

「……トイレに行きたいなあ」

はて、男性用トイレは何所だったか。朝は出なかつたので今ごろにお通じが来たようだ。

「えーと確か、司令部棟にあつた筈」

ちよつと寄り道して無事に用を足した。今度こそ駆逐艦寮へ向かう。

駆逐艦寮

「こんにちはー」

誰も居ないのか返事が無い。そう思った瞬間に管理人室のドアが開き、大正時代のよな袴姿にブーツと言う出で立ちの美少女が現れた。

「何の御用でしょうか。ここは原則として、関係者以外で殿方の出入りはご遠慮させて頂いておりますが」

どうやら彼女も艦娘のようだが随分と礼儀正しい。まるで大昔の時代そのものから抜け出して来たような印象を受ける。

「後藤田プロテクトクリーンと申します。本鎮守府におきまして害虫駆除を請け負っている業者です。先々週に定期駆除を行っていますが、別件で来ましたのでついでの状況確認をとお邪魔した次第です」

「ご丁寧ありがとうございます。神風型駆逐艦、春風と申します。あなたが後藤田様なのでですね」

様……何かムズムズする。

「お初にお目にかかります。以後お見知りおき下さい」

「司令官様からお話は伺っております。どうぞ中へ」

一つ一つの所作に気品を感じてしまう。一般人には接しがたいお方ですわい。

「確認だけですので、ご同行は必要ありません。用が済みましたらお声掛けします」

「はい。よろしくお願い致します」

これはさっさと退散した方が良さそうだ。って訳で、各所に仕掛けた罠や毒餌を確認して回る。20分ほどで全ての確認が終わり、1階へと戻って来た。

「終わりました。まだ色々と早かったようですね。近い内に再度寄らせて頂きます」

「ありがとうございます。お気を付けてお帰り下さい」

「では失礼致します」

無事に駆逐艦寮から出られた。何だか息苦しい時間でしたね……

「さて、今日はこの辺で帰りますか」

駐車場へ向けて歩く。店のワゴンを前にして、右手をポケットへ突っ込んだ。

「……………あれ？」

いやいや、そんなまさか。こっちのポケットでしょう。

「……………おやあ？」

うーん、こっちかな？

「……………待て待て」

持っている物を全てアスファルトの上に出した。さすがにここで作業着は脱げないが、どうやら目の前にある物が全部らしい。

「……………車の鍵がない」

ポケットに入っていた筈の鍵が何所にもない。いつもの行動で絶対に右のポケットへ入れるようにしていたのに何故……

「マジかおい…………」

この広大な鎮守府の敷地内で落としたと言うのか。だが今日は戦艦寮・空母寮・駆逐艦寮しか回っていないから、その何所にはあるだろう。しかし1人で探すのは相応に苦労する筈だ。腹も減って来ているから何か食べてからやりたい所だが、残念な事に財布も車の中でした。

「……………こつてロードサービス呼べるんかなあ」

取りあえずでもどうにかしないといけないが、こういう時つて意外と頭が回らないモンなんですよね。

「わっ!」

「だあ!?!」

急に後ろから驚かされて変な声が出た。振り返るとそこには……

「スキありぜよ、後藤田はん」

満面の笑みを浮かべる白露嬢がそこに居ました。しかし今は「びっくりしたなあ」とか言える状況ではない。

「……………ああ」

「いやさっきの驚きからその反応はどうよ」

「ちよつとそれ所じゃないんですわ」

「どうかした?」

「車の鍵を落としたみたいでして」

「え、マジ? 探すの手伝おうか?」

「是非ともお願いしたく」

「ちよつと待つて。そろそろ何人が帰って来るからさ、人手集めとくよ」

そう言うのと彼女は走り去って行った。10分ちよつとが経過し、よく見知った駆逐艦集団がワラワラとやって来る。

「車の鍵落としたつばい?」

「今日は何所を回りましたか?」

ゆうしぐコンビは何時も可愛いですね。

「えーと、戦艦寮で仕事して、空母寮と駆逐艦寮に立ち寄ったぐらいなんだけど」

「じゃあ私と深雪で戦艦寮を探って来ますね」

「オツケイ任しときな。深雪様が見つけ出してやるぜ」

吹雪&深雪ペアが戦艦寮へ向かった。

「僕たちは空母寮を見て来ます。行こう、夕立」

「ぼーい」

時雨&夕立は空母寮へ向かう。

「黒潮、不知火、私たちは駆逐艦寮に戻って入念に探すわよ」

「必ず探し出します。ご安心を」

「どつかにはあるやろやなあ。まあ任しとき」

陽炎と黒潮、不知火は駆逐艦寮へ戻って行った。

「忘れ物か落し物で届けられてないか見て来ますね」

「他の寮で拾われてないか確認して来ます」

白雪は忘れ物・落し物コーナーへ、綾波以下数名は軽巡察や重巡察で拾われてないか確認に向かった。

「道端に落ちてないか隈なく探すわよ。ここに来るまでの何所かに落ちてる可能性もあるからね」

他の子たちは白露を筆頭にあちこちへ散った。ここまで大搜索して貰うのも気が引けてしまう。

「悪いね、大勢呼んで貰って」

「手数が多いのは駆逐艦の特権だからね。すぐ見つかるよ」

しかし、予想に反して車の鍵は見つからなかった。何所へ行ってしまったと言うのだろうか。

「やばいなあ、このままじゃお袋にどやされちまう」

もう1度、今日の行動を思い出して見る事にした。まず戦艦寮に行つて状況の確認。その後は何所にも立ち寄らず空母寮へ。次は駆逐艦寮……

「……まさか」

「思い出した？」

「……うん。多分、皆が入れない所だ」

頭に「？」が浮かぶ彼女たちをここで待たせ、俺は一人で可能性が最も高い場所へ向かった。そう、俺は駆逐艦寮へ向かう前に、司令部棟の男性用トイレに立ち寄ったのだった。

司令部棟 男性用トイレ

「……あつた」

トイレトッパーホルダーの上って、物が置けるタイプもあるじゃないですか。俺はそこに、落としたら拙いと思つてポケットティッシュなんかと一緒に置いたまま出て来てしまったようです。

「良かった〜」

鍵を両手で包んで、無事に見つけられた嬉しさを表現していると、誰かに声を掛けられた。

「あの、そういう宗派の方だったんですか？」

振り返るとそこには、正門で何時も警備している人が立っていた。いえ違うんです。決してトイレを崇拜している訳ではなくてですね……

「いやあの鍵をですれ置き忘れて出てしまってますね」

「ああなるほど。自分もよく小銭入れとか置いたまま出てしまってますからね。ここ男性

が少ないですから、こういう場所はどうしても発見率が低いのでご注意ください」
「以後十分に注意致します」

取りあえず鍵は見つかつたので問題無しだ。これで家に帰れる。

駐車場まで戻ると、皆はまだ待っていてくれた。

「お騒がせしました。鍵はこの通り、無事に発見しました」

全員が安堵する。白露嬢が「何所にあつたの」攻撃を繰り返して来るが、何となく察した綾波と時雨が宥めている隙に車へ乗り込み、鎮守府を後にした。

（広樹です。また暫くして鎮守府に行った時、しつこく聴かれたのでトイレに置き忘れたと話したら、大笑いされたそうです。ちくせう）

古新聞の記憶

広樹です。今日は定休日です。何を思い立ったか、部屋の押入れを掘り返して掃除中です。

「げ、自作CDか。黒歴史は処分じゃ処分」

中坊の頃にレンタルショップやら友達のCDを借りて作った、好きな曲だけが詰まった最強ラインナップ（笑）のCDが出土した。今思えば恥ずかしい事をしていたもんだ。捨ててしまおう。

「この箱はー、あー、河原で拾った色んな物（意味深）か」

そう、河原と言えば色んな物（意味深）が落ちているのだ。明らかに年数の経った物から、つい最近に捨てられたであろう物まで幅広い。これは人目に付かないよう処分しようと思う。

「えーとこれは……うわ、取ってあったのかこれ」

古い新聞がたくさん出て来た。これは俺が住んでいる町の地方紙だ。

月日は今から8年前。そう、現実には起こらないであろう事が、我々の前に姿を現した年だ。1枚捲るだけで、目に飛び込んで来る見出しの数が脳の処理速度を上回る。

「インド洋封鎖、喜望峰ルートの輸送船団壊滅、シーレーン防衛失敗、ハワイ諸島の島民避難作戦、昭和基地通信途絶で安否不明 経済大打撃、酷いもんだな」

この世界がおかしくなったのは、専門学校の2年生になったばかりの頃だった。

発端はよく知らないが、世界的に海難事故が多発したこの年。どうやらその原因は、未知の敵による仕業らしい事が判明。そいつ等は瞬く間に増え、気付けば人類は海から追い出されようとしていた。

テレビや新聞で何度も見たが、魚のような形をしたのと、人に近い形をしたのが海を荒らし回る光景は、一般人が恐怖を覚えるのに十分過ぎる内容だった。お茶の間はテレビに釘付けとなり、言いようのない不安を感じる日々が続く。

海に近付くなどと言う政府の指示で漁業は中止を余儀なくされ、スーパーや商店街から魚が消えたのは今でも覚えている。

世界中はこの事態に恐らく人類史上初めて一致団結し、大軍を組んで何度か大きな戦いが行われた。結果は殆ど惨敗。小さい集団を相手になら何回か勝ったとの報道もあつたが、制海権の殆どを奪われた状態では焼け石に水だった。

専門の同期生でも何人かはこの危機をどうにかしたいと学校を中退し、自衛隊へ入ろうとする者も居た。俺の場合は家の仕事が立ち行かなくなる方が困るので、言っちゃ悪いがその選択肢は眼中に無かった。まあ、本気でやばくなったらそれも有りかぐらいに

は思つてた気がする。

商店街は次第にシャッターを下ろす店が増え、町から人の姿が少しずつ減つていった。ウチはそれでも営業を続けていたが、当然の如く売り上げは落ち込んだ。

隣県に住んでいる親戚の所へ一時的に身を寄せる事も考え始めた矢先。日本のある沿岸部が、例の化け物に襲われた。しかし、それを撃退したと言うニュースで世間は沸き上がる。それは少女の姿形をした、海の上を疾走して化け物を蹴散らす頼もしい存在だった。

政府は彼女たちを「艦娘」と名付け、化け物を「深海棲艦」と呼称。これまでの状況が嘘のように改善され、各国は再び海へ繰り出し始める。漁業も再開されて町には活気が戻つて来た。

その後は艦娘の数も増え続け、日本の沿岸各所に彼女たちが住まう「鎮守府」が幾つも作られる。俺が出入りしているあの鎮守府も、3〜4年ほど前に作られたものだ。

ただ、彼女たちは深海棲艦に唯一対抗出来る存在のため、町と鎮守府の間には自然と溝が生まれていた。鎮守府の近くに居ると敵が襲つて来ないだろうかと考える者も多く、互いの交流は事務的なもの以外、中々実現しなかった。

そもそもこの辺では深海棲艦が確認された事もないので安全と言えば安全なのだが、そうは思わない人々も当然居た。そんな人々がこぞつて想像を声高らかに叫ぶから、い

くら向こうが門を開こうが、一歩踏み出すのはどうしても難しい状況が作られていった。

その状況に転換期が訪れたのが約2年前だ。1人乗りの小型漁船で沖合いに出ている高齡の漁師が急病を患い、身動き出来なくなっていたのを訓練中の艦載機妖精たちが発見。同じく近場で訓練中だった艦娘たちが急行し、漁港へ連絡を入れた上でその漁師を運び込んだ。あとは救急車で搬送され無事に一命を取り留める。これが切欠となり、町と鎮守府は少しずつ歩み寄り始めたのだった。

運が良いと言えるのかどうか微妙だが、その漁師が漁業組合理事長の兄弟だった事も歩み寄りが始まった要素の1つだろう。

「俺が出入りするようになったのもそれぐらいの頃からだったか……月日が経つのは何とやらってね」

あそこへ出入りするようになった切欠は何だったのだろうか。よく思い出せないがまあ、その内に話す事にしようと思う。

「……さて、続き続き」

掃除を再開する。この古い新聞たちは取っておく事にした。

いつか戦いが終わって、全てが過去の事として忘れ去られようとしても、鎮守府と言う一般人が覗き見る事の出来ない世界に触れて来た俺には、これを残しておく義務があ

ると何となく思ったからだ。

8本足が迫る

ある日、家のポストに見慣れない封筒が入っていた。差出人は県庁の自然環境課である。

「お、ついに来たか」

少し前に受けた狩猟免許の合否通知だ。ガラにもなく胸の鼓動が高鳴る。こんなのは高校受験以来の感覚だった。逸る気持ちを抑えて封筒にカッターを入れていく。

「……………こうかーく」

鳥獣の保護及び管理並びに狩猟適正化に関する法律により狩猟免許を与える。よつてこの証を公布する。○○県知事

「これで事業拡大への第一歩が踏み出せるな。いや、寧ろこつからが大変だけど」

現状、俺の経験値はゼロだ。知り合いのツテを頼ってあちこち修行させて貰ってから、正式な業務として請け負う事になるだろう。

「つて訳で、次は親父の番な」

「おう任せろ」

しかし、親父の不合格は続くのだった。

そんな中、久々に鎮守府より相談でなく初っ端から依頼として仕事が飛び込んだ。急いで来て欲しいそうなので車を走らせ、毎度お馴染みのやり取りを終えて来客用の駐車場に到着する。

「……静かだな」

敷地内は妙に静まり返っている。正門の警備は特に変わった様子を感じなかったが、何かあったのだろうか。

「取りあえず提督さんに連絡を」

「ヨオニイチャン、キヨウハオレタチガアンナイシテヤルヨ」

「ワケアツテソトラムヤミニアルケナインダ、ツイテキテクレ」

久々に耳元で独特の甲高い声が聴こえた。こいつらと押し問答はしたくないので、黙って従う事にする。

声の聴こえる方へ進み続けた所、恐らく潜水艦寮だったと記憶している建物に到着した。

「……ここでもいいのか？」

「チョットマツテロ、ヨンデクルゼ」

「ケッコウナキヨウテキダ、チュウイシロヨ」

あの声が遠ざかる。5分ぐらいが経過した頃、急に頭上を無数の艦載機が飛び交い始

めた。おまけにヘリコプター見たいなのが飛んで来て、目線の高さまで降りて来る。

『聴こえますか、後藤田さん』

提督さんの声だ。目の前で飛んでるヘリっぽいのから聴こえている。

「はい、聴こえています」

『このような形で申し訳ありません。実は潜水艦寮でタランチュラののような蜘蛛を見た
と報告がありました、全員を寮に隔離しました。ですが後藤田さんだけでは万一の際に
危険ですので、志願者を募って人手を集めています。集計次第に向かわせますのでもう
少しお待ち下さい』

聞き間違いだろうか。タランチュラとか聴こえた気がする。マジか……

「……えー、タランチュラ、と」

携帯端末で特定外来生物について環境省が定めているガイドラインを閲覧する。タ
ランチュラに関しては特に記述が無かった。県庁のHPも調べるが、同じように記述は
されていない。

「駆除について法令関係は特に問題無さそうだな。装備さえあればやれるか……」

『お待たせしました、各寮から6人が向かっています。陣容は日向・古鷹・ザラ・龍田・
白露・綾波です』

あ、何か嫌な単語が聞こえた。これまで接触を回避し続けて来れたのは幸運だったの

だろうか。思わず帰りたくなってしまふ。

「お久しぶりですう〜」

背筋を凍らせるような甘ったるい声が聴こえる。なるべく冷静を装って振り返った。

「大変ご無沙汰致しております。何時ぞやは至らない所をお見せしてしまいました」

「私も出過ぎた事をしたと反省しました。今回はお手伝いに徹させて頂きますねえ」

あれ、前より物腰が柔らかいような……

「ですが、仕損じた場合は遠慮なく仰つて下さい。必ず仕留めますからあ」

うん。やっぱり怖い。

「相変わらず、君は難儀な物ばかり相手にする仕事が多いな。他の所でもそうなのか？」

日向さんは落ち着いていて接しやすいです、はい。

「いやあ普段は小物ばかりでして。ここは外国の船も出入りするでしょうから、外来種

はいつつ出ても不思議ではないでしょう」

そこへ古鷹とザラ、白露に綾波も合流した。

「何か凄いのが出たそうですね。注意して探しましょう」

「Buon giorno、お久しぶりです」

「綾波にお任せ下さい。必ずお守りします」

「また私の助けが必要みたいだね。何時でも頼つていいよ」

「あなた騒ぎに託けて俺をいじりに来ただけでしょうが」

「トイレの件はもう言わないからさあ」

そう言いながら白露は思い出し笑いしている。あの件を知っている綾波以外は不思議そうな顔で見ている。もうその話は止めてくらはい。

「はい。それでは何か厄介なのが出たそうですので、注意して参りましょう」

全員を引き連れて潜水艦寮へ足を踏み入れた。そんな我々を一人の艦娘が出迎える。

「潜水母艦、大鯨と申します。ここの寮長を務めています。この度はご足労頂き、ありがとうございます」

「たいがい？ ああ、「だいがい」でも「おおくじら」でもなかったんだ。そう読むのね。」

「後藤田と申します。何でもタランチュラのようなのを見たとか」

「はい。蜘蛛って大体は巣にくっ付いていますから、床をあんなに大きいのが歩き回っているのが驚きました。気になって調べましたら海外の蜘蛛だそうで、大急ぎで提督に一報を入れた次第です」

「何所で見えたか教えて頂けますか。他の方々は部屋ですね？」

「提督の指示で、私以外は許可が出るまで部屋の外に出るのは禁じられました。取りあえずは安全だと思います。見つけたのはこちらです」

8人はゾロゾロと移動する。到着したのは掃除器具の置かれた小さい部屋だった。

「ここです。一応、廊下はずっと見張っていたので、まだ他の場所には移動していないと思います」

狭い空間は体の小さい生物にとって有利だ。人間は体が大きいのでどうしても一歩劣る。

「大鯨、どんな形をしていたか正確に教えてくれるか。色も知りたい」

「あ、はい。色は黒くて全身に光沢がありました。それと何と言うかその、ちよつとだけですがフサフサもしていました」

日向が大鯨より情報を聞き出す。タランチュラは大体がフサフサしていそうだが、黒くて全身に光沢があると言う言葉が引つ掛かった。

「……まさかなあ」

どの都道府県だか忘れたが、それっぽい物の写真がネットに載ってたのを思い出した。大急ぎで検索すると、悪い予想が的中してしまう。その画像を大鯨に恐る恐る見せた。

「もしかして……これですか？」

「はい！ これです！」

最悪だ。まだ国内で目撃情報は無いが、これが敷地外に逃走したとなると騒ぎになるだろう。

「どうした、正体が分かったのか」

日向の問い掛けに、ゆっくり言葉を選んで答えた。

「相手は恐らく、シドニージョウゴグモです。オーストラリアに住む蜘蛛で、姿形は似てますが正確にはタランチュラではありません。因みにこいつ、世界最強の毒蜘蛛として有名です」

冷たい風が通り過ぎた。同時に、そいつが居るであろう部屋から自然と距離を置いてしまう。どうしたもんだろうか……

「いつもみたいに殺虫剤をぶちまければ終わりじゃないの？」

「あそこから既に移動していたとすると、それは無駄な作業になるよ」

「厄介だな。まず正確な所在を押しさえなければならぬか」

「取りあえずでも、あの部屋を虱潰しに探せばいいんじゃないかしらあ」

しからばこうする事にしよう。俺を中心に数名であの部屋から物を出しつつ、目標を搜索し見つければ駆除、見つからなければ他の所を探す。その間、残った者は寮の中を巡回して他の所に居ないか探って貰うのだ。それを提案してみる。

「何人かに別れて、あの部屋を搜索するチームと他の場所に行つてしまつてないか探るチームを作りましょう。見つければその場で駆除、居なければ探るチームとは別で行動し、まだ見ていない場所を回る。これでどうですか」

全員が納得してくれた。あの方の近く居るのは怖いので、このまま人選もしてしまおう。

「では日向さんと重巡のお2人にはこちらを手伝って頂きたいです。龍田さんと綾波ちゃん、白露ちゃんは捜索の方を」

「心得た」

「はあ、いい、じゃあ行きましようね」

こうして上手くあの方と離れる事が出来た。一安心したのを悟られないよう、さっさと行動を起こす。

「始めましょう。ゆっくりでいいので、1つずつお願いします」

箒やモップ、バケツ等をゆっくり運び出す。1人が部屋に入る間はもう1人がそれを見守り、更に2人で周囲を見張った。

「もし見つけてしまったら、どうすればいい」

「恐らくですが、問答無用で噛み付いたりはしないと思います。ゆっくりと距離を取って殺虫剤をかける空間を作り、自分が責任を持って処理します」

運び出しは続く。しかし、最後に残ったゴミ袋が入るカートを移動しても、その姿を見つめる事は出来なかった。

「何も居ないな」

「あの、もしかしてこのカートの中に居るんじゃない」

古鷹がそう発言した。皮手袋を嵌めて、カートの中に入っている物を取り出ししていく。

「ザラ、天井の近くも注意してくれ」

「了解です」

カートの中が空になった。ここまで来ても、まだ見つけられていない。

「移動してしまっただんでしょうか……」

古鷹は不安げになり、自然とザラが見張っていない方向を注視した。この連携は流石だと思う。

「大鯨が私たちを出迎えている間に移動した可能性もあるな。捜索チームと連絡を取ろう」

しかし彼女たちも、まだ見つけられていないそうさ。この状況は宜しくない。

「どうする。あまり少人数になると、万一の際に対処が難しくなるぞ。この面子で捜索に出るか？」

「そうですね。全員でなるべく固まって移動しましょう」

掃除器具は廊下の壁に等間隔で立てかけた。これは隠れられる場所を作らないためである。

日向の提案通り、4人で搜索を開始して20分ばかりが経過した。何度か龍田率いるチームとすれ違っても、未だに発見出来ていない。1度休憩を兼ねてロビーに集合した。

「椅子へ無闇に座れないのが辛いですね」

「私は地べたでもいいけどね」

「こういう時の白露は遅しい。綾波は育ちの良さが感じられた。

「皆さん。お茶が入りましたから、一息入れて下さいね」

「大鯨、あまり一人で動き回るな。危ないぞ」

湯飲みを配る大鯨が背中を見せた瞬間、日向の表情は凍り付いた。何と大鯨の背中に、真つ黒い8本足がピツタリくっ付いていたのだ。俺もその光景に釘付けとなり、体が硬直する。

「大鯨！」

「え、何ですか日向さん」

「じつとするんだ。絶対に動くんじゃないぞ」

その声色と表情で察したのか、大鯨の顔が青くなつた。カタカタと小刻みに震え始める。

「も、もしかして、私の」

「大鯨さんダメ！ 動かないで！」

「じつとして下さい！」

「落ち着け、大丈夫だ。大丈夫だからな」

ザラと古鷹が大鯨に呼びかけ、日向は落ち着かせようと尽力している。龍田は飄々としているが綾波はすっかり青ざめていた。そんな中、白露は何か考えている様子だ。

「あらあ、これは手詰まりねえ」

「ねえ、箒で叩き落とす？」

その提案は是とも言えるし否とも言えた。

「逃げ出されたら厄介だ。だけど、それも選択肢の1つだな」

どうする。どうすればこの場を収められる。余り考えている時間は無い。ここは彼女の提案を実行して見るべきか。

「その提案、やって見るか」

「何か手伝いましょうかあ？」

「アレを箒で叩き落とします。もし可能でしたら、あの時のようにして貰えませんか」

「んく……ちよつと自信ないけど、やって見るわねえ」

「みんな、椅子の上に登って！ 今から叩き落すよ！」

白露ちゃんの呼びかけで、俺と龍田さん、大鯨さん以外は椅子の上に立った。大急ぎで箒を取りに走り、再び戻って来る。

「準備はいいわよお」

あの槍が実体化され、鈍い輝きを放っている。正直怖いです。ふと思ったけど、ここに居る皆はやろうと思えば同じ事が出来る筈だ。どうしてやらないのだろうか。まあそれについては機会があればその内に聴いてみよう。

「では行きます」

自在箒を蜘蛛の上からそつと近付け、そのまま勢いよく振り下ろした。ポトツと床に落ちるがすぐに体勢を戻して走り去って行く。

「おっとー！」

「あら、意外にすばしっこいのね」

蜘蛛は廊下へと姿を消した。それを追いかけていくと、スクール水着を身に纏った2人組と出くわす。

「いやあ！ 蜘蛛でちー！」

「だからイクはまだ出ない方がいいって言ったの！」

どうやら蜘蛛も驚いたらしく、こつちへ引き返して来た。脚が長いので大きく見えるが、体そのものは5〜6cmなのでそこまで巨大な訳ではない。

「食らえー！」

殺虫剤を左右に振りながら噴霧した。こうすればどつちに逃げようが、薬剤の中へ

突っ込む筈だ。

蜘蛛は玄関の方を目指して走り出すが、気化しかけた薬剤の中を突っ切ったためある程度のダメージを負ったらしい。動きが少しずつ鈍くなっていく。

「はい、外には出させませんよー」

小走りで先回りして玄関を閉めた。蜘蛛は歩みが更に遅くなっている。

「悪いね。仕事だからさ」

真上から殺虫剤をかけてトドメを刺した。脚を折り畳んで小さくなり、完全に動けなくなってしまう。

「……終わりました」

「ありがとうございます！ ほら、イクちゃんとゴーヤちゃんも」

イク？ ゴーヤ？ どんな字ですか？

「ありがとうございます！ 潜水艦の伊58、ゴーヤでち」

「潜水艦の伊19、イクって呼んでいいの。やつつけてくれて、ありがとうございますの」

58でゴーヤ、19でイク、なるほど……しかし、何故に水着なんですかね……

「後藤田と申します。潜水艦の皆さんは初めてお会いしますね」

「あ、2人共。どうして許可が出る前に部屋から出て来たのかしら？」

「何かロビーの方が騒がしくって、退治出来たんじゃないかと思っちゃったんでち」

「連絡が来てないから、イクはまだ出ない方がいいって言ったの」

「もう、ダメですよ。もしかしたら、2人のどっちかが噛まれてたかも知れないんですからね」

「ごめんなさいでち」

うーん、まあその件に関しては同意なんですけど……

「みんなー、蜘蛛の退治が終わったなのー」

目に毒です。特にあなた。何所がとは言いませんが今にもはち切れそうじゃないですか。

「本当？ ロビーにスマホ置きっ放しだから取りに行つていい？」

「もうロビーで本を読んでも、大丈夫？」

「お風呂にどぼーんしに行つてもいいの!？」

「まだ許可が出てないから待つてしおいちゃん!」

いかん。スク水集団が現れた。これはいかん。倫理的にも色々……

「あー、えー、ではそろそろ失礼致します」

「はい！ ありがとうございます！」

死骸を回収して、潜水艦寮を後にした。一步踏み出した瞬間から耳元であの声がし始める。

「スクミズハキライカ？」

「イクダケジャナイゾ、ハツチャンモオオキイカラナ」

「知らん！ 俺は帰る！」

早歩きで駐車場に辿り着き、車に乗って鎮守府から退散した。今日は随分としつこく、正門を出る直前まで声がしていた。

「あー疲れた」

何かもう、怪しいお店が開けそうな空間だった。取りあえず帰ろう。そこで死骸も処理しよう。

（広樹です。それから暫く、スク水系が自分の中で流行りました。まあ、左程長続きはしませんでしたが……何を言ってるんでしょうね）

土竜つて読める？ その1

後藤田です。今、山の中に居ます。罫猟の経験値を得るため、知り合いのツテを頼って専門家の所で勉強させて貰ってます。

専門家のお名前は日義ひよしさんと仰います。60歳の大ベテランです。

「ここよく見てみる。掘り返された跡があるだろ」

日義さんが指差す場所をじーっと見つめる。確かに、何かしら手を加えられた形跡が確認出来た。

「……あー、葉っぱと土が捲られていますね」

「猪はこうやって、鼻先で土とか葉っぱ引つくり返して食い物を探すんだ。土がまだ乾き切つてないから、本場に最近掘り返されたばかりだろう」

なるほど、こうやって猪の行動範囲を知るのか。流石に教本だけじゃここまで学べない。

「ほれ、ここからそっちの木々が濃くなってる方に、何となく道が出来てるの分かるか？」

言われて見ると、確かに何となくだが道と呼べなくもない物が形成されているのが分

かった。地面が僅かに踏み固められているため、そこだけ他の地形よりも土の露出が多い。

「これが獣道ってヤツですか」

「そうだ。罾はこういう道の途中に仕掛けると、獲物が掛かりやすいんだ」

その後、実際に罾を仕掛ける際の注意点や、どうやって仕掛けるかまでをやらせて貰い、この日は解散となった。罾に掛かった状態を見るためにその都度ここへ来るのは流石に遠いため、動画を撮ってそれを見せて貰う事にした。

「予定が合えば今度はクマ狩猟にでも連れてってやるぞ」

「ありがとうございます。また近い内にお願います」

どの県でもそうだが、狩猟の担い手は年々減少の傾向にある。そのせいか、思っていたよりも力の入った指導を受けてしまった。うーん、そこまで足を突っ込む予定はないんですがねえ……

それから暫く、月2回ぐらいのペースで日義さんの下を訪れ、罾を仕掛けさせて貰ったり狩猟の手伝いをした。残念ながら、まだ自分が仕掛けた罾には一匹も掛かっていない。山を歩き回るのは当然だが重労働で、野生動物にこちらの存在を悟られないよう行動するのは神経を使う。気付くと俺は、風が木々を揺らす音にも敏感になっていた。

この状態で仕事も並行して行っている内に、鎮守府の定期チェックが終わった報告書

を提督さんに提出した時、その微妙な変化に感づかれてしまった。

「……失礼ですが、お疲れですか？」

「ああ……いえ、ちよつと別件で色々」と

「家と言えないような事でしたら、良ければお話だけでも」

「いや、愚痴の類では無いんですよ。実はちよつと前に狩猟免許を取得しまして、経験値を得るためにベテランの方の所でご指導頂いてまして」

「狩猟免許……もしかして、イタチの件が原因ですか？」

まあ、分かっちゃいますよねー

「ええまあ……その……ただこれは、事業拡大にも繋がりますから、あつて損は無いかと思ひまして」

「ちよつと良かった。実は相談だけでも思つてた案件があるんです。まだ時間は大丈夫ですか」

「今日はこれで終わりの予定ですから、特には」

「では見て頂きたいものがあります。行きましよう」

今日は大淀さんも加賀様も居ないらしく、執務室に施錠をして司令部棟の外に出た。

暫く歩いて辿り着いたそこは、敷地の奥まった所にある倉庫群の一画だった。その中に、暖簾が掛かったまるで居酒屋のような佇まいの小さな建物がある。

「……こんな所に居酒屋が？」

「福利厚生の一環と言いましょるか、彼女たちだけで気兼ねなく騒げる場所も必要でしょう。それと、こういう事をしたの上申もありまして、敷地内なら良いかと許可を出したんです。どうぞ中へ」

まだ営業はしてないようだが、提督さんは暖簾を潜って中に入った。俺もそれに続く。

「邪魔するよ。鳳翔さんは居るか」

「今は裏の畑に居ますよ」

「まだ営業時間じゃないわよ……あら、提督じゃない」

中は完全な居酒屋で、カウンターの内側に見た事のない艦娘が2人居る。どうやら夜に向けて仕込みをしているようだ。

「2人はまだ面識がないな。こちらは後藤田さんだ。空母寮のネズミ退治だけじゃなく、各方面でお世話になってるのは知ってるだろう」

「後藤田と申します。度々お邪魔しております」

「軽空母の千歳です。ネズミ退治の件、ありがとうございます」

「飛鷹型航空母艦、飛鷹よ。ちよつと前に妹の隼鷹と会ったらしいわね」

ああ、酒臭いお方のお姉さんでらっしやいますか。ってか妹さんの髪型ちよつと凄す

ぎません？

「実は例の件で来て頂いた。まだ分からんが、少しはマシになるかも知れない」

「そうね、このままにはしておけないし」

「鳳翔さんも困ってますから、解決出来るといいんですけど」

何か勝手にハードルが上がっていくのを感じる。ちよつと待つてくらはい。俺はまだ猫については修行中の身なんですが……

「では行きましょう」

「は、はあ」

店の中を抜けて、裏側へ出た。そこには、家庭菜園と呼ぶにはかなりレベルの高い光景が広がっていた。野菜がどれもこれも立派に成長しており、素人目に見ても相当な手間暇を掛けている事が分かる。

「鳳翔さん、鳳翔さん」

「はあーい」

優しい声の返事と共に緑を掻き分けて現れたのは、若妻のような雰囲気纏う、小柄で落ち着いた感じの女性だった。

「どうされましたか？」

「実は例の件で、業者の方に来て貰いました。こちら、話しだけは何度か聞いているかと

思いますが、害虫駆除業者の後藤田さんです」

「お世話になっております。後藤田です」

「まあ、あなたが後藤田さんでしたか。航空母艦、鳳翔と申します。お噂はかねがね伺っております」

ああ、間宮さんの存在かと思っただけど、すっかり空母なんですね。そう言えば間宮さんは人間……いや、だから止めておこう。考えるな俺。

「それでですが、何にお困りでしょうか」

「ええ。実はこのように、農家の方の真似事のようなものをしていのですが、ちよつと前から土竜が荒らすようになってしまいました」

漢字にするとかっこいい感じがするけど、これはモグラです。農家にとつては天敵のひとつで、農水省の発表によると年間の被害総額は一千万を超えると何かとか。

「……なるほど。しかしお恥ずかしいのですが、実物を見た事も無ければ狩猟の方も最近始めたばかりでして、かなり時間が掛かるかと思われます。それでも宜しいでしょうか」

「それは構いません。ネズミもそうやって退治して頂きましたし、既に今日明日でどうにかなるものでない事は承知しています」

「人手が必要でしたら、遠慮なく仰つて下さい。ここは多くの者が訪れる場所ですから、

協力者を募れば全員が首を縦に振るでしょう」

こうされては後に引けない。やるしかないようだ。がしかし、重要な問題がある。

まだ料金の設定やら契約書類、必要な器具とかが何も用意出来てないんです。サーセン

「では、練習がてらと言う事でお引き受けします。ネズミより長丁場になる事は確実に、気長に待って頂けると幸いです。料金についても後ほど提示出来るようにします」

新しい仕事が始まった。まず相手を知る事から始めなければならぬだろう。

モグラが掘り返した土の写真を幾つか撮り、一旦家に戻ってネズミの動向を探る時に使う小型カメラを引っ張り出し、それを畑の中に設置した。これは可能ならモグラの種類を調べるためである。

更にネットや本で情報を集めつつ、自治体への申請準備やら何やらに奔走して早くも一週間が経過した。教本と睨めっこしながら法令関係についても調べ上げる。

「えーと……捕獲自体は許可が出れば問題ないと。殺処分等は原則としてこれを禁じ、県によってはレッドデータブックに登録されている場合もあるため……マジか」

急いで調べる。モグラと一口に言っても、種類はそれなりに多いのだった。日本に生息するモグラは大雑把に4つの種類に分けられ、その中には本州に居ない物も含まれて

いる。取りあえずカメラの映像を1度確認してみることがあった。

なので、今日も鎮守府に来ました。取りあえず食堂で腹ごしらえです。

「間宮さん、日替わりのB定食お願いします」

「はい」

最近はこの空間に居る事も慣れて来た。ちよつと露出が多い方々も、気にしなければ問題ない。

「その本は何ですか？」

トレイを持って来た間宮さんに訊ねられる。俺が脇に抱えているのが気になったようだ。

「これは狩猟や関連する法令が書かれた本です。鳳翔さんの所の畑に出るモグラを退治する事になりました、その資料もあります」

「ああ、そうなんですね。あそこは私も時々手伝いに行っていますから、何とか出来ないかと思っていた所なんです。よろしくお願いしますね」

「まだ始めたばかりでして、勉強しながらになります。が、せめて追っ払えるようにはする積もりです。じゃあ、頂きます」

日替わりを抱えて席に着いた。取りあえず食事を済ませ、トレイを下げたから本を捲り始める。

「えーと……本州以西に住むのがコウベモグラ、東日本に多いのがアズマモグラと」
「何をしてるのかしら。今さら大学受験？」

「大学なんか行ける頭してないですよ。放つといして下さい」

加賀様のちよっかいを受け流して調べ物を続けます。気付けば小1時間が経過しており、この辺で切り上げて鳳翔さんの所へ向かう事にした。

「どれ、そろそろ行くか」

本を閉じ、纏めて脇に挟んで立ち上がった。食堂から出て一路、その足を進めていく。お店の入り口は仕舞っていたが、この時間帯なら誰か居るだろうと思つて中に入る。

「ごめんください」

「ああ、見に来られたんですね」

中は鳳翔さん1人だった。裏の畑へ通して貰い、カメラの映像をチェックする。

「……お、映ってる」

モグラが土を外にかき出す映像が記録されていた。殆ど一瞬しかその姿は映っていないが、夜間に地上を歩き回るのが確認されない事を考慮に入れると、ヒミズ属と呼ばれる部類ではないのが判断出来た。この種類は夜間に地上へ出る事もあるそうなので、日不見という漢字からヒミズと名付けられたそうだ。

「って事は……やっぱアズマモグラかな」

棲息分布が本州であっても、特定の地域や高山地帯にしか居ないモグラも存在する。それらの情報から判断するに、やはりここに居るのはアズマモグラである可能性が高かった。

「うーん、果てしないなあこれ」

何かこう、もつと単純なのが最初の相手だったら嬉しかったなあと思いつつ、調査を進めて行つた。また長い戦いになりそうなのを実感する。

「はて、ここからどうやって捕獲、もしくは追い出す道へ繋げるべきか」

この畑自体、何かで敷地を区切られている訳ではない。倉庫群の裏手にあるだけで、何も遮る物は存在しなかった。

「取りあえず許可が出次第に捕獲器を設置して、個体数を減らした後に超音波か何かで追い出す。後はブロック塀で外周を囲って……そこまで首を突つ込む必要はないか」

一応の方針は固まった。カメラのメモリーカードを交換し、新たに増えたモグラ塚がないかを調べる。そうしている内に、鳳翔さんに声を掛けられた。

「お疲れ様です。お茶は如何ですか？」

「ああすいません。頂きます」

店の中に戻つてお茶を頂いた。店内の雰囲気はともりラックス出来るようになっていて、とても居心地がいい。

「夜だけの営業なんですわね」

「はい。私も昼過ぎまでは受け持ちがありますので、朝からと言うのはちよつと」

「それにしても、裏の畑は随分と立派ですが、何かその辺のご経験が？」

「いえいえ、全て我流と言いましようか、調べながらですね。料理に使う野菜ぐらひは、新鮮な物と思ひまして」

調べながらでもあそこまでやるのは凄ひ事だ。儲けになればとそこまで考えずに狩猟の道へ首を突つ込んで、ヒーヒー言つてゐる俺とは大違ひである。

「なるほど。おつと、長居してしまいました。そろそろ失礼致します。また近い内に様子を見に来ますね」

「はい。宜しければ、夜のお店にも来て下さいね」

「タイミングが合えば是非。では、失礼します」

店から出て駐車場へ向かつた。車に乗り込み、鎮守府を後にする。

「取りあえず……ホームセンターでも行つて捕獲器があるかチェックだな」

無ければ何所かに発注すればいいが、近場で手に入るならそれも一考だ。車をホームセンターに向けて走らせる。

血い吸うたろうか

どうも、広樹です。何か急に暑くなつて来ましたね。夏と言えばやっぱり相談件数が増えるのは「蚊」です。何でか網戸を掻い潜り、レビューで☆5つの市販品が効かなく、どうにか出来ないかとの電話が増えます。

業者が言うのもなんですがね、やっぱり蚊帳が最強だと思ふんですよ（職務放棄）

そんな事を顧客に言えばお袋にキレられるので言いませんけどね…… ああ、電話が鳴った。

「お電話ありがとうございます、後藤田プロテクトクリーンです」

『もしもし！ ホームセンターで買った充電式の虫除けが効かないんだけど、何とかならないの!?!』

いや、知らんわ……

「えーとですね、商品名の方を伺いたいのですが」

暫くやり取りが続く。俺はそのホームセンターのカスタマーサービスじゃねえぞこの野郎とでも言いたいが、下手に貶めるような事をすれば全国展開チェーン店の圧力で商店街ごと消え去る可能性もあるので、商品の特性やら何らを丁寧に説明して納得頂い

た。

「……外回り行こうかな」

心にダメージを負った俺は、お袋に「ちよつと出て来る」と伝えて店を出た。車に乗り込み、定期チケットの日が近い所を適当に見繕って、順番に回る事にした。

「さて、次は何所へ行くか……おつと」

携帯が震え出した。番号は鎮守府からである。

「もしもし、後藤田です」

モグラの件で何かあったかとも思ったが、別件で見たい事があるそうだ。ちよつとどい。ついでに間宮さんの所で甘い物を頂いて、このズタズタになった心を癒すしよう。

そんな訳で、毎度お馴染みのやり取りを終えて駐車場に車を停めました。

「ご無沙汰しております、後藤田さん」

そこには、暫く会っていないなかった大淀さんがいらっしやいました。

「何か久しぶりですね」

「出張で少しここを空けていました。ちよつと前に戻って来たばかりなんです」

「そうでしたか。いいですねえ、うちなんて精々が隣県ですよ。しかも経費は雀の涙なんで行って帰って来るだけですからね」

他愛ない話をしながら目的地へ向かう。今日はお馴染み、駆逐艦寮での仕事だ。

「所で、何がありましたか」

「実は先週ぐらいから、蚊が大量に入り込んで来るようになりまして、駆逐艦の娘たちが酷い目に遭っているんです」

ロビーでは、6人の艦娘が待っていた。まだ会った事がない娘たちである。

「睦月型1番艦、睦月です」

「2番艦、如月よ」

む、駆逐艦詐欺の匂いがある。村雨ちゃんや荒潮ちゃんと同類か？

「後藤田です。蚊にお悩みだとか」

「妹たちが凄く刺されちゃって、大変なのです」

「何所からあんなに入ってきて来るのかしら」

2人の隣に居る4人は、痒そうに体を小刻みに動かしていた。しかしこの娘たち、他の駆逐艦に比べて随分と小柄である。海防艦よりは大きいがしかし……

「ボクは皐月、もうあちこち痒くてさあ」

「6番艦、水無月だよ。足の裏まで刺されちゃってね。とつても痒いんだ」

「望月です。痒すぎてマジ面倒く」

「菊月だ……痒くなど、ない」

いや、めっちゃ我慢してますやん。

「もう毎晩よ。寝不足も重なって、そろそろ精神的にも辛くなってるわ」

「何とかして頂けると助かるのですう」

「うーん。取りあえず、部屋を見せて貰えるかな。あと空調の図面とかあると助かるんだけど」

「図面はご用意しますね。2人とも、お部屋の方に案内してあげて」

「お任せにやしい！」

にやしい？ ……まあいいか。人の語尾に文句を付けてはいけない。

「こっちよ」

ちっこい2人に連れられて、階段を登り始めた。辿り着いたのは3階である。

「この一列が私たちのお部屋なのです。それで、皐月と水無月はこっち、望月と菊月はここです」

1人1部屋のようだ。少し前に耳にした事があるが、希望すれば2人部屋にも出来るとかなんとか。

「じゃあちよつと失礼するよ」

皐月の部屋から調査を始める。まず視界の中で蚊が入って来れそうなのは、メインの窓だけだった。開錠して窓を開けると、目の前でブーンと甲高い音が鳴る。

「おっと」

急いで窓を閉めた。しかし、それにも関わらず耳元で同じ音が鳴る。

「え、どつから入りやがった」

取りあえず移動し、ポケットに入っている小型殺虫スプレーを構えた。これは試供品だが、メーカーの話しではそろそろ商品化される見通しだそうだ。そうすればここにも配る事が出来るだろう。

「……くそ、見失ったか」

部屋中を見渡す。窓の他に蚊が入って来れそうな所を探すが、可能性があるとすればエアコンと天上にある換気孔ぐらいである。しかし、それ等も十分に侵入ルートとなり得る存在だ。

「全部の部屋が同じ作りだとすると……やっぱあのどつちかだよな」

一度部屋を出た。大淀さんがそこへタイミング良く、空調の図面が収まったファイルを持って来てくれたので中を確認する。

「……読めるんですか？」

「記号とかは分かりませんが、要は外から中へどう繋がっているかが読み取ればいいんです。前にビル内の保育所で、ハチが何所からか入って来ると相談があったので行つて見たんですが、何所にも巣が見当たらずあちこち探した結果、こういう空調

ダクトの中に巣が見つかったんですよ」

暫し図面を眺める。エアコンの室外機は全て地下にあるようなので、そこは侵入ルートでなさそうな事が分かった。それ以外では、建物の基礎部分に幾つか通気孔が見受けられる。その内の1つは、4人の部屋がある方向に面していた。

「……大淀さん。因みに蚊の被害はこの4人以外で確認されていますか?」

「それが、不思議な事に1階から4階まで、左右に若干の幅はあれど一定範囲からの報告が多いんです。それ以外は全く報告がなくて」

「どうやら、その一定の範囲に蚊の誘引を引き起こす何かがあるようだ。調査を続行するべく、広樹と大淀は屋上へ出た。

「うえ、何かもう真夏見たいな日差し」

「日陰はまだ涼しいんですけどね」

屋上は特に問題なさそうだ。とても綺麗にされている。

「ここは違うか。じゃあ次は地下に行つて見ましよう」

今度は地下の機械室へ向かう。そこは電気関連の設備や室外機で満たされていた。

「……まあ、違うよな」

「まず蚊そのものが居ないですね。こんな乾燥した空間では、数を増やせないでしょう」

どうやら原因は外にあるようだ。しかし、蚊が増えるには水辺か何かが必要な筈である。海水でも増えるらしいが、駆逐艦寮は海から一番離れた場所にある寮だ。なので、海側に近い他の寮からの報告がない所が解せない。

「何だ、何が原因だ」

「一旦戻つて、次は外を調べてみましょう」

寮を出て、建物の外に何かないか調査を開始する。表の方には当然何も無いが、裏側に回つた時、それは姿を現した。

「……………あのドラム缶は」

「ああ。あれは冬になると、駆逐艦の娘たちが雪玉を当てて遊んだり、秋は落ち葉を集めて燃やして、何か焼いて食べたりするのに使つてるんです」

「なるほど……………因みにこっちの古い建物は何ですか？」

駆逐艦寮の裏手には、古い小学校を思わせる木造の建物があった。随分と年季が入つた感じである。

「この敷地自体、かなりの広範囲を切り開いて作られた物である事をご承知としますが、これはその区画の中にあつた大昔の小学校だそうです。初期の頃は、駆逐艦寮として使われていたと聞いています。外見はあれですけど、内装はそれなりに新しくされていくと」

「旧棟つて事ですか。いやあ、雰囲気ありますね」

何かこう、小学校を舞台にしたホラーな映画に出て来そうな感じだ。いやそれより、今は仕事じゃ仕事。

「待てよ……ドラム缶か」

そのドラム缶は、4人の部屋がある場所のちょうど中間に鎮座していた。この一定の範囲で蚊の報告が多いと言う事は……

「……戻りましょう。もしかすると、あのドラム缶が原因かも知れません」

駐車場まで走って、仕事道具を台車に乗せて駆逐艦寮へと戻った。蜂退治にも使うネット付きの帽子を被り、手袋を嵌めて肌の露出をなくす。続いて業務用殺虫剤の充填されたタンクを背負い、噴霧器を片手にドラム缶へ近付いた。

「おーおー、すげえ数」

近づくに連れて蚊の羽音が多くなっていく。視界にもあからさまに飛び回っているのが確認出来た。ドラム缶まで辿り着いて本体を揺らすと、中でチャプチャプと水音がする。

「ちよつと失礼しますよ〜」

木の重しが乗った蓋を開けると、中は雨水が溜まっており、蚊の天国（意味深）になっていた。これはひどい。

「こんな所でも増えちまうんだな。まあ、場所が悪かったと思ってくれ」

まず殺虫剤をそこら中に噴きかけ、飛んでいる蚊を撃墜していく。それが終わったらドラム缶の中にも噴きかけ、ついでに強力な薬剤を投入した。これでボウフラが羽化する事はないだろう。

因みにだが、ボウフラ自体は益虫だったりする。何とすね、汚い水を綺麗にしてくれたりするんですよ。まあ羽化すると厄介な存在になってしまいうんですが……

「よし、撤収」

次はダクト内に入り込んだ蚊を一掃せねばならない。それと同時に、暫くは基礎部分の通気孔も塞いでおいた方が良いでしょう。

「戻りました。飛び回っているのは粗方ですが片付けました。あと、裏にあるドラム缶の中でボウフラが発生しています。薬剤を入れましたので明日にでも中の水を全部廃棄して下さい。以後は雨水が溜まらないよう対策をお願いします。これで大分良くなる筈です」

「ありがとうにやしい！」

「裏のドラム缶が原因だったのねえ。あとで司令官に報告しておかないと」

「これでぐつすり眠れるよ、ありがとう！」

「良かったねさっちゃん。水無月も嬉しいな」

「あざうす」

「礼を言う」

続いて、ダクト内の蚊について説明した。これは提督さんとも話し合つて、近い内に日取りを決めて一斉駆除を行う事となる。

蚊なんて放つておけば餓死するんじゃないやと思つたそのあなた。春先に家の中で弱々しく飛んでいる蚊を見た事があるでしょう？ 連中は越冬するんですよ越冬。これも含めて排除しなければ仕事が完了とは言えませぬ。

「日程については後ほどこちらから提督さんに連絡しますので、その決定に従つて下さい。それと在庫処分つて訳でもないんですが、余つてる忌避剤のスプレーを何本か置いていきますので、通気孔に吹きかけたりして見て下さい。これで殆ど入つて来なくなるでしょう」

「ありがとうございます。今日は何所か回られますか？」

「この前に見たばかりですからね。あと半月はいいでしょう。自分は間宮さんの所にちよつと寄つて小腹を埋めてから帰ります」

「分かりました。では、私もこれで失礼致します」

「お疲れ様でした。またその内に」

「はい」

大淀は台車をゴロゴロと押して去って行く広樹を見送り、自分も踵を返して足を進めた。とその時、ある事を思い出した。

「……………あ、そう言えば間宮さんも」

甘味処 間宮

張り紙【出張のため一週間ほどお休みします よろしくお願ひします】

広樹の心境 (; ω ; …… ; …… ; …… ; ……)

この世には神も仏も居ないようだ。悲しみに打ちひしがれ、何だかちよつと涙も出て来た。

「……………帰るか」

すぐすぐ帰ろうとした所、大淀さんが追い掛けて来ました。

「すいません、間宮さんがお休みなのをすっかり忘れてまして」

「ああいえ……………大丈夫です」

「これ、出張のお土産の余り物なんです、もし良かったら」

差し出された紙袋の中には、見た事のない店名が書かれた箱が入っていた。

「現地では有名なお菓子屋さんで、1日数量限定の物を運良く買ったんです。中は小分けにカットされたバームクーヘンが3つほど入っています」

「これ高そうなヤツですね。いいんですか？」

「はい。とつても美味しいですよ」

やばい。女性から何かを貰うのが久しぶり過ぎて変な顔になりそうだ。

「では有難く頂きます」

「気を付けてお帰りになつて下さいね」

紙袋を小脇に抱えて駐車場を目指した。内心は飛び上がりたい気分だが、そもいきません。取りあえず道具を片付けて車に乗り込んだ。

「……………どっかに寄つて食おうかな」

「ゴイツシヨニドウデスカグライキガルニイエンカネ」

「カタイナアニイチヤン」

「いやあ今日もいい天気だ」

「オ、ムシカコノヤロウ」

「エンストサセチャウゾ」

「さーて帰りましょうかね」

無視して帰ります。お疲れさまでした。

気軽に言えんか、だ？ 気軽に言えるかそんなもん！

生ゴミとかに集まって来ます

広樹です。県庁に来ています。特定外来生物の講習会が開かれており、農業や林業を営む人々や、狩猟免許を持つ人へも案内が来しました。まだまだ一歩踏み出したばかりの人間としては、こういうのに出ておいた方が良いかと思つたので参加しています。

「えー、このように、現在我が国に入り込んでいる特定外来生物は多岐に渡っており、農林水産省のまとめによりますと、昨年度のみならず、継続的に被害が起きているのは以下の通りです」

まず1つ目はアライグマだそう。これについては都市部でも被害が出ており、東京都内でも実害が発生しているらしい。環境に適應してしまうとは恐ろしい連中だ。

そして2つ目はヌートリア。ビーバーみたいな外見で、水辺に住み付いているらしい。京都や大阪に多く、西日本に生息域を広げつつあるそう。

「では、一旦休憩に致します。午後の部では猪やハクビシン等に対する農作物への防除についてが主な内容となりますので、参加を希望されない方は受付に参加票を返却してお帰りになって構いません」

うーん、午後の部は取りあえずいいか。農作物の防除に関しては農家さんの領分だけ

ら、あんまり業者に頼む事もなさそうだ。

つてな訳で、参加票を返却して帰路についた。車に乗り込んで電源を切っていた携帯を復活させると、親父から着信が入っていたので折り返す。

「もしもし」

『おお広樹、やったぞ。さつき通知が来てな、俺も受かったんだ』

「あー、ようやくですか。おめでとうございます」

『お前がお世話になつてる猟師さんに俺も紹介してくれ。色々練習したいしな』

「山の中を歩ける体力はありますか？ 中年腹のおじさん」

『ダイエツトだと思えばいいんだよ。んじや今度一緒に連れてつてくれや』

それから暫くして、親子揃って日義さんの下を訪れた。親父は死にそうな顔をしながら山を歩き、その日が終わった頃には使い物にならなくなっていた。

全身が痛くて動けない親父が店番をするようになって4日目。「鎮守府から依頼だぞー」とのたまう親父から受話器を取り上げて電話に出た。

「もしもし」

『忙しいかしらっ？』

「おおっと、加賀様だ。」

「今日は比較的穏やかですね」

『そう。じゃあちよつと来て貰えると助かるわ。仕事を頼みたいの』

「何がありました？」

『かくかくしかじかよ』

「いやそれで分かれと言われても」

説明によると、間宮の生ゴミ等を保管している倉庫で蠅が大量発生しており、手に負えないので来て欲しいとの事だった。車に必要な物を積み込み、鎮守府を目指して走り始める。

正門でいつものやり取りして、駐車場へGOです。そこには間宮さんと、見た事のない娘が1人居ました。

「おはようございます。蠅が大量発生したと伺いましたが」

「ああ、はい。本来であれば来て頂くほどの事ではないんですけど、ちよつと私の手には厳しくて……」

間宮さんは顔色が悪かった。俺が思っている以上の事になっているらしい。

「ごめんなさい、私がつっかりしていれば」

「大丈夫、気にしないで。それより、ご挨拶なさい」

この娘。間宮さんと随分親しげ……と言うより、信頼の深さを感じる。あれ、もしかしてこの娘は間宮さんのむs……

「伊良湖と申します。食堂やお店で、間宮さんのお手伝いをしています。よろしくお願
いします」

どうなんだ。違うのか？ 分からん。下手な勘繰りはしない方がいいだろう。

「後藤田です。お店には度々お邪魔しております」

「羊羹をよく注文されてますよね。あと、蓬の串団子とか」

どうしてそれを知っている。

「ダメよ伊良湖ちゃん。お客さんの注文履歴を喋ったりしちゃ」

「あ、ごめんなさい。つい」

お店に行くのを控えようと思いました。はい。

「……えーと、現場の方はお店と言う事で宜しいでしょうか」

「正確には、併設されている物置があるので、そっちになります。行きましょう」

暫し歩いた。お店の斜め後ろには、建物に隠れるような形で倉庫がある。そこがゴミ
置き場になっていられるらしく、中で蠅が大量発生したとの事だそうだ。

「鍵は開いていますので、お願い出来ますか？」

間宮さんはお店から10mも離れた場所で足を止めてしまった。そんなに凄い量が
居ると言うのだろうか……

「分かりました、お任せ下さい」

既に装備は完璧だ。全身を包む防護スーツで武装している。蠅が何匹だろうが、背中のタンクに充填された薬剤で仕留めてやろう。

「どれどれ」

倉庫のドアを開けた瞬間、黒い波が飛び出して来た。咄嗟に噴霧器を構えて薬剤を噴き掛けるが、焼け石に水だった。

「ええいくそー！」

噴霧器を振り回して距離を取る。5mも下がれば流石に追って来なかったが、倉庫のドア周辺は未だ敵の勢力化にある。地面には無数の死骸が散乱していた。

「またえらい数ですなこりゃー！」

「だ、大丈夫ですか？」

「取りあえずはー！」

うーん、これは人手が欲しい所だ。しかし助けを求めするにはまだ早い。もう少し頑張ってみよう。

「も、もう1度行くか」

薬剤を噴き掛けながら近付いて行く。蠅がパタパタと落ちていくも、目に見えて数が減っているようには感じられない。何だってこんなに増えやがったのだろう。

同じような行動を何度か繰り返し、ちよつとずつ蠅の数を減らしていった。間宮さん

は引き攣った顔でその光景を眺めている。そりゃこんだけの蠅が居ればそんな顔になるでしょうね。

「あ、マジか」

薬剤が切れてしまった。これだけの量を撒くとは思わなかったので、予備のタンクは車の中だ。取りに行かねばならない。

「すいません、ちよつと補充して来ます。もし蠅が近付いて来たら、これを噴き掛けながら距離を取って下さい」

2人に新商品の「殺虫スプレーZZ」を手渡した。これは試供品だった小型殺虫スプレーがついに商品化された物である。2秒噴射すれば従来品の5秒に匹敵する威力だ。

「は、早く戻つて来て下さいね」

「勿論です。それでは」

不安げな間宮さんも中々こう、あれね。グツと来るものがありますね。バカな事を考えてないで駐車場に急ぎましょう。

重い装備を抱えて駐車場まで戻つて来た。車に近付いた所で、私服姿の長身美女2人と鉢合わせる。

「おや、暫くだな」

「ご無沙汰しております」

大和型のお2人でした。街から帰って来た所らしい。

「お久しぶりです。何所か行かれてたんですか？」

「大和が動物を触りたいと言うのだな。丁度そういう催しが開かれていたから、2人で行って来たんだ」

「ウサギさん、温かくてフワフワでした。キツネさんも人懐っこくて可愛かったです」

大和は笑みを浮かべてそう話した。ああ、そう言えば移動動物園が来るとか町内会で聞いた気がする。場所は知らなかったけど。

「その格好、何か仕事か」

「実は間宮さんのお店で、生ゴミ保管用倉庫に蠅が大量発生しまして」

「は、蠅ですか？」

「さっきまで作業していたんですが、タンクの殺虫剤が切れてしまったので補給に来たんですよ」

「ふむ、また殺虫剤が切れて戻って来るようでは手間だな。大和よ」

「分かったわ。この前のお礼をしなくちゃね」

そう言うのと2人は、車に積んであるタンクを見やった。え、それ薬剤がMAXで入った状態で10キロぐらいあるんですけど……

「……本気ですか？」

「大和型の力、お見せします」

「このぐらいの物、朝飯前には程遠いさ」

車に積んであつた4つのタンクを、2人は2個ずつ軽々と手に取つた。まあ炊事場のクソ重そうな業務用冷蔵庫を2人で持ち上げていた時点で、こんなのは重い内に入らないんでしようねえ。

「では参ろうか」

「これぐらい、どうつて事ありませんよ」

「は、はあ」

何だか申し訳ない気分になりつつ、3人で間宮さんの所まで戻つて来た。急いで殺虫剤を詰め替えて作業を続ける。

「伊良湖よ、あそこはいつも施錠してあつた筈だな」

「は、はい。正確には、回し金具の鍵で仮閉めしてるだけなんですけど……」

「それが最近、誰かが勝手に開けてる事があるらしいんです。それだけじゃなく、中のゴミが荒らされてる事もあるんですよ。私たち以外であそこに用がある人なんて居ないでしょうに」

「本当ですか？」

「もっと早く南京錠を用意していればこんな事には……」

「いや。ここ最近の暑さで、どつちにしろ入り込んだ蠅も遅かれ早かれこうなっていたさ。だが、もう少し早く違和感に気付くべきだったな」

何だか気になる会話が聞こえる。もしかすると野生動物が絡んでいる可能性があるな。いや、今はこつちに集中しよう。それを調べるのは後でいい。

何十分が経過しただろうか。徒労感を覚えつつも、後一步の所までやって来た。既にタンクは1つが空になり、2つ目も半分になるうかと言う状況である。気付けばギヤラリーも増えていた。

「いつでも手伝うっぱーい」

「殺虫スプレーないの？ あれば手伝うのに」

「業務用の殺虫剤が漂ってる所にゴーグルもマスクもなしに近付いちやダメだよ2人共」

白露&夕立を窺める時雨嬢の発言は的確だ。市販品でさえ目鼻口に入れば病院沙汰になりかねないし、入院だって有り得る。

「もう少しだからあんまり近付かないでくれな」

「みんなー、もつと後ろに下がって」

「見世物ではないぞ。持ち場へ戻るがいい」

大和と武蔵が人払いしてくれたお陰でやり易くなった。その後、ようやく倉庫の中ま

で足を踏み入れるに至る。

「うわ、ポリバケツが倒れてる。中は蛆だらけだな」

生ゴミが床に散乱しており、白くて小さい幼虫が大量に見えた。これ等の全てに薬剤を噴き掛けて除去していく。倉庫の中を飛び回ってる蠅も排除する事が出来た。

「よし、完璧だ。戻って報告報告」

倉庫から出て間宮さんの所へやって来た。フェイスガードを取り外して新鮮な空気を吸い込む。

「お待たせしました。蠅は成虫幼虫を含めて全て駆除しました。倉庫の中の薬剤は1時間もすれば薄れますので、それまでは近付かないで下さい。中の死骸と生ゴミの回収はその後に行います」

「ありがとうございます。お部屋を用意しましたので、少しお休みになって下さい」

有難い事である。司令部棟の客間に通され、そこで30〜40分ばかり横になった。

防護スーツを片付けて現場に戻ると、外にある死骸は一箇所に纏められてあった。誰かが集めてくれたようだ。店の中に入って間宮さんに声を掛ける。

「すみません、戻りました。どなたか蠅を集めて頂いたようで」

「伊良湖ちゃんがやってくれました。タンクの方は大和さんと武蔵さんが車に運んでくれていますよ」

「ああ、それは申し訳ない事を。後でお礼に伺います。では残りはやっておきますので」
車まで一旦戻り、掃除機とゴミ袋を持って再び倉庫を前にした。まず蠅の死骸を全て吸い取り、中の蛆入り生ゴミを回収。念のため他のゴミにも蛆が発生していないか調べるが、倉庫の中にあるポリバケツ10個の内、倒れていたのを含めて4つが原因のようだった。

「さてと、じゃあ犯人について調べてみますか」

倉庫の周りをよく観察する。特に変わった物は確認出来ないが、倉庫は地面がむき出しになっている部分に置かれていた。その土の部分に、不自然な足跡を見つける。

「……………これは」

縦に細長い足跡がある。指も5本あるのが分かった。そして、倉庫の鍵となる回し金具の周辺には、引つ搔いたような細かい傷が僅かに残っていた。

「……………また厄介なのが居るらしいなこれ」

県庁の講習会を思い出した。動物の中には、鍵を開けたり壊したりして中に入り込み、エサを奪うヤツも居るそう。そう、ヤツの名は……

「アライグマ……………か？」

姿形の見えない新たな敵の出現に、俺は気が遠くなるのを感じた。コイツと事を構えるのは土竜の件が終わってからのの方が良いだろう。取りあえず間宮さんにその話を話

し、南京錠での施錠と可能であれば隠しカメラの設置を進言。犯人が本当にアライグマなのかをまず調べ、もしそうなら敷地内全体で施錠の強化をして貰い、遠回しに追い出せないかを画策した。

それでも無理ならまあ……戦うしかないか。

土竜って読める？ その2

時系列はちよつとだけ遡る。駆逐艦寮のダクト内に残っているであろう蚊の駆除について提督さんと打ち合わせを繰り返す傍ら、俺は鳳翔さんのお店を訪れてカメラの映像確認もしていた。

「……映っちゃいないが、やはり夜に地上へ出て来ない事からヒミズ属である可能性は低いな」

ここに居るのが十中八九アズマモグラである事は間違いないが、駆除の対象ではない動物が罠に掛かった場合は逃がさないといけないので、情報の収集は入念に行わなければならぬ。人前に中々その姿を見せないのが相手では、どうしても慎重になる必要があった。

カメラのメモリーカードを交換した所で携帯が鳴り始める。相手はネズミ捕りやら罠の類を取り扱ってる付き合いの長い業者だった。

「はい、後藤田です」

取り寄せをお願いしていたモグラ用の罠が手に入ったそう。農家やゴルフ場なんかで多く使われている物で、そこそこの実績もあるらしい。近い内に店へ送ると言って

いた。

「分かりました、ありがとうございます。それでは」

情報は一通り揃った。罌も近い内にやって来る。あとは……

「……そうだ、役所行かないと」

駆除の申請がまだだった。用紙は事前に入手して記入も終わってるから、あとは窓口を持っていくだけでいい。問題はどれぐらいの日数で許可が下りるかである。まあでも、その間は蚊の方が先だ。

市役所の環境課に申請を出し、通知が来るまでの間に準備をしながら蚊の一斉駆除を行った。

「凄いわね。煙が色んな所から出てるわ」

「これで蚊に悩まされる日々もおさらばにやしい」

駆逐艦寮の外壁にある複数の通気孔から、白い煙が立ち上っていた。これで生き残っているのは殆ど仕留めたと考えていいだろう。

「実際どうかな。あれから蚊は出てる?」

「全く遭遇しないよ、お陰で毎日快眠さ」

「ああ、快適だねえ。面倒な事でもやる気が湧いて来るつてもんだよ」

「どうやら問題ないらしい。これでまた1つ仕事が片付いた。」

「事前に説明した通り、最低でも2時間は部屋に入らないようにね。換気も十分にしてから出入りするように頼むよ。じゃあ少し席を外すけど、何かあれば連絡してくれ。それじゃ」

その場から離れて、鳳翔さんのお店へ向かった。今日は罨を何所に仕掛けるか事前に見ておくのが目的である。

「失礼致します」

「お疲れ様です。ここ最近、頻繁に来られますね」

「実は罨が手に入りましたので、何所に仕掛けるかの下見に来ました。近々、人手を借りて色々と設置する日を設けようと考えています」

「そうでしたか。ではこちらでも、声掛けをしておきますね」

「ありがとうございます」

裏の畑に出る。まず、モグラが移動に使っている本道を見極めねばならない。そこに仕掛けなければいくら待っても捕獲する事は出来ないそうだ。

「さて……モグラ塚の場所は分かっているから、まず掘り返してみるか」

小さいスコップを取り出し、近くにあるモグラ塚から掘り返していく。中には1本の道が出来ていた。ここが移動によく使っている「本道」なのか、そんなに通らない「支道」なのかは、埋めた後に修復されているかどうかで見分けるそうだ。

「ここをモグラ塚Aと呼称しとくか。じゃあ次だな」

埋め戻して道を塞いだ。そのすぐ傍に、マジックで書けるネームプレートに「A」と書いて土に挿しておく。同じ作業をモグラ塚がある分だけ繰り返し返した。

「あゝ、腰いてえ」

中腰の作業はキツイものである。昔は平気だったのに、ここ最近では体へダイレクトに影響が出るようになって来た。

「これが年か畜生」

親父のようにはなりたくないと思いつつ、年齢には逆らえないのだろうか。運動する習慣でも作ろうかなんて考えながら作業を進めていく。

「よし、これでいいな」

全てのモグラ塚を一時的に潰した。ネームプレートも設置完了である。これでまた暫く様子を見て、掘り返されている所にだけ罫を仕掛ければいい筈だ。

「後は……………地面に盛り上がりがないか調べるか」

モグラが通った場所は、地面が盛り上がりつつあるらしい。なのでまた姿勢を低くして地面を凝視する。

「……………お、これは」

畝の一部に、奇妙な盛り上がりを見つけた。ここは特に何かを育てている畝ではな

い。

「ここから一番近いモグラ塚は……あつちか」

一番近いモグラ塚との距離は1mもない。恐らく、ここが通り道である事は間違いないようだ。それは同時に、本道の可能性が高い事の証明でもある。

「写真写真つと」

この状態をカメラに収めた。他にもないか探すと、合計で6箇所盛り上がりを確認。その内でモグラ塚に近いものは4つだった。

「この4つは本道っぽいな。要警戒にしとくか」

立ち上がった瞬間、右足が地面にめり込んだ。驚いて思わず声が出る。

「うお!」

トンネルを踏み抜いたらしい。これでは鳳翔さんの作業も中々進まない事だろう。

「これは鬱陶しいな、危ない危ない」

地面を埋め戻して、ここも写真に撮っておいた。今日はこれぐらいにしておこうと思う。

「駆逐艦寮からの連絡もないし、今日は帰りますかね」

鳳翔さんに断りを入れて、今日は失礼した。一応だが駆逐艦寮にも顔を出してから帰路に着く。

それから3日が経過。まだ通達はない。その間、モグラについて調べる。定休日なのでいい暇つぶしだ。

「アズマモグラは肉食性、ほお」

日本に生息するモグラの内、雑食性で何でも食べるのは主にヒミズ属だけだそう。農家が頭を悩ませているのはコイツらしい。アズマモグラは基本的に昆虫やミミズを食う肉食で、たまに植物の種子を食う事もあるそう。

「まあ野菜の種を食われたら育てようがないもんなあ」

鳳翔さんの話では、主に地面の踏み抜きと畝の崩壊、種を食べられる事で野菜が育たない被害が上げられていた。言われて見ると、育った野菜の方に実害が起きていないのが不思議だった。

「その他には移動に伴って野菜の根を切ってしまう被害等が上げられる……なるほど」

まだまだ勉強不足のようだ。もっと調べなくてはならない。でない、他の所から依頼があった時に無知を晒す事になる。

「こんなに勉強してんの多分、高校受験以来じゃなからうか」

勉強机はかなり前に近所の学童に寄付したので、自分用に買い直した滅多に座る事もない簡素な机でこうして勉強しているのが滑稽に思えて来た。こんな光景を誰かが見たら何て言うだろうか。

「やだアンタ、大学でも受けるつもり？」

部屋を覗き込んだ母親の発言で椅子から転げ落ちそうになる。どっかで聞いた事のある台詞だが、気にしないでおこうと思った。

「そんな金があるなら家を建て替えた方が宜しいかと」

「いい近所迷惑でしょそんなの。ただでさえ狭いんだから、やるなら商店街で一斉にやんなきゃ。木村さんの所なんて家が傾いちゃって、2階の窓が全部開かなくなつたつてね」

木村さんとはこの商店街で住人たちが出口側と呼んでいる方の角で理髪店を営んでいる人だ。戦後すぐに建てられた店舗兼住宅で長年商売している。この商店街では最も古い店だ。

「まあ仮にやるとして、全員の生活をどう保障するかで騒ぎになりそうですな」

「でもいつかは考えないといけない問題だねえ。ああ、お昼どうする？」

「あく……溜まつてるレトルトカレーでも消費しますか」

「はいはい」

恐らく親父が「何でもいい」なんて言ったんだろう。戸棚の奥にひしめく安売りレトルトカレーが脳裏に浮かんだのでそう言ってしまった。

そんなこんなで時間は経ち、役所から通知が来た。駆除ないし捕獲の許可が出たの

で、これで仕事を実行段階に移す事が出来る。まずその旨を提督さんに伝え、罠を仕掛ける日の調整に入った。

一方で、入手したモグラの罠を取り出し、自室で動作の確認や取り扱い方を調べた。今回用意した罠は2種類。トンネル内部に仕掛け、入ったら出られなくなるパイプ状の罠と、地面を掘り起こして仕掛けるトラバサミのような罠である。更にもう一つ、モグラの行動範囲を押さえ込む超音波発生器も用意した。

「えーと……爪を開いたら安全棒を一周回して固定し、カギ部分に引っ掛けると」

パイプ状の罠は置くだけでいいので、特に確認する事はなかった。しかしこっちの罠は中々に凶悪な外見をしている。これ捕獲じゃなくてどちらかと言えば一撃で葬るタイプ罠じゃなからうか。

「それで、これを掘り返した場所に仕掛け、上から土を被せたり草で覆ったりすれば良しと……本当に掛かるのか？ これ」

怪しいものを感じるが実績はあるらしい。それを信じようと思います。

土竜って読める？ その3

また少し、日数が経った。罨の数も整い、必要な道具も揃っている。モグラ塚の再調査も終わって怪しい場所の目星も付いた。そして、今日はついにこれ等の罨を仕掛ける日なのだ。

「えーと、モグライッチバーンが10個、モグラトリマースが同じく10個、超音波発生器モグラバイバイが4個、スコップ小さいのが10個、大きいのが5個と」

それぞれを数えながら店のワゴンに積んでいく。過不足はない。準備完了である。「では行きますかね」

久々の曇り空で涼しい中、鎮守府へ向けて車を走らせる。子供たちは夏休みだが、大人にそんな贅沢は許されない。自営業は尚更だ。

あ、因みに当店のお盆休みは暦通りとなりますのでご了承下さい。

そんな訳で大体11時頃、本日も鎮守府にやって来ました。「今日は涼しいですね」

「低気圧が近くに居るらしいですよ。雨が降るかも知れませんが」

リストに名前を書いて警備の人に返す。車を敷地内に入れ、来客用の駐車場に停め

た。端の方では提督さんと鳳翔さんが出迎えに来ている。

「おはようございます。日差しがなくて有難いですね」

「いや全く。日差しが有ると外に出るのも一苦労ですよ」

「今日はよろしく願いますね」

「上手くいくか分かりませんが、出来る限りはやりたいと思います。では行きましょう」
仕事道具を抱えて3人でお店まで向かった。建物の前には既に何人かが待機している。鳳翔さんが集めてくれたメンバーのようだ。

「よう、久しぶりだな」

まず眼帯が特徴的な天龍が居ました。接しやすく有難いです。

「あたしのこと覚えてるかい？ 空母寮の厨房で会ったよねえ」

あー、確か隼鷹さんでしたかね。今日も若干ですが酒気が漂っております。

「陽炎よ。つてさすがにもう覚えてくれてるわよね」

まあ何度も顔は合わせてるから既に覚えてます。

「不知火です。本日は宜しくお願い致します」

こっちは相変わらず目付きがキツイですね……

「ポーラです。鳳翔さんの美味しい野菜を食べちゃうモグラ退治、お手伝いします」
いや食害は出てないんですけど手伝ってくれるのはうれし……つて酒くせえ、隼鷹さ

んの比じゃねえぞこれ……

「おいポーラ、また昼間っから飲んでんのか」

「今日のは出番じゃないですしい、今は飲んでないから問題ありませんよ」

「まあまあいいじゃない天龍ちゃんよお。今日ここに居る面子は出撃の枠に入っていないだからさあ」

「そうですね、本来はお休みなんですよ。だからお酒飲んでてもいいんですよ。ねえ、提督う」

なんつー屁理屈だ……

「ポ〜〜ラ〜」

後方から凄まじい殺気を感じる。振り返る間もなく、1人の艦娘がポーラに飛び付いた。それはザラである。

「休日平日を問わずお酒は夜だけにしなさいって何度言えば分かるのかしらあ？」

「う、嘘です。本当はジューズなんです。スパークリングなジューズなんです」

「じゃあ部屋に転がっていたこの瓶はなあに？ 適量にしなさいって何時も言ってるわよね」

「え〜と、それはですわね」

明るくて元気な印象の彼女があそこまで怒りをむき出しにしている光景に思わず身

震いがした。全身から何かのオーラが湧き出ている。

「ザラ、今はその辺でいいだろう。ポーラは自らこの手伝いを申し出てくれたんだ。言いは悪いかも知れないが、酔ってウロウロしてるよりはいいじゃないか」

「でも提督！」

「人を分別のない大酒飲みのように言わないで下さいよザラ姉さま。私だってお仕事してる時は飲んでませんよ。それに鳳翔さんのお店の危機は、皆で救うべきじゃないですか」

「ポーラさん、いつも美味しそうに飲んだり食べたりしてくれるので、とても嬉しいです」

「く、鳳翔さんにもそう言われると強く出られないわ……」

ザラはようやく握り締めていた拳を緩めたのだった。

「と言う訳で、頑張ってお手伝いします」

「よ、よろしくお願いします」

今はそれしか言えませんでした……

「えーとそれでは、諸々の説明を行います」

ザラも加わった合計6名のメンバーが今日の手伝いとなった。畑の現状と、器具の取り扱いについて説明していく。

「まずこちら。筒状の器具ですが、モグラが中に一定の部分まで入ると返しが入り作動して、外に出る事が出来なくなります。これをモグラが移動するため主に使っている場所、本道と呼ばれる道に仕掛けます。一旦地面を掘り返して、設置した後にもた埋め戻しをします」

これは比較的簡単な部類だ。皆にお願いするのは主にこっちの設置作業になるだろう。

「もう一つありますこちら。モグラがたまにしか使わない道、支道と呼ばれる方に仕掛けてます。これは取っ手の部分を中央に押し込むと爪が開いて、その中心部にある仕掛けが作動するとモグラを捕獲出来ます。ただ扱いが難しいのでこっちは自分がやります。皆さんには筒状の方と超音波発生器の設置をお願い致します」

筒状の器具がモグラリッチバーン、爪が開く方がモグラトリマースだ。前者の仕掛けは誰でも出来る。しかし後者はコツがあるので、下手に扱おうと自分の手が挟まれる可能性が高い。

「それで畑の状況になりますが、恐らくメインに使っている道が7本。支道が4本と推測されます。ただ、日が経つと他にも道が出来ている可能性がありますので、調べながら進めたいと思います。では行きましょう」

全員を引き連れて畑に出た。まず他に道が出来ていないか探る。

「えーと……これは違うな。こっちは……おっと」

新しい道を見つけた。目印を置いた所ではない場所の土が盛り上がっているのが分かる。

「好き放題だな。まあ餌のミミズが居るつて事は、土が良いつて証拠らしいからな」

簡素な図面に新たな道を書き込む。一度見つけた場所は全て書き込んであるので、これを見ながら罫の設置を行うのだ。

「はい。まず超音波発生器の設置から始めましょう。これを畑の四隅に置いて貰えますか」

太い釘のような形をした物を取り出した。これが超音波発生器モグラバイバイである。

「スイッチとかは無いんだな？」

「上のカバーを外すと自動的に電源が入ります。ソーラー式なので、昼間の内に充電されます。夜も月明りである程度は充電出来るそうです」

「民間さんも最近は技術の進歩が凄いねえ。熱燭を自動で作ってくれる装置とか開発されないかな」

「いやそれは無理だろ」

苦笑いの天龍が隼鷹にそう言った。それを尻目に、不知火がモグラバイバイを手に取り

る。

「四隅とはこの石で仕切られた中の四隅で宜しいでしょうか」

「うん。その外に仕掛けても意味はないからね」

「お任せ下さい」

不知火は石で仕切られた畑の中に入った。一番手前、右側の隅に仕掛けようと屈むが、その瞬間に不知火の左足が土の中に没した。

「!？」

「あ、そこにも道が出来てるみたいだね」

「なるほど、上から踏むとそうなっちゃうんだ」

「し、不知火に何か落ち度も」

「あー、いいから早く足上げなさい。タオル持って来るから」

よつぼど恥ずかしかったのか、不知火の顔は真っ赤だ。陽炎はそれに構う事なく足を上げさせて靴下に着いた土を払っている。

「面目ありません」

「中じやなくて外側から設置しようか。その方が安全そうだ」

取りあえず、畑の四隅に外側から超音波発生器の設置を終えた。続いてモグラの本道に罫を仕掛ける。

「じゃあまずお手本となります」

事前で作成した地図を見ながらモグラの道がない部分を通りつつ、本道の1つにやって来た。全員に見えるよう小さいスコップで作業を始める。

「道の方向に合わせて土を掘っていくと……この通り、何か空間がありますね」
我ながら上手く掘れた。土の中に明らかな通り道が見て取れる。

「おお、すげえ」

「モグラの道なんて見たの初めてだよあたし！」

「見ようと思っても見られるものじゃないですしね〜」

「ぬいぐるみとか凶鑑でしか見た事なかったわ、こんな風にトンネルを掘るのね」

「へ〜、これがモグラの通り道かあ」

「すいません皆さん、ちょっと近いです。右を見ても左を見ても可愛い&美しいが揃っていて目のやり場に困ります。」

「それで、どのように仕掛ければ良いのでしょうか」

「おっとつと、意識を戻さなくては……」

「ここにモグライチチバーンを埋め込みます。この時、両方の入口の下に土を少しだけ盛って段差を少なくして下さい。因みにこれは左右のどちらからでも入る事が出来ません。それと、仕掛ける際は手袋をして下さい。他の生き物の匂いがすると警戒されて罠

に掛からなくなります。仕掛け終わったら、最後に埋め戻せばお終いです。あんまり強く踏み固めずにある程度の地固めで大丈夫です」

クリアファイルに挟んでいた地図を取り出す。新たに見つけた道も書き込んで更新しておいた。人数は6人居るので2人1組、3枚を渡せばいいだろう。同時に軍手も渡していく。

「この地図に書き込まれている星印、これが本道です。2人1組で手分けして設置をお願いします。もし何所かで地面を踏み抜いた場合は、何か印を付けておいて下さい。ペンもどうぞ」

「よーしやろうぜ隼鷹」

「合点承知」

「姉さま、頑張りましょう」

「上手く出来るかしら。あ、ポーラ待つて」

「行くわよ不知火」

「はい」

全員が散った所で、凶悪な外見をしているモグラトリマースの設置準備に入った。モグライツチバーンは何となく想像も出来るが、こっちは実際にやってみないと感触が掴めない。

「土を掘り返して……爪を開かせて」

ガキン！ と金属音がした。少しだけビクツとなる。

「おーこわ。自分の腕挟まれたらと思うと恐ろしいな」

一番重要な部分の仕掛けを完了し、掘り起こした支道にセットした。土をゆつくり被せるが、地面の上には半分以上が露出しているので嫌でも目立つ。だがモグラが掛れば地面に出ている部分も閉じるので、見た目としては凄く分かりやすい。

「きやあ！ ビククリした！」

「姉さまモグラの道を踏み抜いたんですね、地図に印入れておきますよ」

「ああ何だよ畜生、ここも道なのか」

「下手に動き回れないねえ。陽炎と不知火も気を付けるんだよ」

「大丈夫でーす」

「二度と踏み抜いたりしません！」

不知火の声がちよつと面白かった。作業を続けていく。

約1時間後、無事に罠の設置が終了した。6人の作業自体は30分程度で終わるも、モグラトリマースの設置には思いのほか手こずってしまった。6人はその間に1枚の地図へ踏み抜いた場所を書き写して、最新の状態にしてくれていた。

「ああ、すいませんね。お待たせをしました。地図もありがとうございます」

「これで無事に捕まえられるといいな」

「意外に疲れたねえ」

畑に通ずる裏口から鳳翔さんが出て来た。

「終わったようですね。お昼の用意が出来てますから召し上がって下さい」

手を洗って道具を纏め、モグラバイバイのカバーも忘れずに取り外した。全員でお昼を頂く。

それから、少しだけ横にならせて貰った。6人は野暮用や仕事で食べ終わると共に店を後にしている。いい気分で微睡んでいると、突然「パチン！」と音がして飛び起きた。

「……………え？」

畑に出る。モグラトリマースの1つが作動しているのが分かった。まさかこんなに早く掛かるとは…………

「…………いや、掘り起こすのは早すぎるな」

ここで掘り起こしては意味がなくなってしまう。少なくとも2〜3日はこのままの方がいいだろう。そうすれば大なり小なり結果が出る筈だ。

「取りあえず今日はお暇するか」

道具を店の外に出し、書き置きも残した。司令部棟にも立ち寄り、提督さんに帰る事を伝えて今日は帰宅する。

それから3日後。もう1度お店にお邪魔した。

「……すげえ」

モグラトリマースが全部作動している。おまけに地面でひっくり返っているモグラが2匹。

「思ったより数が居たようですね……」

「ええ、私も驚きました……」

地図と照らし合わせながら畑を進んでいく。1つずつ回収していくが、実際には大した事なかった。モグラトリマースに掛かったのは1匹だけで、残りは作動しているものの逃げられたらしい。モグライツチバーンも2個だけに掛かっていた。

「結果としては5匹か。いやこの広さの畑で5匹は多くないか?」

モグラトリマースは手間も考えると非効率な気がしたので今回限りの使用とした。モグライツチバーンを本道と支道にもう1度仕掛けて様子を見る。

「初めてにしては多かったような気がします。また様子を見に来て、その都度に対処させて頂きます」

「ありがとうございます。今後も宜しく願いますね」

5匹は既に息絶えていたので、敷地の隅に埋めさせて貰った。また近い内に来て状況を確認する事にしよう。

駐車場に戻って車を出そうとする瞬間、電話が掛かって来た。相手は狩猟の勉強で世話になっている日義さんからだった。

「もしもし、後藤田です」

日義さんは若干興奮気味だった。なんと、俺が仕掛けた罠にイノシシが掛かった事を教えてくれた。

「本当ですか！　じゃあ今すぐに……」

待て待て。山までは50キロぐらいある。今すぐは難しい。

「えーと……明日か明後日にでもお伺いします。また連絡しますので、はい」

通話を終えた。ここに来て一気に経験値を得た気分嬉しきも高まるがしかし……

「……まあ、油断せず行きましようねっと」

仕掛けた罠は複数あるから、どれに掛かっているかで偶然なのかどうかは判断出来る。

ぬか喜びは禁物だ。

「取りあえず帰るか」

店に向けて車を走らせる。モグラ5匹とイノシシ1匹では、害獣駆除を店の仕事に出来る胸を張って言える状況ではない。まだまだこれからだ。

(広樹です。精進するとです……)

アブないやつら

初のモグラ退治に臨み5匹の成果を出した直後、イノシシが罠に掛かったと連絡を受けた俺は、翌日に装備を整えて日義さんの元を訪れた。

「……おお、本当に居ますね」

「まだ元気みたいだな」

イノシシは罠から逃れようとして激しく動き回っている。豚よりも野太い声が響いていた。ここは幾つかある獣道の1つで、そこに仕掛けた罠に掛かったようだ。偶然ではなく狙った場所だったので気分もちよつと良くなる。

「いいか、今回はお手本を見せるが、次に掛かった時はやつて貰うぞ」

「はい」

今からするべき事。それは「止め刺し」と呼ばれる作業だ。罠に掛かった獲物を電気ショックや棍棒なんかで行動不能にし、血抜きを行うための前作業である。

「罠を仕掛けた周辺を中心に地形が少し変わってるな。これを土俵と言うんだ。言い返せば、獲物は罠が外れない限りこの土俵の外に出る事は出来ない」

「分かりました」

「んで、その状況を利用してワイヤーを巻き取らせるように追い込むぞ」

2人でイノシシを左右どちらかの方向に追い回し、イノシシ自身がワイヤーを木々に絡ませてその長さを短くしていくように誘導し続けた。最終的にイノシシは身動きが出来ないようになる。

「 সেইじゃあ、コイツでやるからな」

日義さんはザツクの中から大き目のハンマーを取り出した。それで無事に止め刺しの作業が終わる。

あ、その後の作業については割愛致します。大変にグロテスクで御座いました故……

それから暫くし、モグラの定期チェックで鎮守府に来ていた所、加賀様に呼び止められた。何もやましい事はしてないんですが何の御用でしょうかね。

「悪いわね、駆逐艦寮でちよつと困った事が起きているわ。話だけでも聞いてくれるかしら」

「何でしょうか」

「蜂でも蚊でもないのが大量に飛び回ってて、何人か刺されてしまつてるの。羽の音で怯えている娘も出てるわ。正体突き止めて、もし対処出来るのであればその度合いによつては依頼としてお願いする事も考えています」

蜂でも蚊でもない？ そんで刺す？ はて……

「ほお……分かりました、取りあえず行ってみます」

「後で連絡を頂戴。提督には伝えておきます」

「承知しました」

駆逐艦寮へ向かった。ロビーに入ると同時に屯している娘たちを発見する。面子は知らない顔ばかりなので取りあえずスルーし、管理人室のドアを叩いた。

「はい。あ、後藤田さん」

「お邪魔してます。加賀さんから聞いて来たんだけどさ」

中に居たのは吹雪ちゃんでした。更に綾波ちゃんも奥から出て来た。

「こんにちはー、どうされましたか？」

「蜂でも蚊でもないのが飛び回ってるって聞いてね。刺された娘から話を聞きたいんだけど、出来るかな」

「はい。呼び出しますからちよつとお待ち下さいね」

管理人室の中に入れて貰った。数分待った後、4人の娘たちがやって来る。

「五月雨です。ご無沙汰してます」

「……初雪です」

「吹雪型7番艦、薄雲と申します。ご足労頂いてありがとうございます」

「綾波型、曙よ。あんなに痛いのに蜂じゃないって何なのよもう」

4人とも顔色が良くないように見える。寝不足だろうか。

「加賀さんから聞いて来たんだけど、詳しく話して貰えるかな」

それぞれが刺された時の事情を聴く。共通するのは、何かの羽音がしたと思えば一瞬で遠ざかり、まだ音がしたと思った瞬間、体の一部に激しい痛みを感じたそう。蜂かと思つて慌てて振り払うも、同じように瞬間的な羽音を残して消え去つたと言う。

「……………何だろうね、それ」

「分かりません、もう3日も痛くてよく眠れないんです」

「痛い……………なんにも集中出来ない……………引き篋もりたい」

「アンタは結局引き篋もりたいだけでしょ」

「凄く腫れてるんです。これって何なんでしょうか」

そう言いながら、薄雲は腕の一部を指差した。そこは紫に変色して痛々しく腫れ上がっている。

「うわ、酷いなこれ」

痛みが強いなら蚊ではないし、蜂は刺されると赤く腫れる事が多いので本当に蜂でもないようだ。

「因みに羽音ってどんな感じかな。ブーンとかブブブとか」

「本当に一瞬よ。ブン！ って鳴ったわね」

「瞬間的だった……真横を砲弾が通り過ぎるみたいに」

はい？ 砲弾？ まあ聴かなかつた事にしよう。

「取りあえず敷地内を少し回らせて貰おうかな。遭遇した所は覚えてる？」

地図にそれぞれ書き込んで貰った。被害は全て屋外で発生しているようだ。その情報を元に搜索を始める事とする。

「それじゃあちよつと行つて来る。4人はもう大丈夫だから部屋に戻つて貰つていいよ」

管理人室を出てロビーから建物の外に出ようとした。そこで寮に戻つて来た白露&村雨に遭遇する。

「何か珍しい組み合わせだね」

「いや別に姉妹なんだから誰と一緒に居たっていいじゃん」

「あらあらー？ 姉さんに会いに来たんですかー？」

またこの娘はもう……

「加賀さんから頼まれて様子を見に来ただけだよ。蜂でも蚊でもないのが飛び回つてるらしいね」

「あー、確かに最近そつちこつちでブンブンと」

そう言った瞬間、白露がビクツとした。瞬間的に後ろを振り向く。

「今後ろに居た！」

「大袈裟よ姉さんつたら」

しかし、村雨もビクツとなつて身を屈めた。どうやら近くを通つたらしい。

「アンタだつて怖いんじゃない！」

「ちよつとビククリしただけよ！」

「建物の中に入つてな。見て回つて来るから」

2人が寮に入るのを見届け、何がこの辺で悪さをしているのか調査を始めた。他の寮と違つてここだけ常に何かしらの被害が出ているのはどうしてなのだろうか。

「……………おつと？」

出入り口から右回りに進む。そこには背丈の高い草木が植えられた場所があるのだが、建物との間に分け入つていくと、外壁にかなり大きい目のハエのような虫が何匹か張り付いているのが見えた。

「……………アブだったのか」

アブ。漢字では虻と書く。こいつの場合、刺すと言うよりは皮膚を噛み千切つてそこから出る血を吸引するそうさ。それが中々に痛いと聞く。

「……………最近は湿気が多かったから、それで増えたんだな」

とか言っていると耳元で羽音がした。思わず身を屈める。
「うおー！」

急いでその場を離れた。アブ自体に危険な毒はないが、嘯まれると酷い時は3週間近くも腫れるらしい。ちよつと御免被りたい怪我である。

「参つたなあ、車に殺虫剤あつたかな」

ブツブツ言いながら寮の入口まで戻り、また中に入つて管理人室のドアを叩いた。

「後藤田でーす」

「はい」

ドアを開けてくれた吹雪ちゃんと共に管理人室へ入つた。状況を説明する。

「殺虫剤なら確か在庫がここに」

そう言いながらロツカーを開けると、殺虫剤の詰まつた段ボールが積んであつた。しかもこれは最近発売された「ハチアブジェノサイダー」と言う商品で、銃みたいに噴射の出来るガンタイプだ。噴射距離も長くて使いやすい。

「おー、いいの置いてるね。高かつたでしょ」

「あくちよつと値段までは」

「ウチだつたら安く卸すから今度相談してよ。多いほど値引き出来るからさ」

「一度司令官と話してみます」

いかん、久々に商魂を出してしまった。それよりも、加賀様に連絡しないといけないだろう。

「ここから執務室に電話つて出来るかな。加賀さんに報告しないとイケなくてね」
「じゃあ掛けますね」

内線を掛けて貰った。いや、別の施設に掛けるのは外線だろうか。まあいいや。

「加賀さんです、どうぞ」

「ありがとうございます」

受話器を受け取り、事のあらましを話した。

『分かったわ。では正式に仕事としてお願いします。ついでだけれど、なるべく皆が自分で対処出来るように指導もして貰えるかしら。あなたも何かある度に呼び出されてたら他の仕事が回らないでしょう?』

「お気持ちには有難いのですが別に迷惑だとは思ってませんよ」

『どうかしらね。腹の底では乙女の花園に出入りしてよからぬ事を考えてないかしら』

「人を変態みたいに言わないでくれませんかね……」

『駆逐艦はストライクゾーンじゃないと言う事ね。やっぱり軽巡がお好み?』

「帰っていいですか」

『冗談よ。じゃあお願いね』

受話器を戻す。最近どうも冗談が冗談に聞こえない時があるんだよなあ……

「お仕事になりました。加賀さんから指導も頼まれたんだけど、今つて誰か集められる？」

「ロビーに居る娘たちを呼びますね」

と言う訳で人手が招集された。さつきまでロビーでお喋りしていた娘たちである。

「秋月型防空駆逐艦、秋月です！ よろしくお願ひします！」

「2番艦の照月と言います。最近ここに來たばかりです」

「3番艦、涼月と申します。皆さんからお話は伺つておりました」

「4番艦の初月だ。よろしく頼む」

「陽炎型の浜風です。お初にお目に掛かります」

「私は磯風と言う。長々とここを開けていたが、つい先日にも浜風と共に歸つて來た所だ」

「初めまして、萩風です。お世話になります」

わー、みんな可愛い、綺麗。それで立派。何所がとは言わないけど。

「後藤田です。話だけは聞いた事があるでしょうが、皆さんが居ない間にここへ出入りさせて貰つております。加賀さんから指導も頼まれたので、全員で今この辺を飛び回つて厄介な存在の駆除を行いたいと思います」

まずアプについて一通り説明する。萩風はちよつと引き気味の顔になったが、他はや

る気になったようだ。

「対空戦闘はお任せ下さい！」

「腕が鳴るな。万事任せて貰おう」

「磯風、それは僕たちの台詞だ。秋月型の本領を見せてあげよう」

「私たちも対空戦闘では負けませんよ」

「あ、えつと……私はそんなに得意じゃないですけど、頑張りますね」

何か分からないが火を点けてしまったらしい。拙い選択肢だったのだろうか。

「えーそれでは、この殺虫スプレーを使います。本数も沢山あるので1人2本ぐらいを使い切るつもりで行きましょう。くれぐれも誰かの顔に向けて噴射しないようお願いします」

「それで減った分はウチで発注して儲けさせて貰おう。いや実際です、この仕事は他に比べてやっぱ金額を貰えるんですよ。他を疎かにしてる訳じゃないけど、いい繋がりを得れたと思います。」

「全員の準備が終わり、ゾロゾロと寮の外に出て行った。萩風以外は両手にスプレーを構えて殺気立っている。」

「じゃあ着いて来て下さい。その辺を飛び回ってるから注意してね」

と言った瞬間、耳元で羽音がした。身を屈めて離れる。

「うおービックリした」

だが驚いたのは自分だけではなかった。彼女たちも盛大に慌てている。

「え、何!?! 耳元を何かが通った!?!」

「3時、いえ4時の方向にも!」

秋月と照月が羽音に混乱している。無理もない。

「萩風、足に何か居るぞ! 振り払え!」

「いやあ!」

磯風に指摘された萩風は涙目になって足をバタバタさせた。まずい、このままでは収拾が付かなくなる。

「寮の壁を背にしよう。そうすれば後ろは安全だ」

全員で建物を背にして歩き始めた。これなら180度の範囲だけで対応出来る。

「なるほど、海の上では出来ない戦術だ」

「僕たちはいつも全方位に気を張っているから、それが半分になるだけでこんなに安心出来るものなんだな。無暗に背中合わせになると隊列が崩れるし」

「後藤田さん、一度提督の試験を受けて見ては如何でしょう。それなりに才能があるのではと浜風は思います」

「いやー俺にそんな度胸はないなー」

でも内心、ちよつと揺れました。まあ仮に受かったとして続けられるかは分からないし、こんなに女性だらけの環境は心臓に良くないですわ。それに俺みたいな適当なやつに人々の平和をなんて重責は耐えられません。

「後方、来ます！」

「お冬さんには近付けさせません！」

照月と涼月がスプレーでアブを撃退した。して、お冬さんとはどなたでしょうか。今ここには冬の名前が付く娘なんて居ない筈ですが……

「初月、真上にも注意して」

「大丈夫だ秋月姉さん」

「萩風、顔色が悪いですよ」

「な、何か私だけ場違いな気がして」

「案ずるな萩風、私たちがついてる」

んー、まあ確かにやる気満々な6人の中で1人だけ及び腰なのは見て分かる。

「そろそろだ。この角を曲がった先の壁にいつぱい居るから、ゆっくり行こう」

接近を悟られないよう壁伝いに進む。さつきは気付かなかったが、鼻先を腐臭が掠めた。もしかすると何かに集っていたのが臭いに釣られて飛び回っていたのかも知れない。

ある程度まで近付いた。ここからならスプレーも十分届く。

「じゃあやろう。スプレーは上下に噴きつけると拡散して広範囲に届くし、こつちに飛んで来るのも避けられるからオススメだよ」

2人ずつ交代でやって貰う事になった。自信のない萩風は他の所から来ないか見張りを任せる。ただ1人にさせるのも不安なのでそこに加わった。

「俺も一緒に見張ろうか」

「す、すいません。お役に立てず」

秋月型4人と磯風&浜風が盛大にスプレーを噴射し始めた。殺虫剤を食らったアブが次々に地面へと落ちていく。

「さてと、他に居ないかな」

とか言っている耳元を掠めた。手で払った瞬間、コツンとした感触があった。

「おお、それなりに質量あるんだなこいつら」

約10分後、粗方の退治が完了した。気化しきってない薬剤で視界が少しだけ白い。

「独特な匂いがありますね」

「着臭ガスが混ざってるんだ。これだと人間ならすぐに分かるから、万一の時に中身が漏れ出てるって警告にもなる。あとはその辺の草木にも吹きかけて、外周を回って他に居ないか探しながら戻ろう」

そのまま寮の外壁を回りながら、所々で飛んでいるアブを撃墜しつつ進んで行く。一周して戻って来てから地面をよく見てみると、何かの死骸があるのが分かった。

「……カエルか何かか？」

ぶっちゃけもう原形を留めてない小動物らしき亡骸が横たわっていました。これは一体なんなんでしょうね。最早こうなつては探るだけ無駄だろうが。

「これに集つて血を吸つてたつて訳か。せいじやこれも回収しますかね」

ゴム手袋をして回収完了。ビニール袋で5重包みにした。これならもう虫は集まつて来ないだろう。

「はい終わりです。お疲れ様でしたー」

使い切つた殺虫剤を計上して吹雪ちゃんに報告する。目論見通り、減つた分はウチで補充する事になった。毎度ありがとうございます。

「出入口とかに常備しとくといいよ。あとはドアを開けっ放しにしない事かな、そうすれば中には入つて来れない」

「ご苦勞様でした。司令官にも伝えておきます」

「ありがとうございます！ これからに役立てます！」

「楽しかつたぞ、またこんな事があれば進んで手伝わせて貰おう」

「ご教授頂き、ありがとうございます。これからも陽炎型を宜しくお願い致します」

「蜂が出た時は今度こそ秋月型に任せてくれ。全て叩き落して見せる」
「わ、私はちよつと遠慮したいです」

皆の自信もついたようで何よりです。萩風は仕方ないでしょう。それではお暇します。

（広樹です。もしまたスズメバチが出たら本当にお問い合わせしようかと思えます。それか親父に仕事を投げます）

君は何の子？ ツチノ…… その1

広樹です。ある日、不思議なものに遭遇しました。

某月某日

「平素より当店をご利用頂き誠にありがとうございます。今後ともスタッフ一同、よろしくお願い申し上げます」

3人しか居ない家族経営で何がスタッフだよ畜生。と、親父が書いた横断幕用の原稿を見ながら思いました。近々アーケードでイベントがあるので、そこに設置する横断幕（商店街も1店舗につき1枚設置）に印字する文章を出せと町内会からのお達しがあったのです。

「捻りのない文章ですこと」

「じゃあお前が書け」

「お断り致します。外回り行つて来ます」

店に親父を残して車に乗り込んだ。今日は4軒ほど回った後、鎮守府に行かなければならない。間宮さんのお店の裏手にあるゴミ置き場を荒らした犯人を特定するために仕掛けたカメラの映像チェックをする日なのだ。

『それでは最新のニュースをお伝えします。今月半ばに岐阜県白河村で目撃情報のあったツチノコですが、村では捕獲した場合に賞金として500万円を贈呈するとの発表を昨日に行いました。これによって今朝からツチノコを捕まえようとする人たちが村を訪れ、大きな盛り上がりを見せています』

カーラジオから流れるニュースに耳を傾ける。ツチノコとか子供の頃から騒がれる割に正体は分からないし実物も未だ捕獲された事がないUMAだ。本当に居るんですかね。

「まあ、既にUMAを上回る存在が海を荒らしてるから、こういうニュースが流れるだけ平和になったって事か……」

客先を回った後に車を鎮守府に向けた。毎度のやり取りを終えて来客用の駐車場に車を停めて必要な物を持って降りる。

「さてさて、正体は映ってるのかどうか」

間宮さんのお店を目指して歩き出す。その途中、倉庫と路地を仕切る草木が急にガサガサ揺れたのが気になった。

「……鳩かな?」

路地の脇にあった砂利から小さい目の石を拾って投げて見た。しかしそこからは何も飛び出して来ない。

「……………猫とかかな?」

試しに「ニヤー」とか呼びかけるも反応はない。違和感は拭い去れないが間宮さんのお店に向けて足を進めようとした次の瞬間、何かが飛び出して来た。

「おっ!」

それは丸々と太った蛇のようだが、尺取虫のように何度も体を折り曲げて、その動きを続けたまま這って進み始めた。脳が何を見ているのか理解を拒んでいる内に、路地を横断して入った事のない施設同士の隙間に消えて行った。

「……………っ、っ、っ」

ツチノココオ!?

「……………500万、家の建て替えは無理でも補強ぐらいなら出来るか? いや、いい加減にボロくなつて来たハイエースを買い替えるか? それか店舗部分の改装だけでも、いやいや、投資という使い方も」

小声で色々呟くも考えは纏まらない。取りあえず今のヤツを追いかけて隙間に取り付いた。胸ポケットに刺しているペンライトで中を照らす。

「どっか行つたか……………まあ仕方ない」

既に姿は見えなかった。もしかすると何かと見間違えた可能性もある。

「……………はい、仕事しましょう」

スイッチを切り替えて間宮さんのお店に直行する。店先の腰掛けでは、ショートカットの艦娘……艦娘？ とリボンでツインテールを作っている艦娘が寛いでいた。こっちには気付いていないので足早にお店へ入る。

「御免下さい」

「はい、ご注文は……ああ、後藤田さんでしたか」

伊良湖ちゃんが居ました。

「御無沙汰しております。裏手に仕掛けたカメラの確認に来ましたが、その後は何か起きませんでしたか？」

「やっぱり週に何度か、鍵を壊そうとした形跡が残っています。爪で引っ掻いたような傷もありますね。一応、触る前には消毒をして、鍵の開け閉めには軍手も使うようにしています」

本格的にアライグマか何かである可能性が高いようだ。早く映像を確認して正体を突き止めてやろう。

「分かりました。ではちよつと裏の方へ失礼します」

「はい。願いますね」

店から出ようとした所、腰掛けで寛いでいた艦娘と鉢合わせた。

「後藤田さんですね。お急ぎでなければよろしいでしょうか」

「はい、何か」

「最上型重巡洋艦、三隈と申します。妹の鈴谷から伺っております」

「ネームシップこと姉の最上です。もしお世話になるような事があれば、協力させて下さい」

姉? 姉?? いや失礼、随分と似てないもので……

「あー、なるほど、そうでしたか。改めまして後藤田です」

「お仕事の前に失礼致しました。これで下がらせて頂きます」

「今後よろしくお願ひします」

「いえこちらこそ。では仕事がありますのでこれで」

店を出て裏手に向かう。しかしまあ、あのギャルっぽい娘の姉とは思わなかった。それに一番の上のお姉さん、パッと見はほほおと……いや、これは失礼だな。忘れよう。

カメラは三脚を立てて設置し、その隣に「監視中につき、触らないで下さい またカメラの前を遮らないで下さい 後藤田」と書かれた看板も置いてある。あんまり信用してないけど誰も故意に映り込んでないのを願うしかなかった。

「どれどれ」

録画を一旦ストップして記録された映像を確認した。昼夜撮りつ放しだが、夜の所だけを見れば済む。早送りしていると駆逐艦の何人かが指差しているのが映っていたが、

幸いにもゴミ置き場を遮るような事はしてないので安心した。

そして時刻は深夜。自動暗視モードで撮影される映像の中に、犯人がすっかり映り込んでいた。

「……マジでアライグマだ」

見た目は可愛いけど実際は気性が荒くて鋭い爪と牙を持っており、そして知能も高い。それがアライグマの正体だ。狂犬病も媒介させる事があるらしいです。

性別は分からないが、ゴミ置き場を施錠している南京錠を両手で触っている。そして今度は噛み付いたり爪で引つ掻き回したりしていた。10分ばかりそれを繰り返したあとは諦めたらしく、画面の外へ消えて行った。

「よしこれで本格的に対策が練れるぞ。捕獲機も大きいのを仕入れないと……ん？」

画面の端っこの方で何かがモゾモゾと移動しているのが見えた。さっき見たのと同じだろうか……

「……いや、これは忘れよう」

あれが本物かどうかは捕まえないと分からないが、それに労力を割いている暇は無い。しかし、気にならないと言えば嘘になる。だが、あれを追い掛け回して本業を疎かには……

「……………カメラをもっと遠くに置いてみるか」

映る範囲を広くして、アライグマがどの方向から来るかを探ると共に、あれの移動経路もついでに調べてみる事にした。

こうして俺は、人知れずツチノコ探しを始めたのであった。

数日後・自宅にて

『次のニュースです。岐阜県白河村のツチノコブームは久々の大賑わいとなり、500万円だった懸賞金を1000万に引き上げる等の発表が行われた事で、日本中からツチノコを探す人々が訪れています。近隣の大学等からも動物学調査チームが現地入りし、捕獲機やカメラを設置してツチノコの足取りを追っている模様です』

夕食時のテレビから例のニュースが流れている。箸が思わず止まった俺は、画面を食い入るように見つめた。

「ツチノコねえ、蛇か何かだろ」

「トカゲだって言われてるらしいけどね」

ニュースを本気にしていない両親を尻目に、仕掛け直したカメラの映像が気になり出した。あれは本当にツチノコなのだろうか。それともお袋が言うように、トカゲの一種なのだろうか。

「どうした、そんなに固まって」

「……え、あ、いや、何でもない」

手早く食事を終えて食器を洗い、自室に引つ込んだ。明日また行つて確認するとしよう。

翌日。平然を装つて鎮守府にやつて来ました。取りあえずお店にお邪魔します。

「おはようございます、間宮さん」

「おはようございます。先日も来られたと伺いましたけど……」

「スケジュールの都合でチェックに日が空きそうなので、先に確認する事にしたんです。バッテリーとメモリーカードも交換したいですしね」

「そうでしたか。じゃあ裏の方へどうぞ」

「失礼します」

さて、例の生物は映っているだろうか。内心、ちよつとワクワクしながら記録された映像を確認する。

「……映ってんなあおい」

時刻は昨日の深夜だ。この前と同じように体を折り曲げながら移動している。

「向こうの方に消えて行っているのか」

ツチノコ（仮）が進んで行く方を見た。その先はよく分からない建物で、角を曲がった所までが記録されていた。

(カメラをもう一台増やして移動先を探るのもアリだな……お、アライグマも来てる) 本命(?)のアライグマも映っていた。こっちは毎度のように南京錠をガチャガチャしている。相当に執念深いようだ。

「…………え、マジで?」

鍵が開かない事でアライグマは次の一手に出た。ゴミ置き場の隣にある木から屋根に上がろうとし、木を登っている光景が映っていたのだ。しかしそう簡単にいく筈もなく頑丈な屋根に阻まれてまた木を伝って地面に降り立ち、すぐすぐと帰って行った。

「んー、コイツの棲み処は下手すると建物の中かも知れないなあ」

農村では屋根裏に棲み付くアライグマも居るらしい。そうすると、この敷地内の搜索範囲はえらい事になる。

「糞でも探して移動経路を探ってみるか」

この近くで人気のない場所や誰も出入りしない場所に、アライグマのトイレや休憩場所が出来ている可能性を考えて探索を始めた。そっちこっちの茂みや垣根をゆっくり掻き分け、時には頭を突っ込んで様子を探っていく。

「頭隠して尻隠さずを実践しているのかしら。殊勝な人ね」

後ろから幾度となく耳にした事のある声があった。どうせあなたでしようねえ……
「遊んでいる訳じゃないですよ。アライグマの痕跡を探ってるだけです」

草木から顔を引つ込ませて振り返る。いつものように涼しい顔をした加賀様と、見た事のない金髪美人&際どい恰好の不思議な髪色をした巨乳美人が佇んでいた。このお2人はどちら様でございましょうか。

「……最近来られた方ですか?」

「そうね、今この2人を案内してる最中よ。紹介するわ。Mr. 後藤田、
E^害x^虫t^駆e^除r^業m^者i^者n^者a^者t^者o^者r^者よ。時々こうして来ているから、怪しい人じゃないので覚えておいてね」

「戦艦のサウスタコタだ、よろしくな。アメリカから来たぜ」

「私はホーネット、空母なの。よろしくね」

「いかん、どっちも美人過ぎて言葉が出て来ない。何て言えばいいんですか!?

「あー、その、日本語でお話ししても大丈夫なんでしょうか?」

「難しい言葉はまだ分からんが、このぐらいの会話なら問題ないな」

「ええ、私もよ」

「そうですか。えーと、後藤田と言います。月に何回かここで害虫・害獣駆除をしていますので、加賀さんが言うように怪しい人間ではありませんから、気軽に挨拶して貰って大丈夫です。あ、それとですが、部外者ですので軍事機密になるような会話にはご注意下さい」

これは悩みのタネだった。何所まで俺が耳にして良い事なのかも分からないので、大體は聞かなかつた事にしてやり過ぎしている。

「おう、気を付けるぞ」

「私も注意するわね」

いやー美人だな。特にホーネットさん。元女優と言われても嘘に思えないです。

「では仕事に戻りますのでこれで」

「あ、待つて。葉っぱが付いてるわ」

「え？」

頭をバサバサするが何も落ちて来なかつた。何所にあるんでしょうか。

「肩の所よ。取つてあげる」

金髪美人が後ろに回り込んで、肩を優しく払つてくれた。なんだかとても幸せな気分になりました。

「OK、これでいいわ」

「ああ……ありがとうございます」

「邪魔したな。また会おうぜ」

「じゃあ次は食堂を案内しようかしら。向こうよ」

3人は去つて行つた。そして、直ぐ横をホーネットさんが通り過ぎた時、とてもいい

匂いがしました。

「…………お仕事お仕事」

鎮守府にまた美人が増えました。嬉しい反面、やり難いなあと思ったり思わなかったり…………

君は何の子？ ツチノ…… その2

アライグマを探すついでにツチノコ探しも始めたが、メインのターゲットはアライグマである。

記録された映像をパソコンで再生させ、画像に切り取ったのを印刷。これを鎮守府の中にある掲示板に張り出す許可を得た上で見出しやら何やらを書き込み、指名手配犯のようなポスターを作りました。

【アライグマ出没につき、戸締りにご注意ください】

「……まあこんなもんか」

司令部棟の掲示板に1枚。食堂にも1枚。各艦の寮に1枚ずつ。敷地内に点在する掲示板に1枚ずつ。入口の警備所にも渡すため、20枚近くを拵えた。これと並行して小さめのチラシも作り、遠回しにツチノコに関する聞き込みもして見る。

駆逐寮

今日は珍しい組み合わせに遭遇しました。チラシを渡した相手は朝潮&霞です。

「こういう訳なんだけど、何か他に動物を見たりしてない？」

「……いえ……特に」

「お役に立てず申し訳ありませんが、見覚えはないですね」

「そっか。まあもし見かけたらでいいから、次会った時に教えてくれると有難いな」

「はい、承知しました」

「………そう言えばこの前」

おつと？

「………何か見た？」

「夜中にトイレへ行きたくなくて、廊下を歩いてました。そしたら、外をピョンピョン跳ねてる変な物が」

おー？ これはひよつとして……

「霰、それは何時ごろ？」

「………眠かったから、あんまり覚えてない。見間違いだったかも」

「因みに外って言うのは表の通りの事かな？」

「はい………多分」

間宮さんのお店からこの寮まではそれなりに距離がある。夜中にそんな広範囲を動き回っているのだろうか。

「あ、朝潮姉と霰。おはよー」

「おはようですわ〜」

見た事ないけど、何となく似ている2人が現れました。

「えーと? 妹さん?」

「はい。ご紹介します。5番艦の朝雲と6番艦の山雲です。2人とも、こちらは後藤田さん。害虫駆除をされている方よ」

「山雲です〜、よろしくお願い致します〜」

「朝雲よ。こう見えても山雲と霞、霞のお姉ちゃんなんだから」

「……姉がご迷惑をお掛けします」

「ちよつと霞! 何言ってるのよ!」

少し噴き出しそうになった。霞ちゃんも意外と面白いですね。

「2人は最近戻って来たばかりです。もう1人、峯雲と言う妹が居るんですが、タイミン
グが合えばご挨拶をさせます」

「まあそんな気にしなくていいよ。所で2人は何か変な動物を見たりしなかったかな」

チラシを渡して説明する。だが2人は首を傾げた。

「見た事はないわね」

「そうね〜、私もないわ〜」

「出来たら他の娘たちにも聞いて貰えると嬉しい。これはちよつと多めに渡しておく

ね」

チラシを10枚程度配った。次は軽巡察へ向かう。

軽巡察

思い浮かぶのはチャバナールとの壮絶な戦い。あれは凄かったなあ……

「……さて、誰か居るかな？」

中に入った。相変わらず何かいい匂いがする。誰も居ない？

「すいませーん」

「はい」

奥から誰かやって来た。赤と言うかピンクと言うか、混ざり合ったような色合いのシヨートカットが特徴的である。

「配達ですかー？」

「あーいえ、実は敷地内にアライグマが出没しております、注意を呼び掛けています。それとこちらのチラシを配りに参りました」

チラシを5枚ほど手渡す。

「はいはい……ああ、もしかして後藤田さんですか？」

「ええ。申し遅れました。後藤田プロテクトクリーンです」

「長良型5番艦の鬼怒です。長良姉と五十鈴姉と名取姉と由良姉と、上に4人も居るんで肩身が狭いんですよ」

フランクで話しやすそうだ。しかし一部分が特徴的なので見ないようになければ……

「4人もですか。自分は兄弟が居ないので羨ましいですね」

「それはそれで私が羨ましいです! あ、そうだ。もう1人居るんで呼んで来ますね」

少し奥へ引つ込んだ。連れて来られたもう1人は金髪のツインテールで、なーんか子供の頃をやつてたアニメで見た事のあるようなビジュアルをしている。美少女戦士なんちゃらとか言うタイトルだったような……

「6番艦の阿武隈です……いや、私が会う必要あるの?」

声が凄く甲高いのでビックリしました。

「ご挨拶ご挨拶。ここの窮地を救ってくれた人だよ」

「あく……私まだ阿賀野さんの部屋がある階は入らないようにしてるんだあ。何かあの光景を思い出すと足がすくんじやうの。でも、ありがとうございました」

「いえ滅相もない。それでお聞きしたいんですが、何か他に動物を目撃した事はありますか?」

残念だがこっちは収穫なしだった。次は重巡察へ足を向け、続いて空母、潜水艦と渡

り歩いて行く。だが何も情報はなかった。

「……もしかして俺の目にだけ見える謎の存在だったりして」

意外とあり得なくもない……いやそんな事があって堪るか。取りあえず戦艦寮へも行く事にした。

戦艦寮

目の前まで来た所で、伊勢&日向の2人組と出会った。この2人も接しやすくして有難いです。

「アライグマか……いや、済まないがコイツも他の動物も見た事はないな」

「こんなのが敷地の中に居るんだ。何所で寝起きしてるんだらうね」

それは俺も気になっている事です。

「Bonjour、イセ、ヒューガ」

美しい声が聞こえた。振り返る2人の隙間に居たのは、言葉を失うくらい美人でした。

「ああ、リシユリユ。丁度いい。この動物を見た事はあるか。それか、これ以外で他に動物を見た事がないか聞きたいんだが」

「これは……Raton laveur? いえ、私はないわ。他と言えば鳥ぐらいね」

「リシユリユーはまだ知らないよね。害虫駆除……フランス語だと何て言うの?」

「英語でいいんじゃないのか」

「あ、そうか。えーと、Exterminatorの後藤田さん。たまーに来てるよ」

視線がこつちに来る。うわあ、絶対に女優さんか何かでしょ。こんな人が艦娘な訳……

「Exterminator……ああ外の方ね。初めまして、Monsieur後藤田。戦艦リシユリユーと言います」

艦娘でした。

「後藤田と申します。よろしくお願い致します」

緊張しすぎてどんなやり取りしたか忘れまして……はい……

「じゃあもし見つけたら、場所や時間帯も覚えておく事にするわ。それでいいかしら」

「はい。ご協力に感謝します」

3人と別れて寮に入った。ロビーで扶桑さんに遭遇する。

「本日はどのような」

「アライグマが出没しているようですので、注意の呼び掛けに参りました。それともしですが、他に野生動物を目撃していればお話を聞きたいのですが」

チラシを渡す。だが何かを思い出したような表情はしてくれなかった。

「そうですねえ……ちよつと私には」

「ここも収獲なしだ。思い切つて司令部棟へ行つて見る事にする。」

司令部棟

「なるほど……2人はどうだ？」

「残念ですが」

「ええ……私も」

加賀&大淀の2人も見た事はないようだ。いよいよ行き詰まつて来た。

「まあもし見つけたらでいいのでよろしくお願いします。ではこれで」

取りあえずツチノコは忘れてアライグマへの対処を優先する事にした。こつちの方はいつ怪我人が出ても不思議ではない。

「えーと、罠の業者は……あつたあつた」

色んな罠を仕入れている付き合いの長い業者に電話し、折り畳み式の箱罠を取り寄せて貰うよう話を付けた。これを5個ばかり設置して様子を見ようと思う。

それから1カ月ぐらいは週に1〜2回程度のチェックに留め、本格的にアライグマの捕獲へ力を入れていった。間宮さんのお店を中心に罠を設置して捕獲の確率を少しでも高めるのが良いだろう。同時にカメラも間隔を広くとつて、アライグマに怪しまれな

いよう配慮した。

設置の初日。本日は許可を得て、泊り込ませて貰う事にした。寝場所は司令部棟の1階にある仮眠室をお借りしている。因みにこの部屋は窓を開ければ、少し遠いけどお店が見えるのだ。

「さてさて、アライグマは来てくれるかな」

そう言えばあれから、ツチノコらしき生物はカメラに映り込まなくなつた。保存してある映像データにはしっかりと映っているのが少なくとも幻ではない事が分かる。

「……うん?」

双眼鏡でお店の近くを見ていたら、違う建物の屋根の上に誰か居るのが見て取れた。あれは何だろうか。

「……………人?」

人の形をしているが、本当に人だろうか。そんな事を思っていると、視線が合った気がした。咄嗟に双眼鏡から顔を離して身を隠す。だが部屋の灯りが煌々と点いている。ここは、嫌でも目立つ場所だった。

「こんな時間に起きている悪い子は誰かな?」

窓の外から声があった。あんな場所から短時間でここまで来れると言う事は、間違いなく人間ではない。であれば艦娘の誰かだろうか……

「……失礼しました、害虫駆除業者の後藤田プロテクトクリーンと申します。本日はアライグマの罠を設置した初日です、様子を見たいので泊り込ませて貰ってます」

覚悟を決め、両手を挙げて窓から見える所まで移動した。そこには髪を左右に短く結んで、何所となく忍者っぽい恰好の娘が居た。

「……………あー、神通から聞いてたけど、私たちの寮からアレを退治してくれた人？」

神通、私たちの寮、アレを退治。そこから導き出される答えとしては、軽巡の誰かと言うのが一番近いだろうか。

「その節はお世話になりました。えーと、失礼ですが神通さんの……………」

「姉の川内よ。川内型軽巡洋艦の1番艦。神通は2番艦。那珂は……………長期出張中か」

もう1人、妹が居るようだ。すると3姉妹なのか。

「何か見られてるなーと思って走って来ちゃった。消灯の時間はとつくに過ぎてるし」

「……………あのー……………と言う事は其方も寝ないといけない時間帯では」

「私はいいの。許可も貰ってるから。夜っていいよね、夜って」

「すいません、ちよつと何言ってるか分かんないです。出来れば俺も寝たいんですけどね。」

「あ、邪魔してごめんね。そろそろ居なくなるから」

いや暫しお待ち下され。こんな時間に動き回ってるなら、アレを見ている可能性が高

い。

「突然ですいませんが、アライグマを見た事はありますか? それと、他にも動物を見かけていたらお話を聞きたいのですが」

「ん、この時間帯は野良猫とかも平然と入って来るしねえ。それっぽいのはもしかしたら見た事あるかも知れないけど、何とも言えないかな」

ダメか畜生……

「なるほど……お引止めしてすいません」

「じゃあね」

目にも留まらぬ速さで消えた。あれが彼女たち本来の力なのだろうか。

「……監視再開つと」

時刻は24時を回ろうとしていた。残念だが、流石に初日で捕獲は無理だったらしい。適当な時間に切り上げ、布団に寝転んだ。

翌朝、ドアを何度も叩かれる音で目が覚めた。

「……………はいはい」

立ち上がってドアを開ける。大淀さんが居ました。

「ああ、おはようございます」

「罨に何か掛かっています。早く行かれた方が」

「え……は、はい！」

一緒に司令部棟を飛び出し、罨の所まで走った。提督さん、間宮さん、伊良湖ちゃん
の3人が罨を囲んでいる。

「すいません、朝早くからお手数を」

「こ、これは何の動物ですか？」

提督さんの声が上がっている。え？　もしかして？

（……お前かーいーい！）

罨の中には、最近足取りの掴めなかったツチノコ（？）が居た。体を中途半端に曲げ
て飛び上がるうとするが、天井部分に当たって全てが無駄な行動になっている。

「アライグマ……じゃないですよね？」

「蛇の仲間……ですか？」

間宮さんと伊良湖ちゃんも不思議な顔をしていた。拙い。出来ればこっそり捕まえ
たかったのにこれでは……

「……な、何でしょうねコイツは。確かに蛇っぽいですが」

一芝居打った。取りあえずこの場を収めなくてはならない。

「おつはよーございますー！」

「っぽーい！」

白露&夕立コンビが現れた。いかん、面倒な事になりそうだ。

「何を見てるんですかー?」

「アライグマ捕まったっばい?」

そして罠の中に居るのを見た2人は、途端にはしやぎ出した。

「マジ!? ツチノコじゃん!!」

「本物っばい!!」

「つ、ツチノコ?」

博識の大淀さんでもご存知なかったようだ。と言うか、興味なんてないでしょうね。

「やばいよこれ! 賞金貰えるやつ!」

「お金持ちになれるっばい!」

「……………まあまあ、コイツは逃がしましょう。鎮守府の敷地でツチノコ捕獲なんて、地方紙ですら食い付くかどうかかってネタですよ。それに散々つばら調べて、やつぱりツチノコじゃなかったなんて事になったら笑われるだけです。仮に本物だとしても、この世には未知な部分があった方が面白いじゃないですか」

提督さんにそう語り掛けた。自分でも何言ってるかあんまり分かってない。

「……………そうですね。こんな事で騒ぎを起こしたくないですし、上の手を煩わせるような事になるのもちよつと」

「下手をすれば、外出もままならなくなりそうですね」

大淀さんがそう言った事で、白露&夕立の表情が変わった。休日に出掛けられなくなるのは嫌らしい。

「……写真だけ……いや、動画も……いいですか？」

「ほ、ほい」

「個人の端末には残さず、データは全てこの場で共有サーバーに送る事。いいな？」

「はい」

2人はツチノコの写真や動画を撮り始めた。撮ったのは提督さんが見ている状態でどっかに送ったようだ。自分の端末から消す所までの確認が終わる。

「ここで見た事の口外は禁止とする。各自、そのように」

俺も……でしょうねえ。

「……ではこれを山にでも放って来ます。生きるなら自然の中の方が良いでしょう」

「よろしくお願いします。ビニールシートか何かで覆いましょうか」

「そうですね、ありがとうございます」

罨を青いビニールシートで覆って、ゆっくりと車に積み込んだ。まだちよつと諦め切れてない表情の白露を尻目に車を出し、近くの山に入る。そこで下ろしてシートを外しながら罨を開け放った。

「ほら、行けよ」

ツチノコは豊かな自然を見ると同時に勢いよく飛び出した。嗚呼、500万が跳ねて森の中に消えて行く。惜しかったなあ……

「アリガトウ」

「……え？」

今何か……妖精っぽい声があったような……まあいいか。

「……戻りましょうかね」

ツチノコはもう見えなくなった。ここは県で管理している山だから、そうそう見つかる事はないだろう。これで良かった事にして一度鎮守府に戻った。

「逃がして来ました。罨はまたここに仕掛けて宜しいでしょうか」

「大丈夫です。ありがとうございました」

白露ちゃんが微妙な顔でこつちを見ているが仕方ない。今日はこの辺で帰るとしよう。

以後、カメラにツチノコは映っていないし、罨にも掛かっていない。地元情報が見れる掲示板でも特にそれらしき書き込みはなかった。だがアライグマはまだ罨に掛かっていないから、根本的な解決にはまだ時間が必要そうである。

ハイイロだけど黒とか茶色だったりもする その1

広樹です。近所の幼稚園に来てとです。

「ではお願い致します」

園長先生に連れられた俺は、小じんまりとした体育館に足を踏み入れた。多くの園児たちが体育座りをしている。そのままステージに上がり演説台のある所までやって来た。

「今日は皆に触ったり近付いたりすると危ない虫さんを覚えて貰います。このお兄さんは、そういう虫さんから皆を守ったり、近付かれないようにしてくれる人です。よくお話を聞いて、お家に帰ったらお父さんお母さんにも教えてあげましょう。いいですね」

元氣な返事が聞こえて来た。こんな時代が自分にもあつたなあと思いつつ、園長先生を横目で見やる。しかしハゲたなこの人。昔はもつと髪がたくさん……

「それともう一つ。お兄さんはちっちゃい頃、この幼稚園で皆と同じように過ごしていました。いい子にしていたら、皆が知らない昔の事を聞けるかも知れませんよ」

何だその前振りは。そんなネタは用意してませんよ元教頭先生。

「……そういうのは事前に言つて頂かないと」

「まあまあ。ちつちやい子は何かご褒美があつた方が励むもんだ。じゃあ頼んだよ、つくし組の広樹くん」

そう、俺はこの卒園生なのだ。やっぱり来るんじやなかつたなあ。畜生、どうしてくれよう……

「はい、こんにちは。皆は虫や動物を見たり触つたりした事があると思いますが、その中には触ると痒くなつたり、痛くなつたりする虫が居ます。動物だと引つ掛かれたり、噛み付かれたりするかも知れません。まず大切な事を2つ、皆に守ってもらいたいです。触らない、近付かない。これを守るだけで、毎日楽しく過ごす事が出来ます」

いら○と屋だのから引つ張つて来た素材で作つたスライド等で、とても柔らかい表現を用いて説明する。これが成人相手ならいつもの仕事モードでベラベラ喋れるが、目の前に居るのは3歳から5歳だ。難しい事を言つても仕方ない。

無事、説明が終了した。さて、皆いい子にしていたので昔話をしなければならぬ。「じゃあ皆いい子にしてくれたので昔の事を喋ろうと思います。これは噂話ですが、園庭、皆が遊んだり運動したりする所の端っこに大きな木がありますね。その木に手を触れて心の中で質問をすると、木が何でも答えてくれるという噂話が昔にありました。もしよかつたらやつて見て下さい」

園児たちがザワついた。最近の子供はこういうのを信じないかと思つたが、意外にも通じて嬉しい。まあこれも誰が言い出したかは知らない噂だ。

「ありがとうございました。じゃあ皆、拍手でお兄さんを見送つてあげましょう」

一礼してこの場を去る。あとは職員室であれこれやり取りして帰路に着こうと思つた所で携帯が震え出した。鎮守府からである。

「はい後藤田です」

ちよつと見て欲しい案件が発動した。一度帰ろうかとも思つたが面倒なので直行する。

と言う訳で正門で用紙に記入し、来客用の駐車場に車を停める。大淀さんが待つていてくれた。

「おはようございます。あれ、何かいつもと違いますか？」

大淀さんは見慣れないチエック柄のカーディガンを羽織つていた。

「執務室の空調がおかしくなつてしまつて、ちよつと寒いので一枚上に着ているんです」
おお、何だろう。新鮮な感じがする。くそ、こんな格好の同級生が居る青春時代を過ごしたかつたなあ。

「後藤田さんも今日は珍しい服装ですね？」

本日の出で立ち。珍しくネクタイとYシャツにスラックスで革靴。それで作業服の

上を羽織った状態である。何所その工務店に居る営業さんみたいな感じだ。

「あー、ちよつと学校関係で仕事がありまして。まあ官庁とかに作業じゃなくて、打ち合わせなんかで出入りする時はこんな格好です」

正直に言うところなのは息苦しいので嫌だ。だがその場に合わせた服装と呼ばれるものがあるじゃないですか一応。面倒だけどね。

「そうなんです、よく似合ってると思いますよ」

「いやいや、普段が作業着なんで締まって見えてるだけですよそれは。じゃあ行きましょうか」

嗚呼、お世辞でもあなたにそんな事を言つて貰えるだけで生きてて良かったと思えます。我ながら小さい人間だとも思うが……

それから少し歩いた。すれ違う顔見知りの娘たちが珍しいものを見る目になっている。これはこれでちよつと気分がいいかも知れない。

「今日は普段なら立ち入り禁止の区画に行きます。その手前まで来たら、許可証をお渡ししますね」

「立ち入り禁止……承知しました」

こういう時、あまり多くの言葉を交わしてはいけない。出入りの業者には常に守秘義

務がついて回るものだ。自身が見聞きしたものを外部に漏らせば逮捕されてしまう事もある。

「因みにですが、虫と動物のどちらでしようか」

「虫ですね。自分たちでも調べてみたんですが、どうやら危険な種類のようでした」

危険な種類。うーん、何だろう。港湾施設だとヒアリの可能性もあるな。

「ここから立ち入り禁止区画になります。この許可証を首からかけて下さい」

「はい」

ネットワークストラップに許可証がくっ付いた物を受け取り、首から垂らす。目の前には港と海、そして関連する施設が立ち並んでいた。その中でも特に目を引くのが「開発工場」と「建造工場」とそれぞれ名称の書き込まれた大きな施設である。

この鎮守府へ来る前に山があるが、そこから見下ろすと敷地の中は一応でも覗き見る事が出来る。確かにこの大きな2つの施設はそこからでも大きさが十分にわかる建物だった。

「今からあの左側、開発の方に行きます」

言われるがまま着いて行く。波の音が静かに鳴り響いていた。だがそれも施設に入ると消え失せてしまう。中は言葉で言い表せないほど様々な機器でゴチャゴチャしており、機械油のおいもした。

「明石ー」

「はーい」

機械の奥から4人が現れた。その内の2人は顔見知りである。

「どうも、明石です」

「由良です。ご無沙汰しております」

残りの2人。どうやら駆逐艦のようだ。

「レーベリヒト……いえ、レーベでいいです。駆逐艦です」

「駆逐艦マックスシユルツ。マックスでいいわ」

何だろう。よく知ってる駆逐艦勢と比べて細く見える。いや、肌が白いからか？

「この2人はビスマルクさんと同じく、ドイツから来てる娘たちです」

「後藤田と申します。害虫駆除をしている者です」

「僕たちの国では、ツエツケが原因で病気になる人が多いんです。日本ではどうなんですか？」

ツエツケ？ 何ですかそれは。

「レーベ、それじゃ伝わらないわ。マダニって言わなきゃ」

「マダニ……ああ、血を吸うと膨れ上がるやつか。全国的には増加傾向にあるらしいですが、この県では主だった被害は確認されてない筈ですね」

マダニ。血を吸うと500円玉くらいにまで大きくなるヤツだ。これに食われると色々な感染症や諸症状を引き起こし、その致死率は30%と言われている。

「この皆は、草のある所に平気で座っているから怖かったです。それを聞いて少し安心しました」

「何所にも居る訳じゃないのよ。必要以上に恐れてたら何も出来なくなるわ。ごめんなさい、この子はちよつと心配性な所があつて」

「まあ立ち上がる時によく払ったり、敷物の上に座ったりすればそこまで気にする必要もないかな。ああ、それで、今日は何が出たんですか？」

「向こうです、着いて来て下さい」

明石さんを先頭に歩き出す。狭い通路を器用に進んで行くのが、この空間に慣れていく証拠だと感じた。

最終的に、施設の奥まった部分へやって来る。溶接か何かで使うのか分からないが、ガスボンベが並んでいる区画だった。

「こっちのボンベの隙間から、ペンライトで覗き込んで見て下さい」

言われた通りに隙間を覗き込み、暗闇をペンライトで照らす。そこには、灰色っぽいような茶色っぽいようなお腹の大きい蜘蛛が、ボンベと壁の間に巣を作っていた。丸まった綿ぼこりのような物も複数見える。

「ボンベを交換しようとして、器具を隙間へ落としてしまったんですが、ライトで照らして探していたらこの蜘蛛を見つけたんです。気になって少し調べてみたら」

「ハイイロゴケグモっぽいですね」

そう口走った瞬間、空気が少しだけ張り詰めた。セアカゴケグモ同様、コイツも隙間や物陰に巣を作る習性がある毒蜘蛛だ。つまり、この空間の何所にでも潜んでいる可能性がある。

「写真だけ撮ったら一旦出しましょう。ここ最近通っていない所は歩かないようにして下さい」

ライトで照らしながら写真を撮った。そこで取りあえず外に退避する。明るい所でさつき撮ったのをもう1度確認した。

「……………9割近い確率でハイイロゴケグモだと思います。この丸いお腹と色、長い脚が特徴的ですからね。それにあの巣の作り方から考えても、間違いないかと」

「……………そうですかあ」

明石さんは肩を落としたがらゆっくりと大淀さんの方を見やる。

「おおよどお……………これじゃあ仕事出来ないよお」

「前から言おうと思ってたけど、ちよつと散らかし過ぎよ。それに使用頻度が低い機器の点検が暫く出来てないって夕張も言ってたし、いい機会だから大掃除も兼ねてと思え

「ば？」

「ここでそれを言わなくてもいいでしょ、鬼なんだから」

「人手は相応に用意するから安心して。取りあえず、提督とも話さなきゃ。ほら行こう」
大淀さんは明石さんの手を引つ張りながら戻って行った。少し待っていて欲しいと言われたので待機する事になる。

「……あの中を全部調べるとなると、3日ぐらい必要かな？」

脳内で作業手順を構築する。しかし気が滅入りそうになったので止めた。どっちにしろ、俺一人では限界があるので親父か知り合いも呼んだ方が現実的だろう。

「向こうのベンチは安全なのを確認してありますから、座って下さい。立ったままじゃ疲れちゃいますよ」

「ああ、そうですね。すみません」

由良さんに言われるがままベンチに腰掛けた。凶々しいかも知れないが有り難い。

「コーヒーを淹れてくるわね。砂糖とミルクは必要？」

「えー……ミルクだけお願いします」

「由良さんはどうしますか？」

「私は両方お願いね」

レーベとマックスは工廠の横にあるプレハブ小屋へ向かった。恐らく休憩室か何か

なのだろう。そこでコーヒーを淹れてくれるようだ。

(……ちよい気まずいなあ)

あんまり話した事ない艦娘と2人きりにされてしまった。どうやって時間を稼ごう

……

ハイイロだけど黒とか茶色だったりもする　その2

レーベとマックスがコーヒーを淹れに行った事で由良と2人だけにされてしまった
広樹。

(お湯が沸くまで数分。コーヒーを淹れるとして、インスタントなら1分かそこら。ド
リップ式ならもう少し掛かるか。あんなプレハブの所に大層な物は置かない筈だから、
コーヒーミルで豆からつてのは無い……といいなあ)

取りあえず10分稼げばいいだろう。よし、まずは背伸びでもするか!

「ふん!」

背中がバキバキと盛大に鳴った。気持ちいいがこれは人の耳に聞きこえるぐらい大
きい。

「すごい音しましたね」

「いでで、前の仕事が立ちっ放しだったもんで。いや失礼、まさか聞こえるとは
……………」

あかん。もうキツイ。どうしよう……

「……………そう言えば前にお会いした時と服装が違いますけど、何かあったんですか?」

チャバネールの時は白い学生服っぽい恰好だったけど、今は落ち着いた色合いの服を着ているのが気に掛かった。いや待て。これは機密に触れる事を聞いてないか？ ますしいかな？

「ちよつと前に新しい装備を頂いたんです。それで制服も変わったんですよ。改二つてご存知ですか？」

「カイニ？ いえ申し訳ありませんが」

「私たちは色々な経験が一定のレベルに達すると、装備を新しくする事が出来るんです。その中でも更に高い練度を持つっていると認められた時、改二と呼ばれる存在となって、制服や装備も新しい物が支給されるんです。私たち全員がそうなれる訳ではないんですが、そのための研究は日夜続けられていると聞いています。前の装備が良いって言う方は改二の認定を受けずに、そのままの物を使い続ける場合もあるそうです」

喋って頂いているので聞いてるが、これはいいんだろうか……

「あ、因みに今のは当たり障りない事しか言ってますから大丈夫ですよ。見学会でも言ってる事ですから」

「見学会。そう言えば情報誌に載ってましたね。月に1回でしたっけ？」

「2回やる時もありますね。次は来月の半ばだったと思いますけど、来られますか？」

「いやー普段から出入りしてるんで大体の物は見えますから結構です。顔見知りの娘た

ちと会ったら普通に声掛けて来そうですねし、一緒に居る他の人たちから変な目で見られたりしたら多分その場から逃げ出したくなると思いますから」

寧ろ見学会に顔見知り居たらやり難いだろう。俺も何かギクシヤクしてしまいうだ。

しかしどれぐらい経った？　ぶつちやけもう限界なんですけど……

「待ったかしら？　どうぞ」

「こっちは由良さんのです」

「ああすいません。ありがとうございます」

「ありがとうございます」

レーベとマックスがいい所でコーヒーを持って来てくれた。本当に有難いです。

「じゃあいただきます」

いい香りだ。出先で出されるインスタントとは違う。とか思ってみるだけです。そんなに肥えた感覚は持ち合わせておりません。

コーヒーを啜っていると、司令部棟に向かった2人が戻って来た。提督さんも一緒に来ている。

「お待たせしました、細部については提督とご相談下さい」

「実物を見たいんですが、よろしいですか」

「写真がありますのでそれを。今あそこに立ち入るのはちよつと危険ですので」

携帯で撮った写真を見せた。セアカゴケグモと違ってハイイロゴケグモはあまり聞かない種類だ。沖縄では多いとか何とか。

「……………なるほど、こんな毒蜘蛛も居るんですね」

「日本で死者はまだ確認されてません。そこまで毒性は強くないんですが、それなりに色々症状が出ます」

「あの中を全て綺麗にするとして、どれぐらい掛かるとお考えですか？」

「そうですね……一週間から二週間は見た方がいいかと。動かせない物もあるでしょうし、最後の手段としては燻煙剤を焚きまくるか、隙間と言う隙間に薬剤を撒くのが関の山ですね」

日数はちよつと盛った。変に短くすれば一日の作業量が増えてしまう。

「もしくは、一日の工程を決めて少しずつ安全な場所を増やしていくのも有りではないでしょうか。一気にケリを着けようとするよりはトラブルが少ないと思います」

「分かりました。こちらにも業務が完全に滞るのは避けたいので、その案で行きましょう。」

明石

「はい！」

「動かせる物だけ細心の注意を払いつつ建造工廠へ移してくれ。あつちに自分の作業ス

ペースを作つて構わない。何か大掛かりな開発をしたい場合は悪いが事前に連絡を頼む。近隣の鎮守府に協力を要請して、向こうの施設を貸して貰うようにするから」

「承知しました、直ちに!」

「あ、コラ!」

走り出そうとした明石の鉢巻きを大淀が引つ張つた。

「ぐえ!」

「待ちなさい。手が空いている駆逐艦の娘たちを20人くらい集めてるから、あなたが纏めて動かしてね。ちよつとは指揮をする経験にもなるでしょ」

「何で工作艦の私が指揮しないといけないの!？」

「この責任者はあなたでしょ。自分の管理下にある所で誰かを動かすなら少しはそういう経験もおかないと」

ため口の大淀さんも……これはこれで……

「お疲れ様です、司令官」

「皆さん、おはようございます」

吹雪型と綾波型が集団で現れた。どつかの中学生たちがボランテニアか何かで集まつたように見えてしまいます。

「白露型推参!」

「っばいー！」

「お、おはようございませす」

白露・夕立・時雨のお馴染み3人組とその妹たちもやって来た。

「陽炎以下6名、集合しました！」

「ご無沙汰しております」

「こつちもよく見る3人とアブの時に出会った浜風、そして面識のない娘が2人ばかり居る。」

「妹の浦風と谷風よ。今日はたまたま居合わせたから連れて来たわ」

「うちは浦風じゃ。よろしゅうね」

「谷風さんだよ。害虫退治もどんと来いつてなもんさ」

うーん、京都弁？ いや、その語尾は広島の方だったっけ？ あんまり方言に明るくないのであれですが、新鮮な気分になります。2人目は涼風ちゃんと言葉遣いが似てる。ような似てないような……

「人数が一気に増えたな、ここでは話しにくいから場所を移そう」

提督さんの計らいで司令部棟の会議室を使う事になった。全員でゾロゾロと移動する。

「今度は何が出たの？」

「ハイイロゴケグモって言う毒蜘蛛。セアカゴケグモの仲間」

「あー、この前の真つ黒くて毛が生えたのより強い？」

「いや基本的には大人しいし毒もそこまで強くない。でも繁殖力がやばくて、放つておくとあちこちに居るような状態になる」

「うえー、それはやだなあ」

「仲良さそうじゃねえ」

白露嬢と毎度お馴染みなやり取りをしていたら何か突つ込まれました。

「何よ浦風、いつもこんな感じだよ」

「ほんまあ？もしかしたら、もしかするんじゃないと思うたんけどねえ」

「おつとお、谷風さんもそれは感じてたねえ」

2人はニヤニヤしている。

「村雨と荒潮みたいな事を言つてないで前見て歩きなさい前。つてかどう見たらそういう風を感じるのよ」

もし町中に居たとしてもどちらかと言えば兄妹に見られそうな気はするが、流石に付き合つてるとかそんな目で見て来るヤツはあんまり居ないんじゃないかならうか。つてか、下手すりゃ何らかの条例を違反している疑いを掛けられそうな気がする。

なんて考えていると丁度よく司令部棟に入った。会議室へと場が移る。

「えーそれでは、詳細をお伝え致します。以前セアカゴケグモが出たのはご存知かと思いますが、その仲間のハイイロゴケグモが開発工廠で確認されました。いつから居たのかはまだ不明です。目に付いた時にはもう繁殖期になっているそうですので、かなりの数が潜んでいると思つて間違いないでしょう。こちらから何かしない限りは噛まれる事はありませんが、安全の面を考えるとやはり駆除の必要があります。いつも通り器具は用意しますので、皆さんにこれの発見と死骸回収をお願いします。また初期の段階では自分が駆除しますが、ある程度の指導も行いますので慣れて来た方は1人での対処もして頂こうと考えております」

その後、段取りやら何やらも彼女たちを交えて打ち合わせを進めた。明石さんにはグループの編成と陣頭指揮の役目が課せられる。その日の進行具合等を管理して貰うのだ。

「じゃあ日程はこんな感じでお願ひします。今日出来る事は限界がありますので、取りあえず出入口付近の安全確認ぐらいで済ませましょう。またウチの方で卸しますから、駆逐寮の殺虫剤を使わせて頂いても宜しいでしょうか」

「ええ。本来であれば相応に準備して来て頂く所を、手ぶらに近い形でお呼びして申し訳ありません」

「司令部棟にも幾つか在庫がありますから、そちらもお使い下さいね」

「おおよどおく、私だけじゃ無理い〜」

「ああ、はいはい。今行くから」

半べその明石を余所に行動を開始する。司令部棟の在庫を持ち出し、動ける艦娘たち数名と共に一旦駆逐艦寮へ向かった。

「1箱あれば十分かな」

物置部屋に積まれている段ボールを1つだけ外に出す。箱を開けると、中には30本近いハチアブジエノサイダーが入っていた。

「皆で分けますか?」

隣にしゃがみ込んだ吹雪ちゃんが訊ねる。

「いや、このまま運ぼう。そんであのプレハブ小屋に置いといて、司令部棟から持ち出したのも一緒に管理すれば楽だ」

段ボールを運びながらぞろぞろ移動した。開発工廠まで辿り着くと、作業服を着た誰かが立ち尽くしているのが目に飛び込む。小柄で髪を結っているので女性だろうか。因みに今、工廠の出入り口は立ち入り禁止の看板が置いてある。

「あ、夕張さんじゃん」

「夕張さん」

敷波と綾波が呼び掛けると、その娘は振り返った。

「ねえ！ これ何!? 明石が何かした!？」

開口一番にとんでもない事を口走りますね……

「い、いえ。ここでハイイロゴケグモって言う種類の毒蜘蛛が見つかったので、一時的に立ち入り禁止にしてるんです。明石さんは今、司令部棟の会議室で駆除の工程とかを調整しています」

吹雪ちゃんが事情を説明した事で彼女はようやく冷静になった。ほんで、あなたも艦娘って事で間違いないですね？

「兵装実験軽巡の夕張です。ここで明石と一緒に開発とかを担当してます」

「後藤田と申します。害虫駆除と最近では害獣の捕獲も始めました。あ、そう言えばですね」

段ボールを置いて内ポケットのチラシを取り出す。

「アライグマが出没してますので、もし見かけたらご連絡下さい。場所と時間帯も教えて頂けると幸いです」

「へー、アライグマなんて居るんですね」

この言動じゃツチノコも見た事は無いようだ。あれは本当に何だったんだろうか……

「夕張さん。今から開発工廠の出入り口を安全にする作業を始めますけど、手伝っ

て貰えますか?」

「このままじゃ仕事出来ないから当然手伝うわよ。何すればいい?」

白雪の申し出に彼女は気持ちよく答えた。明石がこの場に居なくてもある程度は機械を動かす事が出来そう。一先ず、今日やる事の説明が終わる。

「手袋とかあった方がいいよね。あとマスクもか。取って来るから待つてて」

プレハブ小屋から手袋・マスク・ゴーグル等が次々に運び出されて来た。それを身に着け、出入り口の前に集まった。

「工具箱とか作業台をまず外に出して。そこで蜘蛛が居るかどうかをチェックしましょう」

夕張指揮の下、軽い物から運び出す作業が始まった。工具箱も念のため中を開けて確認していく。

「おー! こいつそうだろ!」

「落ち着きなさい、はしゃいだら危ないわよ」

「後藤田さん、居ました」

深雪・叢雲・磯波が見つけたようだ。運び出した作業台の1つに居るらしい。

「どれどれ」

台の下には工具を置くための空間がある。その裏側、しゃがまないと見えない場所に

巣を作っていた。

「よし、ちよつと離れてて。何も難しい事はない。この殺虫剤をブシューつとすればOK」

少し離れた所からハチアブジエノサイダーを食らわせる。薬剤が勢いよく噴霧される事でハイイロゴケグモは激しく暴れ、巣から逃げようとすが次第に足を閉じて動かなくなり、最後はポトつと落ちてしまった。

「死骸は火箸とかで拾ってビニール袋に入れて欲しい。ただし、卵には殺虫剤が効きにくいから踏み潰したりして貰えるかと助かり……」

「そこまで説明した所で3人の目から光が失われた。やつぱりそういうのは厳しいようだ。」

「……まあ難しいなら一緒にビニール袋へ入れて下さい。それかハイイロゴケグモだけ排除してくれたら後始末は俺がやります」

うーん、思ったよりキツイ仕事になりそうです。つかストラックスと革靴でやる作業ではないなこれ。一旦帰って着替えたいけど今日の作業的にはそこまでやらなくても、と言うのが悩み処だ……

ハイイロだけど黒とか茶色だったりもする その3

任務：開発工廠に潜むハイイロゴケグモを排除せよ 継続中

現在の時刻は午後2時。いい所、あと3〜4時間って感じた。工廠出入り口付近にあった物の運び出しはまだ途中である。

「大丈夫な作業台はそのまま建造の方に運んでー。工具箱は休憩小屋ね。蜘蛛が居るのは全部開発の前に並べといて。あと今日の作業はキャスター付きの物が運び出せた時点で一旦終わるからねー」

……

夕張が的確に指示を出す。駆逐艦は其中でキビキビ動いた。当の広樹はと言うと

「じゃあやってみようか」

「潮、参ります！」

両手でハチアブジェノサイダーを構え、ハイイロゴケグモに向けて小刻みに噴射した。

「もっと思いつ切り」

「はー！」

白い煙が一直線に繋がる。その数秒後、ハイイロゴケグモがポトつと下に落ちた。

「んじや次は回収。ゴミ袋と火箸の係はこっちへ」

黒いゴミ袋を持った漣と曙。そして長めの火箸を持つ朧が前に出た。全員しつかり軍手をしている。

「ぼのたんもつとゴミ袋の口を広げないと蜘蛛が手に付いちやいますぞ。素手じゃないからまだいいかもだけど」

「朧はそんなミスしないわよね」

「……そう言われるとしてみたくなるかも」

「ちよつと漣！」

何かに目覚めたららしい朧は不敵な笑みを浮かべながら火箸をカチカチし始めた。

「朧も止めて！ 嫌いになるわよ!？」

「ほーら喧嘩しない。さっさとやらないと終わらないよー」

「日が暮れちやいますよー」

長姉の2人がワチャワチャしてる4人を宥めた。回収を再開する。火箸で死骸を掴んだ朧が不思議な顔をした。

「……色が黒い？」

「ハイイロって名前の割には黒いわね」

「個体差があるらしいね。茶色っぽいのも居るってさ」

「確かにこつちの巣に居るのは茶色ですな」

「え？ こつち？」

屈んだ漣が作業台の下を指差していた。隣にしゃがんで覗き込むと、確か色は茶色だけれど同じ姿形のハイイロゴケグモが見て取れる。

「あー、本当だ」

「潮にお任せ下さい！」

この4人は任せても大丈夫そうだ。火箸で巣を卵ごと絡め取り、ビニール袋の中に先を突っ込んで袋の上から拭いている。これなら踏み潰したりせずに無理なく回収出来るだろう。

「こつち頼んだよ。何かあれば呼んでいいから」

「ほいさっさー」

「オツケーよ」

手こずってそうな所へ助け舟を出すべく動いた。手が止まつてる子はいねがく。

「沈め！」

「それ毎回言わなあかん？」

「不知火、あんまりやると死骸がどっか飛んでつちやうわよ」

鋭い眼光でハチアブジエノサイダーを噴き付ける不知火と火箸を持つ黒潮。そしてビニール袋を広げて待つ陽炎の姿があった。こつちも問題ないと思われる。

「これの扱いは私の方が慣れていきますから任せて下さい」

「1回ぐらいやらせておくれよ」

「浜風それ好きやねえ」

ハチアブジエノサイダーを構えて得意げな浜風に交替を懇願する谷風はビニール袋を持つていた。火箸を持った浦風が慈愛の表情で2人を見ている。

（こつちも大丈夫そうだな）

そう言えばドイツの2人は……

「えいー！」

Z1が工具箱の中にハチアブジエノサイダーを噴射している。5秒ぐらいして指を放した。

「どうかな」

「良いわね。動かなくなっただわ」

火箸を持ったZ3は自分でビニール袋を広げ、その中に死骸を放り込んだ。あつちは2人でも十分らしい。だが一方こちら……

「スプレー缶が冷たいっぽいっ」

「握る所があるんだから使わなきや。そのためにある部分なんだから」

「ちよつと村雨、そのニヤついた顔を止めなさい。何するつもりよ」

「えー？ 何もしないわよー？」

ビニール袋を広げる白露に対し、村雨は意地の悪い笑顔を浮かべながら火箸で死骸を掴んでいた。何か悪戯をしたいようだが作業が滞るのは見過ごせない。

「はいそこ。余計な事しないで作業進めて下さい」

「すんごく冷たいっぼいー」

「その出っ張つてる所を立てると手で握れるようになるよ。そうすれば冷たくないから」

「これー？」

夕立はスプレー缶にくっ付いている長方形の部分を立てた。これで握れるようになる。ガンタイプスプレー最大の特徴だ。

「すごーい！ これなら冷たくならないね！」

「いや……………さつきからそう言ってるんだけどさ」

時雨嬢の苦勞がしのばれる。そこでこつちの2人、いや主に村雨様……

「あのねえ、回りまわって自分たちが不便になるだけだからさ、ちやつちやと終わらせよう。何なら加賀さん呼んで来るけどいいかな」

「あ、それはちよつと」

「アンタこの前も注意されてたつしよ。次は何かしらペナルティが来るかもよ」

「ちやんとやります」

都合のいい時にだけ名前出してすんません。なんて思ってるその後ろに居たり……

「やつほー手伝いに来たよー」

「二航戦参上、支援任務もお任せあれ」

久々に見た気がする2人組が現れた。飛龍と蒼龍である。加賀様じゃなくて良かった。

「お疲れ様です。道具は一式ありますのでどうぞ。何を手伝うかは夕張さんにお聞き下さい」

「はーい」

相変わらずと言うか、何かこう、感覚が若いなあと思う。よお分からんものに郷愁を感じてないで仕事じゃ仕事。

「ちよつと、サボってないで混ざんなさい」

「働かないア리가居たっていい。私はそう思う」

「神通さん呼ぶわよ」

「……あう」

作業を眺める事で体よくサボっていた初雪を叢雲が上手く引きずり込んだ。んで、どうしてそこで神通さんの名前が出て来るんでしょうね。

「……………つかぬ事を聞きますが」

「はい？」

夕張は不思議そうな顔である。

「神通さんってその、駆逐艦の娘たちにとつて凄い存在なんですか？」

その質問によつて夕張の顔は何とも言えない表情に変化していった。

「あ……………神通ちゃんはその……………指導と言いますか、訓練に対してとてもストイックな所がですね」

うん。触らない方が良かったらしい。

「……………出しゃばつた事を聞いてすいませんでした」

「いえいえ、上手く言葉に出来なくて申し訳ないです」

何だかんだで作業は落ち着きつつあった。時刻は既に4時である。しかし、明石はまだ姿を現さなかった。

「今日はこの辺にしておきます？」

「欲を言えばもう少し何かしたいんですけどね……………どうしたもんか」

出入り口周辺で取りあえず運び出せる物は全て建造工廠の方へ移し終わっていた。

今は後から混ざった二航戦の2人と駆逐艦数名が、それらをもう1度チェックしている。見落としがあれば今度は建造工廠も巣窟にしてしまう可能性があるため、二重のチェックは大切だ。

「異常なしつと」

「ちよつと巣が残ってるね、拭き取ろうか。飛龍、火箸とウエス貸して」

「はい」

チェック作業も任せて大丈夫なようだ。あれなら安心出来る。

「様子を見て来ます。時間的にはあと1時間が限度でしょうし、出入り口周辺を少し掃除するぐらいが丁度いいかも知れませんね」

「そうですね。じゃあそれはこっちでやっときます」

「お願いします」

「はい。みんなー、1回集合してー」

ワラワラと集まる駆逐艦たちを尻目に司令部棟へ向かった。随分と長くやっているが、向こうはどうなったのだろう。

足早に司令部棟まで戻って来た。中に入ろうとしたその時。

「お待ちなさい。そこに何の用ですの」

「はい?」

声のした方を振り向くと、ブラウンの髪を高い位置で結っている娘がこつちを見ていた。腕を組んでいるせいかわ威圧感も感じる。私は決して怪しい者では……いや、初対面の場合には不審者と思われるでも仕方ないか。しかも今は一人で付き添いも居ないし。

「えーと……業者の者です。害虫駆除サービスの後藤田プロテクトクリーンと申します」

「業者の方と言えど重要施設への立ち入りは禁じられていますわ。その場合は特別な許可証が」

「これですか？」

首から下げたカードを見せた。

「!?!?!」

いやそんなビックリされても……

「大淀さんから今日のためにお借りしております」

「だ、騙されませんわ。何か怪しい事をするつもりでしょうかがこの私に見つかった以上」

「おや、今日は何の作業だ」

通り掛かりの日向が現れた。

「ああどうも。工場の方で毒蜘蛛がですね」

「この前みたいに素早くて厄介なヤツなのか？」

「今度のは巢を張るタイプですね。毒はそこまでなんですけど数が多いいもので」

「なるほど。気を付けてな」

「ありがとうございます」

日向は去って行った。

「……ど、どうして日向さんと」

「何度か作業を手伝って頂いた事がありました」

「騒がしいわね。司令部棟の前で何をしているのかしら」

あー、頼もしくもあり厄介な方がいらっしやいましたよ畜生。今日は顔を合わせずに済ませたかったのになあ。

「加賀さん！ 不審者ですわ！」

「不審者ではないわ。そう見えているのなら、あなたにも何か非があると言う事よ」

「上下作業着ならいざ知らず今日は幾分かフォーマルな恰好だと思うんですけどねえ」

「さ、急いでるんでしょう。早く行くといいわ。こっちは任せて」

「すみません」

「お待ちなさい！」

「熊野、こつちへ来なさい。一から説明してあげるわ」

後ろから聞こえる声をスルーして司令部棟に入る。執務室に戻ると、相変わらず半べ

そ&鼻水を流している明石がノートPCを前にチマチマと何かを打ち込んでいた。

「無理い、こんな先のスケジュールまで考えるなんて無理い」

「取りあえず来週と再来週だけを考えて。それぐらいなら出来るでしょ」

「編成なんてした事ないもん」

うーん、かなり難航してそうだ……

「……あのお、進捗はどうでしょうか」

「あ、すいません。まだ少しかかりそうです」

「少し所じやないってえこれ」

全部を1人で仕切っていると、何にどれぐらいの人数を割り振るかは難しい作業だ。それは俺もよく分かる。

「えーとですね、今日出来そうな事は一通り終わりに近付いてまして、何か段取りが組み上がってればそれをやって本日は終了と言う流れになりつつあるんですが」

「申し訳ありません。じゃあその部分だけでも早急に」

「鬼い、悪魔あ、大淀お」

聞いちゃいけない言葉が聞こえた。提督さんが席を外しているのが幸いなのかどうか俺には判断出来ないが、これは空耳で済ませられる状況でもない。

「……いま何か言った？」

メガネが光ってる。声が低い。怖い。

「ひいー」

「えーと、もしご迷惑でなければ、お手伝いとかさせて頂いても、宜しいでしょうか」

取りあえずでもこの場を収めなくてはならない危機感が俺を突き動かした。胸ポケットのUSBを取り出す。

「自分がよく使ってるエクセルのデータがありましたですね。そもその人数がどれくらい居て、何の作業にどれだけの人数を割り振って工程を組み上げていくかを分かりやすくしたものがございました。あ、USBだと危険ですよ。でしたらメールでそちらのPCにお送りしますので、もし宜しければ使ってみてはどうかというご提案なんですけれども」

かなりの早口で捲し立てた気がする。明石はその言葉に救世主を見つけたような表情になり、大淀はさっきまでの自分の言動を思い返して顔を赤くしていた。

「あ、えつと……………お見苦しい所を」

可愛い。

「そ、そのデータ、お借りしても」

「はい。自分で適当に作ったやつなんで、好き勝手に作り変えて貰って大丈夫ですのよ」
やっぱりUSBはウイルスや何やらの危険性もあるので、オンラインストレージに

アップロードしてから鎮守府の共有アドレスに転送した。

「えーと……これをダウンロードして」

ダブルクリックの音が響いた。

「……うわあ、すつごい。人数打ち込むだけでいいんですねこれ」

「これはGの罠とか毒餌を交換する時の一例です。因みにセアカゴケグモの時を参考に作ったのがシート3の方ですね。これを見ながら考えると分かりやすいかも知れませんが」

「ありがとうございます！ これなら簡単ですね！」

さつきまでの表情が飛んでいった明石は悠然とキーボードを叩き始めた。

「……今日は終わりでいいですかね」

「はい。また後日お願い致します」

執務室の外に出る。

「さつきは申し訳ありませんでした。変な所をお見せしてしまつて」

「いやあ自分も店でよく親父と口喧嘩したりしますよ。外回りの最中とかに、担当者の人とその上司が急に口論し始める場面とか遭遇しますし」

あれはかなり居心地が悪い。せめて2人だけの時にやってくれと思う。第3者の前ではやらないで欲しいです。

「明石とは同じ時期の配属なんです。突っ込んだ事とか言い合えるので、私としても有難いんですけど、時々あんな感じになったり」

「いいじゃないですか、右見ても左見ても肉親よりは」

「大淀ー！ 1つ出来たー！ 見て見てー！」

「はーい。では後でご連絡しますね」

「分かりました。自分は現場の方に解散を伝えて来ます」

司令部棟を出て工廠へ向かい、今日はこれで終了である事を伝えた。次の作業日はちようど一週間後だ。その間、工廠の出入り口付近にハチアブジェノサイダーを徹底的に撒いて、外への勢力拡大を防ぐ措置が取られている。

森の中には何がある？ いや、居る？

広樹です。今日は定期チェックの日です。まず執務室に寄って、各寮や施設にどれだけ居るかの大まかな時間、そして作業内容が書き込まれた工程表を提出しに行きます。提督さんは居なかったので大淀さんに手渡す。

「おはようございます。本日の工程表です」

「はい、確かに」

どれ今日も頑張りましょうかね……はて、大淀さんの表情が少し暗い？

「……………どうかしました？」

「え……………あく……………いえ、大丈夫……………です」

本人が大丈夫と言うならあんまり突っ込まない方がいいか？ って訳でお仕事お仕事。事。

鎮守府を東奔西走してあちこち駆けずり回る。気付けば時刻は昼をとつくに過ぎている。いた

「さーて、今日はこれでお終いっつと」

チェックリストに記入漏れは無い。全て終了だ。足元に転がる無数のゴミ袋は全部

車に押し込んでやるぜ。

「腹減ったなあ。食堂で何か食って帰るか」

車に積んでいる台車を取りに足を進め出したその直後、キョロキョロしながら歩く大淀さんが視界に飛び込んだ。どうしたのかと思っているとこつちを見た途端に駆け寄って来る。

「すいません、もう帰られる所ですか？」

「後作業が残ってるのでまだ居るには居ますけど……もしかして何か出ました？」

「えーと……部外者である事を承知で、お願いがありました」

お願い。聞きましょう。でもその前に……

「分かりました。ただ昼もまだなんで、その後でいいですか？」

「はい。執務室でお待ちしますね」

一旦別れて、ゴミ袋を車に積んでから昼を食いに向かう。部外者なのを承知で、と言う事は恐らく内部に関わる何かで頼み事があるのだろう。都合よく曲解出来る部分は存在しない。

まあでも……買い出しを手伝って欲しいとかだったら嬉しいかも……

つて訳で昼を食った俺はまた司令部棟に戻って来た。階段を上がって執務室を前にする。

「……よし」

ノックした。「どうぞ」と言われたのでドアを開ける。

「失礼します。お待たせをしました」

「お疲れ様です。コーヒーを淹れますから、座って待って下さいね」

「どうやら今日は提督さんも加賀様も居ないようだ。それ所か今日の鎮守府は何時ぞやのように人気が無い。取りあえずソファに浅く腰掛ける。」

数分後、恐らく安物ではないであろうコーヒークップとソーサーがテーブルに2つ置かれる。小脇に何かの資料を挟んだ大淀さんが向かい側に座った。

「それでお願いと云うのは」

「……まず、これをご覧下さい」

テーブルに資料から取り出された一枚の写真が置かれた。

「……………航空写真ですか？」

「はい。この鎮守府を上空から撮影したものです。それで……」

大淀さんが一箇所を指す。

「ここに建物があるのはお分かりですか」

「……………あー、何かありますね」

そこは鎮守府の北。殆ど森しかないが、何か建物があるのが分かった。

「鎮守府建設の際、この辺にも何か建物を作る予定で土地を買い上げたそうなんです、結局は何も作らずに終わってしまい、手付かずになっていている場所なんです。実は近い内に用地確保に伴う開発が予定されておりまして」

「この辺が含まれていると」

「はい。記録ですと、廃業した水産加工会社の社屋と小さな工場があつたそうなんです。それで……」

「取り壊しの前に状況の確認が必要……そんな所ですか？」

「……はい」

見えて来た。森の中にある何が居るんだかよく分からない場所を1人で探るのは勇気が要る。もしかすると、まだ見ぬ危険な外来種が潜んでいる可能性も高い。

「予算取り付けのために、上の方から早めに状況を調べて欲しいと言われてまして……ただ鎮守府は今、提督も含めて大勢が出払っている状態なんです」

「分かりました。ご一緒すればいいですか？」

大淀さんの表情が明るくなった。やめて。惚れてまうがな。

「ありがとうございます！ 1人ではちよつと怖くて」

「どうやらこの件で悩んでいたらしい。俺みたいなので良ければいつでも馳せ参じますです。」

「まあ男でもこれを1人でやるのは少し抵抗がありますねえ。それで日時はどうされま
すか」

「明日は厳しいでしょうか。あまり時間がないもので……」

「ちよつとお待ち下さい」

手帳を広げる。俺が行かないといけない案件は無かった。外回りは親父にやらせればいいな。たまには働かせないと店の椅子に座ってるだけの存在になってしまうし。

「大丈夫ですよ。虫が飛んで来る可能性もありますから、メツシユのカバーが付いた帽子を持って来ますね。それと長靴か安全靴みたいなのはありますか？」

「自分で考えて必要そうなのは一応揃えてあるんです。でも帽子はお借りしたいですね」

「殺虫剤も1つぐらいあった方が良さそうですね。今回はお手伝いの範囲ですので料金等については大丈夫です」

「申し訳ありません。では明日の朝9時に来て頂きますか？」

「承知しました。何か変更点があれば店の方までご連絡下さい」

ちよつと冷めたコーヒーを飲み干してから失礼した。駐車場まで戻って来た所で、ふと気付く。

「……ほぼ1日2人つきりか」

何だかんだ一緒に居る事も多かったが、精々が1〜2時間程度である。恐らく明日は9時から昼を跨いで午後まで掛かる筈だ。そう考えると、これまで最も長い時間を過ごす事になる。

「……………あかん、意識したらあかん」

これはお手伝いだ。やましいものではない。取りあえず自分を納得させて車に乗り込み、家へ帰った。

帰宅と同時に明日の準備に取り掛かる。メッシュカバー付き帽子を2つ。殺虫剤を予備まで含めて4本。1人2本持つ計算だ。あとは手袋やら安全靴を用意する。若干でもウキウキしている自分を無理やり冷静にさせ、今日を終えた。

翌日。鎮守府に行く途中のコンビニで昼とスポーツドリンク、ウエットティッシュを買った。もしかしたら手作りの弁当なんて用意してくれたりして、なんて都合の良い妄想を消し去って現実的に考える。出入り業者とはそもそも訪問先に迷惑を掛けないのが鉄則だ。利用してもいい施設があれば利用するが、そうでないのなら自分たちで用意しておくべきである。

「……………行くか」

エンジン始動。いざ鎮守府へ。

正門で以下略のやり取りを行う。来客用の駐車場へ車を進めた所で、視界の端に映っ

た存在を意識しない事に全神経を集中させた。

「おはようございます」

「おはようございます。本日はよろしくお願い致します」

長靴。ツナギ。背中にはリュックサック。そして、髪を後ろで纏めた大淀さんの姿見入ってしまいそうになるのを悟られてはならない。絶対にだ。

「えーと、これが帽子です。それと殺虫剤は2本持つといて下さい。使い切る事はないと思いますけど念のため」

「はい。ああ、草刈り鎌をどうぞ。昨日、森の入り口付近をちよつとだけ見て来たんですけど、結構背の高い草が沢山ありましたので、進むのに便利だと思います」

「ありがとうございます。じゃあ行きましようか」

少し。いや、暫く歩いた。敷地内の通路は車が走れる広さを確保されているが、そのためには単なる入場許可証ではない特別なやつが発行が必要だそうだ。これの発行は時間が掛かるので、昨日の今日では用意出来ないものらしい。

「ここから入ろうと思います。ちよつとずつ行きましよう」

「お……かなり鬱蒼としていますね」

と言うか不気味だ。森が濃いせいで陽の光が差し込んでない。こんな所に鎌1本で分け入っていくのは重労働である。

「よいしょっと」

草を刈りつつ道を切り開いていった。人が通れるだけの幅を作って進んで行く。

「これはキツイですね。1人でやったら1日2日じゃ終わらないですよ」

「距離も結構あるみたいなんです。無事に着けるといいんですけど」

黙々と草を刈り続けた。森に入って1時間近くが経過した段階で小休止を取る。

「あー、腕がいてえ」

「はあ……疲れた」

草を踏み分けて座る場所を作る。帽子を外して水分補給だ。

「あとどれぐらいでしょうね」

「もうちよつとだと思えます。途中で、社屋と工場があつた敷地内に入るための道路に出る筈なんです。鎮守府に来る途中の道で、フェンスで塞がれている所があるのはご存知ですか？」

「ああ、山を下りた所のカーブの途中ですね。あそこがここに伸びてるのか」

と言う事は、どつかで舗装された道が現れるって訳か。なら迷う事はないだろう。

「そろそろ再開しますか。こんな所でも日が暮れると何が出るが分かりませんし」

「はい。頑張りましょう」

また暫く、鎌を振り続けた。その途中で急に空間が開け、割れたアスファルトから草

が生えている古い道に飛び出す。

「お、これがその道ですか」

「えーと……………向こうですね」

道路に対して垂直にぶち当たったので、右に向かって進む。左に行けば恐らくフェンスの所へ出る筈だ。それでは意味がないので右へ進む。5分ばかり歩いた先に出て来たのは、雰囲気MAXの廃墟だった。

「……………ここが鎮守府の敷地じゃなかったら、入り込んで肝試しとかしてる連中が居そうですね」

「写真を撮りますので、ちょっと待って下さい」

大淀さんが備品のデジカメで外観とここに来るまでの道を撮影した。それが終わると、中途半端に開いた古びた正門から敷地内に足を踏み入れる。地面は草が生い茂って何がどうなのか分からないが、恐らく立っている辺りが駐車場で、目の前にあるのが社屋で、左にあるのが工場のようなのだ。

「……………佐々木水産……………あー、ここだったんだ」

赤錆びた看板の文字が何とか読み取れた。子供の頃に母親と近所のスーパーへ買い物に行った時、缶詰コーナーで「佐々木の鯖缶」なんて商品を見たのを思い出す。ここがその工場だったらしい。

「ご存知ですか？」

「子供の頃に近所のスーパーで売ってた缶詰のメーカーみたいです。気付けば見なくなってたんで、知らない内に潰れてたようですね」

まあそんなのはどうでもいい。写真を撮る大淀さんの後ろで周辺を見まわしつつ警戒した。

「中に入りますか？」

「……あんまり入りたくないんですけど、必要ですから」

困り顔の大淀さん、いいですね。

「じゃあ先に入りますね。一応、人の気配が無いかだけ確認します」

社屋の正面入り口から中に入った。ガラスが散乱してないので、保存状態は良さそうである。積まれた段ボール箱や応接セットも、経年劣化はしているがほぼそのままだ。床も埃や落ち葉が溜まっている事から、人の出入りは無さそうなのが分かる。

「大丈夫みたいです。どうぞ」

「は、はい」

資料を上に乗すだけなら、またその内に解体業者か何かが見に来る筈だ。なので今回は奥まった部分や部屋の中までは探らず、大雑把にこんな感じだと分かる写真が撮れば良いだろう。

それにですね、万一に住み着いている人が居た場合を考えると、何が起きるか分からなくなります。もしもこつちが大勢で向こうが1人なら、あまり大きい声では言えないけど最悪は何とかなるじゃないですか。でも今、我々は2人だけです。だから否応にでも慎重に行動する必要があります。

と言うか、何人だろうがでこんな所に入出入りするのに関心しませんが……

「あんまり奥には行かないで下さい。床を踏み抜いたりしたら危険です」

「変な気分ですね。何かの痕跡があるのに、誰も居ないので……」

取りあえずここはもういいだろう。外に出てまた休憩となった。作業着を捲って腕時計を見る。

「……もう12時前なんだ」

「お昼にしましょうか。間宮さんにお願いでして、お弁当を作つて貰つたんです」

あ、はい。出来ればあなたの手作りが食べたかったなあ、なんて口が裂けても言いませんけどね。

「いやあすいません。昼の事なんてすっかり忘れてましたよ」

リュックに入っているおにぎり達よ。帰ったら食うからそれで勘弁してくれ。

「どうぞで」

「頂きます」

手提げに入った間宮さんのお弁当を広げる。内容は稲荷寿司と円筒状の容器におかずが入っているものだった。とても美味しかったです。

昼休憩を済ませ、探索を再開する。今度は工場側だ。

「また先に入りますね」

先陣を切って中に入った。こつちも人が出入りした形跡は無さそうである。

「大丈夫です」

「はい」

汗が出て来た。帽子を取ってタオルで汗を拭おうとしたその時、鼻先を嗅いだ事のある何かが掠める。

「……………大淀さん」

「何ですか？」

「壁に寄って下さい。それと暫く喋らないようお願いします。動物が居そうなので」
大淀は無言で頷き、壁にそつと体を着けた。

「……………お？」

床に見た事のある模様を発見。しゃがみ込んで確認すると、それは足跡だった。

「……………どつかに居るな」

獣の臭いだ。恐らく、ここ最近ずっと探していたアイツが居る。足跡を追っていく

と、開けっ放しになっている部屋の中へ伸びていた。

(ちよつと失礼しますよつと)

仕事道具の1つであるファイバースコープを取り出す。隙間に突き刺すと、中がどうなっているか見れる優れ物だ。内視鏡検査とかに使われてますね。

(……寝床発見)

部屋の隅でアライグマが寝ていた。ここがヤツの住処らしい。

「……………どう攻めるか」

幸い、この部屋に窓は無い。ファイバースコープの先端をグリグリ動かして確認するが、他に出入り口も無さそうだ。と言う事は袋の鼠に出来るかも知れない。

「よし」

音を立てないよう静かに立ち上がり、正に抜き足差しでそこから遠ざかった。

「すいません、出ましょう。アライグマが居ます」

「……………こんな所に？」

「今は寝てます。申し訳ありませんが、捕獲を優先させて下さい」

一先ず外へ出た。工場の探索は中止して司令部棟まで足早に戻る。

「誰か人手を……………2人か3人ぐらいで良いんですが」

「ちよつと待つて下さいね」

あちこちへ内線を掛けている。そう簡単に捉まらなれと思っていた矢先、重巡寮で予定より早く戻っているグループが居ると判明した。

「呼び出しました。青葉さんと衣笠さん、利根さんに筑摩さんが来てくれます」

「分かりました。捕獲機を持って来ますから、ここで待機されるようお伝え願います」

司令部棟を飛び出して間宮さんのお店に向けて走り出す。罠に掛からない強敵だと思っていたが、あんな所で寝ているとは想像もしてなかった。このチャンスを逃す手はない。

アライグマ包囲網

まさかと言う場所でアライグマが寝ている所を発見した広樹。設置してある罠を大急ぎで回収に向かうが、よくよく考えれば4つぐらい仕掛けてあった事を思い出していた。

「……………全部を1人で回収するのは無理か」

いや、ここは急がねばなるまい。1つでも運んだら、その間に4人が執務室には来ているだろう。そしたら総勢6人で残りの罠を運べばいい。

「急げ急げ」

お店は閉まっていたから素早く罠を回収。両手で金網の隙間を掴んで持ち上げ、何とか司令部棟まで戻って来た。

案の定、執務室には4人の姿がありました。

「久しぶりじゃの。あの時はろくすっぽ自己紹介も出来なかったら改めて名乗らせて貰おう。利根型重巡洋艦、1番艦の利根じゃ」

「2番艦、筑摩と申します。微力ながらお手伝いさせて頂きます」

「青葉ですー！ ムカデの件ではお世話になりましたー！」

「青葉型2番艦の衣笠よ。改めてよろしく」

重巡は何と言うか大人っぽいですね。でも戦艦や空母ほどでないのがポイントか。

それで、青葉さん？ 額に固定されてるG o P r oは何ですか？

「後藤田です。以前お会いしてると思いますがよろしくお願い致します。えーと、それは撮影か何かですか？」

「もし宜しければ本日の作業を記録させて欲しいです。レクリエーションの時とかに編集したものを流せないかと思ひまして。あ、ちゃんとモザイクとか入れますからね」

「あー……ネットの海に流さなければ特には構いませんが」

「ありがとうございます！ それと出来れば後藤田さんもG o P r oを着けて下さると幸いですー！」

「いやー壊したら申し訳ないので」

「大丈夫ですよ、そんな簡単には壊れませんから！ 型落ちなんで最悪はメモリーカードさえ無事なら問題ありません！」

つて訳で何か丸め込まれてG o P r oを装着する事になった。一瞬だけ某動画投稿サイトで「害虫害獣ハンターチャンネル」みたいなのを開設して副収入を、なんて考えが過ぎる。再生数を考慮すると駄賃にもならないだろうか。

「それではですね、申し訳ありませんがまず罫の回収を手伝って下さると恐縮です。あ

と3つあるんですが、短時間でここへ集めたいので全員で行きましょう」

6人でぞろぞろ移動した。2人1組で罨を回収してまた執務室に戻って来る。

「ワクワクしますねえ！」

「青葉、落ち着きなさいって」

「なるほどのお、罨とはよく出来ているもんじゃ」

「逃げ出したりはしないんですか？」

「それなりに高い物なら聞く限りでは事例がないそうです。ただ、メンテを怠ると錆びとかで劣化して、そこを破って逃げる事はあるらしいですね」

さて、作業の割り振りを決めなければならぬ。だが今回は殆ど自分が矢面に立つしかない。手伝いは最低限だけお願いしようと思う。

（罨を2段に積み上げて入口に押し当てて、誘い出してそのままお縄を頂戴する。もし逃げ出した場合を考慮して左右にも罨を置いて逃げ道を塞ぐ……これで行くか）

ふと、車に積んでいた例の物を思い出した。あつたら便利程度の物だが、無いよりはいい筈である。

「大淀さん、ちよつと忘れ物を取って来ます。その間に皆さんの着替えを済ませて頂けると有難いです」

「はい。諸々はさつき夕張に連絡しましたから、間もなくと思います」

「ありがとうございます。では少し失礼します」

司令部棟を飛び出し、駐車場まで走った。荷台からブツを取り出し、駆け足でまた司令部棟に戻って来る。

執務室に入ったら既に全員の着替えが終わっていた。作業着に安全靴。何用かは知らないが皮手袋もしている。髪も纏めて帽子を被った完全武装だ。

「お待たせしました。まず皆さんにこれを一本ずつお渡しします」

熊避けスプレーを手渡した。実際に撃退した功績のあるメーカーから取り寄せた商品である。

「使い方は普通のスプレーと同じです。ただ、熊を退けると言う事は当然、下手すれば使用者もダメージを負いかねません。建物に入ったら念のためマスクもするようお願いします」

って訳で罨を担いで廃工場へ引き返した。罨を持ち上げる際は専用の取っ手があるのでそれを使って運ぶ。罨に掛かった野生動物の爪で万一にでも怪我をしないよう、そこそこの長さがあった。

「まず罨を2段に積み上げます。結束バンドがありますので、これで所要所の固定をお願いします」

罨は扉が上から落ちて閉まるやつではなく、中に入ると内側から閉まって出られなく

なるタイプだ。罨の作動に必要な個所を上から邪魔しないようにズラして、ゆっくり2段に積み上げる。

「えーと……今から残った罨を2つ中に運ぶんですが、その映像はあつた方が？」

「是非とも！」

「じゃあ最初はここで罨を固定する風景と実作業を撮影して下さい。もう1つ運ぶ時にお手伝いをお願いします。では大淀さん、1つ目を中に運びましょう」

「はい」

1度は中を見ている事もあり、1つ目の移動は大淀と共に行った。最初に中へ入ったルートから息を殺しつつ足音も出さないで、アライグマが眠る部屋の前をこっそり通る。これでアライグマから見て右方向へ罨の設置が終了した。一旦外に出て今度は青葉を呼ぶ。

「青葉さん、お願いします」

「承知しました！」

2つ目の移送も無事終了。積み上げた罨はまだ外にあるので、アライグマから見て左方向を完全に塞ぐのはもう少し後だ。この間、青葉は終始ニッコニコだった。

「いいですねえ。非日常を味わうのは新鮮です」

「あー……まあ自分もここに出入りする時は同じ気持ちですかね」

また外に出る。積み上げた罨の固定は終了したようだ。

「こんなもんでどうかの」

「ガツチリ固定したわ。ちよつとやそつとじゃ外れないわよ」

「如何でしょうか」

「ありがとうございます。念のため、作動の確認をします」

1段目の作動をチェック。問題なく扉が閉まった。大きな音を出すと逃げられるかもしれないので、扉は閉まる手前で止める。2段目も無事に作動してくれた。

「じゃあコイツを運びます。ゆっくりいきましよう」

今度は4人がかりで中に運んだ。罨の入り口を部屋の前に対して垂直に向けて設置する。

「配置ですが、右の罨は青葉さんと衣笠さんでお願いします。左を利根さんと筑摩さん。罨を押し付けるのは自分がやりますので、大淀さんはこの発煙筒を中に投げ込む役割をお願いします」

こうして部屋の正面と左右の封鎖が完了。全員がマスクを着け、右手にはスプレーを持った状態だ。見た感じでは完璧に包囲しているがどうなる事やら……

罨に手を掛ける。両手は防刃繊維が組み込まれた頑丈な手袋。もし引つ掛かれても大丈夫な筈だ。

「お願いします」

「は、」

大淀が罨越しに部屋の中へ発煙筒を投げ込んだ。因みにこれは無公害発煙筒と呼ばれるものである。単純に驚かすのが目的だ。

落下した金属音と共に白煙が一斉に立ち昇る。爪の先が床を擦る音が響いた。驚かす所までは成功のようだ。

「よーし来い来い」

軀のような声が聞こえた。あれは威嚇している声だ。

(いつ突っ込んで来るかな……)

それなりの質量が飛び込んで来る瞬間に備える。だがヤツは予想外の行動を見せた。煙の中から飛び出して来たアライグマは、罨が2段になっている中間を足掛かりにして2段目の上に躍り出た。まさかの事態に変な声が出る。

「はあ!」

自分から見て右、アライグマからだど左へ飛び出そうとした瞬間、大淀がスプレーを一瞬だけ噴射した。敏感な嗅覚が逆手になって拒否反応を示したアライグマは右へ逃走。青葉と衣笠が居る方に向けて突進する。

「来るよ!」

「決定的瞬間、頂きです！」

スプレーを構える衣笠を見てまた嫌な臭いを嗅がされると思ったのか、アライグマは罨の上にジャンプして取り付いた。

「ひゃあ！」

「青葉、危ない！」

アライグマは罨の細い網目を器用に足場とし、咄嗟に身を引いた青葉の足元を駆け抜けてその後ろにあつた階段を上り2階へ姿を消した。あんな動きをすることは誰も思わず、ポカーンとしてしまう。

「大丈夫かお主ら！」

「あんな機敏に動く動物だったんですね」

「怪我はありませんか!？」

「わ、私は大丈夫です」

「ビックリしたね」

2階かあ……どうするかなあ……

「ちよつと見て来ます。申し訳ありませんが、罨を階段の前に集めておいて下さい」

スプレーを構えて階段をゆっくり上がる。踊り場は1つだけだった。2階も1階と同様、人の出入りは感じられない。部屋数は1階と違って少し変則的だ。階段もここだ

けらしい。3階は存在しないのもう上へ逃げる場所はなかった。

「……向こう側からは1階に下りれないようだな。だったら」

何れにしろ袋のネズミだ。重ねた罨だけをここに持つてくればいい。手前の部屋から風潰しに探せば遠からず見つけられるだろう。

取りあえず1階へ戻って作戦を伝えた。6人全員で罨を運び、搜索を開始する。

「では始めます」

ファイバースコープ片手に部屋へ近づく。中途半端に開いたドアから見える様子だと中は個室ではなく、隣の部屋と繋がった構造だった。しかも廊下側には隣の部屋への出入り口がない。

(……マジかあ)

ここからでは奥の部屋の状況までは見えない。仕方ないので少しだけ部屋の中に足を踏み入れた。その瞬間、暗闇から何かがあつ込んで来た。

「うおー」

接近を回避するため反対方向へ走ると何かはドアに激突。同時に床へまた違う何かが落ちる音がした。それが何の音なのか理解するよりもまずは自身の安全確保が大事だ。

「……そこに陣取られると廊下に出れんじゃないか畜生」

アライグマはドアの前でこちらを威嚇している。一先ず奥の部屋に移動して距離を取ろうと思ったが、向こうは床が崩落していてどうにもならなかった。これでは逃げ場がない。

「……………しかもお前、ドアノブ壊しやがったな」

床には赤錆びたドアノブが転がっていた。窓は開きつ放しだから雨風で劣化したんだろう。そしてドアが内開きだったのは階段が近い場所だから避難時の移動を阻害しないようになのかどうかまで知らんが、これではもしアライグマをどうにかしたとしても外へ出れない。下階へ飛び降りるのはもつての他だ。

『後藤田さん！ 大丈夫ですか?!』

『中に居たんですかあ?!』

『ドアが閉まったぞ！ 何があった!』

廊下から声が聞こえる。どうしてくれようか……

「ドアの前にアライグマが居て出られません！ さっきの衝撃でドアノブが落ちて中から開けられない可能性があります！ そっちから動かさせませんか!」

『やってみます！ 罨も目の前に運びますね!』

ガチャガチャと音がした。錆と劣化でそもそも歪んだドアがアライグマの突進で更におかしくなった可能性は高い。

『ビクともせんぞ!』

『姉さん、貸して下さい』

バキツと音がした。嫌な予感がする。

『……あら』

『ちよ、筑摩さん!?!』

『筑摩あ! お主まで壊してどうするんじゃ!』

あー……どうしましょうね……

『蹴破ろう! もうそれしかないよ!』

捕獲は最悪諦めた方がいいみたいだ。まず自分の安全が第一である。

「何でもいいんでお願いします!」

取りあえず時間稼ぎだ。アライグマも出来れば下階へは飛び降りたくないらしく、ド

アの前を譲ろうとしない。

ドアがバンバン蹴られるが全く動く気配は無い。その音が幸いしてアライグマはドアから少しづつ距離を取り始める。

「よし根比べだこの野郎」

スプレーをちよつとだけ撒いた。アライグマは目で見て分かるほどの嫌そうな仕事を

睨み合つたまま数分が過ぎる。ドアを蹴る音は止んでいた。人手を集めるから何とか待つていて欲しいと言われたので現状を維持している。

(窓から上手く外に追い出すか……それとも隣の部屋に追い込んで1階へ落とすか)

選択肢は少ない。怪我もしたくない。さて……

『ドアからの位置を教えてください』

「ハ、ハ」の声は……

「ちようど延長線上に居ます」

『右に向けて蹴るぞ。蝶番との関係上で左には行かない筈だが気を付けてくれ』

「お願いします」

廊下から見て左方向の壁に体を寄せる。アライグマはこつちがどうして動いたのか理解出来ないようだが、部屋のほぼ中心まで移動した。

『いくぞ』

どうやっても開きそうになかったドアが蹴破られた。ハツとしたアライグマは廊下へ飛び出す。目の前に突然現れた罠に勢いよく飛び込んで囚われの身となる。

「待たせてしまったな。怪我はないか」

「ええ………何とか」

武蔵様が居られました。

「こいつが例のアライグマか。無事に捕まえられて良かったな」

そして罫の後ろには長門様。何じやこのイケメン2人は……

「ご迷惑をお掛けしました。ありがとうございます」

「気にしないでくれ。普段のお礼だ」

「間宮のゴミ置き場を荒らして蠅を大量発生させた下手人はコイツか。外見は可愛らしくとも侮れない存在だな」

廊下に出ると6人が待っていました。

「ご無事で何よりです」

「怪我が無いようで一安心じゃ」

「足を引つ張つてしまい申し訳ありません。あんな簡単に壊れるとは」

「う、うん。そうだね」

衣笠は筑摩がそこそこの勢いでドアノブを捻つたのを目撃したが黙っている事にした。青葉はGoProの映像を期待してか表情が明るい。

「取りあえず空の罫だけ外へ出しましょう。後は役所に連絡しますから、回収はそつちの人たちをお願いします」

空の罫は施設の外に出す。アライグマ入りの方は2階に置いたままだ。役所にも連絡した。

「GoProをお返します」

「ありがとうございます！ 後で確認しますね！」

疲れた。どっかで寝たいなあ……

鳳翔さんのお店

アライグマの捕獲が終わったから一安心。ではないのだった。

可能な範囲で施設内をもう一度調べる。何でかって？ 今の所はアレが1匹だと言う確証が無いんです。映像に映っているのはもしかすると別個体かも知れません。と言う事はですよ。

もしかすると幼獣（子供）が居る可能性があるじゃないですか……

「えー……」協力、ありがとうございました。言い難い事なんですけど、もう少しだけお手伝いをお願い出来ますでしょうか」

7人はキョトンとしていた。長門様と武蔵様もいまいち状況が飲み込めていない。

「アライグマの子供が何所かに居ないか確認する作業をしたいんです。全部は無理ですが、30分ばかり使って工場部分だけでも探したいと思います。アライグマがこれ1匹だけなら子供は居ない筈ですが、もし番が居ると状況は一変します」

「なるほどな、では急ごうか。雲行きも少し怪しい」

長門が空を見ながら言う。確かに嫌な色をし始めていた。

「2階はやりまますから、取りあえず皆さんには1階をお願いします」

って訳で搜索を始める。幸いにも子供は見つからず一安心だ。アライグマ入りの罫は建物の中に残しておけばいい。役所の人に来てくれるので、回収はその人たちにお任せである。

「よし、引き上げだ。戻るぞ」

武蔵様の先導で司令部棟まで戻った。大淀さんの仕事もさっきの搜索に便乗して終わらせた。俺はと言うと……

「申し訳ありません。少し休ませて頂きます」

「朝早くから来て頂いてありがとうございます。仮眠室の方を開けますから、そこでお休みになって下さい」

集まってくれた皆はそれぞれの寮へと帰って行った。開けて貰った仮眠室で暫し休息を取る。約1時間後、携帯のバイブレーションで目を覚ました。

「もしもし……はあ、なるほど」

役所からだった。担当者が別の方にも回収に行っているため、一旦戻って来ると今日は終業時刻になってしまうので明日の朝一回収になると言われた。

「んー、何とかありませんか……ならない。分かりました。因みに朝一は何時になりますか。9時。承知しました。ではお待ちしております」

塩対応気味に電話を切る。まあ掛けたのは昼過ぎだったし、時間的にも微妙だっただ

ろうか。いやでもさあ、その場で確認取ったら明日になるって言えたじゃん。何だよ畜生。後出しのクセに偉そうな口調で電話して来やがって。

「……ええい、どうしてくれよう」

暴れたい気分になって来た。暴れないけどね。

「外の空気を吸いましょうか」

仮眠室から出て司令部棟からも出た。深呼吸して気分を落ち着ける。そこへ……

「今日は何の作業ですか？」

優しい声色で呼び掛けられた。振り向くと、鳳翔さんがいらつしやいました。

「いえ今日は少しお手伝いに来たんですが……まあアライグマも捕獲出来たんで万々歳だったんですけど役所関係でちよつと色々あります」

「怖い顔してましたよ。嫌な事だったんですね」

お見通しのようです。

「……ええ、何だかなあつて感じでして」

「今日、お店に来ませんか？ 提督や警備の方たちも呼んで、ゆっくりお酒でも」

とつても魅力的な提案だけど、問題は帰りの手段である。バスは夕方でお終いだし、かと言って車に乗ればどうやっつたって飲酒運転になってしまう。

「あー……そうですなあ」

「もしあれでしたら、今日は泊まられて下さい。提督はもう少して戻られますし、私の方からもお願いしておきますから」

そんな贅沢を味わって良いのだろうか。ここはまかり間違っても宿泊施設ではないのだ。

「……………いいんですかねえ」

「ご家族には零せない事もあると思います。あんまり騒がれても困りますけど、吐き出さないと体に良くないですよ」

もの凄い葛藤が渦巻く。そして俺は決心した。

「……………じゃあ、お邪魔させて頂きます」

「はい。5時には開きますから、それぐらいにいらして下さい」

ご厚意に甘える事にした。仮眠室へ一旦戻って、リュックに入れっ放しのおにぎりを食べて夜に備えておく。家にも電話したから問題ない。時間になるまではアライグマの防除について調べものをした。

「……………なるほどね、防除の計画書を出せば全部自分でやっていいのか」

全部とは捕獲後の処理も含めてだ。これなら役所にその都度で連絡する必要もない。あんなヤツから電話が掛かって来る事もないだろう。

「よーし、今度はそうするぞ。金だけ貰って偉そうにしてるヤツと話さなくていいなら

全部自分でやってやる」

暫しお勉強の時間にした。約2時間後、ドアをノックされる。

「はい」

「お世話様です」

提督さんの声だ。立ち上がってドアを開ける。

「お疲れ様です。どちらかに行つてらしたとお聞きしましたが」

「自分の受け持ちは終わりました。話は聞いていますので、本日はここでお休み下さい」

「ご厄介になります」

外へ出て鳳翔さんのお店に向かう。時刻は既に5時を過ぎていた。

「暖簾は……出てるな」

「こんな感じになるんですねえ」

えんじ色の暖簾と、淡い光を放つ提灯が目を引いた。路地裏に佇む知る人ぞ知る名店のようだ。

「では入りましょう」

「はい」

暖簾を潜り、ガラス戸を開ける。居酒屋特有のいい匂いが立ち込めた。

「いらっしやいませ。奥のカウンターへどうぞ」

「こんばんは、ようやく来てくれましたね」

「ご無沙汰してまーす。こちらにどうぞ」

今日は千歳&大鯨の2人も居た。どうやら手伝いは持ち回りらしい。

席に着くと目の前におしぼりが置かれる。メニューはもうテーブルにあったので暫し眺めた。そしてある事を思い出す。

(……やべ、財布に幾らあったっけ)

「今日は私が出しますから、好きなだけ楽しんで下さい」

「いやあそんな申し訳ないです。ほどほどにしますから」

提督さんからの嬉しい提案に飛び乗る。うん、まあ節度を持って楽しみましょう。

「お飲み物はどうぞされますか」

「こういう時はビールが美味しい。今日はビールだ。」

「ビールをお願いします」

「じゃあビール2つで」

「はい」

千歳は冷凍ジョッキを取り出してビールを注いだ。金色の液体が満たされていく。

「こちらはサーブスです」

大鯨が小鉢を置く。中はマカロニサラダだった。

「お待たせしました」

霜の付いたジョッキが2つ置かれた。手に取って持ち上げる。冷たいのが心地いい。

「乾杯」

コツン、とジョッキをかち合わせる。あとは流し込むだけだ。

「……うめえ」

喉を通り過ぎる炭酸と胃が熱くなる感覚。たまらんね。

「いいタイミングでしたね。お誘いしたくても車ですし」

「ここって一般人が利用してもいいんですか？」

「もう少し交流が盛んになれば、とは考えてもいるんですけどね」

やはり交通の便が悪い所がネックのようだ。そもそも気軽に来られるような場所でもないし。

「お祭りですか……」

「例えばですが、お祭りか何かを企画して、その時に開放してここを知って貰う方法と言

うのも視野には入れています。今はまだ見学会ぐらいしか出来てませんが」

「お祭りですか……」

アイディアが閃きそうだったが、取りあえずいいだろう。それより何か頼まなくては

とか思っていると、引き戸が開いた。

「いんばんは」

「はい、こちらにどうぞ」

誰か入って来たらしい。まさか隣にドカツと座って来る事はないだろう。聞き慣れた声だったけど気にしない気にしない。

「えーと……もつ煮をお願いします」

「レンコンのはさみ揚げを」

「はい、お待ち下さいね」

注文を取った大鯨は奥へ引つ込んで行った。そして、隣の椅子が引かれて誰か座る。

「今日は終わりかしら」

「この声。やはりあなたで加賀様したか。

「ええ。本来はお手伝いで来てたんですが、偶然にもアライグマを捕獲しまして」

「あら、目出度いわね。一杯奢ってあげるわ」

「いやそんな滅相もない」

隣を見やる。長めの髪が綺麗な美人が座っていた。服装も違う。でもその声は……

「加賀、戻ったのか」

「はい。報告書は明日中に出します」

髪を下ろしている所を初めて見た。雰囲気がるで違う。誰ですかと言いたくなるが我慢だ。

「……………本日の業務は終了って解釈でよろしいですか？」

「そうよ。オンオフはしっかりしなきゃ。千歳、ビールと今日のお任せで」

髪が靡いた時に心なしかいい匂いがしました。だが意識は運ばれて来た料理に移る。

「お待たせしましたー。レンコンのはきみ揚げと、もつ煮でーす」

いいねえ、味の沁み込んだもつがビールと最高に合うんですよこれが。日本酒も合うんですよね。

「いただきます」

この甘辛いのが何とも言えん。そこへビールを流し込むともうこれは最高。

「あー……………何か生きてるって気がしますね」

「家では飲まれないんですか？」

「家だとですね、片付けが始まるともうそこで終わらせなきゃって気持ちになって、ゆっくり飲めないんですよ。親父が変に深酒したりして次の日に響く事もあるんで、長く飲んでられないのもありますね」

やっぱり家を出ようかな。だが実家に出勤するのは何か気持ちが悪い。自分の家に行くのに「行きたくないなあ」とか思う日が来るのは嫌だ。

「まあ自動的に飲みすぎないように出来るのがいい所ですかね」

いい年してハメを外すのはアレだが、今日はいい気分になれそうです。

「さて、2杯目はどうすつかな」

「好きなのを頼むといいわ。日頃のお礼よ」

そう言えばさつき「1杯奢る」って仰つてたな。いやしかし……

「あーえー、実は提督さんが出して下さるので」

「まあいいじゃない。こんな機会、滅多にないわよ」

言われてみればそうだけど。そうだけど……何か違和感が凄い！

「……じゃあ、久保田いいですか？」

「あら、いい趣味ね。私も貰うわ。千歳、2合ちようだい」

「はーい」

マジか。でも後で強烈なしつぺ返しが来そうで怖い。

「こつちも1合追加。そうなると、刺身がいいですね。鳳翔さん」

「今日の盛り合わせを3人前でいいですか？」

「お願いします」

あらー提督さんも乗つかつて来たぞ。

約2時間後……

「大体ね、好きで憎まれ役をしてる訳じゃないのよ」

「いやもう心中お察しします」

「あなただつて一定の規律も無いような職場は不安でしょ」

「自由過ぎるよりは確かにちよつとは緊張感があつた方がいいですよねえ」

「何と思われようと別に構わないけど、もう少し落ち着いて動けるようになって欲しいと思うのよ。どうもこの娘たちは集まると賑やかになつてしまふ傾向があるわ」

色々と溜め込んでらつしやるようです。酒が回つてるせいかな嫌じゃないのが凄い。

「んじゃあもう少し具体的に言つた方が」

「私が言うのと嫌味にしか聞こえないのよ。自分でもそう思うわ。千歳、熱爛でちようだい」

「あ、水も2つ貰えますか」

「お待ち下さーい」

一方の提督さんは……

「テートクー、どうして私を受け入れてくれないのデスカー」

「家族持ちに何をさせるつもりだ君は」

「私とも家族になりましょー」

「榛名も提督と家族になりたいです」

唐突に現れた金剛&榛名によつて座敷へ連行された提督さん。助け舟を出すべきだろうか？ だが2人共にかなり酔っている。あの発言が正気とは思えないが金剛さんに

関しては前に1回そんな所を見ているので判断が付かない。お嬢もポヤポヤしてる。可愛い。

「何を見てるのかしら」

「いや、向こうがちよつと大変そうだなと」

「……前から思ってたけど髪の毛の長い娘が好みらしいわね」

「はい？」

「大淀、間宮さん、明石、この辺とは親し気よね。阿賀野とかも射程内かしら。あつちはあなたの性格的に榛名でしょうね」

何を言ってるんですかこの人は!? いやその、遠からずとも、と言いましようか……

「私もこれよりも少し長ければそんなで見られるのかしら」

「すんません、やめて貰っていいですか」

「冗談よ」

今の言葉で少しだけ酔いが醒めた。勘弁して下さい。

「こんばんはー」

「こんばんは」

引き戸が開いて赤城&翔鶴が現れた。

「加賀さーん、今日はこの辺にしましょうねー」

「お水飲んで下さい。立てますか？」

「立てるわ。馬鹿にしないでちょうだい」

コップの水を飲み干した加賀さんは立ち上がった。気付けば入店から2時間ちよいだ。俺はセーブしていたけど加賀さんはかなり飲んでる。

「今日は随分長いと思ったら後藤田さんも居たんですね」

「お邪魔しております」

「じゃあ行くわね」

「ご馳走様でした」

「おやすみなさい。大鯨、お勘定を」

「はい」

2人に連れられるでもなく、自分で会計してしっかりした足取りで店を出て行った。流石です。にしても出入りする人数がそんなに居ないように感じた。日によって違うんだらうか。

「……さてと」

いい感じに酔っている。後半は加賀さんの相手をしていたが、自分自身の溜め込んでいた部分は前半でそれなりに解消出来た。すつきりした気分である。

「提督さん、一足先に失礼します。眠くなって来ましたので」

「あーはい。途中から離れてしまつて申し訳ありません」

「テートクー」

「提督」

「こら2人共」

「ご馳走様でした。そちらのお相手をしてあげて下さい」

「すみませんね、また今度ゆっくり飲みましょう」

「はい」

店を出る。夜風が気持ちいい。今日はよく眠れそうだ。明日はアライグマ入りの罨が回収されるのを見届けたらお暇である。って訳で休みましょう。

開発工廠 駆除作業日1

任務：開発工廠に潜むハイイロゴケグモを排除せよ 継続中

空っぽの罨は取りあえず司令部棟の裏に置かせていただいた。アライグマ入りの方は無事に回収。でも罨は備品なので役所まで同行し、アライグマだけを引き取って貰って罨は持って帰る事となる。

「……………あー、明日も行かなきゃならんのか」

信号待ちの最中に思い出した。明日はハイイロゴケグモの駆除作業日だ。

アライグマでバタ付いてて忘れていたが、開発工廠でハイイロゴケグモが出てからもう1週間である。

「……………助手が欲しいなあ」

家族経営でこのキャパシティーはちよつと厳しいような気がする。いや、俺の要領が悪いだけか？

「帰って準備して……………忙しいですねぇどうも」

まず帰る事が最優先だ。少し休んでから準備を始めよう。

翌日

車へ積み込んだ荷物をチェックする。予定では10人が参加してくれる事になっていた。なので道具もその分だけ用意してある。

「しゅっぱーっ」

メンバーは初日にも居た綾波・敷波・朧・曙・漣・潮。これに、まだ会った事もない4人組、初春・子曰・若葉・初霜が加わる。事前情報だとこの4人組は姉妹だそう。であれば、前日も居た6人は2人1組で作業して貰い、新しい4人はそのまま4人組として動いた方がやり易いだろう。

でも慣れて来たら2人ずつになつてくれると有難い。作業効率も上がるので……

つて訳で鎮守府に到着。毎度のやり取りして駐車場に停めて荷物下ろして司令部棟へ行く。工程表を出して立ち入り許可証を貰い、大淀さんと一緒に開発工廠へ向かった。

「何か最近よくここに来てる気がするんですけどよねー」

「昨日も朝までいらつしやいましたからね。アライグマは無事に引き取って貰えましたか?」

「それは大丈夫です。置きっ放しの罫も順次持つて帰りますから」

開発工廠が見えて来た。明石&夕張が何か打ち合わせをしているっぽい。その向こ

うには駆逐艦組が揃っていた。

「おはようございます」

「おはようございます」

「はい！ 準備は万端です！」

夕張様、上にもう一枚着てくれると嬉しく存じます。タンクトップは目のやり場に困ります。明石さんも声高らかに何かを宣言していた。そんなに力まなくてもいいと思っ
うんですがね。

「じゃあ頼んだわよ、明石」

「お任せつかあさい！」

「一応、あちこちに声掛けはするからね」

うーん、何も無い所で転びそうな勢いだ。大淀さんは仕事があるので戻って行く。道
すがら、手透きの誰かが居ればこっちの手伝いをお願いしてくれるそうだ。有難い限りで
す。

「よろしくお願いします」

「この前と同じ感じがいい？」

「皆は先週も居たからね。2人1組でお願いします」

「ぼのたんワイと組もうぞ」

「何よその言語は」

「潮、行こ」

「うん」

6人は前回の事もあるので早速取り掛かって貰う。ほんで、新規の4人ですが……

「初春型1番艦、初春じゃ。お主が噂の後藤田殿じゃな。よろしく頼み申すぞ」

「2番艦、子曰でーす」

「若葉だ。明日の朝まで休まずこの作業をしても問題ない」

「初霜です。よろしくお願ひします」

何かもうパツと見ただけで上の2人、下の2人で組ませるべきな気がした。しかしこの姉妹、かなり個性的で存在感がありますね。

「後藤田です。取りあえず、何を相手にどんな事をするか。もう1度説明をします」

ハイイロゴケグモの事、駆除の方法、気を付けるべき事、使う道具について説明する。

「まずはゴーグル、マスク、軍手を着けて下さい」

これは用意して貰った物があるのでそれを使う。休憩所に置いてある段ボールからハチアブジェノサイダーも2本取り出した。

「スプレー係が1人、回収係1人、ゴミ袋の係を2人でやってみようか。順番に一通りやって慣れて来たら、2人1組でお願いします」

「蜘蛛つきお裾分けです」

「置いとくよー」

綾敷コンビがタイミングよく練習台を持って来てくれた。早速これで感覚を掴んで貰おう。

「何か問題は？」

「大丈夫です」

「私らより大きいのが出て来たら呼ぶね」

いやそんなのは居ない……と思う。ここは現実世界だ。いやしかし、海の上を深
海
棲
艦あんなのが動き回ってるのを考えるともしかしたら……

……つてかもう俺じゃなくて警備の人を呼んでくれ。

「ではやって見ましょう」

4人で作業台を調べる。引き出しを開けると……

「……コイツがそうか」

「若葉、触つちやダメよ」

巣に張り付くハイイロゴケグモを発見。作業開始だ。

「どれぐらいからスプレーを放てば良いのじゃ」

「1mちよつと離れてても届く。そんなに近付く必要も遠ざかる必要もないかな」

「ふむ、では参ろうか」

近からず遠からずの距離から噴射。激しくもがいていたが、数秒程度で脚を閉じてそのまま動かなくなった。

「回収するよー」

子曰が死骸を火箸で掴み、若葉と初霜が広げるゴミ袋に入れた。続いて巣ごと卵を回収するやり方も見せる。

「こーやって火箸で絡み取って、あとはゴミ袋の中に入れて袋の上から拭う。これで触る必要もなく、巣と卵が回収出来ます」

「難しくはなさそうじゃな。これなら任せてくれてよいぞ」

「子曰、頑張っちゃうからね」

「もっと沢山の蜘蛛が居るやつはないのか」

「1つずつ終わらせていきましよう」

案外、慣れるのが早そうだ。任せても大丈夫っぽい。4人が遠ざかっていく所へ新たな人影が……

「お昼で居なくなるけど手伝うよー」

「こんにちはー」

遊びに来ましたー、な勢いで飛龍&蒼龍が現れた。まあ加わってくれるのは助かりま

す。

「ありがとうございます。この前と同じ感じでお願ひします」

慣れた手つきで道具を身に付けていく。

「夕張、建造に運んでるやつもう一度調べるねー」

「寮に戻る時に誰かに声掛けておくからー」

「はい、すいませーん」

お、見落しがないか心配だったのをチェックしてくれるらしい。有難や有難や。

それで、一人で固い表情をしている明石さんに近付く。

「お疲れ様です。今日はどれぐらいまでの予定でしたっけ」

「ああはい。まず前回の作業で運び出せなかった物を、今日で全部建造の方へ移します。既に運んでしまっている方の再チェックも考えていたんですけど、さつき二航戦のお2人が行ってくれましたので、そちらは大丈夫だと思います。午前はそれらに費やして、午後は清掃がメインとなります。その段階で薬剤の散布をお願ひします」

「分かりました。では昼までこれ続けましょう」

暫し、作業に没頭する。初日に一度チェックしている事もあって、再発見の報告は殆ど無かった。ただ、幾つか巣が残っている所もあったため、それらは入念に拭き取る処置を行っている。

昼を報せるチャイムが鳴った。12時である。夕張が休憩を宣言した。

「はい、お昼です」

一旦終了となる。ゴーグル・マスク・軍手を外して道具を集め、手を洗ってゾロゾロと食堂にきました。

(何にしようかな……)

日替わりA：ご飯・豚汁・鯖の味噌煮・お新香

日替わりB：ご飯・中華スープ・チンジャオロース・ザーサイともやしのサラダ

日替わりC：ハンバーグプレート・スープとサラダはセルフ

選び難い。日替わり以外にもメニューは沢山ある。

「綾姉はどうすんの」

「んー、今日は野菜炒めにしようかしら」

「ふーん、じゃあ私は日替わりのBで」

野菜炒めかあ。ここのは豚肉がしっかりしてて美味いんだよなあ。野菜も菌応えがあつて音まで美味い。

「間宮さん。オムカツカレーお願いしまーす」

「チキングリル定食、ご飯大盛りで下さーい」

飛龍と蒼龍は流石である。空母はよく食べますね。

「天ざる下さーい」

随分と渋いのを注文するのは誰かと思いきや夕張さんでした。

おっと、俺もそろそろ決めないと。

「アジフライ定食お願いします」

「はーい」

間宮さんは今日もお美しい。

約1時間後。お腹も落ち着いて来たので作業再開である。二航戦が居なくなつた分は誰が来るのかと思っていると……

「H e y、 M r 後藤田」

「ここに来た日以来かしら？」

振り向いたそこには金髪外人美女2名。まさかのイントレピッド&ホーネットだった。会う事も滅多に無いのでちよつと接しにくい。

「お久しぶりです。因みに今ここで何をしてるかはお存知ですか？」

念のため確認である。

「ハイイロゴケグモの駆除と清掃でしょ？」

あ、ちゃんと存じてましたか。

「似たような名前の蜘蛛が本国に居るのは知ってるわ。見た事はないけれど」

「しつかりバッチリ、手伝うからね」

これなら有難い応援である。取りあえず道具を渡して着けて貰い、諸々の説明をした。

「二応これで、説明は以上になります。午後からは清掃がメインですので、もし見つけたら対処をお願いします」

「OK、大丈夫よ」

「さあホーネット、行こう！」

意気揚々と混ざって行った。しかしあれだ。流石は海外組。色々とデカイ。そしてあのスリットはいかんです。目の毒だ。

「……お仕事お仕事」

切り替え完了。駆除は一旦終わっている。俺も清掃に混ざるとしよう。

「何よこれ、あっちこっちに巣があるじゃないの」

「曙ー、いいから手を動かして」

「ヒエツ、巣が軍手に付いた！」

「漣、それぐらいで慌てなーい」

「背中に蜘蛛が」

「!!??」

敷波は凄まじい顔で硬直した。

「……ごめん、嘘」

「綾姉!!」

「ちよつと、終わらないから早くやろうよ」

「時間もあんまり無いです」

朧と潮が止めに入る珍しい光景が見れた。一方のこちら……

「任せろ。全て綺麗にしてみせる」

「これ、若葉。1人で何でもやろうとするでない」

「ダメだよ、皆でやらなくちゃ」

「もう、若葉ったら」

何ですかね。若葉つて子は頑張り屋なのでしょうかね。まあ問題なく作業出来てる

ならいいか。

「Mr後藤田、ちよつといい?」

「はい」

イントレピッドさんに呼ばれました。着いて行きます。

「これ、その蜘蛛よね」

「ごめんなさい。一応、確認をと思って」

ペンライトが照らす先には、ハイイロゴケグモが居た。巣の中でジツとしている。

「そうですね。殺虫剤で駆除した後に死骸をビニール袋に入れて下さい」

「よし、私に任せて」

スプレーを吹き掛け、床に落ちた死骸をビニール袋に回収。続いて巣を火箸で絡め取る。

「これぐらい？」

「卵は出来るだけ残さないようにして下さい。この小さいのがそうです」

壁に残っている控え目の金平糖みたいな形をしたヤツを照らした。

「うまく掴めるかな」

「壁に火箸をつけて削ぎ落とすようにすれば簡単に取れます。まだ巣の一部が残ってると思うんで、それを利用する感じですよ」

「やってみていいかしら」

ホーネットが火箸で卵の回収を試みる。先端を壁に這わせながら上手く絡め取った。

「あ、上手いですね」

「難しくはないわね。大丈夫だと思うわ」

「こつちも順調である。さて、今の時間は……」

「……もう3時か」

残りの作業時間は2時間程度だ。明石さんの所に行つてスケジュールを確認する。

「進みはどんな感じですか」

「そうですね……ちよつとだけ遅れてます」

清掃に思つたより時間が掛かっている。それもそうだ。まだ全て駆除出来た訳ではない。ハイイロゴケグモを探しながらとなると仕方ないだろう。

「もう少し人数があると早まりますか?」

「いえ、変に人手を増やすと全体の動きが悪くなると思います。今ぐらいが丁度いいんじゃないかと、中でハイイロゴケグモを探しながらの作業ですから、どうしても慎重になります。取りあえずこのまま進めて、全体の作業度合いを確認しましょう。もしあれだったら、予備日も念頭に入れてつて感じで」

「分かりました。今日はこのまま進めて、予定通り17時で終わりますよう」

と言う訳で、開発工廠へ戻った。残り2時間で何所まで出来るだろうか……

2時間後……

「……半分は行きませんでしたね」

今日は時間切れである。開発工廠全体の半分手前までは終わつた。

「来週のスケジュールをもう少し練り直します。あと忘れてましたけど、天井の方とか

はどうでしょうか」

「天井……天井かあ」

どっかしらには居るんだろうなあ。足場を組まないと絶対に届かないけど、それには資格が必要だ。俺？ 持つてる訳ないじゃないですか。

「……足場組む業者を探しますか」

「高所作業車とかどうですか？」

高所作業車。なるほど、そういうのもあったか。

「いいですね。そっちの方が楽かも知れません」

「分かりました。上の方に掛け合います」

あ、そうか。下手に民間を頼るより身内の方が面倒事にならなくていいのか。

「よろしく願います。取りあえず来週について少し煮詰めましょう」

「はい」

本日は解散だ。明石さんと司令部棟まで行き、執務室で報告を済ませて来週の調整を始める。まだハイイロゴケグモの完全排除には時間が掛かりそうだ。

任務：開発工廠に潜むハイイロゴケグモを排除せよ 50%

番外編 夏の鎮守府 その1

あつちいですね。広樹です。鎮守府に向けて車を走らせてます。エアコンもいけど窓全開にして入って来る風もいいですよね。

この季節はまあ色々忙しいです。定期チェックでも気が抜けません。

「おはようございます」

「おはようございます。こちら、記入をお願いします」

正門で毎度のやり取り。青い迷彩服に防弾チョッキを着て自動小銃を持ち、見るからに暑そうだが警備の人は涼しい顔である。

「……暑くないんですか？」

「まあ、鍛えてますので」

羨ましい。俺も鍛えようかな。最近どうも脇腹の肉が……

「はい、終わりました」

「ありがとうございます」

車を駐車場まで進める。今日は定期チェックだ。色々と交換したり経過観察をする。

「よっかいせ」

荷台からアレヤコレヤを下ろした。台車の上に載せてゴロゴロと押し歩いて歩く。まず司令部棟に行つて今日の工程表を渡さなければならぬ。照り付ける日差しと熱されたアスファルトが強敵だ。海から風が吹いているのがまだ救いか。

「おはようございます。こちら、本日の工程表です」

「はい、確かに」

執務室はいい感じに冷房が効いている。今日は提督さんだけのようだ。

「そういえばお盆休みはいつからになりますか?」

「えーと……いつも1日早く閉めてますんで、12から送り火の16までです。17日から営業再開ですね」

「承知しました。その辺はお呼びしないようにします」

「あー、まあ緊急でしたら遠慮なく呼んで下さい」

どうせひっくり返つてただけだしなあ。寂しい数日を過ごすぐらいならここに来るのも一考か?

「極力そうならないように周知はしますので」

「ありがとうございます。それでは作業に向かいます」

「よろしくお願ひします」

さて、まずは駆逐艦寮へ行くか。こう暑いとGどもが活き活きしてそうだ。

駆逐艦寮

「お邪魔します」

「よお兄ちゃん、今日もあつちいね」

「こんにちは」

五月雨&涼風だ。この2人は髪と服の色のせいか凄まじい清涼感を感じる。

「今日の日替わり責任者は誰つすかね」

「白雪と初雪だっけ？」

「初雪ちゃんは多分……ゲームしてそう」

ああ、あの眠そうな感じの娘か。確かに……

「はい、じゃあ失礼しますよ」

管理室をノックした。お下げの可愛い白雪が出て来る。

「あ、おはようございます。今日はチェックの日でしたね」

「工程表です。何かあれば呼んで下さい」

「はい。よろしくお願いします」

チラツと室内を覗き込む。テーブルでグターつとなってる初雪がゲームしていた。しかもあれは某メーカーが売り出してる据え置きも携帯も出来るハードじゃないか。

もしかしてみんな結構お金持ち？

「……サボってる？」

「サボってないし。暇なだけだし」

「まあ……そんなにする事ないですから」

ふーん、まあいいか。

つて訳で給湯室まで来ました。

「えーと……ホイホイ及び毒餌の交換回収ね」

至る所に仕掛けてある業務用ホイホイを回収し、新しいのを設置していく。掛かっているGの数は偏りが感じられた。相対的には減って来ている。

「いつまでこいつ等と戦わないといけないんでしょうねえ全く」

人類が生きている限り、避けて通れない道なのだろうか。そんな所へ元気なあのが現れる。

「後藤田さーん、ゼリー作ってみたんだけど食べる？」

白露嬢の音が後ろからした。何所で作ったんだそんな物。

「ゼリー？ 得体の知れない物が入ってなければ」

「実は敵の死骸を利用してるんだよね」

「丁重にお断りします」

「いやそんな訳ないじゃん。ラムネ味のゼリー」

振り返る。涼しげな色だ。まるで南の海みたいな感じである。

「混ぜて冷やしただけのヤツだよ。自分の部屋の冷蔵庫で作ったんだ」

「……じゃあ遠慮なく」

カップを受け取る。プラスチックのスプーンで掬って食べた。

「おお、夏らしい味」

「やった。味見してないけど上手く出来たっぽいね」

「聞き捨てならない発言したな今」

「ネットには誰でも作れるって書いてあったし」

「全く。はい、ご馳走様でした」

「はい。皆にも配ろーっと」

ツルンと頂いた。作業を終えて次の目的地へ向かう。

軽巡察

「ごめん下さーい」

「いらっしやいだクマー」

「ZZZZ」

かなり遭遇率の低い人物に会った。球磨と……クソ暑いのに寝ているそっちの方は？

「定期チェックに来ました。あの部屋を見ていいですか？」

「鍵は預かってるから一緒に行くクマ。多摩、多摩」

「……にや？」

「ちよつと席外すクマ。あ、妹の多摩だクマ。多摩、この人が後藤田さんクマ」

「……………多摩です、2番艦だにや」

「あー、妹さんもう1人いらつしやたんですね」

「自分の受け持ちがない時は基本的に寝てるクマ。ここに居る皆でも多摩に会えるのは

下手すりや数日に1回だクマ」

何じゃそりや……

「じゃあ多摩、行つて来るクマ」

「にやー」

また寝始めた。すげえなこの人。

「レッツゴーだクマ」

連れられて上階への階段を上る。あの一件で、阿賀野型は部屋を別の場所に移していた。今は空き部屋になっているが、やはり定期的に見ないとまた増える恐れがある。

「割と真面目に神経が磨り減る日々だったのを思い出すクマ。」
開錠して貰った。まず旧阿賀野の部屋である。

「……特に痕跡は無いか」

糞は見当たらない。卵も無し。ひっくり返ってる死骸も無い。

「……大丈夫そうですね。じゃあどんどん行きましょう」

「クマ——」

能代・矢矧・酒匂の部屋だったのをそれぞれ開けて貰う。見た感じは大丈夫だが、油断ならないのがチャバネールの怖い所だ。伸縮足場台を持ち込み、通気口や点検口を調べらる。

「よっこいせ………痕跡無しっつと」

チェックリストに書き込みながら作業を続ける。すぐ終わりそうだが、それでも1時間ちよつとは掛かった。地味に汗も噴出して来る。

「あっち………」

足場台を片付けて廊下に出た。人の気配が殆ど感じられないので、今日の軽巡察はほぼ誰も居ないらしい。

「終わったクマ?」

「はい。大丈夫そうですね。ただ、どつかのタイミングで通気口内部にまた燻煙剤を流

し込みたいです。もし生き残つてるとすればそこですから」

「日程調整は提督の方としてくれればいいクマ。それと水分補給だクマ」
水の入ったグラスに薄緑の液体が注がれていた。緑茶だろうか。

「ありがとうございます」

受け取つて一口含む。玄米茶だ。しかもめっちゃ冷たい。

「おー……夏に玄米茶もいいですね」

「麦茶の消費量が凄まじいから変わり種だクマ」

飲み干した。鼻から抜ける玄米の香りがとても良い。

「ごちそうさまでした。これで失礼します」

「熱中症に気を付けるクマー」

グラスを返して軽巡察から出る。お次は重巡察だ。

重巡察

「後藤田です」

返事は無い。静まり返っていた。

「……誰か一人ぐらいは居るよなあ」

「ここに来る事は少ないからどうにも入り難い。さてどうしよう。」

「内線を掛けましょうかね」

ロビーにある電話で、提督さんが居る執務室の番号を押した。コールは3回目で切れる。

「はい、執務室」

この美声は加賀さんですね。

「お疲れ様です、後藤田です。重巡察に来たんですが、どなたもいらつしやらないようです」

「あら、おかしいわね。青葉が居ると思うのだけれど」

あー……GoProの人っすか。

「呼び出すわ。そのままそこで待っててちょうだい」

「はい」

受話器を置いた。数分後、血相を変えた青葉が奥から走って来る。

「申し訳ありません！ ちよつと編集が捗ってましてえ！」

「……編集？」

「この前のアライグマですよ！ もし良ければ見て行きますか!?!」

「いえ、機会があればその内に。取りあえず、何かお困りな事はありませんか？」

青葉は暫し考え込む仕草をした後、何かを思い出したようで一旦部屋に戻って行っ

た。バインダーを抱えて戻って来る。

「古鷹から預かってたのを忘れてました。こちらををご覧ください」

「拝見します」

バインダーを受け取る。重巡寮の外や中で起きた害虫関連の出来事が纏められていた。

アシナガバチの目撃情報3件 主に寮の裏手 巢は未確認

目撃者：衣笠・ザラ・筑摩

アシナガバチか。あいつら寄って来るんだよなあ。心臓に悪いわ。

炊事場で半月ほど数匹のゴキブリが出現。誰も退治していないのに死骸を日に1〜2体確認。出入りが激しい場所なので殺虫スプレーのにおいを気にする者も多く、罠の設置のみに留める。現在はほぼ収束しつつあり。

おっと、こっちでもGが出たか。でも死骸が確認されている。誰も退治していないのだ。

(……まさか軍曹が居る?)

軍曹アシタカフモ。我々の業界でも名高きゴキブリハンターだ。意外に知られてないけど外来種

である。まだ実物を見た事がないので一目拝みたいがかし……

「……炊事場の方へちよつと失礼しますね」

「はい。こちらです」

炊事場を拜見。取りあえず死骸は見つからなかった。あちこち入念に見まわすが、軍曹のお姿は確認出来ない。

「もしこれ以上に見かけるようでしたら、無臭タイプの燻煙剤もありますので、一報をお願いします」

「ありがとうございます」

続いて寮の裏手を確認。残念ながらアシナガバチは居なかった。重巡察の裏は自然が多いので、もし巣があるとしたらその中だろう。でも今は装備が無いので踏み込まない。

「近場に殺虫剤を置きましょう。もし危機的な状況になれば使うと言う事で」

「はい。古鷹に伝えておきます」

ここはこれぐらいでいいだろう。炊事場にもし本当に軍曹が居るなら、ぶつちやけらせても良い。下手にこつちが介入すればやり難くなるだけだ。

その後、昼を挟んで潜水艦・空母・戦艦寮と渡り歩いた。何所とも特に問題は無い。理想的な定期チェックの日である。このままトラブルなく終わりたい所だ。

「3時か……久々に間宮さんのお店でも」

小腹が空いた。間宮さんの所で水羊羹か水まんじゅう、いや、かき氷もいいな。

「後藤田さーんー！」

遠くから響く白露嬢の声。あー聞こえない。俺に穏やかなる時のおやつを食わせてくれ。

「蛇！ 蛇出た!! 蛇!!!」

スネーク？ 確か3まではやったなあ。いや違うか。

「何の蛇？」

「分かんないけど早く来て！」

腕を掴まれてそのまま駆逐艦寮に逆戻り。つてか装備が無いけど……

駆逐艦寮

寮の入り口の前に駆逐艦が屯している。駆逐艦が屯しているってこの外じゃ通じない表現ですね。

「はーい、後藤田でーす」

「兄ちゃん！ あれ何て蛇だ！」

「めっちゃ怒ってるっぽい」

「白雪！ 中に居る皆に正面入口へ近付かないように伝えて！」

「何よコイツ、一体どっから来たのかしら」

入り口の前には涼風・夕立・吹雪・陽炎。寮の中には白雪・初雪・五月雨・黒潮が見える。その間には一匹の蛇が居た。

「……わー、ヤマカガシか」

コブラのように上体を起こして首から左右に体を広げて大きく見せる。これはヤマカガシの威嚇行為だ。微かにシューシュー鳴いているのもそれである。毒はマムシよりも強い。

「道具が無いなあ……下手に殺すのもあれだし」

大方、迷い込んだのだろう。あちこち動き回ってる間にここへ来てしまった可能性がある。

「掃除道具とかでき、T字の箒ある?」

「あるよ」

「一本借りるよ。裏に通用口とかあったっけ」

「こつちこつち」

白露の後を着いて行く。寮の角の所に通用口があるのでそこから入った。中でT字箒を受け取る。

「厚手のタオルもいいかな。3枚ぐらいあると嬉しいけど」

「ちよっと待ってね」

タオルと言うか、使い古しの干からびた雑巾を貰った。まあこれでもいいか。

「よし、では行きますか」

ロビーまで歩く。ヤマカガシの後ろに取り付いた。

「……よつと」

箒で頭を後ろから押さえ込んだ。更に雑巾で頭を上から包み、そのまま持ち上げる。

「山に放つて来る。箒はまだ借りるよ」

「兄ちゃんすげえな!」

「お見事ほいほい」

「いやー、真似出来ないわ」

ヤマカガシが腕に絡み付いて来るが気にしない。そのまま正門で事情を話し、一旦敷地の外に出た。近くの山に入り、手頃な場所で足を止める。

「はいはい、もうちよつと待ってくれ」

まず頭を包んでいる雑巾を地面に押し付け、潰さないように足で押さえる。続いて箒で頭の後ろを押さえ、腕に絡み付いているのを外しながら右手を自由に。箒で押さえたまましゃがんでいる姿勢から立ち上がった。

「はい。出来れば鎮守府にはもう行くなよ」

十分に距離を空けてから箒を離す。相変わらず威嚇して来るが、こつちが遠ざかると

森の中へ消えて行つた。

「……そう言えば、ツチノコのような何かは元気かな」

見つけようと思つても見つかるものではない。2度目の邂逅は無いと思つていいだろう。取りあえず鎮守府へ戻つた。

番外編 夏の鎮守府 その2

ヤマカガシを自然に放ち、山から下りて道路を横切り正門に到着。

「すいません、戻りました」

「ああ、どうぞどうぞ」

警備の人に通して貰う。ふと、自衛隊の訓練で蛇とか食ってる動画を思い出した。

「皆さんも蛇とか訓練で食べるんですか？」

「自分たちは海自の方から来ていますので、その手の事はやってませんね。まあ他の部署ではどうか分かりませんが」

あー、そういうもんなのか。確かに警察と言えど交通課と刑事課ではやってる事も違うしな。

「どんな味がするとかって聞いた事ありますか？」

「ササミに近いって話によく耳にしますね。不味くはないらしいです」

ふーむ。淡白な感じか。って事は味付け次第でどうとでもなる訳だ。

「なるほど。すいません、お邪魔しました」

「いえいえ」

駆逐艦寮まで戻った。さっきの面子がまだ残っている。

「はい、山に返しました」

「兄ちゃんよお、蛇避けの方法とかないのか？」

「あるにはあるけど……そうすると自然が無くなる」

「何か注意書きを貼ろうかしら。蛇だって無暗に近付かなければ問題ないわよね」

「せやなあ、向こうさんだつて生きとる訳やし」

「草刈りとかして棲み分けを作るのはどう？ 蛇だつてワザワザ身を隠せない所には出て来ないと思うけど」

吹雪の発言は良い案だ。それをした上で陽炎の注意書きも加えれば、お互いの線引きが出来る。もし蛇を見掛けたらこっちは距離を取ればいいし、蛇もこっちが何かしている所に躍り出て来るような事はしないだろう。

「いいねそれ。蛇が居そうな所とこっちの生活圈を明確に区別出来る。あ、箒を返しませう」

「はい」

白露嬢に箒と雑巾を返却。さて、間宮さんの所に行こうかな。

「んじゃ、この辺で失礼」

駆逐艦軍団と別れた。間宮さんのお店に向けて歩いてみると……

「ちよつといいかしら」

「はい？」

黒髪のショートカットで巫女っぽい服装、色白、特徴的な頭の飾り。殆ど話した事ないけどあの人ですね。

「何でしょうか、山城さん」

「少しだけ、時間を貰えると有難いわ」

間宮さんのお店が遠のくけど仕方ない。遊びに来てる訳じゃないし。

「大丈夫です」

「炎天下なのもあれね。司令部棟へ行きましょう。一番近いわ」

ダルそうな彼女に着いて行く。司令部棟の、俺がよく物書きしている所に来た。ここは冷房が効いている。

「それで、どう言ったご用件でしょうか」

「私が寮の裏でガーデニングをしているのは、大和から聞いてるわね」

「あー……はい。よく手入れされてるのは見ただけでも分かります」

「季節的には過ぎてしまったけど、次の春にフジを育ててみたいと考えてるのよ」

フジ。紫色の綺麗な花だ。大量のフジが咲き乱れている光景はとても美しい。そして香りもいいのだが……

「でもあの花は、クマバチを寄せるのよね。そうすると皆にも迷惑かと思うと、踏ん切りが付かなくて」

「ですよー。クマバチのオスは刺さない、と言うより刺せないが、あのサイズはオスだろうがメスだろうが恐怖心を与えるには十分だ。」

「何か良い方法がないか、相談したいの」

「フジですかあ……」

「ぶっちゃけ個人レベルの栽培における方面については門外漢でござります。だが、クマバチも悪気があつてフジに集まつて来る訳じゃない。共生関係にあるから仕方ない事だ。」

「……因みに、どれぐらいの規模でやろうとお考えですか?」

「……まだそこまでは決めてないわ。言っただけで止められるかも知れないから」

「いつも手入れされてる所とは別の場所、もしくは少し遠くに置かれてはどうでしょう。フジは観光名所のような大規模な栽培でなくても、植木鉢で十分に育てられる花の筈です。1つぐらいなら、そこまで大量のクマバチを引き寄せる事もないと思います」

「暗めだった表情に少しだけ光が差した。これは正解かな?」

「……そうね。どうしても沢山の花が咲いているイメージが強かったから、勝手にそう考えてたわ。花壇と別の所で育てるのは、良い案ね」

「ただ、他の草花同様の害虫による被害は想定されます。もしあれでしたら、防虫ネットか何かを被せるのも良いかと思えます」

「目で見ると少し減りそうね。まあでも、その方向で考えてみるわ。ありがとう」
「他にお困りの事があればご連絡下さい。それでは」

席を立てて別れる。現在の時刻、3時半過ぎ。今からおやつはちよつと遅いか……
「あら、いい所に居たわね」

「はい？」

小さい袋を抱えた加賀様見参。

「ちよつと高いコーヒーを貰ったのよ。一緒にどうかしら」

「……執務室ですか？」

「そうね。提督と大淀も居るけど、良かったら」

む、大淀さんも居るのか。これは乗っかってしまおう。

「……ご馳走になります」

「じゃあ行くわよ」

執務室まで着いて行く。日差しで暑くなった廊下から程よく冷房の効いた空間に飛び込んだ。

「戻りました」

「お邪魔します」

「おや、どうされましたか」

「1階に居たので誘いました」

「折角ですので誘われました」

「どうぞ。少しお待ち下さいね」

大淀さんに促されるままソファへ。ここの窓からは海が見えるのだ。太陽が反射していい眺めである。

「アイスとホット、どちらが良いですか？」

「アイスでお願いします」

「提督はどちらで」

「私もアイスだな」

「加賀さんはどうします?」

「ホットにして見ようかしら。いいわ、自分でやるから」

数分後、コーヒーの時間となった。

「いただきます」

いい香りだ。多分。氷の音も心地いい。スッキリした苦味を感じる。

「ちようどいいわ。少し相談をしても?」

「何でしょう」

「司令部棟にも殺虫剤を幾つか常備しようと考えてるの。まあでも、ここはそんなに脅威となるのは出ないから、あんまり大きなスプレー缶を置くのもどうかと思うのよね。上の人達も出入りする場所だから、存在を自己主張し過ぎないのが欲しいのだけだよ」

なるほど。って事は一般的な大ききの殺虫スプレーは無理か。とは言え、消火器がそうであるように、何所に置いたか分からなくなるようなデザインは目に付き難い。店頭においてある各種の殺虫スプレーで黄色・緑・赤が多いのは、一目で分かるという意味も含まれているのだ。

「そうですねえ……………消臭スプレーとか除菌スプレーに見えるようなのは幾つか知ってますけど、イザと言う時に何所へ置いたか分からなく可能性もありますよが」

「……………それもそうですね」

「直射日光に当たると、爆発の危険もありますし……………」

加賀様が眉間にシワを寄せておられる。何か解決策を提示しなければ。

「入れ物を用意するのはどうでしょう。それで日差しの当たらない所を定位置にして、掲示物も貼って置けば流石に忘れないと思いますけど」

先手を取られた。大淀さんが提案を始めている。でも良い解決策だと思う。

「確かに堂々と置かずとも入れ物で隠してしまえば、目を引く事もないな。存在感を保

たせつつ、視界に入っても嫌な感じがしない方法だ」

提督さんも食い付く。うん。広樹もそう思います。

「でしたら、この前に発売されたばかりの物がオススメです。無臭タイプで大抵の害虫に効くヤツがありました」

ついでに営業を掛ける。10本を納品する運びとなった。然程の金額ではないが、メーカーから「買って欲しい」とよく営業の電話が来るのでいい目くらましになるだろう。

「ご馳走様でした。商品の方は恐らく、来週ぐらいに届くと思いますので、搬入があり次第にお届けします」

「ありがとうございます。その旨、よろしく願います」

執務室を後にした。時刻は4時を過ぎているも、司令部棟から出ると日差しが突き刺さる。

「うえ……」

さてと、予想より早く終わったので時間が余っている。このまま帰ってもいいけど何か物足りない。

「ちよつとウロウロしましょうかね」

立ち入れない場所は知ってるから、問題の無い範囲で危険な害虫害獣が居ないか見て

回る事にした。さっきのように毒蛇の類、まず居ないだろうけどハブとか何かしらが潜んでいる可能性はある。

(パトロール開始)

近くの草木を少しだけ掻き分ける。とんでもないのが飛び出して来るかも知れないので、慎重に行わなければならない。

「野生動物の痕跡も特に無さそうだな……」

ポケットの携帯が震え出す。大淀さんでした。

「まだ近くにおられますか？」

「はい、何かありました？」

「駐車場の方で海防艦の娘たちが虫捕りをしていたんですが、とても小さくて赤い虫を手で潰してしまったと連絡がありました」

小さくて赤い虫。 駐車場。 あれかな？

「分かりました。 ちょっとと見て来ます」

いざ駐車場へ。

因みにここの駐車場は来客用と関係者用で分かれているが、隣同士なのでどつちかには居るだろう。

駐車場

案の定、人だかりが出来ている。ちっちゃい海防艦が3人と、あの2人は……

「ほーら大丈夫だ。綺麗に拭いたからな」

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい」

「大丈夫大丈夫、後で医務室に行つて診てもらいましようね」

半ベその海防艦を抱っこしている髪の毛の長くてメガネをした艦娘。そして隣に居るショートカットの艦娘。どちらも似た格好だ。確かこの2人は……

「お疲れ様です。大淀さんから連絡をいただいて来たんですが」

「よお、久しぶりだな。この摩耶さまを忘れたなんて言わせねーぞ」

「鳥海です。ご無沙汰しております」

そして海防艦の3人。記憶が正しければ姉妹だった筈だ。

「佐渡さままだぜー。忘れて貰っちゃ困るぜー」

「海防艦、択捉です。お久しぶりです」

「……松輪です」

抱っこされている半ベその松輪ちゃんは警戒心を剥き出しにしている。忘れられてしまったようだが俺は医者じゃありませんぞ。

「赤い虫を潰したそうですが」

「ああ。そのコンクリの所にいっぱい居るぞ」

鉄柵と駐車場を区切るブロックの部分を見た。赤くて小さい虫がウジャウジャ居る。
「……………アカダニですねぇ」

皆さんも1度は見た事あるんじゃないでしょうか。駐車場の車止めとか、学校の塀とかで春から夏場によく見るあの赤くてちっこいヤツです。

「手で潰しちやっただ感じですか?」

「ええ。それで指先が赤くなって、ピククリしちやっただみたいで」

「何か症状は出るのか?」

「殆どないですね。少し痒くなるかも知れませんが、市販の塗り薬で十分です」

ぶっちゃけアカダニはアリよりも無害だ。あいつらは噛むけどこっちは殆ど噛まない。
い。

「良かったなあ、まつ。ほぼ何ともないってさ」

「松輪、大丈夫だってよ」

「う、うん」

何だろう。口にしたらあれなんだろうけど、もし摩耶さんが男だったら完全に子連れな風景に見える。

(子連れかあ…………遠からずその辺も考えないと拙いよなあ…………)

孫の顔ぐらいいは見せてやりたいと思ってるんですけどねえ……はてさて……

「悪かったな、呼び付けちまつて」

「まあまあ、これも仕事の内ですよ」

腕時計を見るといい時間になっていた。ぼちぼちお暇するか。

「ではそろそろ失礼します」

「おう、サンキューな」

「ありがとうございます」

5人と別れる。ふと思つたが、虫捕りなんてするんだな。その辺は小さい子とあんまり変わらないのだろうか。

(いかん、その当たりに首を突っ込んではいけなない気がする。考えないでおこう)

車に乗り込みエンジンを掛ける。直射日光で熱された車内がクーラーでゆつくりと冷やされていった。では帰るとしましょう。

「酒でも買って帰るか」

「オオナンド、インシユウンテンカ、ツカマツチマウゾ」

「トチュウデノンデクダト？ マゼテクレ」

「いや買って帰るつちゅーとるがな」

「こいつらの扱いも慣れたもんだ。適当に受け答えしながら敷地を出ると聞こえなく

なる。やはり鎮守府の中だけが影響を受ける範囲らしい。

「オレタチガソノキニナレバオマエノイエマデツイテイクコトダツテ」

「それ冗談だろ？」

「ヨウセイヲアマリナメナイホウガイイゾ」

本気なんだか嘘なんだか分からない所が少し怖い。がしかし！

「何かあつたら提督さんにすぐ電話するからな」

「ア、サーセン」

「カンニンシテツカアサイ」

この通りである。慣れてしまった自分もどうかと思うが……

(広樹です。お見合いとかどうなんでしょうね……いや、何でもないです)

カマドウーン

某日。アライグマの罨を引き取るために鎮守府へ来ていた。

「よし、積み込み完了」

鉄製の折り畳んだ罨2つを車に載せる。残りは1つだが、これはまたの機会に回収しよう。

「そうだそうだ。これを持って来たんだ」

助手席のリュックから、複数の紙袋を取り出した。中には猪のジャーキーが入っている。罨で捕らえた猪を日義さんが捌いて、色々な状態にして送ってくれたのだ。その中でもこれは保存が利くのでお裾分けに選んだ。ちよつと食べてみたが、酒の進む味がして非常に美味い。

「取りあえず執務室と……酒飲みなら空母寮かな？」

まず執務室へ向かう。今日は提督さんと大淀さんだけらしい。

「自分が罨で捕らえた猪のジャーキーです。猫を教わっている方に作っていただきました」

「おお、ジビエですか」

「……ジビエ？」

首をかしげる大淀さん可愛い。

「狩猟した野生動物の肉をそう呼ぶみたいです。何語かはちよつと」

「フランス語ですよ。日本では関心が低いですが、ヨーロッパでは高級食材として扱われているんだ」

「そうなんですね」

わー、提督さん博識。

「有難くいただきます」

「どうぞどうぞ。酒が進みますよ。大淀さんも良かったらどうぞ」

「楽しみにしておきます」

「ありがとうございます。後でいただきますね」

ほいで、司令部棟から出た。空母寮に行つて残りを渡そうと思う。

空母寮

ネズミはもう出なくなり、痕跡も見つからないので来るのはちよつと久々である。

「後藤田でーす」

静まり返っている。何かちよつと嫌な予感がした。

「……またの機会にしようかな？」

外から話し声が聞こえて来た。うーん、仕事が発生しそうな予感がする。

「あ、後藤田さんじゃないですかあ」

確か……瑞鳳さんでしたかね……

「お久しぶりです。今日は皆さんだけですか？」

「はい。正規空母の皆は出張中です。暫くは軽空母の私たちしか居ません」

軽空母と言う事は、例の酒飲みさんたちも含まれるつて訳だな。じゃあ渡すか。

「こちらお裾分けになります。自分が罨で捕らえた猪のジャーキーです」

「あらー、ジビエですね。有難くいただきます」

鳳翔さんのお店に居た千歳さんでしたっけか。いやちよつと待て。あの時は割烹着でよく分からなかったけど、デカいな（意味深）

「そうだ。後藤田さんなら」

「そうね。ちようどいいわ」

何がでしょうか。何がちようどいいのでしょうか。

「お時間ありますか？」

「時間はまあ……大丈夫です」

「中でお話ししましょう。どうぞこちらへ」

場所は打って変わり空母寮の小部屋。一応、小会議室らしい。そこで待っていると見知らぬ艦娘4名を引き連れた2人が戻って来た。

「瑞鳳の姉、祥鳳と申します。よろしくお願ひします」

おお、しつとり和服美人。髪が長いのも良い。いや何を考えてんだ俺は……

「千歳型2番艦、千代田です。私も鳳翔さんのお店手伝ってますから、たまに来て下さいね」

でかい。色々。いやしかし、鳳翔さんに祥鳳さんとな。何かの拍子に間違えそうで怖い。

「ウチは龍驤や。これでも立派な軽空母やで」

頭のそれは帽子なんですか？ くっ付いてる訳じゃないですよ？

「……………あ、あの、CVE-73、が、ガンビア・ベイ……………です」

そして1人だけ異彩を放っているのはポリュームのある金髪ツインテールで、一部がまあ大きい娘である。軽空母？

「後藤田です。えーと……………海外組の方って事でよろしいですかね」

「イントレピッドやホーネットと同じでアメリカ勢や。向こうには姉妹がぎょうさん居るらしいで」

「は、はい……………30人くらいですけど」

30! 陽炎軍団でも15人くらいは居るって聞いたけどその倍だと……

「凄いですね……あ、それで、ご用件の方は」

それを切り出した瞬間、6人の顔色が一樣に悪くなった。そんなに難しい案件なのだろうか。

「うーんと……まあ、相談やねんけどお」

「はい」

「寮の裏手に殆ど使っていない物置が何個かあんねん。ちよつと古くなったりガタが来たりで、買い替えようという話になってるんやけど……」

「昨日、中の物を取り出そうとしたんですが……」

祥鳳さんの発言以後、少し長い沈黙が続いた。そして瑞鳳さんがゆっくり喋り出す。

「……茶色いのが……たくさん飛び出して来て」

「Oh terrible」

ガンビア・ベイがフラ付いた。椅子から倒れそうになるのを千代田に支えられる。

「あー、大丈夫？」

「……むりい」

「部屋で寝てきいや。千代田、頼むで」

「はーい」

2人が退室した。話は続く。

「……ほんでな、あの、茶色くて、ピヨンピヨンと跳ね回るのがぎょうさんおつてな」
茶色。跳ね回る。あー、アレか。

「なるほど。最後がマで終わる虫ですね」

全員の顔色が悪いので正式名称を言うのは止めておいた。それでも、マと発言しただけで全員が一瞬跳ね上がる。

「……ご存知とは思いますが、別に病気を媒介させる事はありませんが」

「まあそれは知つとるねんで。せやけどなあ……」

「どうやれば追っ払えるでしょうか」

困り顔の鳳しよ……いや、祥鳳さんもいいですね。

して、カマドウマ。漢字は竈馬。うーん、害はないけどまあ、女性にとっては苦手でしょうね。男でも無理な人は無理だし。

「そうですね。手っ取り早い方法としてはドアを開け放って居なくなるのを待つか、殺虫剤を中にぶち撒けるの2択でしょうか。もしくは防護服を着て踏み込む感じもありかと思えますが」

そんな提案を試みたが、乗り気ではないようだ。然らばお仕事と参りましょう。「では取りあえず現場を見てもいいですか」

4人の表情が一気に明るくなった。こういう光景を見られるのは役得なんではないか。

空母寮・裏手

意外にも初めて来た。別の角度から見た事はあっても、近付くまでは至らなかつた場所だ。

「あれがそうですね」

ちよつと草臥れた感じの物置が5つある。塗装も剥げている所が目立った。

「えっと、出来ればその……私たちはここで」

「待つてもいいですか？」

祥鳳&瑞鳳の足が止まった。後ろには残りの2人が同じように立っている。

「堪忍やで、後藤田はん」

「近付くのはちよつと遠慮したいと言いますか……」

「……まあ、分かりました」

女性に自らアレへ近付けと言うのも酷な話だろうか。そう思いつつ足を進めると、一番近い物置の目の前に居るのを早速見つけた。

「わー……結構な数で」

10、いや、もう数えるのも億劫なレベルだ。手入れされていない&物陰や奥まった場所&湿気が多い所にはよく連中が群生する事がある。物置も見るからに雨風に晒された感じだ。地面も水はけが悪いのか湿っぽい。

「物置の中には特別な物とかがありますか？」

「大した物はないと思いますけど、備品が何かしら入っている可能性が」

「ここに鎮守府が出来た頃に買った物置やからなあ。正直何が入っているかいまいち分からんわ」

あんな物置ではそれも然りか。ウチだつて物置に何があるかはお袋しか把握してないだろうし。

「無下に殺すのもあれですんで、取りあえず片っ端から捕まえますね。物置の中に居る連中についてはある程度だけ捕まえて残りは駆除しちゃいます」

道具を取りに車へ戻った。その道中、見知らぬ2人を引き連れた陸奥さんと遭遇する。1人は何かこう、和服と言うか巫女っぽい恰好だ。もう1人は大きな荷物が目立つも地味な服装である。

「あら、お疲れ様です」

「お疲れ様です。そちらのお2人は……」

「ちようどいいわ。今さつき着いたばかりなの。特務艦の宗谷と、水上機母艦の日進よ」

特務艦。水上機母艦。つて事は軽巡察に行く訳か。ぶっちゃけ、その何々艦がどんな役割なのかは未だによく分かってません。サーセン。

「特務艦、宗谷です。よろしくお願いします」

「水上機母艦の日進じゃ。よろしゅうに」

あれ、宗谷つてあの宗谷？ 南極に行った船の宗谷？

「こちら、害虫駆除業者の後藤田さんよ。ここ最近は週に1回来てるから、見掛けても怪しまないでね」

「後藤田と申します。その辺で何かしてるかも知れませんが気にしないで下さい。あと見知らぬ野生動物を見掛けたら、提督さん経由で良いので教えて下さると幸いです。最近になって害獣の捕獲も始めましたんで」

「長門からアライグマの件は聞いたわ。あんな所に居たんですつてね」

「簡単に見つからない理由がよく分かりましたよ。あんな廃墟で寝起きしてたなら当然です」

因みに、あの廃墟と廃工場は現在も取り壊しが進められている最中だ。いずれ鎮守府の敷地がもう少し広くなる日が来るだろう。

「と言う事はその……もし何か出た場合は対処して頂けるんでしょうか」

「そうですね。ただ近頃はそこまで凶悪なのは出ませんけども」

「一時期は色々よく出てたのよ。今は大分落ち着いたけど」

「なんと。見たかった気もするが、落ち着いた今の着任で良かったとも思うのう」

いやまあ、お2人の行く軽巡察も手放しでは喜べない場所なんですけどね……

「ああすいません。ちよつと急ぎますのでこれで」

手短に別れを告げて駐車場へ走る。虫捕り網と適当な入れ物、殺虫剤、一応の防護服を持って空母寮へ引き返した。復活したらしいガンビア・ベイと千代田が合流している。

「大丈夫ですか？」

「が、頑張ってお手伝いします」

「無理しないでいいからね」

顔色は悪いが、見張りぐらいなら出来るだろう。全員にも殺虫剤を持って貰い、自分の方に近付いて来た場合はそれで駆除。あとは変な方向に飛んでいくのを報せてくれればそれでいい。

「では始めます。あらぬ方向に飛んで行くのを見掛けたら教えて下さい。自分の方に近付いて来た場合は距離を取るか、可能ならお手持ちの殺虫剤で仕留めて貰って大丈夫です」

言うは易し。6人の表情は固かった。半ば棒立ちなのが心境を物語っている。

しかしそれを尻目に作業を開始。虫捕り網で目に付いたのから片っ端に捕まえていった。

「よつと」

網を突き破るかのように強烈なジャンプである。2匹を一気に捕らえた。

「はいはい。森の中へ帰りましょうね」

透明なケースは見た目がやばい事になるので、ホムセン箱へどんどん放り込む。中で飛んではぶつかってバチバチと当たる音がした。

「はいつと」

3匹。

「ほれ」

2匹。

「あつ、逃げた」

追いかける。1匹ゲット。

「後藤田さーん」

「あつちに飛んでいくのが居まーす」

祥鳳&瑞鳳に呼ばれた。指差す方向を見ると、2匹が変な方向に行っているのが分かる。

「……随分遠くに逃げるなあ」

追い掛けて捕まえる。いや、これは見た目以上に重労働だな。

「後藤田はん後藤田はん、ちよつとこつちに近付いとるのが居るんやけどお」

「あ、わ、私が、やつつけます」

ガンビア・ベイが殺虫剤を噴射。バリア効果になったのか、近付いていたカマドウマは後ずさりして逃げた。

「おー、ナイスやー!」

「……こ、怖かったあ」

半ベソである。何でか分からないが、漫画とかで目がバツ印になって泣いてるキャラを連想させた。

「お姉、何かあつちに飛んでいくのが居るけど……」

「後ろからなら大丈夫かしら。こつそり近付いて、私たちでやりましょう」

お、有難い行動ですね。出来ればそれぐらいはやって欲しいが果たして……

「千代田は右から、私は左からね」

「了解」

2人で後ろからゆっくり接近。殺虫剤が届く距離まで近付き、一気に噴射した。

「えい!」

「逃がさないわ」

左右から殺虫剤を食らつては無事で済まない。引っくり返つてジタバタした後、動かなくなつた。

「……死んだ？」

「みたいね」

「あー、ありがとうございます。箒か何かで集めといて下さい。後で処分しますから」
暫し捕獲作業を続ける。物置の外に居る分は捕まえ終わつた。

「さて残るは中に居る連中だな」

全ての物置でちよつとだけ引き戸を開けて確認すると、外よりは少なかつた。これなら捕まえずに燻煙剤で駆除してもいいだろう。

「燻煙剤を仕掛けます。3時間ほどで終了ですね。捕まえたのは外の山へ逃がして来ます」

先に燻煙剤を仕掛けてから中で当たる音の響くホームセン箱を抱え、正門から出て道路を渡りいつもの山に入った。適当な場所でホームセン箱を開けてカマドウマたちを解放。人によつては卒倒するレベルの光景である。

「よーし、戻るか」

空っぽのホームセン箱を抱えて鎮守府に戻つた。燻煙剤が効果を弱めるまでは時間が

あるので暫し休憩だ。空母寮でこの後の流れを確認し、駐車で装備を解いたら後部座席で横になる。

物置の中ぜんぶ出す

アラームが鳴ったので起き上がる。1時間半ぐらいは寝れた。

「……よいせつと」

携帯に着信はないので特に問題は起きていないらしい。車から降りて軽く体操する。

バキ！

「あだだだ」

肩を回したら変な音と激痛が走った。グルグルしている内に収まったのでヨシ！

「くそ、腹筋ぐらい始めるか。いやまず柔軟かなあ」

とか何とか理由を付けて中々動き出さないのが大人つてもんだ。取りあえず足を空母寮に向けて歩き出す。

その道中で伊勢&日向と出会いました。個人的にこの2人は特に話しやすい。

「開発工廠の作業日は明後日じゃなかったか？」

「アライグマの罠を引き取りに来たんですけど、道すがらで仕事になりました」

「何が出たの？」

「空母寮です。裏の物置でカマド」

「あ、ごめん。それ以上は言わないで。苦手だから」

へえ。この人も苦手なのか。意外と平気そうな感じだったけどまあそんなもんか。

「ジメツとした所で跳ねてるアイツでしょく？ 遠くからでもヤダ」

「なんちやらコオロギとも言われているな」

「所詮はバツタ目の仲間ですからね。コオロギにしてみれば迷惑な話ですよ」

「バツタはまだ見てられるけどアレはちよつとねえ」

そんな軽い雑談を終えて足を進める。空母寮の裏では既に6人が待っていた。服装はツナギに軍手。髪が長い人は纏めた上で何かしらの帽子を被って貰った。

「お待ちせました。始めましょう」

これから物置に入っているものを1度全て外に出すのだ。ぶつちやけこれは殆どサービスに近いが、死骸を回収するのも仕事なのでそれを兼ねてる。まず1つ目の物置へと近付く。外に死骸は飛び出していないのを確認し、引き戸を開けて中の様子をまた窺う。

「……5匹か」

視界に入る限りでは5匹だけだった。しかし物を引っ張り出せば奥に居たのも出て来るだろう。これはこれで長い戦いになりそうだ。まず死骸は回収して引き戸を目いっぱい開く。

「1つずつ出していきますね」

手近な段ボール箱から外へ搬出していく。封は嚴重にされているようなので中に入り込んでいる可能性は低い……と思う。

「千歳、千代田。この辺の箱は頼むわ」

「はい」

「お任せ下さい」

「祥鳳と瑞鳳はこっちの軍団や」

「承知しました」

「OKです」

「あ、えっと、私は」

「ベイはんはウチと一緒にやるで」

意外な光景を見た。もしかしてこの中では一番古株か序列的に長いんだろうか。でなければあそこまでの確に仕切る事は出来ない気がする。

「これは……カラカラ音がするね」

「薬缶か何かかしら」

ガムテープをカッターで切って開封。その中にある新聞紙で包まれた物体を更に開いていくと、千歳の言った通り薬缶だった。それもそこそこ大きい。

「うわ懐かしい。鎮守府が出来た頃にこれでお湯沸かして皆でよくお茶飲んでたよね」
「ちよつと錆びてるわね。使い続けるのは無理かな」

まあまあ年季の入った金物の薬缶が現れた。マジックか何かは分からないが、大きく
”十七”と書かれている。

「龍驤さん。使えそうな物とそうじゃないのをロビーで仕分けしますね」

「ええでー」

「お姉お姉、これ提督の湯呑じゃない?」

「あら、それすつごい前のやつよ確か」

掘り出されるとそれなりに思い出が蘇るのは何所でも同じようだ。作業を続ける。

「これは……何だ?」

不透明なプラスチックの収納ボックスが奥に積まれている。見るからに重そうだが
果たして……

「うわ、結構重いぞこれ」

上の段から順に下ろしていった。最上部にあったケースの蓋の上に死体が転がって
いたのでこれは回収しておく。

「何や随分とデカいのが出て来よったなあ」

「お、重くないですか?」

「あー、それなりに」

「1つずつ外に並べた。何ですかこれは。」

「開けるで」

蓋の留め具を外す。中には圧縮された複数の寝具が収まっていた。

「むかし使ってた備品の布団やんか。流石にもう使わんやろ」

「勝手に処分していいもんなんですか?」

「備品やからその手のを牛耳ってる部署に送り返すだけや。皆もう自前のがあるからこれを取っとく意味もそんなに無いねんな」

「あ、あの、枕カバーが沢山、出て来ました」

「うわー、翔鶴が洗濯の時に誰のか分からなくなるから言うて全員の名前刺繍したヤツやん! めっちゃ懐かしいわあ!」

「……えつと、今居る全員分は、ないんですね」

「後からここに来た面子のは無いで。これは鎮守府の創設時から居る連中分だけやな」

随分と古い話に聞こえるが、ここに鎮守府が出来たのはそう遠い昔ではない。俺がまだ20代半ばだった頃の事だ。半ばって所は重要だから覚えておいて欲しい(意味不明)。

「ってこんなんで時間を浪費してる場合ちゃうわ。急ぐでー」

1つ目の物置は終了した。2つ目に着手するとしよう。

「……………さつきより多いなあ」

20匹くらいが床で動かなくなっている。取りあえずこれを回収して進路を確保した。

「さーて運び出すか」

積み上げられた段ボールを上から1つずつ下ろしていった。くっ付いている死骸はその場で回収する。

「これ大丈夫ですんでお願いします」

「はい」

「そつちで開けましょう」

気付けば千歳&千代田は1度中身の確認が終わった物をロビーまで運んで仕分け、ここに残った4人は中身を確認した後に新しいガムテープを張り、大雑把に内容物を書き込む役割分担が出来ていた。

それを尻目に物置の中身を出していく自分。引越し屋ってこんな感じなんだろうか、とか思ったりしてみる。

「みんなー、ちよつと休憩しよー」

「お好きなのをどうぞ」

千歳と千代田がビニール袋を持って来た。紙パックのジュースのようだ。色々あるらしい。

「おー、助かるわあ」

「あ、ありがとうございます」

「いっぱいあるね。どうしようかな」

「何がいいかしら」

俺は残り物でもいいかな。軍手を一旦外してポケットに仕舞う。

「後藤田さんはどうされますか」

「ありがとうございます。えーと……」

目移りしてしまいそうだ。オレンジ、レモン、パイナップル、ヨーグルトやら何やらと種類は豊富である。お、グレープフルーツがあるな。これにしよう。

「ではこれを」

暫し休憩時間となった。

現在、作業の終わった物置は1つ。今は2つ目を片付け中。手付かずは3つ。1と2時間もあれば終わるだろうか。

「さーてそろそろ再開や。気張って行くでー」

作業再開である。2つ目の物置に残された物は少ない。ちやつちやと片付けよう。

その後、30分足らずで3つ目に取り掛かれた。中の死骸を回収してから同じように作業を始める。

「……おっと？」

ガムテープにマジックで大きく“?”と書かれている段ボールが出土した。一度外に出て声を掛ける。

「すいません、ヤバそうなのが出て来ました」

「何やて？」

段ボールを外に出す。ロビーから戻って来た千歳と千代田も加わって7人で取り囲んだ。

「……誰の字やと思う？」

「さあ……ちよつと私には」

「見た事あるような気はするんですけどね」

祥鳳は見覚えがないようだ。瑞鳳は思い出せそうで思い出せない顔をしている。

「千代田、こんなの覚えてる？」

「ううん。何だろうね」

「あ、危ない物が入ってるんじゃないか……」

「自分は居ない方がいいですかね」

「乗り掛かった舟や。まあ何が出て来ても口外無用で頼むで」

龍驤が段ボールを揺すった。何かがギツチリと詰まっているらしく、物が揺れるような音は聞こえない。しかし……

「何や水音がするなあ。チャプチャプ聞こえるわ」

液体炸薬って何かのアニメで聞いた気がする。いやゲームだったような。何だっけか。

「カッターをどうぞ」

「しゃーないから中を改めるでー」

千歳の持つて来たカッターを受け取った龍驤がガムテープをちよつとずつ切つていく。慎重に開けるとその中には……

「……………酒やん」

酒の一升瓶が新聞紙やら梱包材と一緒に入っていた。そこで瑞鳳が何かを思い出す。

「あ、何年か前のビンゴ大会で隼鷹さんが当てたお酒だ」

「思い出した。ポーラが是非一口つてしつこいから、絶対に分からない所に隠したつて言つてた」

千代田もその時の記憶が蘇つたらしい。隣の千歳は獲物を狙う目をしている。

「すっかり忘れとるやんけあのアホ。どないする？ 夜に皆でこつそりいただいてまう

か?」

「戻しておいた方がいいのでは……」

「隼鷹さん、引き摺ると長いです」

祥鳳とガンビア・ベイが窘めた。肝心な時に使い物にならないのは避けたいらしく、龍驤もそれを思ったか封をし直した。

再び閉ざされていく段ボールを見つめる千歳に龍驤が気付く。

「千歳、その目やめえや」

「え、あ、ど、どんな目ですか?」

「何が何でも手に入れたるって目えしてるで」

「そ、そんな事ないですよ」

「飲みたかったら隼鷹さんに直接言えばいいじゃん」

「あかんあかん、酔っ払いが2人同時に出たら收拾が付かへん。飛鷹の事も考えてやり」
蚊帳の外だなあとか感じつつ作業は再開された。まあ、俺が何か言える立場でないのも事実ではあるが……

「某日、物置の整理にて中を検める。早よ飲みいや。」と

龍驤がメモ書きを残した。これで本人が気付いても慌てる事はないだろう。それが何時になるのかは分からない。

「千歳ー、手え出したら暫く禁酒令やからな」

「了解致しました」

無駄に姿勢を正して千歳は答えた。キビキビと動いて作業を進めていく。

その後はスムーズに作業が捗り、何だかんだ残りの物置は1つになった。これも同じようにやっていきましよう。

「……あれ、居ない？」

引き戸を開けた先に死骸は転がっていなかった。ちよつと不思議に思いつつ足を踏み入れるが、やはりカマドウーンは居ない。あ、カマドウーンってどうですかね。ちよつとは柔らかく連中を呼べるんじゃないでしょうか。

「まあいいや。お仕事お仕事」

荷物を外へ出していくと、何でか奥の方が明るくなりだした。何でだろう。

「……………おやまあ」

下の方の一部分が破損して穴が開いていました。ここから逃げ出した可能性がありますね。

(でも大した数じゃないだろうし、目に付かない場所で生きていくんなら放つとしても)
「後藤田さーん！ さつき近くで何か跳ねましたー！」

祥鳳の叫びを皮切りに外が騒がしくなる。

「何や何や！ まだおるんか！」

「お姉！ 足元足元！」

「やだどこ!？」

「ヒイツ」

「ベイちゃんここで倒れちゃダメ！」

うーん、遠くに行つてくれてたら良かったのになあ……

まず物置から出て全員を遠ざける。そしたら殺虫スプレーを持って目を凝らしながら歩いた。

「お、そこに居たか」

地面と色合いが似てるのでよく見ないと分からなくなりそうだ。1匹を駆除する。その後も2匹3匹と退治した。他には居なさそうなのでよしとしよう。

「大丈夫ですよー。続けましょう」

恐る恐る6人はまた作業を再開した。それから1時間は掛からなかったが、無事に作業は終了。残りの仕分けは任せ、俺はもう1度だけ物置周辺を回つて残つたのが居ないか探したが、もう見つける事は出来なかった。

「ではこの辺で失礼します。もしまた死骸が転がってましたら、箒で遠くにも弾き飛ばして下さい。後は土に帰るでしょうから」

「お手数をお掛けしました。後はこちらで処理しますね」

「急なお願いだったのにありがとうございます。もう出ないといいなあ」

生きていく上では何回か遭遇するでしょうね。多分……

「ありがとうございます。あ、ジビエもしつかりいただきますね」

「えーいいなあ。私にもちよつと頂戴」

「後でね」

「えらい苦労掛けてもうたなあ。ホンマ感謝やで」

「色々、勉強になりました。ありがとうございます」

本日の作業も無事に終了。鎮守府を引き払って家路についた。

「……そうだ。家の物置もちよつと整理するか。何が入ってるかの確認もしたいし」

車中でそんな気分になった。ところが、これが大きな間違いだった事に気付いたのは、後になってからだ。今日の一件のせいかわるわる気を出した俺は、殆ど開けた事もない家の物置へ戦いを挑もうとしていた。

帰宅と同時に居間の鍵置きから物置の鍵を取り出し、申し訳程度の庭へ躍り出た。

「よいせー」

鍵を差し込んで物置の引き戸を勢いよく開ける。目の前に広がったのは、1mmの隙間もなく積み上げられた段ボールの壁だった。どうやったらこんな綺麗に収納出来る

んだらうか。人間の出来る事なんだらうか。

「……マジか」

僅かな隙間に爪を突き立てて引つ張るが上手くいかない。右手人差し指の爪が一瞬だけ捲れ上がって戻った。

「いつてえ！」

激痛に苦しんでいる所へお袋参上。

「何やってんのあんた」

「えー、ちよつと整理でもしようかなと」

「それねえ、私もどうやって積み上げたか覚えてないんだよねえ。下手に引っこ抜くと雪崩れが起きるかも知れないから止めときな」

「いやでも少しだけ」

「んじやお好きないように」

意地になってしまった俺は無理やり段ボール箱の1つを引っこ抜く事に成功。中には未使用の古いネズミ捕りが詰まっていた。

「これはネズミ捕りか。使つてないんなら捨てればいいのに」

「ここである事に気付いた。この段ボール箱を引っこ抜いたにも関わらず、上の段の箱は下に落ちて来ない。それだけに留まらず、1度引っこ抜いた段ボールを元の空間に収

める事も出来なかった。

「……うそーん」

どうやっても押し込めない。何ででしょうか。

「……………ひらけごま……無理ですよねー」

結局、段ボールの壁に穴を開けただけで、一度出した物を戻せない珍事を引き起こしてしまった。やめておけば良かったと今更ながらに思う。

(広樹です。挑戦とは時に無謀でしかない事を思い知ったとです)

いやそれにしても、あんな状態を作り出したお袋が恐ろしいとです。

開発工廠 駆除作業日2

俺の人差し指の爪が一瞬だけ捲れ上がって戻った日から2日後。ハイイロゴケグモの駆除作業日がやって来た。今日の作業は工廠内にある移動可能な工作機械を外へ出しながら清掃しつつ、天井部分に居るかも知れないハイイロゴケグモの駆除、巣や卵を回収する予定だ。

因みに前回駆除した日の翌日、天井部分の搜索について高所作業車を使わなくても出来る案があると連絡があった。それが何なのかも今日で分かる。

「今日のためにこちらを用意しました！」

開発工廠前のアスファルトに並べられた形と大きさが違う2種類のドローン。その数は5機ずつで計10機。

「これで天井近辺の搜索をします！ 中央にある可動式ノズルを備えた殺虫剤で駆除が可能です！ カメラもありますからその映像を見る事も出来ます！」

得意げな明石さんが早口気味に捲し立てる。どう反応していいかいまいち分からな

い。「半分は駆除型。もう半分は回収、いえ、どちらかと言えば吸引型ですね」

打って変わって嬉し気な表情だが口調は落ち着いている夕張さん。して、吸引型とは何でしょうか。

「小型掃除機を組み合わせたこれは、巣にある程度まで接近して死骸や卵を吸い込む事が出来ます。この上の方に伸びているノズルで吸い込みます。その際は機体を傾ける事も可能です」

つまり、クモ自体は駆除型でやつつけ、死骸と卵は吸引型で回収する算段らしい。

「……巣の方はどうなります?」

「それなりにパワーのある物を積んでいますから十分に吸い込めます。一応、その辺にある蜘蛛の巣でのテストも成功しました。全てを回収するのは難しいでしょうけど、目で確認しながら手作業でやるよりは時短になると思いますし、高所の作業は転落の危険もありますからまだ安全じゃないかと」

まあそれもそうか。手だろうと完全にこなすのは不可能だ。どうやったって取り切れない部分も出て来る。定期的に燻煙剤を撒けば増殖も防げるだろう。それに万一が起きて落下でもすれば、大怪我かもしくは死の二択しかない。

「因みにこれ、誰が操作するんですか」

「私とお手伝いの2人が居ます」

そこに現れたのは……

「ん、頑張る」

「今日のためにガラじゃないけど練習して来たよ」

初雪と、もう1人は誰だったかな。何とか月だったと思うけど……

「駆除型を初雪ちゃん、吸引型を望月ちゃんにやって貰います。私もそれぞれ2機ずつくらい受け持つので、2人には残りを折半して貰おうかと」

ああ、そうそう、望月だったか。

「……にしても3人で10機はちよつと厳しいんじゃないですかね」

「自動操縦モードもありますから、その辺は何とかやりますよ」

なるほど。まあ、素人の俺が口を挟める事ではないから任せるとしよう。それはそうと、準備しなくては。

「えーと、皆さんお揃いでしょうか」

工廠前にはとある艦種が勢ぞろいしていた。

「本格的な手伝いは初めてだな」

「長門はアライグマの時に1回経験してるじゃないの」

「あの時は少々緊急性があったから少し違うと思うんだが」

まず長門型。

「頑張りますね」

「大和型の底力をみせてやろう」

続いて大和型の2人。

「よろしく頼む」

「力仕事は久々かな。ま、気楽に行こうよ」

お次は伊勢型。

「お昼の方はこちらでご利用しますね」

「少し多めに仕入れたから、ある程度はお替わりもいいわよ。ある程度はね」

隣に扶桑型。この2人は今日のお昼を準備してくれる。

「私にも出番が回って来たか。任せてくれ」

前に会った事のあるサウスダコタと……

「アイオワ級戦艦、ネームシップのアイオワよ。ずっと前から居ただけど、あちこち飛び回ってて久しぶりに戻って来たわ。Mr後藤田、よろしくね」

でけえなあおい。あ、やべ、声に出てないよな？

「よろしくお願ひします」

「そうそう。マミヤの商品に加えて貰ったホットドッグ。あなたが初めてのお客さんだったそうね。気に入ってくれて嬉しいわ」

間宮？ ホットドッグ？ そう言えば何かそんな事もあったような（物陰注意報そ

の2”で食べた)

「あー……はい、美味しかったです。ありがとうございました」

さてそろそろ仕事にかかりましょうかね。

「では予定通りをお願いします」

作業が始まる。ある程度の清掃を行ってからの運び出しとなった。

「いくよー日向」

「いつでもいいぞ」

絶対に持ち上げられないような機械が軽々と宙に浮き、戦艦たちによって工廠の外へと運び出されていく。さすがは戦艦組。凄まじいパワーだ。

「武蔵、いいわね?」

「ああ」

重機じゃないと外に出せないんだろうなあと思っていたが、そんな事はなかったようだ。いや、ここだけで見れる光景の筈だ。ここの外で見た事を話しても信じて貰えないのは確実である。

「やだもう、機械の下ってこんなに汚いのね」

「基本的に動かす事はないからな。それより陸奥、そっちが少し高いぞ」

「よーしアイオワ、私たちもやるぞ」

「OK!」

さて、ボーっとしてないで俺も仕事せな。

運び出された機械が元あった所に卵や下手すれば幼虫が居る可能性があるんで、まず薬剤を散布して回る。1度確認の終わっている場所にも念のため再度の散布を行った。それが終わったら外にある機械の入念な清掃と並行しつつ、天井部分を調べるためドローンが工場の中に入る。

「行くわよ2人とも!」

「オツケ」

「了解」

一斉に飛び上がるドローンはちよつとカッコいいと思った。向こうは大丈夫そうなので清掃に混ざる。

「では掃除の方を始めます」

ある程度は本当にある程度で、外に出すためのものだったから本格的な掃除はこれからだ。1台に2人1組で取り付いて掃除していく。俺も明石さんと一緒に1台目に取り掛かった。

「しかしまあ大きいですね。幾らぐらいするんですか?」

「そうですねえ、数千万はするんじゃないでしょうか」

マジか。下手な新車よりよっぽど高いなおい。

「もつと規模の大きい鎮守府ですと、生産システムも加わって億単位の設備を持っている所もありますよ」

「……気が遠くなりますね」

壊したら大事だ。慎重にやらなければ……

その後も掃除は続く。ドローン班は何だかワーキヤー言いながらやっているが、主に騒いでるのは夕張さんだった。

何だかんだで昼になり作業は一旦中止。戦艦寮で昼食となる。

「今日のお昼はピラフを用意しました。配膳はそれぞれでお願いします」

「盛り過ぎはダメよ。いいわね」

「Oh! looks delicious!」

「山城は意外と料理が上手いからな。期待してるぜ」

「意外は余計よ、意外は」

サウスタコタの言葉を一蹴しつつもちよつと嬉しそうな山城であった。

「いい匂い、さすがは山城だね」

「感謝する」

「褒めても何も出ないわよ」

ピラフ、サラダ、スープを盛り付けてランチタイムだ。とても美味しかったです。

「さあ午後も頑張ろうね」

「眠くなりそうだな」

「お腹いっぱい。寝るかも」

かも、ではなく既に初雪は眠そうである。目が細い。

「山城、ご馳走様」

「勿体ないな。食堂で間宮の手伝いでもしてはどうだ」

「遠慮するわ。私、どんくさいから」

彼女が長門型の2人と話す光景はもしかするとかなりレアなのではないだろうか？

「後藤田さん、午後の工程ですけど」

「あー、はいはい」

明石さんと少し打ち合わせをしてゾロゾロと開発工場へ戻った。軽く体操をしてからの再開となる。

バキ！

「っー」

背中で軽い痛みと共に嫌な音がした。大丈夫かね、俺の体……

「どうした、顔が歪んでいるぞ」

「ちよつと背中嫌な音がしまして……」

「運動不足だな。ラジオ体操だけでもそれなりに効果があると聞く。やってみるといい」

「ありがとうございます」

日向様からアドバイスを頂いてしまった。明日やってみようかな。

「作業を再開しまーす」

明石さんの号令によつて再び作業が始まる。機械は残り10台くらいだが大きいのでそれなりに時間が掛かるため、どうしてもスピードは遅めだった。

「手が痛くなって来ましたねえ」

「私も指先が痛いです」

残りは7台か、先は長い。

「休み休み続けましょうか」

時間を掛けて1台、2台と終わらせていった。気付けば時刻は15時を回ろうとしている。今日も残り2〜3時間と言った所だ。

「お疲れ様です。どんな感じでしょう」

「ああ、お疲れ様です。そうですね、思っていたよりは進めてないです」

提督さんが様子を見に来た。取りあえず残り時間を考えて、今日が何所まで出来るか

を見定めなくてはならない。向こうの様子も探るべくドローン班の所へ向かった。

「夕張。順調か？」

「ちよつと初ちゃん寝ないで！ もつちー、私の受け持ち少し渡しでもいい!？」

初雪はコントローラーを握ったまま落ちていた。

「無理言うなよ、1人じゃいいところ4機だつて。周回モードだから放っておけるんであつて実質操れるのは1機なんだから」

かなり無茶な方法で頑張つていたらしい。そりゃあ10機を3人で操るのはどう考えても厳しいだろう。

「あー、夕張？」

「え？ やだ提督！ いつから居たんですか！」

「ついさつきだな」

「お忙しい所をすいません。そちらの状況は如何でしょうか」

「はい！ 順調……ではないですねぇ」

天井部分の半分は何とか終わったそうだ。巢も可能な限りは吸い込んだらしいが、細かい所は残ったままである。まあこれは人力でも難しいから仕方ない。何よりもドローン班は圧倒的な人手不足だ。

「機械の清掃も残り時間を加味すると何台か終わりませぬね」

「あれは別の所に場所を用意しますので、終わった物はそっちへ移しましょう。終わらなかつた分はこちらで作業を継続しますから大丈夫です」

何だか毎度毎度、作業の読みが甘くて1日の予定が全部終わらない事が多い。その辺も考慮して予備日を設けてはいるが、そっちに全部のしわ寄せを集めるのは良くないだろう。

「規模が大きい作業は難しいですねえ。どうにも読み通りにいなくて申し訳ありません」

「この面積を考えると本来なら大手さんに頼むレベルですから仕方ありませんよ。それを引き受けて頂いてるだけでも感謝仕切れません。あ、そうそう。様子見ついでにこれを渡しに来たんです」

提督さんは小脇に抱えていた封筒を差し出した。

「……何ですか？」

「敷地内車両通行許可証です。ようやく届きましたのでどうぞ」

おー、ついに来たか。アライグマの一件で、上に申請するから用紙を書いて欲しいと言われたヤツが届いたようだ。これがあれば駆逐艦寮から出る色んなのが詰まったゴミ袋の移動も楽になる。

いやでも運動不足が更に加速しそうだなあ。取りあえずこれは受け取っておこう。

「ありがとうございます。これで重量のある罨の移動も楽になります」

しかしそう考えるとやはり凄く便利な物に思えて来た。置きっ放しのアライグマの罨も近い内に回収しなくては。

さてと、許可証についてはこれぐらいにして、今日の工程を見直さなくてはならない。

「今日の残り時間で天井はどの程度ならいけますか？」

「あと……3分の2は何とか」

「バリさくん、正直に言いなよ。かなり指痛いんだけど」

「……3分の1……ですかね」

「では回収のドローンを全部下ろして、噴射型だけにしましょう。それで終わってない部分への噴霧だけお願いします」

ドローン班についてはこれでよし。ほいで、自分が受け持っている所はどうするか。

「4人1組へ変えて1人1人の負担を軽くしてみましよう。自分は工廠内で増えているのが居ないかももう1度見て回りますので、明石さんは来週のスケジュール調整をお願いします」

「了解です！」

戦艦組に2人1組から4人1組へ変える旨を伝える。幾ら戦艦と言えど疲労は無視出来ないらしく、単純に手数が増える事を喜んでいた。

「どれ行きますか」

薬剤入りのタンクを背負って工場内部に入った。時計回りを見ていく。

「……おや？」

こんな所に巣がある。はて、見落としかそれとも……

「綺麗に排除して、薬も撒いて、と」

巣を拭い取った。一応入念に見たが生きている個体は確認出来ない。多めに薬品を撒いておく。

「はい次。迅速迅速」

確認しつつ見取り図に終わった所を書き込んだ。これを基に作業がない間も見回りをして貰って、情報を更新していくのが狙いである。連中の繁殖力を調べる事も出来そうだ。

気付くと時間が溶けていた。時計の針は17時前を指している。

「あー疲れた」

見回りは取りあえず終了。工場の外に出た。

「お疲れ様です。そちら、どうでしょうか」

バインダーを脇に抱えた明石さんが振り返る。

「残り2台までいけました。後はこちらで進めます。来週のスケジュール確認をお願いします」

します」

バインダーを受け取った。来週は……

(機械の清掃は明日再開。天井の方も2日に1回程程度で継続実施。来週のメインは大掃除だな)

当日のメンバー：吹雪型8名・綾波型8名・白露型10名・長良型2名

28人も居る。凄い人数だ。それにしても、駆逐艦の方は知っている数よりも多い。まだ見ぬ姉妹が居ると言う事なのか。

「……はい。大丈夫そうですね。運び出した機材を戻す日はまた考えるとして、駆除作業自体はこれで終わりに出来そうな気がします」

「ありがとうございます。でもまだ油断は出来ませんねえ」

「来週は開始時間を少し早めましょう。そうすれば今日よりも時間を見やすいかも知れません」

そんな訳で本日の作業はここまですなりました。最後に念のため燻煙剤を複数設置して広範囲へ行き渡らせる。食堂で夕食を取ったり道具や在庫の確認をして時間を潰し、空になった燻煙剤を回収してから帰った。

「……来週で終わると良いなあ」

車内で1人そう零す。毎週毎週こんな大きい作業をしてると流石に疲れも溜まるつ

てもんだ。何所か温泉でも行って暫く休みたいなんて気分にもなる。

百足、再び

広樹です。取りあえず始業前のラジオ体操を始めました。その内に効果が出て来る
といいなあ。

前回作業日の2日後。提督さんから受け取った車両通行許可証をインパネの上に載
せて鎮守府へやって来た。今日は残っているアライグマの罨ラスト1個を回収に来た
のだ。

「お疲れ様です。罨の回収に来ました」

「おはようございます。あ、ついに許可証が出ましたね」

警備の人が許可証を見つける。そう言えばこれがあると何か対応が変わるのだらう
か。

「はい。因みに敷地の奥へはどうやって入れば」

「これを持って来られた場合は関係者用の出入り口からどうぞ。何かのついでとかで来
られて許可証が無い場合は、以前のように来客用の方から出入りして下さい」

「関係者用？」

鎮守府の出入り口は2つある。1つは俺が何時も出入りしている来客用の方。こっ

ちには中に入ると、そのまま来客用の駐車場へ繋がるようになっていた。警備所を挟んだ隣は関係者用で敷地内の奥へとダイレクトに入れる。

「あー、隣ですね。分かりました」

ハイエースを一旦バックさせてから入り直す。何か手続きがあるのか思っていると、バーコードの読み取り機みたいなのをフロントガラス越しにかざした。

「はい、OKです。どうぞ」

わあ凄い。楽でいいなこれ。

「何か埋め込んであるんですか？」

「まあそうですね。詳しくは言えませんが」

あ、はい。分かりました。これ以上は何も聞きません。

「では失礼します」

車を敷地の中へ進める。目指すは司令部棟だ。裏手に置かせて貰っている最後の罠を回収に向かう。

敷地内は制限速度30キロだ。教習所に行つてた頃は30キロでも怖かったけど今は何ともない。慣れて凄いなあと今更ながらに思います。

司令部棟裏

「どっこいせつと！」

鋼鉄製の罫を持ち上げて積み込み作業を開始。くつそ重いです。

「おつと！」

手が滑って盛大にアスファルトへ落とした。ガシャーン！　なんて金属音が響き渡る。そして司令部棟の何所かの窓が開く音もした。

「大丈夫ですかー？」

上から大淀さんの声がする。顔を上げるとちやつかり隣に加賀様もいらつしやつた。

「騒々しいわね」

どうも今日は機嫌が良くないみたいなので早々に退散するでしょう。その証拠に目付きが鋭いし声がいっつも以上に低い。

「大丈夫です、お騒がせしましたー」

今度は落とす事なく積み込めた。バックドアもそつと閉める。

「さて、退避退避」

あ、待てよ。ついでだから間宮さんの所に寄つて行こう。何か新商品に出会えるかも知れない。車をゆつくり発進させてお店へ向かった。

お店の斜め向かいに車を止め、久々に客として暖簾をくぐつた。当然だが間宮さんがいらつしやる。

「今日はどうされましたか？」

「久しぶりに食べに来ました」

「あら、ごめんなさい。何か出たのかと思ってしまつて」

まあここ最近の事を考えると脳みそが勝手にそう思ってしまうのも無理はないか

……

「こちらにどうぞ」

「ありがとうございます」

カウンターに座り、メニューを眺める。特に新しい商品は追加されていないようだ。

「うーん……今日のおすすめにしようかな」

美味しそうなのでこれにしよう。お茶が運ばれて来ると同時に注文する。

「今日のおすすめでお願いします」

「はい。お待ち下さい」

こんな注文をすると、常連のような気分になった。ここ最近はあまり来れてないから

常連と呼べるほどの存在ではありませんけどね。

とか思っていると、暖簾が風と共に捲れ上がる。

「すいません、後藤田さんが来て……ますね」

「はい？」

飛び込んで来たのは小脇にクリアファイルを抱えた古鷹でした。ちよつと息を切らしているがどうしたのだろう。

「司令部棟の裏に車があつたのを見掛けて、追い掛けて来たんです。お仕事をお願いしてもいいでしょうか」

「分かりました。取りあえずどうぞ」

隣に座つて貰う。それでどのような案件でございましょうか。

「以前、ムカデを退治して頂いた件なのですが、ここ最近になつてまた姿を現すようになりまして」

「なるほど。まあ裏手の雑木林がある限りはどうしても再発の可能性がありますね」

重巡寮の見た目は新し目の小さいマンションと言つた感じだ。しかしその裏手には鬱蒼とした雑木林が存在を誇示している。手を全く入れていない訳ではないが、伐採するのも金が掛かるのでそのままになっているらしい。

そしてこれは又聞きした話だが、俺が出入りするようになる前は特に何も起きなかつたそうさ。どういう事なんですかねえ……

「この前、ついに部屋の中にまで入つて来たんです。中途半端にドアが開いていたのも原因なんですけど、足元に来るまで気付かなかつた青葉が驚いて飛び上がつて、床に落ちて軽い怪我もしてしまいました」

あら、これはちよつと穏やかではないな。

「これが見掛けた回数や、建物の中に入って来た頻度を纏めたりリストです」
「拝見します」

クリアファイルから出された紙に目を通す。見掛けた回数は十数回。建物の中に入って来た回数も同じぐらい。一週間でこの数字だ。一般家庭ならそろそろ気が参つて来るだろう。

「……何所かで漏水してたりしませんか？ ムカデは実を言うと水が好きな生き物です」

「水ですか……」

暫く考えたが、答えは見つからなかったようだ。何度も首を傾げている。

「特に異常は無いと思います」

「であれば別の何かが原因でしょうね。取りあえず見てみましょうか」

「えーと……お仕事に行かれますか？」

隣にお盆を持った間宮さんが立っている。しまった、注文していたのをすっかり忘れていた。

「………いただいてから向かってもいいでしょうか」

「はい。私は先に戻ってますので、ゆっくり来て下さい」

と言う訳で無事、本日のおすすめを食べられた。車に乗り込んで重巡寮へ向かう。「ごちそうさまです」

「ありがとうございます。行つてらっしゃいませ」

「……はい、失礼します」

今ちよつと、ドキツとした。もし仮にどうにかなる事が出来たとしたらあれを毎日聞けるんですよ皆さん。凄いいと思いませんか？

そんな事を考えていたら食品配送トラックの進行を妨害しそうになったので気持ち切り替える。危ない危ない。運転中に考え事はいかんですよ。

重巡寮

邪魔にならない場所に車を停めて中に入る。アライグマの時にも会つた利根と衣笠、肘に包帯を巻いた青葉が居た。

「よく来てくれたのう。また手を煩わせてしまつて済まぬ」

「どうもー青葉です。出来れば今回も撮らせて貰えませんかでしょうか」

「青葉、片腕殆ど使えないんだから大人しくしてなさい」

「えーでも」

「いいから」

「はい」

シユンとなる青葉は大人しくソファに腰掛けた。まあ下手に動き回って怪我が増えるのはよろしくないだろう。

「まず一通り見て来ますので、皆さんに何を手伝っていたかはお話しますね」
リスト片手に偵察を開始。同行者は衣笠と古鷹の2人。裏手に出て建物と雑木林の間にある庭を調べた。

「お、小さいけど居るな」

基礎の部分に小ぶりなムカデを発見。まだ成長途中のようだ。

「小さくても形は同じなんです」

「これがあんなに大きくなるって考えると怖いなあ」

コイツはその辺にあった木の枝に乗せて森へ帰した。物は試しと言う事で通用口を開ける。

「そんな直ぐに姿を現す事はないでしょうけどもちよつと開けておきましょう。もし入って来たのを追い掛けられたら、ムカデがやって来る原因を調べられるかも知れませんが」

「あ、でしたらちよつと皆に報せて来ますね」

古鷹が通用口から入ってロビーへ向かった。戻って来るまでの間、建物の外壁を調べ

る。

「……うわ」

角を曲がって側面に出ると、そこそこ大きいのが3匹も壁にへばり付いていた。

「これはちよつと触れないなあ。戻るか」

「後藤田さん後藤田さん、1匹中に入ろうとしてます」

「え？」

衣笠に呼び戻される。すると壁に居たのと同じぐらいのムカデが通用口から入っていく光景を目撃した。

「……マジか」

「すいません、お待たせしました」

「あー古鷹、動かないで」

「え……ひっ」

戻って来た古鷹が床を這うムカデを見て固まった。ムカデの方から離れていくのを待つ。

（そう言えばリストを見る限り、目撃も遭遇も1階だけだな。どうしてだろう……）

リストにもあるように、目撃場所は基本的に1階のみだった。不思議な事に上階での遭遇や目撃情報はない。侵入ルートは恐らく、1階の中途半端に開いていたり換気のため

めに開けていた窓や通気口からなのだろう。

ムカデは触角を頻繁に動かしながら、少しずつ古鷹から離れていった。それを後ろからこつそり追い掛ける。しかし、何も道具がない事に気付いた。

「そうだ。火箸とかありますか？」

「多分、物置部屋とかには」

「急いで持つて来るね」

衣笠が小走りで物置部屋に向かった。このままゆっくり追い掛けるなら、戻って来るまでに大した距離は移動しないだろう。

「……何所に行こうとしてるんだ」

「こっちは炊事場があります。でも、ゴミは別の所に纏めて置いてあるので、生臭いなんて事はない筈ですけど……」

何かを求めて彷徨うムカデはゆっくりと進み続けた。予想通り、然程の距離を移動する前に衣笠が舞い戻る。

「火箸です。それと一応ゴミ袋も」

「ありがとうございます」

暫し、ムカデの追跡を続ける。ウネウネと動き回るムカデは炊事場の中へと吸い込まれて行った。

「炊事場に入りましたね」

「うーん、掃除が不十分なのかな」

「綺麗にはしてると思うけどね」

炊事場を覗き込む。ふと、鼻先を何かの匂いが掠めた。

（何だ？ 甘い匂い？）

「あれ、何所に行ったんだろ」

「消えちゃった？」

意識を戻す。ムカデの姿が見えない。

「げ……隠れたか？」

中には入らずにくまなく探すが見つからない。少しずつ足を踏み入れようと思いはじめたその時……

「あ、居ました」

古鷹がムカデを見つけた。冷蔵庫の裏から壁を伝ってシンクに取り付こうとしている。

「捕まえます。ここで待っていて下さい」

火箸を構えて近づく。ムカデは三角コーナーの上から触角を動かして何かを調べているようだ。それに夢中になっている間に火箸で捕獲する。

「よつと」

体を掴むと全身を激しく動かして火箸に絡み付いて来た。長さがあるのでどうやっても手に触れる事はないが、見ていて気持ちのいい光景ではない。

「はいはい。悪いけど出てつて貰うぞ」

黒いゴミ袋に放り込む。これで外からは見えない。

「終わりました。取りあえず逃がして来ます」

「はい。ありがとうございます」

「もう終わったの？ はつや」

ガサガサ動いているゴミ袋を片手に外へ出た。森の手前で封を解いてムカデを逃がす。

「ほれ、はよいけ」

ボトッと落ちたムカデは森の中へ逃げていった。ついでに外壁に居た連中も引っぱがして森に帰しておく。

「さて戻るかね」

報告も兼ねて2人の所へ戻る。だがその時、足の間を細長いのがすり抜けようとした。

「ちよい待ち」

火箸で掴んで持ち上げた。さっきのよりは小さいから同じ個体ではない。

「何だおい。次から次へと」

念のため通用口は閉める。コイツはそのまま森の中へと放り込み、今度こそ炊事場へ戻った。

「お待たせしました。取りあえずロビーの方へ戻りましょうか」

「ちよつと疲れましたね。少し休憩にしましょう」

「皆もそろそろ帰って来る時間だよ」

うん？ 誰か出掛けているんでしょかね。まあいいや。

ロビーへ戻ると、ちよつどその出掛けていた面子と出くわした。初めてここに来た時以来の高雄&愛宕、アライグマの時にも会った筑摩、お馴染みになったザラの4人が居る。

4人の私服姿は初めて見たが、一見するとモデルか何かかと思う容姿だった。

「あら、お久しぶりです」

「暫くでーす」

「もしかしてここでもアライグマが？」

「アライグマ？ こんな所に？」

「ご無沙汰しております。実はまたムカデがですね」

その時、4人の持っているバッグに気付いた。あれは確か有名なアイスのチェーン店が売り出している保冷バッグだ。駅前にも最近店が出来たし、郊外にも2、3つはあった気がする。

「お帰りなさい。あ、買って来てくれたんですね」

「早い者勝ちよー。今日居る人数分はあるけど」

愛宕が保冷バッグを開けたのを皮切りに、それぞれも開け始めた。中にはシンプルな物から豪華なトッピングが施された物まで幅広いアイスが収まっている。

「はい姉さん。いつものトッピングですよ」

「おー！ 有難いぞ筑摩！」

子供が夢見るような色々トッピングされたアイスを嬉しそうに受け取る利根であった。そして漂い始める甘い匂い。これはさつき嗅いだのと同じである。

「そうか。バニラの匂いだったか」

「どうかしましたか？」

「原因が分かりました。古鷹さんだけちよつとご協力願います」

古鷹を含め頭の上から“?”が消えない彼女たちを尻目に行動を開始。2人で炊事場へと戻る。

「あまり大きい声じゃ言えないんですけど、ムカデって甘い物も好きなんですよ」

「甘い物……もしかして」

「まだオープンして間もないですけど、ここから一番近い店は駅前ですよ。ムカデがまた出始めたのと皆さんがアイスを食べるようになった時期は同じじゃないですか？」

「そ、そうですね」

「あそこでカップとかを洗つても、三角コーナーに残つたのはよつぽど洗い流さないと消えない筈です。恐らく、中途半端に残つたのが蓄積して、連中を誘い込む要因になっている可能性があります」

炊事場から三角コーナーを取り出して裏手に置いて見た。無論、戸締まりはしっかりとしてある。

「……あ、来た」

1匹、2匹、3匹と姿を現す。三角コーナーに頭を突っ込んでいるのが見えた。

「この隙にシンクを綺麗にして、消臭もしてしましましょう」
「徹底的にやります！」

意気込む古鷹と共にお掃除を開始。排水溝の中も綺麗にした。無香料の消臭スプレーをあちこちに噴き掛けていく。

「これぐらいでしようか」

「匂いはしなくなりましたね」

残りには三角コーナーを綺麗にして、群がっていたのを回収。こいつらは帰りに山へ放とう。性懲りもなくやって来る可能性は否めないし……

「取りあえず様子を見ましよう。多分大丈夫だと思えますけど」

「不手際でした。ありがとうございます」

ロビーへ戻り、軽くお話をする。もしかすると原因はアイスかも知れないので、処理の仕方をもう少し工夫した方がいいかも知れないと言う事と、その上で様子見をする事。これでも侵入が絶えない場合は本格的に駆除作業をするので連絡して欲しいとも伝える。

「では失礼します」

蠢くゴミ袋片手に車へ乗り込んだ。そのまま敷地を出て近くの横道から山に入り、ムカデを放つ。草むらに消えるのを見届けて帰路に着いた。

「やれやれ、大捕物にならずに済んだか」

開発工廠の件でキャパシティがきつい所に変な物が出なくて良かったとも思う。今日はもう帰って休ましよう。罨のメンテもしたいし。

番外編 鎮守府公式チャンネル

某日 第十七鎮守府

駆逐艦寮 管理室にて

「……本当にやるの?」

「外部の人達にここを知ってもらういい機会だって、提督も言ってたしね」

「お面もあるんだから大丈夫大丈夫。他の鎮守府だって似たような事してるんだし」

三脚に設置されたカメラの前に居るのは吹雪・陽炎・白露の3人だった。近くにあるテーブルの上にはひよつとこ・おかめ・きつねのお面が置かれている。

なんと3人は、これから動画投稿サイトに鎮守府の公式チャンネルを設立するため、第1回となる収録を始めようとしていたのだ。

「んじゃ私はきつね貰うわ」

「おかめいただき」

「えー、ひよつとこお?」

陽炎はきつね。白露はおかめ。吹雪はひよつとこのお面を被った。そしてカメラの前に用意された椅子に腰掛け、陽炎がカメラの録画ボタンを押す。

椅子に座る陽炎を待つてから10秒後、白露の秒読みが始める。

「5秒前。4、3、2、1」

一拍おいてから再び白露が喋り出した。

「こんにちはー。第十七鎮守府公式チャンネルでーす」

「私たちが普段どんな事をしているのか、見せられる限りの事を公開していきまーす」

「あ、えつと、よろしくお願いします」

「今日のメンバーはしらつちと」

「かげろん」

「ふ、フブでお送りします」

「メンバーは私たち以外にも増えていく予定なので、その辺もよろしくどうぞ」

ギクシヤクする吹雪を余所に白露と陽炎は妙にこなれた感じで収録を進めて行く。

「今日は第1回目の収録です。ゲストはこの方」

丸椅子を片手に何かの戦隊物の仮面を被った提督がやって来た。白露と陽炎の間に入って座る。

「初めまして。第十七鎮守府の提督です。この娘たちの上官でもあります」

あんまり堅苦しいと再生数が出ないと判断した提督の決断によりこんな事になった。因みに提督の被つてるお面は提督宅の物置から出て来た品で、実子が小さい頃にお祭り

で買ってあげた物である。

「本チャンネルでは鎮守府内で見られる日常やハプニング等を楽しく紹介していければと思います。映せる限りの事や提供出来る限りの情報を盛り込んで参りますので、よろしく願います」

「映せない事つて言うのと、やっぱり機密に関わる事ですか？」

生真面目成分の強い吹雪が訊ねた。

「それもそうだが、色々と各方面に悪影響を及ぼすような事も避けて欲しい。収録された映像は私の方で精査するので、使える部分だけを皆に渡す感じになるな」

「つて事は下手すると殆ど撮り直しになる可能性も」

「ある。だからよく考えて行動して欲しい」

「うへえ」

1回目の収録は取りあえず当たり障りのない感じで、雑談メインに進んだ。事前のお報せとして、チャンネルの更新は隔週か月1回程度で行う事と、状況によつては突然3人以外のメンバーが進行をする場合がある事も告知した。

それこそ、もしかすると提督だけが出演して収録を進行させる可能性がある事も伝えられる。

「本日はこの辺で失礼します。ご視聴ありがとうございました」

「まったねー」

「さ、さようならー」

適当な所で立ち上がった白露が録画停止ボタンを押す。無事、1回目の収録が終わった。

「さーて編集しなくちゃ」

「今日感じだとはぼ問題無いわよね」

「今回は特にいいだろう。出来上がったら1度見せて欲しいから、連絡をよろしく」

「了解しました」

初めての編集ソフトに苦戦しつつ、3人は何とか動画を形にさせていった。一週間後に出来上がった動画を提督に見せてチェックして貰う。

「……大体はイメージしてた通りになったか。まあ1回目ならこんなもんだろう」

OKが出たので動画ファイルを書き出し、アップロードも済ませた。と言う所で色々とバタバタし始めたお陰で放置してしまい2日後。再生数は100回に満たないも、地元民のコメントがチラホラと見られた。

「やった、コメント来てる!」

「いかがわしいのとか誹謗中傷だったりしない?」

「あんた普段どんな動画見てんのよ……」

一人で疑心暗鬼に陥っている吹雪に陽炎が突っ込む。

「見てみなって」

白露に促されて画面を覗き込む吹雪の目に飛び込んだのは「お、あその鎮守府じゃん」「見学会とかしてるみたいだけど交通の便がなあ……」「提督のお面はそんなでないかw」「楽しみが増えた」というコメントだった。

「……何かこそばゆいね」

「その手のコメントが来ても気にしちやダメよ。楽しまなきや」

「早速だけ次の動画の打ち合わせしよっか」

次回の更新に向けて話し合いが始まる。色々とネタ出しを行い、その中から選んだ物を提督に精査して貰ってからの撮影となった。今回は水上機動訓練の主観映像に決定する。

数日後……

「やつほー、かげろんでーす。今回は私たちが普段海の上で見ている光景をお送りします。ここは鎮守府正面の訓練海域ですので、一般の船舶やダイバーさんが存在しない事は予めお伝えしておきます」

ゴープロを額に装着した陽炎が海の上を進みながら話し始める。

「本日は水上機動訓練の様子を一部ご覧いただきます。見学会でもやってる事ではありませんが、実際に私たちの目を通してらどう見えているのか、皆さんにお届けしたいと思いまーす」

進み続けると共に進行方向へ誰かが見えて来た。先に待機していた白露と吹雪だ。お面は危険なので外してあるが、後で顔を隠す加工が必要になるだろう。その辺は青葉が教えてくれるので問題ない。

「準備いいー?」

「いつでもいいよー」

「はーい」

まずは海上に浮かんだ複数のブイの間を縫って進む最も基本的な機動術である。よそ見しながらでも出来るようになれば一人前とか何とか……（神通談）

「ではお願いします」

「まず私からね」

一気に加速した白露がブイの間を文字通りに縫っていった。続いて吹雪もジグザグに縫って進む。

「2人が終わりましたので、私も続きます」

最初は見ている側が酔わないようにゆっくり進む。自転車程度のスピードを維持し

た。

「次はもうちよつと加速しますよー」

次第にスピードを上げていった。最後はレース中のバイクかと思うほどにまで速くなる。ブイの間を通るのが殆ど一瞬の出来事と化した。

「いかがでしたでしょうか。これが私たちの目線で見ている風景です。次はもうちよつとブイを複雑な位置関係に変えますので、一旦切りますね」

録画を停止した。この間にブイを移動させてさつきよりも間隔を狭めたり広くしたりする。あえてブイ同士をぶつかりそうな距離で設置したりもした。

「再開します。どうでしょうか、普通に通るのも面倒な感じですね。ではこれの間を速めに通り抜けます」

さつきの最高速度よりもやや遅めで無事に通り抜けた。同じように少しずつ速度を上げるが、あんまり衝撃映像にしても仕方ないのでこの辺が落とし所だろう。

「本当はもうちよつと速く出来ますけど、今回はこの辺で失礼しますねー」
「ご視聴ありがとうございます」

「また見てねー」

収録を止める。ブイは自動帰還モードで港に帰って行った。吹雪が装備している専用タブレットでブイを待機モードから切り替えその様子を見守る。

「これおまけ用に撮ったところか？」

「うん、いいね」

「ただ帰って行くだけのブイ見て面白い？」

「中にはそういうのが好きって人も居るんじゃない？」

録画を再開した。ブイが帰って行く様子を映像に収める。

「お昼どうするー？」

唐突に白露が喋り出す。

「今日の日替わりなんだっけ？」

「新しいお店のメニュー表がこの前届いたけど注文してみない？」

吹雪は新しく町に出来た店が気になる様子。

「えー時間掛かるじゃーん」

「注文するならお昼の1時間前にはやっとなないとねー」

吹雪の提案は2人にやんわりと却下されてしまった。水上機動のスピーディーな映像とブイが自動帰還する微笑ましい映像に、この何気ない会話が入った事で2回目の動画は再生数1000を超え、コメントも倍以上が書き込まれるのであった。

「やべえ、バイク買い戻そうかな。乗りたくなってきた」

「一列に並んで帰って行くブイに癒しを感じる」

「最後の会話が年相応感あつてすき。でも彼女たちつて何さ（オヤコンナジカンニダレダロウ）」

「他の鎮守府の訓練映像も見たけどこつちのも凄いなあ」

所謂「バズった」まではいかないが、チャンネル登録者数と再生数はジワジワと伸び始めた。そんなある時。

「来週のスケジュールを確認しまーす」

「ごめん、出張。戻るの再来週になるわ」

「護衛作戦に出るから同じく戻りは再来週」

陽炎と吹雪は遠出のため居ない。カメラと司会を1人で行うのは可能っちゃ可能だが……

「1回お休みでもいいんじゃない？ 最初の告知で更新は隔週か月1回程度つて言ってるんだし」

「これ始まってから目まぐるしい日々が続いてる気もするしね。休もうよ」

「じゃ何か適当に撮り溜めしとくよ。私も急に遠出する可能性だつてあるし」

と言う訳で、白露1人で収録する事になった。その旨を提督に伝える。

「大丈夫か？」

「いい機会なんてメンバーを増やすための布石にします。最初はサポメンつて感じで出

て貰って、徐々に準レギュラーぐらいにしていければなー、なんて」

「まあ企画もこれなら大丈夫か。ゲストが足りなければ呼んでくれ」

「了解しました！」

そして来週になる。

「しらつちです。残念ながらフブとかげろんはスケジュールの都合が合わなくなったので、今日は私と妹のしぐしぐでを送りしまーす」

カメラを構える時雨は何と言えばいいか思案しつつ、ゆっくり喋った。

「えーと、しぐしぐです。急にカメラを渡されて困惑しながらこの場に居ます。よろしくお願いします」

「今回は私発案の企画を行いますが、まずゲストが数人必要なのでそれを確保しに参ります」

駆逐艦寮を出て歩き始める。するとそこに通り掛かったのは……

「あ、いい所にターゲット発見」

定期チェックに来ている広樹を見つけた白露嬢。

「お兄さんお兄さん、ちよつとお尋ねします」

「もうお兄さんなんて言われる年じゃないんだけどなあ。それ何でお面してんの？」

「公式チャンネルの収録中だから顔バレ防止。あ、じゃあお兄ちゃんならいい？」

「若返つとるやん。つてか、誰がお兄ちゃんじゃ誰が。血を分けた覚えはないぞ」
徐に広樹の作業着を引つ張り始める白露であつた。

「ねえお兄ちゃんちよつと協力してー」

「仕事の邪魔せんで下さーい」

公開出来ない映像になりそうだと判断した時雨はカメラを咄嗟に下へ向けていた。
アスファルトだけが映る中に白露と広樹の会話が聞こえている。

「姉さん、後藤田さん一応部外者だから提督にも訊かないと」

「顔は隠すし声も変えるからいけるっしょ」

「え、マジでネットに流すの？」 ↑身内で見せ合う映像だと思つてた

取りあえず間に一度提督を挟む事になった。提督自身も出るし、広樹にも被り物をして貰つてかつ声も加工する事で出演が決まる。因みにさっきの映像は全て使われない事となり、企画も一部変更。そんな訳で……

間宮

「しらつちです。今日は鎮守府の甘味処、間宮さんにやつて来ました。フブとかげろんはスケジュールが合わなくて不在なので今日は妹のしぐしぐとお送りします」

「しぐしぐです。何をどうしたらいいかまだ分かつてませんが、よろしく願います」

時雨は仮○ライダーのお面を被って出演。これも提督の家にあった物だ。

「私たちの心の癒しである間宮さんで、今日はおやつを食べたいと思います」

暖簾を潜る。間宮さんはカメラの後ろを移動して貰うので上手く映さないようにしてあった。

「おや提督が居ますね」

「お疲れ様です」

「やあ、ご苦労さん」

例の戦隊物のお面を被った提督と……

「そして向い側に居るのはG田さんですね」

「どうも、G田です」

地蔵の被り物をした広樹が映り込む。アップロード用の映像では画面下に「出入り業者のG田さん 出演にご協力いただきました」とテロップが追加されている。

「ではお2人に軽くインタビューしてみましよう。提督はこのメニューでどれが好きですか？」

「私はシンプルに胡麻の串団子とお茶のセットかな」

「通なお好みですね、胡麻とはまた渋い」

「G田さんはどうですか？」

今度は時雨が訪ねた。

「色々好きなんですけど 最近は草餅のぜんざいにはまっています。夏場だと水ようかんもいいですね。変わり種だとシュークリームとコーヒーマーのセットなんかもおすすめです」

このままだと広樹が喋り続けそうだと判断した時雨は、うまい具合にインタビュアーを切り上げた。2人もテーブルに座り注文を済ませる。

白露は餡蜜。時雨はアイスが乗ったホットケーキを注文した。カメラはテーブルだけが映るように固定。お面を外して食べ始める。

「やっぱり甘い物は正義だね」

「食べ過ぎるとしつぺ返しが怖いけどね」

「言わないでよそんな事」

談笑しつつ食べ終わる。3回目の動画もそこそこの再生数とコメントを得るに至り、登録者数もゆっくりに増えていった。

「提督の趣向が渋い」

「ホットケーキ美味しそう」

「G田さんかなり通ってるっぽいなw」

「しぐしぐは今後も出るん？」

等々のコメントが書き込まれる。こうして始まった第十七鎮守府公式チャンネルはローカルな存在として手堅く登録者数を伸ばしていくのだった。

この時の広樹は内心「先を越された」と考えていたが、実際に収録している所と編集している所を見た結果「1人じゃ厳しそう」との結論に至り、店の仕事を利用したチャンネルの開設は一旦白紙に戻したそうだ。

因みに広樹はその後、5回に1回は出る存在として密かに知られていく事になる。身バレはしていないが商店街の連中は薄々感付いているとか何とか……

黒くて光ってる素早いアイツ　フォーエバー

広樹です。ハイイロゴケグモの駆除作業日（暫定最終日）を2日前に控えた今日、珍しく提督さんから直接呼び出されたので鎮守府に向けて車を走らせています。許可証もあるんでそのまま司令部棟に横付けしよう。

「お疲れ様です」

「ああ、どうぞどうぞ」

関係者用出入り口に車を少しだけ入れ、何かの読み取り機でチェックが終了。そのまま司令部棟を目指した。

車を横付けして降りた。さて、何の依頼でしょうかねと思いつつ司令部棟に足を踏み入れ、執務室のドアをノックする。

「恐れ入ります、後藤田です」

「どうぞ」

ドアを開ける。執務室には提督さんだけだった。

「お掛け下さい」

「失礼します」

ソファに腰掛ける。提督さんは何かのファイルを取り出して向い側に座った。

「実はですね、大口案件のご相談になります」

大口。既に零細自営業のキャパシティーではない案件も幾つかこなして来た中、それを凌ぐものがあるのだろうか。

「……内容は」

「まずこちらを」

テーブルにファイルを開いて置いた。

「拝見します」

ファイルを手繰り寄せて内容を確認する。まず張り付けられていた画像が目飛び込んだ。これは駆逐艦寮の裏手にある旧駆逐艦寮だ。ここを再び使えるようにする計画が動いているらしい。

「……あの裏手にある古い建物です、これは」

「ええ。以前、大淀と廃工場の現地調査にご協力頂いた件で、計画に少々変更が起きました。まだ先の事ですが、駆逐艦の増員が決まりました、今の駆逐艦寮では人数が限界なんです。それで廃工場一帯を切り開いて用地を確保し、新しい寮を建てる事になっていんですが、インフラ等の整備でちよつと予算が厳しくなってしまった事もあり、既にある物を使う方針になりました。切り開いた所はグラウンドや何かしらの運動場を作

る予定です」

「なるほど。それでまあ、長年放置でもないですけど、半ばそんな状態だった場所を使えるようにする訳ですから、色々と綺麗にしないといけませんね」

「仰る通りです。一昨日、吹雪と朝潮、夕立の3人が旧棟の様子を見に行つたんですが、悲鳴を上げて帰つて来まして」

「……何がありました」

「移動する暗闇と泣きながら連呼していました。外壁を調べて回つたんですが、何カ所か窓ガラスが割れていたり強風の影響か窓枠自体が外れている所もありまして、恐らくそこから色々と中に入つてしまつているんでしょう」

「移動する暗闇。嫌な予感が膨れ上がる。にしても、ここで空き家案件に当たるとは思わなかった。」

「空き家つてのは管理が難しいですよねえ。この前は大丈夫でもちよつと間隔が開くと何か変わつていたりしますし」

「数年前から増えている案件の1つに空き家の害虫駆除があつた。家そのものが食料にもなるので、放置しておくのと酷い事になる。」

「何度か見掛けられて大ききさもご存知とは思いますが、これの駆除作業をお願いしたい次第です」

「分かりました。ハイイロゴケグモに関しても明後日で最後の予定ですし、駆逐艦寮の方も最近は落ち着いて来ましたので、今の状態なら何とかこなせるかと思えます」

「って訳でここに契約が成立した。まず様子見をする事になり、案内役として5人の艦娘が執務室にやって来る。」

「神風型1番艦、神風です。よろしくお願いします」

「2番艦、朝風よ。覚えておいてね」

「春風です。ご無沙汰致しております」

「僕は松風。4番艦さ」

「5番艦、旗風と申します。お見知りおき下さい」

「着物、袴、ブーツ。あれ、時空が歪んだか？　ここは大正時代の女学校か何かだったのか？」

「おや？　春風だけは知ってたのか」

「はい。以前、当番の時にお会いしました」

「かなり前だったような気がする。俺自身はちよつとうる覚えだ。」

「5人は元々、旧棟で生活していたメンバーになります。中の事は詳しいので案内役を任せました」

「またあそこを使う事になるとは思わなかったけどねえ」

「懐かしいわね。取り壊さなくて正解だったって事かしら」

「部屋をまたあつちに移しても良いかも知れませんか」

松風、朝風、旗風は何となく郷愁に浸っているようだ。

「ちよつと皆、吹雪たちの件を忘れてないでしょうね」

「移動する暗闇とは何なのでしょいか」

神風が釘を刺す。春風は「移動する暗闇」をさほど理解していないらしい。

(多分……居るんだろうなあ)

何となくでも予想は出来る。多分アレだ。こちらも相応に覚悟しておかなくては。

旧駆逐艦寮 正面入り口

再びここにやって来た。雰囲気たつぷりの木造校舎。学校を舞台にしたホラー映画の4作目に出来てた校舎に似ている気がする。あれが1番怖かったなあ……

「ほ、本当に入るんですか？」

「はい」

「中に入るのをおすすめ出来ません。いえ、入らない事をおすすめします」

最初に様子見に入った3人が後ろに居る。顔は青かった。

「まあ今日は偵察だからね。無茶はしないよ」

「色々と持って来たから大丈夫よ」

神風は大きなバックパックを地面に置いた。中には大量の殺虫スプレーが詰まっている。

「あちこちのメーカーから取り寄せたわ。これだけあれば問題ないわよね」

とは言え民生品ばかりだ。あ、これは新商品だな。ちよつと高くて即効性があるヤツだ。

「在庫あるんですから使って下さいよ」

「何が有効か分からないじゃない。沢山あつた方が心強いでしょ」

吹雪ちゃんが敬語だ。もしかして同じ駆逐艦同士でも上下関係があるのだろうか。

「姉貴は何か言って言うよと全力だからね。取りあえず僕はこれにするよ」

「私はこれにするわ」

「えーと……私はこれを」

松・朝・春の3人はそれぞれ違う殺虫スプレーをチョイス。

「……どれがどう違うのでしょうか」

旗風は何を選べばいいか分からないらしい。まあこんなにあればそうだろう。

「んー……精々が届く距離ぐらいかな。薬剤の成分が強いと効き目も早いけど」

「あ、これとか良さそうね」

神風が選んだのは例のハチアブジェノサイダーの派生系で冷却無香料タイプだ。凍らせて退治するヤツである。

「迷ってるなら同じにしましよ。早くしないと日が暮れちゃうわ」

「じゃあ、私もこれを」

武器を選び終わったので旧棟の鍵を開け、中に踏み込んだ。木造建屋特有のにおいと若干の湿気がそれとなく恐怖心を煽る。

「空気が滞留してる感じね。後で換気しなくちゃ」

「ちよつとカビ臭いわね。まあ木造だから仕方ないか」

朝風と神風は勝手知ったると言った感じで先を進んだ。その後が続く。

「さて、今日は何所までやるんだい？」

「今日は中を一通り見て、何の生物が巢食ってるか大まかにチェック出来れば御の字かな」

「微力ながら、お手伝いさせていただきます」

「では先に進みましょうか」

正面入り口から左に曲がって炊事場に来た。途端に自分の中のセンサーが危険信号を発し始める。

「……炊事場にしては大きいね」

「元々、校舎にあった調理場をそのまま炊事場として使っていたのよ。昔は週に何回か、調理師の人が来てここで料理してくれてた事もあったわ」

「今ある食堂は意外と新しい建物なのよ。前はここがある関係上、そんなに大きくなかったの」

神・朝の解説で新事実を知る。部外者だから当然だけど、まだ鎮守府については知らない事だらけだ。

「なるほど。じゃあ取りあえず中を調べようか」

引き戸を開けた瞬間、暗闇が一瞬にして奥の方へ消え去った。目の前には30人くらいが座れそうな複数の長テーブルと椅子がある。暗闇はその更に奥の厨房へと引込んだ。

イメージするならあれだ。と○りのト○口冒頭で錠前を開けた瞬間にス○ワタリが日光から逃れようと消え去るシーン。あれが目の前で再現されたのだ。

「……今の見た？」

振り返ると5人は後ろの壁に背中をくっつけて付けて慄いていた。それぞれ持っていた殺虫スプレーも床に落ちている。

「……何よ今の」

「あんなに居るって……冗談でしょ」

「み、見間違いだよ姉貴たち……でも見ちゃったなあ」

「……移動する暗闇……でしたね」

「ここはもう……私たちを知ってる場所ではないのですね」

あー、これはもう悪いけど戦力にならないなあ。仕方ないから1度出るか。

「一旦出ようか」

超高速で頷く5人と一緒に外へ出た。正面入り口まで大した距離ではないが、5人は俺の周囲に固まってすつかり閉口してしまっていた。

無事に外へ帰還。待っていた3人が出迎えた。

「あ、戻って来たっばい」

「……あの様子だと見たんだね」

「私は二度と見たくありません」

神風型5人は意気消沈。ロビーで休んで貰っている。ほいでもって、今居る人員で肝の据わったのを選定した結果……

「あんま気は進まないけど偵察ぐらいならいいよー」

いつもの白露嬢と

「頑張りまーす」

綾波に

「あーGぐらいだったらもう慣れたでござる」

漣

「まあ深追いせんのかやったら大丈夫やろ？」

黒潮、の計4人が参加した。神風には簡単な地図を書いて貰って、それを基に探索を進める事となる。

「取りあえず殺虫剤は護身用程度って考えてくれ。移動する暗闇と遭遇したら真っ先に逃げる事。以上」

「マジで移動する暗闇なの？」

「マジ」

「手を付けない間に随分と増えたンゴねえ」

「漣、変な言語は慎みなさい」

「あ、はい。姉上」

「出来れば無事に終えたいもんやねえ」

再び旧棟に足を踏み入れる。炊事場は後回しだ。先に敵の居なさそうな所から探つて行く。

物置部屋。元々は職員室だった所を再利用した会議室。更にその中に間仕切りで作られた休憩スペース。トイレの搜索が終了。トイレは水抜きされていたので何かしら

が群生する条件を回避出来たようだ。

「ねえ後藤田さん、何かの糞っぽいものがあるよ。しかもすごいにおい」
「糞？」

白露が廊下の壁と床の境目辺りを指差す。近付いて見ると、確かにすごいにおいだ。

「……何だろうね。犬っぽい感じもするけど」

「野良犬だったら流石に私たちでも気付くと思いますけど」

「鳴き声とかは特に聞いてないですぞ」

「野良犬なんてこの辺にはおらんぞ」

まあそりやそうだ。北海道には野犬が居るって話を聞いた事があるけど、元々は飼
い犬だろう。この糞は一応、写真に取っておいて探索を続行だ。

1階は炊事場を除いて探索が終了。主に跳ねるのとか足がいつぱいあるのとかクモ
が巣を張ってるぐらいである。

「2階はどないする？」

「全部で何階建てだっけ？」

「3階建て」

「ゆっくり見て行こうか」

「ほいさっさー」

「後方の安全はお任せ下さい」

階段を上って2階に到達。ここは殆どが部屋になっているようだ。

「さてどつちから見ようかな」

「あれ、何か急に暗くなった？」

確かに周りが急に暗くなった。太陽が雲に隠れたんだらうか。

「今日は全国的に快晴だと天気予報で言っていました」

「変やなあ」

「あー皆さん、壁と天井をよく見て頂けると幸いなのですが」

漣が機械的な声でそう言った。ふと壁と天井を見る。そこにはですね……

「……しまった、囲まれた」

我々はいつの間にか移動する暗闇に囲まれていた。壁と天井が蠢いているのが分かる。

「ど、どうする？」

「しゃがんで殺虫剤を上下左右に撒きながら逃げよう。それしかない」

俺を含めた6人は一斉にしゃがんで殺虫剤を撒き散らした。その姿勢のまま1階へ続く階段を駆け下りる。

「ボトボト落ちる音がするー！」

「うひい！ 耳元を掠めるでない！」

「あと少しや！」

「みんな急いで！」

正面入り口から外へ飛び出す。同時に扉を閉めた。強烈な衝撃が襲って来るかと覚悟したが、それはなかったので安堵する。

「……寿命が縮んだ」

「あー怖かった。海の上で戦ってる方がまだマシかも」

「同感でござる」

「あれを倒すのは骨が折れるでえ？」

「いつそ取り壊した方がいいのでは」

「出来るだけはやって見るよ。取りあえず休もう」

息を整えながらロビーへ向かう。吹雪・夕立・朝潮の3人は、この話を聞いて目から光を失った。神風型は全員耳を塞いで拒絶。少し休んだ後、俺は執務室を訪れた。

「……そんな事が」

「ご期待に添えない可能性もありますが、やっては見ます。もし時間切れが近いですとか、計画自体にまた変更があつた際は遠慮なく仰つて下さい」

「分かりました。ですがそちらも、限界を感じたら無理せずにご連絡下さい。何か手段

を考えますし、その時点までに掛かった費用もお支払いしますので」

あれ、もしかするとこれはどっちに転んでも美味しい話なのでは？ とか思い始め

た。であればやるだけやってギブアップしても金が入る？

いやいや、ここで変な商魂を出すと痛い目に合う。最善は尽くそうと心に決めた。

こうして俺はまた大口案件を抱え、こまめに鎮守府へ通う事になるのだった。

(広樹です。安息の日々が訪れるまで、戦い続けるとです)

開発工廠 駆除作業日3（暫定最終日）

移動する暗闇の衝撃も冷めないまま2日が経過。今日は開発工廠駆除作業の暫定最終日だ。以後は様子を見つつ、必要なら作業日を設ける事となっている。

「おはようございます。取りあえず本日が最終日となります」

「ありがとうございます。暫くはこちらも目を光らせますので、何かあればよろしくお願いします」

執務室に顔を出したら開発工廠へ向かった。大勢の駆逐艦軍団と他にも数名が待っている。その中には加賀様もいらつしやいました。

「どうかされましたか？」

「立会よ。あまり気にしないで頂戴」

相変わらずの涼しい目つきで見張られると思うとちよつとやり難いなあ。

「おはようございます。最終日ですね」

「ああ、おはようございます。何とか終わらせたい所ですね」

クリップボードを持った明石さんがやって来た。今日の工程を見直す。

午前中：清掃

昼食の間に燻煙剤を設置

午後：換気のために薬剤散布 ※換気中は工廠施設周辺に生息域が伸びていないか調査
さて上手くいくかどうか……

「お疲れ様です。今日は吹雪型が全員揃いましたので、末の妹をご紹介します」
吹雪ちゃんの隣に見知らぬ艦娘。でも同じセーラー服だ。

「特改I型、浦波です。いつもタイミング悪く不在だったのでお会い出来ませんでした
が、よろしくお願い致します」

何だろう。深雪ちゃんっぽくもあるけどちよつと違う不思議な感じがする。

「後藤田です。色々聞いてると思いますがよろしくどうぞ」

「磯波姉さんと一緒に頑張ります！」

「そ、そんなに大きい声で言わなくてもいいから……」

後ろに居る磯波の顔はちよつとだけ赤かった。

「チーッス、こつちも紹介したいのが居るんだ」

「天霧と狭霧でーす」

綾敷コンビと見知らぬ艦娘2名が現れた。着ている制服は殆ど同じデザインだが少しだけ色が薄い。

「天霧だ。よろしくな」

おー、見た事ないタイプだ。でも木曾さんなんかに近い気もする。

「狭霧と申します。えっと、本日は微力ながら、お手伝いさせていただきます」

あら可愛い。萩風ちゃんと似ている？

「よろしくお願ひします。今日はもうそんなに大変な作業はないけど、注意しながらやってみるさ」

「これまでの事は一通り聞いている。皆の動きを見ながらやってみるさ」

「一応、姉から色々教えては貰いました」

姉。ふと、何番目の姉妹なのか気になった。

「2人の上と下は誰になるの？」

「あたしたちの上は綾姉と敷姉だな」

「天霧は私のすぐ上になります」

え……つて事はいつもの4人組は2人の妹だったのか。新しい事実には驚く。

「後藤田さん後藤田さん、まだ見ぬ白露型も居るからこっち来て」

今度は白露嬢に呼ばれた。朝からせわしないですね。まあ挨拶回りは大事だ。

「改白露型の江風だぜ。任せてくれよな」

「海風です。よろしくお願ひします」

既視感に襲われる。あれ、さっき似たような光景を見たなあ？

「後藤田です。ひとつよろしく願います」

「今日が最終日なんだって？ もっと早く戻って来れてたら面白そうな事に混ざれたんだけどなあ」

「暫定だから今日が絶対の最終日ではないかな。今後の状況次第で作業日を設ける可能性はあるけどね」

「お、じゃあそんな時は呼んでくれよ。楽しみにしてるぜ」

「もう江風、遊んでる訳じゃないんだからそういう風に考えちゃダメでしょ」

「まあ、職業体験の一種とでも思ってくれればいいよ。こういう世界があるんだと知ってくれるだけでもこっちは有難いです」

「すいません。元気が有り余ってるようで」

保護者の人と話しているような気分になって来た。どうしてですかね。

「暫くです。ちよつとこちらも1人ご紹介させて下さい」

よく通る声に白い鉢巻き。今日は2人だけが軽巡も居た。その1人が長良である。隣にはガンビア・ベイのようにボリユームのあるツインテールの艦娘が立っていた。

「長良型2番艦、五十鈴です。阿賀野の件ではお世話になりました。今後とも何かあれば、よろしくお願い致します」

わあ、凄いオーラを感じる。俺のような適当人間には眩しい存在だ。あとデカいです

ね。

「後藤田です。提督さんを始め皆さんにはお世話になっております。これからも鼻肩にして頂けると幸いです」

うーん？ 取り引き？ 役所？ 何かそんな所に居るイメージが……

「まあまあそんな堅苦しくならないでさ、いつもみたいに緩やかに行こうよ」

「姉さん。外部の人とそんな軽々しい付き合いは危険じゃないかしら」

おや、意外に真面目というか少し固い感じのお方？

「初めまして。加賀の妹です」

いやどう見ても髪を下ろしただけの加賀さんですよね!?

「あー、これはどうも。毎度お世話になっております」

何がしたいのかよく分からんが取りあえず乗っかる。駆逐艦の約半分は唾然。もう半分程度は笑いを堪えているようだ。長良は口を押さえてクスクス笑っている。五十鈴はポカーンとしていた。

「姉が急用で戻ってしまいましたので、本日の立会を任されました。よろしくお願い致します」

「いえこちらこそ。所でいつまでこれ続けます?」

あえてこつちから切り込んだ。そろそろ仕事させて欲しいんですが……

「もう少し付き合ってくれてもいいんじゃないかしら」

「ちよーつと時間が押してまして」

「じゃあ仕方ないわね。皆、今日もよろしく頼むわ」

駆逐艦の笑い声交じりの返事が響く。明石さんが必要な道具の用意を始めたぐらいでお呼び出しを食らった。

「茶番に付き合わせて悪かったわ。五十鈴と接してちよつと分かったと思うけれど、ああいふ一面のある娘だからあえて私がふざける事で”ある程度はリラックスしていい作業”という印象を持たせたかったのよ。通じたかは分からないけど」

「いえ助かりました。ありがとうございます」

「あまりこうしていると怪しまれるわ。作業に戻って」

「はい」

そうだそうだ、早くしないと時間が無くなる。最後ぐらいは予定通りに終わらせたい。

「吹雪型を五十鈴さん、白露型は長良さんでお願いします。綾波型の皆は私と後藤田さんで回しましょう」

「はいはい、じゃあ行くよ皆ー」

「用意はいいわね。他の所に後れを取っちゃダメよ」

加賀さんのお陰だろうか。表情は幾分か柔らかくなったように見える。

「マスク、ゴーグル、手袋、各種清掃器具の準備はよろしいですか皆さん」

綾波型を前にそう問い掛ける。少しだけ学校の先生か用務員になった気分だ。

「「はーい」「オッケー」「大丈夫です」

一文字の4人組と綾敷はいつも通りだ。まあこの6人は大丈夫でしょう。

「おう、いつでもいいぞ」

「が、頑張ります」

綾敷と一緒に動いた方がやり易そうに感じた。自然と誘導する事にしよう。

「では始めましょうか明石さん」

「是非とも最終日にしましょうね」

そうしたいものだ。つてな訳でお掃除開始。

約1時間が経過した。既に何度も見たり葉撒いたり掃除している所だが、入念にチェックしていく。移動する暗闇は置いておくとして、寝ても起きてもハイイロの事を考えなくていい日々が戻って来るなら今日頑張るしかないのだ。

「どう?」 「居る?」

「巢も本体も見ないですぞー」

「曙ちゃん、頭の上に気を付けて。そこ狭いから」

「分かってるわよ」

「こっちは問題無し。」

「なあ綾姉。何も居ないぞ」

「最終日だから仕方ないかしらね」

「初日は酷かったよ。あっちこっちに居てさあ」

「……あっちこっち」

狭霧の顔が青くなる。急にキョロキョロし始めた。

「今やってるのはどっちかかっていうと入って来ないようにするための掃除だからさ、そんなに怖がなくていいよ」

「掃除だけで終わりかー、ちよつとは駆除つてのもやって見たかったんだけどなあ」

「わ、私は今日の参加で良かったと思う」

あれを楽しいと思うか少しキツかったと思うかは人それぞれだ。俺個人的にはちよつと辛い所もあったかな。

「経過報告です。本体、巢、共に見つかりません。このままだとお昼前には終わりそうですね」

明石さんが集計した報告を聞く。時間が余るのはいいが、手持ち無沙汰になるのも考

え物だ。何かやる事を考えなくてはならない。

「分かりました。ただそうになると、昼食までの間に何か場を繋がないとはいけませんかね」

「あれでしたら作業台やその他の動かせる物を戻す準備を多少でも進めます。これはこれでまた時間が掛かりますから」

なるほど、それはいい手だ。お願いするとしよう。俺はその間に午後の準備を進めればいい。

「ではそちらをお願いします。自分は午後の準備を幾分かやつてしまいますので」
「了解しました」

その後、1時間ちよつとを残して午前の作業が終了。10分程の休憩を挟む。

「なーんか張り合いがないねえ。1匹くらい居ないもんな」

「皆が先に頑張ってくれてたお陰でしょ。いい事じゃない」

江風は掃除だけじゃ物足りないようだ。海風が宥めるも不完全燃焼な顔である。

「お望みとあらば数えられないぐらいの違う虫が棲み付いてる所あるけど行つて見たい？」

暗黒微笑を浮かべる白露嬢が江風ちゃんと俺を交互に見て来る。やめろ。今日はただこつちだけに集中させてくれ。旧棟の事は少し忘れさせてくれ。

「……思い出しちゃった」

「ぼい……」

吹雪&夕立の表情が暗くなった。

「え、何だそれ。何所にあるんだ？」

「姉さん。いずれ遭遇する事になる可能性は高いんだから今は黙っておいた方が」

「うーん、そうだね。その時が来たら教えるよ」

時雨嬢が釘を刺す。あれに関する事は知っている者はまだ少ない方がいい。

「勿体ぶらないで教えてくれよ姉貴たちー」

江風が追い継る所でタイミングよく明石さんが集合を掛ける。意識がそつちに切り替わったらしくそれ以上の追及は無かった。俺もこの間に午後の準備を進めなくては。

何やかんやとしている内に昼の鐘が鳴る。食事の前に燻煙剤を等間隔に設置していった。この作業は俺だけでいい。最後に明石さんが中途半端に閉めてくれていた工廠のドアを完全に閉め切ってから食堂に行った。

「日替わりCお願いします」

「はい」

奥から間宮さんの声。でも配膳は伊良湖ちゃん。忙しいみたいですな。

「（い）ちそうさまでした」

トレイを戻して先に工場へ向かう。準備の続きをしている間に燻煙剤を焚いて1時間ちよつとが経過。本当はもつと時間を掛けたい所だが、早く帰れるなら早く帰りたい気持ちもあるのでスケジュールを少し切り上げる。

皆が戻つて来る前にドアを開けて放つて換気を始めた。間もなく休憩も終了である。午後の始まりを告げる鐘が鳴る2分前には全員が再び集合。いいスタートダッシュが切れそうだ。

「換気にもう1時間ちよつと使いたないので、周辺の調査はゆつくりで大丈夫です」

そう呼び掛けた所で鐘が鳴った。駆逐艦軍団はまた3つに分かれてそれぞれに動き出す。五十鈴率いる吹雪型は隣の建造工場、長良率いる白露型は岸壁周辺、明石と綾波型がこの開発工場の周りを調べていた。

「ちよつといいかしら。大きなクモが居るから一応見て欲しいわ」

五十鈴さんに呼ばれたので足を速める。大きなクモ。はてさて……

「大きいなあコイツ」

「敵つい形してるわね」

「あ、あんまり近付くと飛んで来たりしないですか」

建造工場の横では深雪・叢雲・浦波がそのクモを眺めていた。そこに混じる広樹。

「大きなクモってそいつ?」

隣にしゃがんだ。

「……あー、オニグモってやつだな。害はないから放つといいよ」

他のクモに比べて足は短い。名前の由来はよく分かってないそうだ。

「後藤田さん！ 外に1匹！」

「今行きます！」

今度は明石さんに呼ばれた。開発工廠の外壁に1匹居たようだ。

無事、駆除が完了。折角なので天霧と狭霧にやって貰った。天霧は満足気だが狭霧は終始おっかなびつくりな感じである。まあ仕方ないか。

そんなこんなで1時間過ぎた。次はいよいよ最後の中に薬剤を撒く作業だ。薬剤入りの霧吹きを1人1つ持って貰い、中身が無くなるまで噴霧を続ける。これだけやればもう入って来ないだろう。と思いたい。

予定より1時間早く、全ての作業が終了した。これで本件は一旦、俺の手を離れることになる。

その場を終わらせて挨拶も済ませ、使った物を車に積み込んで司令部棟に向かった。提督さんに報告しなくてはならない。つてか、気付いたら加賀さん居なくなってたけど”立会”とは何だったんだろうか。

執務室

「お疲れ様です。本日の作業は無事、終了しました」

「ありがとうございます。後はこちらで進めます。何かあればすぐにご連絡しますの
で」

「はい」

「終わったのね」

「取りあえずは、つて感じですか」

「正直、私が居なくても無事に進むと思ったから途中で失礼したわ。見られてるとやり
難いでしょうし」

心を読まれていたらしい。恐ろしい人だ。

「えーと、近い内に旧棟の件でお話をしたいんですが、日時のご都合はいかがでしょう
か」

「ちよつとお待ちを」

メモ帳とノートPCでスケジュールの確認が終わる。

「来週の中頃……あ、水曜と次の木曜はお休みでしたね。であれば金曜の午後一はどう
でしょう」

「はい。ではまたその時間にお伺いします」

今日はこれで失礼する。取りあえず、ハイイロゴケグモが一旦片付いたから、少しだけ現実逃避させて欲しいのだ。

旧棟・周辺調査

広樹です。店の休みは基本毎週水曜。そして第2週と第4週は木曜も定休日です。今日はその木曜なんですが、母親が「たまには夕飯作れ」と仰ったのでスーパーに来ています。

「……何にしましょうかね」

煮る・焼く・炒めるしか出来ないので凝った物は作れません。って訳で……

「ここはクックドゥーに頼るか」

麻婆豆腐の素を買った。それで豆腐とひき肉。後は冷凍餃子。こんなもんでいいですよ。

「……………明日は鎮守府かあ」

軽い打ち合わせと旧棟周辺の調査がメインである。魔物が棲まう要塞をどうやって攻略するかは1度置いといて、他に入入りしている動物や危険な虫が周辺に居ないかをまず調べる。

旧棟の裏にスズメバチなんて居たら申し訳ないがこの案件は辞退するしかない。もう2回刺されてるから次は確実にあの世逝きだ。そうならないためにも、動きやすい環

境を作る事は大切なのだ。

翌日。午前中は店番で昼を食ったら鎮守府に向かった。何気に許可証を貰ってから軽自動車で行くのは初めてである。最近は殆どハイエースばかりだったから運転の感覚がちよつと狂い気味だ。右左折の時に違和感がある。

「お疲れ様です」

「お疲れ様です。前の方をお願いします」

そろそろ見慣れて来た例の読み取り機でチェックが終了。そのまま司令部棟に行つて車から降りた。執務室へ向かう。

「後藤田です」

「どうぞ」

ドアを開けて入室。加賀様は居ないが大淀さんがいらつしやる。

「失礼します。あれ、提督さんは」

「伐開の業者さんと廃工場がある森の所まで下見に行っています。もうすぐ戻りますから、少しお待ち下さい」

お、ついに本格的に動き出すのか。って事は俺の手持ち時間もそんなに多くない訳だ。

「あそこを切り開くとなるとかなりの日数が必要でしょうね」

「ええ、相応の規模での工事になると思います」

「長引いてくれたりするとこっちとしてはちよつと有難い所があるんですよねー」

「旧棟の件ですね。あまり無理はしないで下さい」

あ、そんな事を言われると何かこう、好きになります。

「すみません、お待たせしました」

ドアが開くと共に提督さんが戻って来た。

「ああいえ、さつき来た所ですから」

無事、打ち合わせが始まる。まずはどれだけの時間を使えるかの確認だが、伐開の方に掛かる日数もまだ不明なため、具体的な数字は出なかった。ただ向こうの業者の見立てによれば色々な手続きや準備も必要なため、2〜3ヶ月程度は掛かる可能性があるとの事らしい。

「規模が規模なので、その後の整地作業も含めると下手すれば半年かそこらは掛かるかも、と仰ってはいました」

「半年ですか。まあ仮にそれぐらいの時間を頂けるのであれば何とかはなると思いますが」

少なくとも2ヶ月は固いようだ。であれば色々と策を練る時間もありそうだ。

「取りあえず旧棟の周辺を自分の目で見ておきたいんですが、よろしいですか？」

「はい。大淀、案内を頼む。鬱蒼としているから着替えて行くといい」

「了解しました。ちよつと失礼しますね」

大淀さんは席を外した。着替えるのだろう。

「それでなんですけど、駆逐艦寮の方に道具を置かせて欲しいんですが」

「分かりました。準備するように伝えます。人手に關してはその日に居る者で、まあ希望制と言う事になります」

「大丈夫です。あれは自分でも正直、尻込みするレベルですから」

その後もやり取りが続く。10分程度が経った頃、ツナギに着替えた大淀さんが戻つて来た。

「お待たせしました」

「では行つて来ます。終わったら1度、報告に戻りますので」

「よろしくお願いします」

司令部棟を出て駆逐艦寮を目指す。目的地はその裏にある旧駆逐艦寮。あゝ、怖い。

旧駆逐艦寮

木造校舎つてのは何かこう、威圧感がありません？ 使われてないからですかね。

「じゃあ取りあえず、右回りに行きますか」

「慎重に進みましょう」

調査を始める。草は膝より高く、股下に近いぐらいだ。木は生えていない。草で見えないが、森との間に何か仕切りがあるらしい。

「後ででいいんですけど、ここの古い写真とかつてあつたりしますか？」

「記録を探せばあるかも知れません。必要ですか？」

「もしあればいいです。今日必要って訳でもないのです」

あれだったらこの辺の草は刈ってしまったでもいいだろう。蛇と出くわす可能性もあるから、連中が身を隠す場所を消してしまいたい。もしも仕切りが思っていたより遠くだったら、伐開の業者にそこまで切り開いて貰うのも有りだ。それがどの辺なのかを知るために、昔の写真がもしもあれば嬉しい。

「外壁は……結構アレですね」

何カ所か穴が確認出来る。キツツキでも来たんだろか。

「内装は一度全てリフォームしていますけど、外はある程度しかやらなかつた筈です」

視線を更に上へ向けて行く。すると、壁と屋根の境目の所に何か大きい塊があるのが見えた。

「……おっと、ハチの巣ですね」

「え……」

胸ポケットから小さい双眼鏡を取り出して様子を見る。ハチの姿は確認出来ない。それに、建物に対して巣がくっ付いていると言うより、建物内から生えているように見えた。

「スズメバチじゃないですね。もしそうなら警戒役がその辺で飛び回ってるでしょうし」

偵察を続ける。この巣の出来方は……

「多分、ミツバチだと思います。スズメバチの巣は出入口が基本的に1つですからね。1匹も居ないんで恐らく引越した後でしょう」

「でも屋根裏にまだ残っていたりは」

「可能性はありますね。ただどうでしょうか。かなり古い巣っぽいですし、構造物が欠けている部分もあります。放っておくと新しい群れがやって来る事もありますから、何かのタイミングで取っってしまうのが良いですね」

ミツバチの巣（恐らく空き家）を確認した。調査を続ける。ぶっちゃけ、心臓が口から出そうでした。静かに深呼吸しつつ裏手に出る。

「あー、窓枠が外れますねこー」

「同じような所が何カ所かあると提督が言っていました。多分、他にもあると思います」

窓枠が外れている所に近づく。中に顔を突っ込むと、廊下にガラスが散乱していた。雨風のせいかわれも凄しい。大きな木の枝でも飛んで来たのだろう。

「……鳥が入りしているみたいですね」

窓枠のあった部分に糞の跡が確認出来る。何かの鳥が棲み付いている可能性もありそうだ。

「まあ鳥ぐらいならいいか。毒がある訳でもないし」

「後藤田さん、今何か」

「はい？」

ガサガサと草の動く音がした。そつちを向くと、旧棟から何か森に向けて移動しているのが分かる。草がまあまあ高いお陰で姿は確認出来ない。

「……ゆつくり後ろに」

「は、はい」

後ずさりな感じで距離を取っていく。幸い、何かはそのまま森に入って行ったようだ。

「……………何でしょうね今の」

「またイタチとかですか？」

「調べないと分かりませんが……そうだったら厄介ですね」

あれはぶっちゃけ、もう勘弁して欲しいランキング1位だ。ちようどいいので何か移動していた辺りに殺虫剤を撒く。これでもしかすると異変を感じ取り、出入りしなくなるかも知れない。まあここを通らないだけで他のルートを使う可能性はあるが……

「忌避剤の代わりです。何所から出て来たか調べるのでちよつと待つて下さい」
壁を見る。出入口は無い。あれえ？

「……因みにですけどさつきのは窓から出て来ましたか？」

「いえそこまでは。多分、下の方だと思えます」

「下？」

草を掻き分けて基礎の部分を見る。通気口に嵌めていた鉄格子の1つが壊れていて、そこに入れる大きさなら出入り可能な状態になっていた。

「(トントカ)」

地面に膝をつけてペンライトで中を照らす。色々と凄まじい事になっていたが、光に反応して動くようなのは確認出来なかった。ここからでは床の上にあるであろう出入り口までは見えない。

「蛍光塗料を撒いておきます。上手くいけば足跡が見れるかも知れませんが」

通気口のコンクリ部分と地面に蛍光塗料のスプレーを撒いた。と、ここでさつきの行動に気付く。

「しまったな。さっきの忌避剤代わりはやらない方が良かったか……」

「ここを警戒されてしまうと通らなくなる。足跡が付かないかも知れない。他に出入り口があればそつちにも撒いておけばいいか？」

「すいません、他の通気口も調べて貰えますか。ここと同じ感じになっている所があれば出入りしている可能性があります。さっき、忌避剤代わりで撒いた殺虫剤を警戒してここを通らなくなるかも知れないので」

「分かりました。探してみます」

草を掻き分けて基礎の部分を調べていく。自分が見た範囲では全て無事だった。

「参ったなあ……水でもぶちまけるか？」

「こつちにありまーす」

おつとマジか。小走りで向かう。

「ありましたか」

「ここ、どうでしょうか」

膝を付いて通気口を見る。確かに同じような状態だ。

「それじゃあここにも塗料をと」

さっきの所と同じ感じで散布した。さて、足跡が見れるか否か……

「っ！」

隣の大淀さんが息を飲むような声を出した。振り向くと、まあまあ大きいバツタが腕にくっ付いているのが見える。

「……しゃがんでたからその辺の草と同じ高さだったんですね」

と言った瞬間、自分の手にも白いトンボが止まった。これは取りあえずいいのでバツタをどうにかしないとイケない。

「そのままで」

親指・人差し指・中指でバツタの体を横から掴む。持ち上げた時に少しだけ作業服が引つ張られるがすぐに離れた。手の中に収めた状態で立ち上がり、手を開くとバツタは勢いよく跳ねて草の中に姿を消す。

「……えーと、大丈夫ですか？」

「…………びつくりしました」

はて。気の利いた事を言えるような男じゃないからどうしていいか分からない。年齢イコールだから経験値がない。

「……休憩しますか。近くに自販機ありましたからそこでちょっと休みましょう」

「は、はい」

まあバツタが腕に飛んで来たのは人によつては怖いでしょう。俺だって子供の時、カミキリムシが飛んで来て服にくっ付いた時は泣いたもんだ。

自販機コーナーに到着。最近は缶コーヒーをコンビニで買った方が安い時代になって来ましたね。どうしたもんでしよう。

「みつともないから止めなさい」

「あの100円玉……細かいので最後の1枚だったのに」

「蜘蛛の巣だらけですね、ちよつとこれは」

自販機の下を覗き込んでいるのは初雪と薄雲。そして仁王立ちの叢雲という光景が目に見え込んだ。

「……落とした？」

「落とした……最後の100円玉」

「100円玉1枚に固執し過ぎよ」

胸ポケットに入っている指示棒を取り出す。これ、離れた所から虫の近くを叩いて移動させたり逃がすのに便利なんですよ。

「どれ」

ペンライトで照らしながらしゃがんだ。蜘蛛の巣や落ち葉が支配する世界に光る物が1つ。

「あったあった」

指示棒で掻き出す。見事、1000円玉を救出した。

「はい、1000円」

「感謝の極み」

「デ○ラー総統かな？」

「良かったですね、初雪姉さん」

「まあいいわ。それで、何買うの？」

「炭酸系がいいなあ」

他の自販機も見始めた。取りあえずこっちは買ってしまおう。近くのベンチに腰掛けた。

「あとは裏から左に回って戻るだけですわ。30分そこらもあれば終わるでしょう」

「すいません、お役に立てず」

「いえいえ、1人だと何かあった時に大変ですから」

そう。俺の場合、スズメバチの件があるから死体で見つかる可能性も高い。だから2人なのはとても有難い事なのだ。

10分程度の休憩を終えて再び旧棟へ向かう。また右回りだと面倒なので、思い切つて左から行く事にする。これなら移動時間が少ない。

「では行きますか」

「はい」

左からのルートは特に問題なく進んだ。窓枠が外れている所も何カ所か確認。それ以外でヤバそうと感じた事も特になかった。

「何か……あつさり終わりましたね」

「左の方だけ草も少なかつたですね。でも窓枠の件は、提督と話して修繕の算段を付けようと思います。あのままだと何か入ってしまいますし」

司令部棟まで戻り、報告も終えた。また近々で、夕張さんの手を借りて今度はドロインを用いた内部と屋根部分の偵察もしておきたいと伝える。その辺の日程調整はまた後日という事で今日はお終い。

「今日はお暇します。また連絡しますので」

「ありがとうございます、お気を付けて」

さーて帰って他に何を見ておけばいいか考えて、それらを含めて明後日ぐらいには連絡したい所だ。

(広樹です。まあ、ゆっくり事を構えましょう)

やる事は山積みである。出来る事からやっていかないと何も始まらないけど、何も始めたくない気持ちも何所かあった。1つ1つ解決していければいいなあ。

蝮局を巻くモノ

旧棟周辺の調査から4日後。今日は午後からまた鎮守府に打ち合わせへ行く予定だ。あれこれこうしたい云々を提督さんとやり取りしつつ、まずこちらが動きやすいように領域を広げていく算段を立てている。

ほんで午前はと言うと、親父が出る筈だった地域の集まりに何でか出る事になり、渋々とコミュニティセンターみたいな所に来た。町の発展をどうだの経済効果をどうだのと仰る何ちやら会長さん(?)の公演が終わる。

「あー終わった、さっさと帰ろう」

顔見知りばかりが集まるこの空間。そこかしこで雑談が始まる。早く逃げないとおっちゃんたちに捉まる。

「よお広樹ちゃん。最近そこそこ儲かってるらしいじゃん。車も2台にしちやつたりしてさ」

「いいねえ、うちにも少し分けておくれ」

「ちよつと太ったんじゃないか? ダメだよ運動しなきゃ。俺みたいなお腹になっちゃうぞ」

「広樹ちゃんたまには店に来てよ。おじさん寂しいな」

こういう感じの絡みをされるから来たくないんだよなあ。つてか何が寂しいだよ、いい年して。

「皆さん昼間から飲んでらつしやいます?」

「飲みたいけどまだ早いよなあ」

「あと4時間はしないと怒られちまう」

その時間でも十分早いと思うが何も言わない事にした。と、ここで携帯が震え出す。緊急の連絡が入ったので鎮守府に向けて車を出した。

旧駆逐艦寮

「はいはい。どうしましたか」

「蛇です、蛇が居ます」

「すつごく長かったです」

「あれはおかしい。普通じゃない」

「めっちゃやくちやデカかったよな!」

「落ち着きなさい。何の蛇かで対応も変わるわ」

「騒いでる間に居なくなりました」

「無暗に近付けないです」

「模様は縞々でした!」

上から吹・白・初・深・叢・磯・薄・浦と吹雪型一同が騒ぎ立てている。縞々の蛇。アオダイシヨウウなら問題は無いが……

あー、因みに弊社は毒蛇もすっかり対処致します。特に春先から夏場にかけては墓地とかお寺さんの依頼が多いですね。駆除はしないで捕獲後に山へ逃がす感じですよ。

ハブ以外の本州に存在する毒蛇（在来種）なら問題なく取り扱えますのでよしなに。つっても基本的にはヤマカガシとマムシだけですかね。

「色とかは分かる?」

「赤っぽい感じ」

「土色のようにも見えました」

初・白はそう答える。他も大体同じ感じだ。マムシの可能性が高そうだけどヤマカガシも視野に対策を練る。

「にしてもなあ……この状況は如何ともしがたい」

草、生え放題。足元、見えない。普通にしゃがむと上半身以外は草に隠れられる。

そう、まずこちらが動きやすいように旧棟周辺の草を刈る役目を、たまたま全員揃っていた吹雪型がやろうとしていた直後の出来事であった。

「手作業はちよつとなあ。電動草刈り機とかはあったりする？」
「聞いてみますね」

薄雲が執務室に内線を掛ける。警備所で管理している物置にその手の器具があるそうだ。しかしそんなに数はないらしい。

「じゃあ俺がそれを使わせて貰うから、皆は左側の草が少ない方を刈つてくれるかな」

「1人だと危険じゃないか？ そつち手伝うぜ」

「じゃあ私も。白雪、皆をお願いね」

「うん」

右側に吹雪と深雪が参戦。それ以外は左側の草刈りを開始する事になった。草刈り機を持って来て貰う前に全員で注意事項を確認する。

「これ、笛ね。何かあったらこれで異常を報せる事。右側は吹雪ちゃん、左側は白雪ちゃんに持って貰います」

畏獵で山に入る時に使う笛の予備だ。無論だが新品を渡します。

「素足は危険なので着替えて下さい。上も長袖の物を着るようお願いします」

万一噛まれても、服だけに噛み付けば御の字だ。ちよつと暑苦しいかも知れないが仕方ない。

そんでもって皆が着替えに駆逐寮へ戻っている間、周囲の安全を確認しておく。もし

かすると既に背後へ回り込まれている可能性もある。落ちていた長めの木の棒で草を掻き分けるが、蛇の姿を捉える事は出来なかった。

念のため今の駆逐艦寮周辺も少し探る。こっちは大丈夫のようだ。

「何してんのー？」

「ちよ、姉さん」

窓が開く音と主に白露嬢の声がした。顔を上げると紙バックのココアを飲みながらこちらを見ている白露&呆れ顔の時雨が居る。

「でっかい蛇が出たらしいんで今から草刈りする所。寮に居る皆にも報せてくれ」

「マジで。何か手伝う？」

「あれだったらこっちの寮周辺の草刈りとかしてくれと助かるけど」

「りようかい。何人か連れてくね」

と言う訳で急遽、白露・時雨・五月雨・潮・不知火・睦月・皐月が加わった。

「へ、蛇って……毒蛇ですか？」

「それもまだ分かりません。なので必要以上に注意して下さい」

「ちよ、ちよつと怖いですね」

潮と五月雨の表情は固い。まあ無理もないか。

「この不知火、蛇如きに引けは取りません」

彼女は相変わらざるの眼光だ。蛇と睨み合ったら撃退出来そうである。

「お任せにやしい」

「頑張るからね！」

睦&皐は何と言うか微笑ましい。そうこうしてる内に吹雪型も再集合。草刈り機も届いたので作業開始だ。

「よいせつと」

脛を守る安全用のプロテクターを着けた。スイッチを入れると甲高い音と共に刃が回り出す。

「取りあえず大雑把に切っていくから、残っている所を頼むね」

「合点合点」

「はーい」

ブイーンと草刈り開始。左右に振りながら進んで行く。出来ればこの音で遠くへ逃げてくれると有難いがどうだろうか……

「深雪、ゴミ袋持って来て」

「あいよー」

俺が刈った草を2人が少しずつゴミ袋に詰めてくれた。並行して残っている草を刈って貰う。大変に有難いです。

「……すげえな、もう半分か」

右側はもう半分程度を刈ってしまった。文明の利器は素晴らしい。

「ピーー！」

「ん？ 笛か？」

「え、何……」

「……出たかな？」

笛の音がした。草刈り機の電源を切って小走りで向かう。

「蛇出た？」

バツの悪そうな白雪が振り返る。

「す、すいません。早とちりです。磯波ちゃんが草むらから飛び出した鳥に驚いて悲鳴を」

「ごめんなさい。ビックリしてしまつて」

「何か出たのかと思つたわよもう」

まあ何事も無ければいい。笛の音を聞きつけた現駆逐艦の草刈りチームもやつて来るが、一通り説明したので作業再開となる。

30分後。裏側の突き当りまで草刈りが完了。ここらで一旦、作業を山になりつつある草の回収へ移行した。同時に向こう側の様子を見に行く。

「ちよつと向こう見て来るね」

「分かりましたー」

旧棟の正面口を横目に左側へやって来た。こっちは奥へ行くに連れて増える草にばかり手こずっているようだ。

「その後は問題無い？」

「はい。ただ、奥に向かうに連れて草が濃くなってるのが少し」

「足、痛い。手、痛い。休みたい」

「黙ってやんなさい」

磯・薄・浦の3人は黙々と草刈りしているが、疲れて来ているのが見て取れた。こっちも残りを電動で刈ってしまった。皆を一旦、右側に行かせて草の回収に加わって貰う事にした。

「じゃあ残りは電動でやるから皆は右側に移動して草の回収をお願いします。それがひと段落したら休憩にしていよいよ」

「え、休憩？」

「向こうが終わったら。さあ行くわよ」

「あう」

ゾロゾロと移動する皆の後に続き、電動草刈り機を持って左側に戻る。

「どれさっさと終わらせますか」

残っている草を次々に刈っていく。20分もせずには右側同様、突き当りの所まで作業が終了した。

「後藤田さん。こつち、粗方終わりました。特に問題もないです」

時雨嬢がやって来た。現駆逐艦寮の草刈りも無事に終わったようである。

「はい。ゴミ袋があるからそれに刈ったのを積めてくれたら終わりでいいよ」

「ピーー!」 「ピー、ピーー!」

おつと? 重なるように2つ鳴った?

「……さっきとは違う感じですね」

「うーん、今度こそかな?」

足早に右側へ向かう。吹雪型が密集していた。

「出た?」

「今、そつちの草から顔を出してました」

「こつちを少し見た後にまた居なくなっちゃいましたけど」

吹・白が残っている裏手の草の方を指差している。やはりそこに潜んでいるか。

「動画撮れた」

「しや、写真もなんとか」

初・磯のスマホを拝借。まず動画から。

「あんたそんなのいいからこっちは来なさい！ 危ないわよ！」

「嘯まれるからこっちは戻れって！」

叢・深の声がする。映像はガクガクだが最後のズームで何となく蛇だったのが分かる程度だった。

「これじゃちよつとなあ」

続いて写真を見た。こっちはかなり鮮明に写っている。

「……ママシだね」

「あ、あの毒蛇ですか」

「毒蛇……」

薄・浦の顔が引き攣り出す。ママシの致死率はそんなに高くないが、それでも危険なもの危険だ。放っておくのは危ない。

「今度こそ出た？」

「蹴散らしてやります」

白露&不知火が登場。潮と五月雨は怖いので待機。睦月と皐月は疲れて動けないらしい。

「はいはい、あんまり集まらない。少し遠ざかりましょう」

建屋が途切れる所まで下がった。どうやってマムシを捕獲、あるいは駆除、もしくは追っ払う方法を考える。

「無暗に突っ込むのは当然危険。草刈りしながら進んでもいいけど、それも危ない。さ
てどうするか」

「と言うか道具が必要だ。これは1度店に戻るべきだろうか……」

「夕張さん呼んでさ、ドローン使わせて貰おうよ」

白露嬢が提案を出す。思わず飛び付いた。

「……その心は？」

「居場所が分かれば挟み撃ちに出来ない？　じゃなきゃ私ら全員でどっちかから攻めて
立てて、後藤田さんの方に追い込むとか。運が良ければ森の奥へ逃げるかもよ」

この案件が長引くと旧棟の作業に少なからず影響を及ぼす。可能なら今日か明日に
でも片付けたいが相手の居場所が分からない状態では色々懸念事項が多い。確かに
ドローンがあれば居場所を特定出来るかも知れない。

「……………やってみるか。悪いけどその辺の調整を頼めるかな。流石に道具が必要だか
ら1度戻りたいんだけど」

「オッケー」

「皆には監視をお願いします。もしも出て来たら無理はせずに距離を取る事。何所かに

逃げた場合は連絡して下さい。笛はそのまま持つていいから」

「分かりました」

「はい」

つて訳で1度店に帰った。道具を積み込んで再び鎮守府に向かう。幸い、連絡はなかったので逃げてはいないらしい。

また旧棟に戻ってくるとそこには夕張さんの姿がある。無事にドローンが使えそうだ。

「お疲れ様です。急なお願いで申し訳ありません」

「あー、いえいえ。何かこの調査で使わせて欲しいって話しは提督からもありましたんで、ゆっくり準備してた所です」

既にドローンの準備は終わっていた。独特のモーター音を響かせながらドローンが浮き上がる。

「じゃあ探ってみますか」

機体下部に設置されたカメラの映像を見ながら調べる。5分とせず、草の中に何かが見るのが見て取れた。

「……コイツですね」

「凄い。蛇が蜷局巻いてる所って初めて見ました」

絵に描いたように見事な蟻局だ。サイズもそこそこ大きい。しかし蛇が蟻局を巻いている時は逆に手出しが出来ない。この状態は蛇が自身の安全を確保しつつ、何かあったら最も迅速に動ける体勢なのだ。

「これはこつちからの方が近いですね。因みに他に居たりは」
「もう少し探しますか」

旧棟の裏に他の蛇が居ないか今少し調査する。だが幸いな事にあの1匹だけのようだ。

「よし、じゃあ皆には左側に行つて貰つて、向こうから追い立ててくれるかな。こつちに出て来た所を捕まえるから」

「「はーん」」

「もしもそつちにマムシが向かったらドローンを近付けるから、皆逃げてねー」

向こうに着くのを待つ間、捕獲機をチェックする。特に問題はない。手袋は革手だから牙は通さない。足はさつき草刈りで使つてたプロテクター。マムシを入れるための特殊繊維で出来た袋も装備。準備は完了だ。

「…………お、着いたな」

向こう側に全員揃つたのが見える。手を振り合つて追い立てるのを始めて貰つた。

「……………まだ動かないですね」

「もう少し近付けば嫌でも動く筈です」

わざと草の音を大きく立てながら近づいていく。ある程度距離が詰まった所で、ママシが首を持ち上げた。

「あ、動きそうです」

ママシはキョロキョロした後、こちらに向けて移動を開始。さて、このまま何も無い空間に出て来てくれるだろうか。

「……手前で止まりましたね」

「草が途切れますからね、怖いんでしょう」

身を隠せない場所に出るのは勇気が居るようだ。頼むからそのまま出て来て下さい。

「顔を出しそうです」

「知らんぷりして見ますか」

ママシに背を向けた。どうやら見られていない事が分かったのか、ママシはゆっくりと出て来た。

「……どうします?」

「まだこのままで」

背は向けたまま映像を注視する。ママシの体が完全に露出した頃合いを見計らってこちらも動いた。

「ドローンで注意を引いて貰えますか」

「お任せを」

急に頭上へ現れたドローンにママシが尻尾の先端を細かく震わせて威嚇音を出し始めた。首を折り畳んで警戒の体勢になる。

「映像越しでもちよつと怖いですね」

「手早く終わらせませすからもう少しそのまま」

後ろに回り込み、ママシの首を捕獲機で掴んだ。驚いたママシが捕獲機に絡み付くも金属をどうにか出来る訳がない。ロックを掛けて捕獲機を置き、首を左手で掴んでロックを解除。今度は腕に絡み付くが袋に突っ込み、袋の上から右手で首を掴み直して左手を少しずつつ外に出す。

袋の口を閉めて無事、捕獲終了。さて、コイツはどうしよう……

「終わったー?」

「捕まえたんですね」

白露と吹雪が草むらから出て来た。他の皆もそろそろと出て来る。

「終わりました。あとはこつちで処理します」

皆には残りの草刈りをお願いして今日は終了。本来の予定だった打ち合わせは後日に再調整して貰う。疲れたのでもう帰りましょう。

(広樹です。 マムシは近所のおじさんたちにあげました。 マムシ酒にするそうです)

ヌメヌメしてませんが何か（本人目線）

広樹です。雨が続きます。そういう季節だから仕方ないですが……

「今日はこれぐらいですかね」

「そうですね。因みに窓枠の修理に関してはどうなってるでしょうか」

「日付調整中です。分かり次第、ご連絡します」

「承知しました。よろしくお願いします」

無事、提督さんとの打ち合わせ終了。吹雪型の皆が残りの草刈りも終わってくれた。現
駆逐艦寮周辺も、他の駆逐艦勢が持ち回りで草刈りを継続中だそうだ。

司令部棟から出る。空は曇り。今にも降り出しそうな感じがする。

「さてと」

時刻は11時半前。早めに昼を食ってもいい頃合だ。なんて思っていると、アスファ
ルトにポツポツと水の落ちる音がする。数秒とせずには強い雨が降り出した。

「何だよ畜生」

今日は敷地内通行許可証を忘れてしまい、久々に来客用の駐車場に停めて歩いて来た
のだ。雨が止まないと動けない。

「あら、どうしました」

「えーと……昼にしようかなあ、と思つてた所で雨に降られて」

司令部棟から大淀さんが出て来た。執務室には居なかつたが、別の所で何かしていたのだろう。

「ちよつと待つて下さい。余り物の傘がありますから」

「あー、そんな気にしないで貰つて」

建物の中に帰つてしまつた。5分とせず、ビニール傘を持った大淀さんが戻つて来る。

「どうぞ。備品とかではないので、持つて帰つても大丈夫ですから」

「いやすいません。ありがとうございます」

ビニール傘を差して歩き出す。大淀さんも少し早めのお昼にするそうなので2人で食堂に向かつた。

(雨の中を2人で歩く。何かいい感じだなあ)

「旧棟の方はどうですか?」

「そうですね。中々に手強そうな感じですけどまあ、相応に準備すればどうにかなりそうですかね」

「何かあれば言つて下さいね。いつでも手伝いますから」

あかん。ドキドキしてまう。

「極力、ご迷惑は掛けないようにします」

なーんて話している内に食堂へ着いた。傘を畳んで中に入る。

「……今日のおススメは炊き込みご飯の定食か」

いやでも半チャンセットも捨てがたい。が、糖質ばかりだしなあ。もう若くないから自重しいといかん。日替わりBの赤魚煮付け定食もいい。迷う。

「チーツス。私のこと覚えてる？」

長い緑髪。着ている服のせいかな、何か如何にもギャルっぽい感じの娘に話し掛けられた。学生時代ならいざ知らず、30を控えた社会人なら相応の振舞いがあつて然るべきだ。

「……鈴谷、さん？ ちゃん？」

「まあどつちでもいいよ」

「じゃあ、鈴谷さんで」

「はい。あ、そうそう、ちよーつと相談があるんだけどいいかな」

「昼を食つてからなら」

「私も今からお昼だからさ、話しながら食べようよ」

何だと？ 見た目JKな娘と一緒に昼を食うだと？ あ、ちよ、公安委員会さん、こ

れはですね……

「……もしかして仕事？」

「多分……そうなると思う」

「じゃあいい……かな？」

結局、俺は今日のおススメ。鈴谷さんは日替わりカレーを頼んで席に着いた。

「ほいで、どんな案件でしょうか」

「うーんとね、この食堂なんだけど、生ゴミの管理を皆で持ち回りしてるんだ。裏に専用の小屋があつてさ、そこに廃棄する生ゴミを集めてるの。んで今週は私たちがやってね。ほら、最近ずーっと雨じゃん。多分その性だと思うんだけど、あんまり近寄りたくない状況に今なつて……」

次第にスプーンの動きが遅くなっていく。同時に顔色も悪くなった。

「……まず食べてしまおうか」

「あ、うん」

昼を終えた。雨も一時的にか分からなくなりがついていたため、厨房の間宮さんに声を掛けて建物の裏に回る。間宮さん自身も「出来れば私も近付きたくない状態」と仰った。何が居るんですかね。

「ほら、あれ」

金属製の大きなゴミステーションが鎮座していた。穴が何個も空いているから通気性は悪くない筈だ。

「……もつと近付かないと見えない大きさ？」

「ん〜……目の前までいかないと分からないかも」

ゴミステーションに近付く。飛翔音はしないからハエの類ではなさそうだ。

「……………ありや」

何か、無数の小さいのが蠢いている。びっしりの一歩手前ぐらいだ。

「ナメクジがこんな」

漢字は蛞蝓。書けたもんじゃない。何かの時に気になって調べたら、漢字検定の一級で出題されるそうだ。

「小屋の中も？」

「外ほどじゃないけど……」

「卵がどつちかで一斉に孵化したんだろうなあ。今の季節はピークだし」

「これ、何とかなる？」

「少しぐらいは手伝って貰うよ」

「はい」

司令部棟の物書きスペースへ移動し、他の姉妹と合流した。見知らぬ外人美女2名も

含めて……

「最上です。お久しぶりです」

「三隈です。ご無沙汰致しております」

「く、熊野と申します。以前はその、失礼を」

「何かしたの？」

鈴谷さんは知らないようだが、あの時の事だろうなあ……

「ちよつとその……出張先がそこそこ物騒と言うか、あんまり安全ではない所だったせ
いど」

「感覚が残っててつい口調が厳しくなったんだってさ」

「妹の無礼をお詫び申し上げます。どうかこの通り」

「いえいえそんな、お気になさらず」

「も、申し訳ありませんでした」

「あーもう話し進まないからそこまで！」

「そうだよ。こつちの2人がいつまでも喋れないじゃないか」

確かに何となく居づらそうな感じもする。

「では改めて。ノーザンプトンと、ヒューストンです」

最上の紹介によって2人によく出番が回って来た。

「の、ノーザンプトン級1番艦、ノーザンプトンです。まだ来たばかりで、業者の方の見分けも出来ない状態ですが、よろしくお願い致します」

「ノーザンプトン級、ヒューストンです。色々とお話は耳にしています」

わー、落ち着いた大人の女性って感じがいい。でもこう、色々大きいので意識しちゃいそう。

「後藤田と申します。よろしくお願いします」

話し合いはこの2人を含めて進んだ。最上型の4人はムカデやらと遭遇した事もあるので、ある程度は任せられそうだが残り2名に関しては一切の経験がないらしい。

「スラッグですね。見た事はありますけど……」

「私も触った事までは」

まあそりやそうだ。普通に生活してたらナメクジを触るなんて機会はない。そもそも触ろうなんて思う事もないだろう。

「素手は寄生虫の危険性がありますから、何かしらの道具を使用します。数が数ですの
で、捕まえたら大きな容器に入れましょう。後処理はこちらでします。皆さんには捕獲
と駆除剤の散布を手伝って頂きます」

「道具は何か必要でしょうか」

何だろう。三隈さんの目がキラキラしている。こういうのが楽しいのだろうか？

「そうですね。火ばきみは取りあえず必須です。後は大きめのスコップもあれば」
「もがみん。寮にあるかしら」

「多分、物置部屋に一通り揃つてると思いますが。駆除剤と容器は何所から持つていきま
すか？」

「別件で駆逐艦寮の方に在庫がありますからそれを運びます。容器は車に積んでいるの
で、また後で持つて行きます」

「じゃあ僕と三隈は後藤田さんと一緒に駆除剤を取りに行こう。鈴谷。そっちは皆で寮
に戻つて道具を探してくれるかい」

「オツケー、行くよー」

つて訳で二手に分かれる。駆逐艦寮に入つて管理室を訪ねると、開発工廠の作業で一
度会つた海風&江風が出て来た。

「あ、お久しぶりです」

「おー、どしたい」

「こんにちはー。駆除剤をちよつと持つて行くね。また今度来た時に使つた分を補充する
から」

「分かりました。記録しておきますね」

「んー？ 最上と三隈の姉御じゃん」

「今日は2人が当番なんだね」

「お邪魔致しております」

駆除剤は1人2つずつを持った。重巡察に付くと、出入り口の近くでビニールシートが敷かれており、その上に火ばさみとスコップが並べられていた。

「全部あつた？」

「あつたよー。人数分出しておいた」

「軍手も必要かしら」

「軍手よりは滑り止めの付いた作業用手袋が好ましいわ。使い捨ての物が箱で置いてあるからそれを使いましょう」

とある事に気付く。最上・鈴谷は喋り方というか、フランクな所が似ている。対して三隈と熊野も同様に喋り方と、何となくだが雰囲気似ている。容姿だけでは姉妹だと分かりにくい部分があるが、こうして見ると共通項が見えて来る事に気付いた。

「これは……トングでいいの？」

「薪を掴んだりする物だそうよ。料理で使う事はないって言ってたわ」

お姉さんの方は火ばさみをご存知なかったようだ。海外の火ばさみは細長いのが多いらしい。確かに日本のだと、一見はトングに見えなくもないか。

「えーと、容器を持って来ますので、その間に着替えなどをお願いします。念のため合羽

なんかもご用意下さい」

鎮守府の正面にある山の雲が黒い。もしかすると作業中に降って来る可能性があった。

駐車場に戻ってホームセン箱を2つ取り出す。普段は車に積んである自分用の合羽も持つて重巡察へと戻った。

「お待たせしました。行きましょう」

全員共にな上から帽子・ツナギ・手袋・長靴と準備は万端である。駆除剤と道具を持つて食堂の裏へ回った。最初に見た時と状況は変わっていない。

「……す、凄い数ね」

「こんなに沢山……何匹居るのかしら」

海外のお2人はちよつと引き気味だ。ナメクジの大発生は時たまに見られる光景だ。別に嘔まれる訳ではないから作業的な危険性は低い。

「まず、目に見える範囲で捕獲を行います。壁にくっ付いているのから始めましょう」
作業開始。雨はまだ降って来ない。今の内だ。

「上手く掴めないや」

「滑ってしまいますわ」

カチカチと火ばさみの音がする。今は苦戦していても慣れて来る筈だ。

「うえ〜ヌメヌメする〜」

「そりゃあそういう生き物ですから……」

「ど、どれから捕まえれば」

「上に居るのからやるといいですよ。やってる最中に落ちて来たので驚いたりしませんし」

「おっと、海外組もサポートしなくては。」

「大丈夫ですか？」

「掴めても滑って落ちてしまつて」

「あ、挟めたわ」

「妹さん。ちよつと嬉しそうですね。」

「掬い上げるようにやると上手くいきますよ。ナメクジはこれに入れてつて下さい。脱走するのも居ますから時々見て貰うと有難いです」

「ホームセン箱を開けて近くに置いた。まあナメクジの這うスピードは遅い。作業が終わるまでに箱の外へは出ないだろう。」

「ありがとうございます」

「んつと……今度はくつ付いて離れないわね」

「さて自分も捕獲作業を始める。しかし偉い数だな。」

「ひい、ヌメヌメしてる」

「鈴谷さつきからそればかりですわ」

「上手く出来ない」

ナメクジ（そういう生きモンじゃけえ、文句言われても困るわ）

とかナメクジも思ってたりするんだらうか。いやそれはないか？

「同じようにやってみ」

「えー？」

お手本を見せる。

「こうやって、下から掬い上げるように」

捕獲。

「ほらね」

「……こんな感じ？」

お、一回見ただけには上出来だ。

「やった、掴めた」

「どうやるんですの？」

「さっきだよさっき」

熊野も同じようにやって見た。さつきまで苦戦していたのがウソのように捕獲成功。

「出来ましたわー！」

こっちの2人はいいだろう。最上&三隈は何だかんだ上達して来たようなので特に声掛けはしない。海外組もある程度は慣れたようだ。ホムセン箱にナメクジをひたすら放り込んでいく。

約40分後……

「……外側は終わりましたね」

無事、ゴミステーションの壁に居た分は捕獲した。残りは内部と地面だ。

「内部はやりませう。皆さんは地面に駆除剤を撒いて、スコップで土を何回か掘り返して馴らす作業をお願いします。こうすると土の中に居る分を手軽に駆除出来ますので」

「じゃあ外はお任せ下さい。みんな、やるよ」

外の作業は皆にお願いしたので自分はゴミステーションの中に入った。外よりは少ないが、それでもまあまあ数の数が這っている。

「よしラストスパート」

時々ホムセン箱の状況に注意しつつナメクジを捕獲し続ける。幸いにも生ゴミは無いので臭いはそこまでじゃなかった。

「容器の裏も……居るなあ」

こちらは20分程度と以外に掛からなかった。ホムセン箱を積み上げて地面の様子

を観察。

「大丈夫そうですね。暫くはこんな感じで、地面の掘り返しと駆除剤の散布を2日に1回ぐらいやって下さい。何匹かは出て来るでしょうけど、数は大分減ると思いますから」

「ありがとうございます。後はこちらでやります」

「感謝致しますわ」

「掴めないといライラするけど上手くいくと何か楽しいね、やっぱ相談して正解だったわー」

「今後とも何かあればよろしくお願い致します」

「良い経験になりました。私たちも、これからお手伝い出来れば幸いです」

「また機会があれば呼んで下さい」

本日の作業はこれで終了。ホームセン箱は回収。近くの山に放つとしよう。

「では失礼します。間宮さんには伝えておきますので」

食堂に入って間宮さんに報告も済ませ、ホームセン箱を抱えて車に戻った。

「さてまずは外に出て、と」

車を発進させる。敷地から出て山に入る。ナメクジを解き放つ。店に戻りましょう。

(広樹です。旧棟の件で頭がいっぱいな所で、いいリフレッシュになった気がします)

旧棟・内部調査準備

某日の午後。旧棟内部調査の打ち合わせに軽巡察を訪れた。夕張さんと会うのだ。

「ごめん下さい」

「あら、暫くです」

ヒエツ 龍田様

「……………無沙汰しております」

「夕張ですね、少々お待ちを」

奥に消えて行く。心臓が止まるかと思った。

「あー怖かった」

「そこまで露骨に態度が硬化すると流石の私でも分かるぜ」

後ろから女性の割には低めの声があった。振り返ると、あー、ガルバルディさんでしたっけ？ いやこれはモ〇ルスーツか？ 違うっけ？

「……………一応は隠したつもりなんですけどね」

「まあ、怖いのは理解出来る。何か底が知れないのを感じるよな」

「正直そうですね……………ちよつとは慣れましたけど」

「何がですか〜？」

急に隣で声がして2人同時に驚いた。思わず叫びそうになるがそれはギリギリで抑える。

「あー、えつとー、旧棟の移動する暗闇がですね」

「そうそう、怖そうだなって話を」

「あれですか〜、確かに怖いですよね〜」

「すいません遅れましたー」

いい所で夕張さんがやって来た。有難い。

「お疲れ様です。旧棟の件で」

「はい、あつちでお話しましょう」

ロビーの隅っこに移動した。夕張さんの抱えるノートPCとファイルがテーブルに置かれる。

「これが大淀から預かった旧駆逐艦寮の図面です。3D化したデータもありますので、良かったらどうぞ」

「ありがとうございます」

取りあえず1階から攻めて行きたい所だ。図面を受け取って立ち上がったノートPCのデータと照らし合わせていく。

と、ここで気付いた。さつきから視界の隅にチラチラとよくないものが見える。いつもは作業着姿だが恐らく今日は制服であろうその服、お腹が丸見えですけどいいんですか？

(気にしない気にしない)

「あれから中には誰も入っていません。窓枠が外れている所以外は、出入り口も締め切っている状態です」

「裏手の方ですけど何か野生動物の目撃情報とかは」

「今のところは何も」

「何も……………なるほど」

ふーむ、やはりカメラを仕掛けておいた方が良さそうだ。後で提督さんにもお願いしよう。

「そうそう、当日の拠点はどうしますか？」

「拠点ですか……………正面出入り口の前はちよつと遠慮したいですね」

「じゃあ今の駆逐艦寮の中から出入り口が見える所にしましょう。そうすればモニターとかも置けるので見やすいと思います」

モニター？ 外部に映像の出力が出来るのか。すげえ……………

「分かりました、その方向でお願いします。取りあえず1階の……………炊事場以外を探りま

しよう。あとは順次、上階を偵察する感じで」

「あー……本当にそんなの居るんですか？」

「居るんですよえこれが」

移動する暗闇の目撃者は俺を含めてたった13人。この鎮守府の総勢200数名で考えると1割に満たない証言にしかない。提督さんも信じてはいるが自分の目で見た訳ではないから、話を聞いただけでは疑う気にもなるでしょうね。

「まあ、映像越しでも威圧感は半端ないと思うんで気を付けて下さい」

「うーん、ジャンク品を使おうかなあ。そうすれば最悪、壊れても構わないし」

「自分も回収しに行く勇氣はないですね。その方がいいかも知れません」

打ち合わせはこの辺で終了。次は重巡察へ向かう。

重巡察

「すみません後藤田ですー」

「ZZZZZ」

ロビーのソファで寝入っている見た事のない艦娘を発見。誰の姉妹だろうか……

「あーすみません、お待たせしました」

「いえいえ、本当にさつき来ましたんで」

古鷹が現れるも寝ている艦娘の方へ進んでいった。

「加古、加古」

「……んんん、あと1時間」

「もう加古、起きて」

「30分でもいいから……ZZZZZ」

また寝たようだ。あそこまで意識が戻って来たたら普通は起きそうなものだが。

「仕方ないなー。すいません、妹の加古です。また機会があれば改めてご挨拶させていただきますので」

「あれ……てつきり青葉さんなんか妹かと思ってきましたが」

「んーとお……厳密に言うとは無関係ではないんですけど……まあそれは置いておきましよう」

おっと、他人の血筋を詮索しても仕方ないな。お仕事お仕事。

「いえ失礼しました。本題に入りますよ」

彼女が持つて来たファイルを見せて貰う。重巡寮は裏手の雑木林のお陰で色々出るのだ。目撃情報を纏めたのをこうして定期的にチェックしている。

「……………真っ黒い蜂のようなものですか」

「それ、みんな結構怖がってます。誰のペランダにも巢は確認出来てないので、建物の外

に居るのは間違いないと思うんですけど」

「具体的な形とかは分かりませんかね。どなたか例えばクマバチと言った事は」

「クマバチではないって所が共通認識です。私も色々調べてみたんですけど、それっぽいのが沢山あって……」

これは実物を目にしないと何とも言えない。しかし簡単に遭遇は出来ない筈だ。こういうのは意識して探すと見つからないものである。普段その辺に転がってるボールペンの如しだ。

「もし可能なら写真とかを撮っておいて貰えると助かります。難しいかも知れませんが」

「そうですね、無理はしない方向でみんなにも頼んでみます」

他は特に目立ったものはない見当たらない。近々でまた様子見ついでに、忌避剤を持って来る事にした。今日中に発注を掛けてしまおう。って所で今度は司令部棟に向かう。

司令部棟

ドアをノックする。

「お疲れ様です、後藤田です」

「セールスはお断りよ」

「いえどうかお話だけでも」

「仕方ないわね。どうぞ」

「失礼します」

この小芝居が出来るとて事は提督さんは居ないようだ。ドアを開けると案の定、加賀さんだけだった。

「えーと、提督さんは戻られてない感じでしょうか」

「トイレよ。すぐ戻るわ。座って待っていて頂戴」

言われるままソファに腰掛けるのとほぼ同時にドアが開いた。戻って来たようだ。

「ああすいません。お待たせを」

「いえ、大丈夫です」

打ち合わせ開始。今回も内部調査に関する事だ。

「それですね、もし可能なら、旧棟の裏手にカメラを設置させて頂きたいんです。もし出入りしている野生動物が何なのか分かれば、場合によってはそっちの対策が先になる可能性もあります」

「この前に何かが移動している事だけが分かった件ですね。そう言えば屋内には糞もあつたそうですが」

「犬っぽい感じだったんですけど、この周辺に野犬の類が居れば流石に誰かしら気付き

ますもんね」

「二応それなりの警備システムがありますので、何かあればそういう報告も上がってきますが特には確認してませんね。分かりました。よろしくお願いします」

その後、15分ばかりのやり取りをして打ち合わせは終了した。旧棟裏へカメラを仕掛けるついでに周辺の様子を探る事にする。

旧駆逐艦

「……うーん、1人はちと怖いが仕方ない」

ウダウダ言っても始まらない。子供じゃないんだから仕方ない。

「子供ねえ……戻ってもいいけど学生時代を全部もう1度つてのはやだなあ」

「へえ、そうなのねえ」

「そうですねー……え？」

振り向くとそこには、荒潮もとい、駆逐艦詐欺の1人がニコニコしながら立っていた。
「……いつのまに」

「旧棟の方に行くのを見掛けたから付いて来ちゃった。人手が必要になったら、呼びに行く係が必要でしょ？」

「……まあちよつとは手伝ってくれると有難いけど」

「はぁ〜い」

どうしてこうなった。まあいい。気にしない気にしない。

旧棟の裏手に移動。草は綺麗に刈られている。どの辺にカメラを仕掛ければいいだろうか。

「さてと……カメラは何所に置こうかな」

「あらあら大変、そういう趣味だったのね〜」

「あのねえ」

「やだ〜冗談よ」

いかん。調子が狂う。さっさと終わらせないとペースに飲まれそうだ。

「えーとね、まず基礎の所の通風孔とその周辺に蛍光塗料のスプレーを撒いて貰います。前にも1度やってるけど、草刈やら何やらであんまり意味がなくなってしまうのでもう1回やります」

「どんな感じでやればいいのかしらあ」

「まあ、難しい事は考えずにこんな感じで」

お手本を見せる。と言うかこれに関しては特に技術も何も無いが。

「先にカメラを設置するから、この作業を進めて下さい。終わったらそつちに混ざるけどもし先に終わったら一声掛けて欲しいです」

「全部の通風孔？」

「全部だね。あとこれ、緊急用の笛。変な物が出たとか蛇に出会ったとかあれば吹いて」
「了解よ〜」

よし、これで体よく離れられる。カメラを設置したら反対方向に向かうように塗料を撒いて正面で合流。作業終了。解散だ。

しかし思うように事は運ばなかった。画角が上手く決まらない。可能な限り広い範囲を映像に収めたいが、カメラのズームを一番手前にしても気に入る状態にならん。

「ん〜……難しい」

「全部終わったわよ〜」

「え、もう?」

「30分ぐらいは経ったんじゃないかしら〜」

マジか、そんなに悩んでたとは。

「何が決まらないのお?」

「映像の取れる範囲が決まらなくて」

「じゃあ私がどの辺から映像に入るかで設置場所を決めるのはどう?」

「あ、それはいいかも。じゃあちよつと森の境目当たりに行ってくれるかな」

「はあ〜い」

荒潮がトコトコと小走りで森と敷地の境目に行った。そこから少しずつ前に歩いて貰う。10歩ぐらい進んだ所で液晶に映り込んだ。

「ストップ。一歩下がってみて」

映像から荒潮が居なくなる。旧棟の裏はしっかりと映ってるので、この状態だと森の方にカメラを向けた方が良さそうだ。

「ちよつとずつカメラをそつちに向けるから下がれる所まで下がって欲しい」

「OKよお」

カメラを動かしつつ手の動きで後退を指示。するとある角度で旧棟の裏側が映像から消えた。

「ここまでは入るのか」

「まだ下がる?」

「一歩前に」

また荒潮が映り込んだ。と言う事は、もう少し左に向けるのがベストだろう。

「こんな感じかな。OK、終わった」

「ギヤラはお幾らかしら」

「録画はしてないから何も発生しませんね」

「ええ、いいじゃない」

「よくありません。ご協力ありがとうございます。これにて失礼」
「もうちよつとお話しましょう」

纏わりつかれながら旧棟周辺をもう1度見て回る。外れていた窓はビニールシートで塞がれていた。業者の人が下見か何かに来たようだ。俺の出番も近い内に回って来る事だろう。しつかり準備しなくてはならない。

（広樹です。移動する暗闇、小さい無数の龍田様、なんてのを想像して震え上がりました。君は、生き延びる事が出来るか）

番外編 鎮守府公式チャンネル 深夜の鎮守府

第十七鎮守府 正門警備所付近 深夜1時頃

「しらつちでーす」

「やつほーかげろんでーす」

「こんばんは、フブです」

「シキミンだよー」（敷波・出るのは4回目 カー○おじさんのお面）

「あく、ホクジヨウさんでーす」（北上・今日で2回目 ちい○わ・栗ま○じゅうのお面）

「しぐしぐです」（仮面ラ○ダーのお面）

暗い中、懐中電灯を持った状態で定例の自己紹介が一通り終了。白露が一步前に出る。

「今日はなんと、初となる生配信です」

「みんな見てるー?」

陽炎の問い掛けに閲覧者たちのコメントが帰って来る。ソフトが自動的にコメントを読み上げた。

『見てるー』『ホクジヨウさん2度目か』

『シキミンシキミン』『フブの声眠そう』『しぐしぐが出てると!?!』
「ではゲストをお呼びします。どうぞ」

陽炎がそう言うのと、画面外から新たに演者が登場。

「はいどうも、G田です」（リアルタイムボイチェンを装着 相変わらず地藏さんの被り物）

『G田さんk t k r』『よっしやG田さん見れた』

『今日は当たり回やな』

「えー、俺はここに居ていいんですかね」

「提督と警備の責任者に許可は頂いてます」

陽炎がそう言うのと、カメラが正門の警備所を向く。暗くてよく分からないが手を振っているのが責任者の人だ。

「あの方が責任者です」

『フリーダムだなこの鎮守府』

『緩々やん』

「因みに今日の映像は提督にやって頂いております」

「どうも皆さん、第十七鎮守府の提督です」

『マジで!?!』『やべえwwww』

『提督がカメラってｗｗｗｗ』

コメントが一気に増えた所で企画の説明が始まる。立案者はやはり白露だった。

「本日はですね、肝試しに近い事をしたと思います」

「別にここ、墓地の上に建てられたとかそんな場所じゃないけどね」

「そういう噂もないし」

北上と敷波が少し否定的に言う。まあこれは仕込みだが事実でもある。

「でも不気味だなんて思う所はあるじゃん？ 皆がそういう風に思ってる所を見て回ろ

うかなってのが今回の企画です。じゃあ事前に書いて貰ったボードを出します」

ここで時雨がキヤスター付きの台（手製）を押しして来た。寝かせていたボードを持つ

て見えるように立たせると、提督はそこにズームする。画面外で左手を振って映像が定

まった事を伝え、白露が読み上げ始めた。

「えーと、食堂裏がシキミンとしぐしぐ。某施設裏の雑木林、フブと私。敷地内のある

ベンチ、かげろん。南の倉庫、ホクジヨウさん。以上の4か所を回りたいと思います」

因みに食堂裏以外の3か所は全て一般人が見学の際に歩いてもいい区画にあった。

食堂裏は若干グレーだが、行く前に全員でしっかり「一般の方は立ち入れません」と報

せる事でOKとなる。

広樹に関しては提督が自ら今回のために許可を出したと口頭で伝える予定だ。

「ではまず、食堂裏を目指しましょう。みんな行くよー」

白露の先導で歩き出す。後頭部は身バレになる恐れがあるので、提督がさり気なく最前列に出た。ここで吹雪が大欠伸した声カメラに入る。

『今の誰?』『フブ?』

「眠い?」

「だってこんな時間普段なら寝てるもん」

陽炎の問い掛けにダルそうに答える吹雪であった。

『眠そうなフブかわいい』

『健康的でいい事だ』

何かしら喋りながら食堂に到着。こんな時間なので当然だが真つ暗。非常口のランブぐらいしか明かりはない。

「暗くなると不気味だね。あんま近寄りたくない」

「何も出ないだろうけど何か出そうって思っちゃうね」

ここを書いた敷波と時雨は少し怖いらしい。ここでカメラが振り返り、全員を映像に収めた状態になった。

「ちよつとお報告があります」

提督がそう告げる。

『お？ 何だ？』

『お報せ？』

「はい。今から行く所は、一般の方は立ち入れない場所ですのでご了承下さい」

「「「「ご了承下さい」」」」

白露がお報せのために用意した文章を読み上げる。他の5人も最後にそう言って締めた。続いて広樹について提督から。

「G田さんについては今回のために許可を出しましたのでその辺についてもご了承下さい」

「弾薬庫とかにでも行くのかと思って冷や冷やしましたねえ」

『おk』『www』

『翌日、G田さんは姿を晦ました。知り過ぎたのだ』

ここで先頭が提督から広樹にチェンジ。地蔵マスクは完全な被り物なので後頭部も分らないから安心だ。

「仕事で1回来たつきりですねここは。夜になると嫌な感じします」

「ええ〜マジで行くの〜？」

「う……シキミン先に行つていいよ」

「ちよ、裏切んなし！」

『怖がつてるしくしく可愛い』『シキミンシキミン』

『G田さんマジで何の業者なん?』

『ボイラーとかじゃね? 自衛隊の駐屯地に泊まりとかあるみたいだぞ』

たまに起きる広樹の職種予想大会。出演した回のコメント欄ではいつもの事だった。作業服には店のロゴ等が入っている訳ではないのでそこから職種を推測するのは難しく、コメント欄をチェックしている提督もまだ正解が書き込まれていないのは確認していた。

しかし今回は生配信。その手のコメントが増えてしまうのを防止するために、提督も予め考えてた事を言う。

「G田さんの業種は身バレに繋がる恐れがありますので何とぞ詮索はお止め下さい」

『止すんだ皆、消されるぞ』『そして誰もいなくなつた』

『まあ、皆いいやつだったよ。提督さんの言う通りに行っていればよかつたものを。おや、こんな時間に（ry）』

数分とせず食堂裏に到着。木々がそれなりにあるので鬱蒼としている。灯りは懐中電灯以外にない。

「ねえもういいじゃん、次行こうよ」

「あんまり長く居たくないです」

「そう？ 別に何ともないと思うけど」

「あゝ、まあ不気味っちゃ不気味かもね」

陽炎と北上にとつては特に問題ないようだ。時間配分もあるので次の目的地に移動する。

『自分の家の裏でも夜中は不気味だよな。そういう感じに思えた』

『ホクジヨウさんから漂う強者感がすごい』

『かげろん本当は怖いのが我慢してる説』

『きゃく怖くてかげろん歩けなく』

『あ、うん、無茶ぶりしてすみません』

「えーと、今のコメントはチョコメロンさんね。明日お迎えに行くから覚悟しといて下さいね」

放送は各自のスマホでも見られるので、陽炎は自分をノセたのが誰かを探し出していた。

『オワタ』『ああ、達者でな』

『イヤダ！ シニタクナーイ！ シニタクナーイ！』

時折こうして茶番なやり取りをしつつ次の目的地に到着。某施設裏と言ったがこれは重巡寮裏の雑木林だ。詳細を特定されなかったための措置である。

「うえ、昼間も不気味だけど夜だと数割増し」

白露が懐中電灯で雑木林を照らす。昼間でも向こう側が見えないほどの密度だが、夜だと尚更に存在感が強まる。

「……うん」

吹雪はもう眠くて仕方ないらしい。反応が薄かった。

「辛かったら先に戻っていいよ。何かもう立ったまま寝そうだし」

「いい。レギュラーだから頑張る」

敷波が戻るように促すも吹雪はそう言った。真面目成分の強い吹雪としては立ち上げメンバーの1人である事に責任を持ちたいのだろう。

『フブ、我慢しないでいいのよ?』

『ちよつと鎮守府宛に布団を発送して来るぜ』

『おやおや、フブは健気でかわいいですね』

『某卿は深淵にお帰り下さい』

『わく、フブ人気者〜』

『もういいんで次行きましようよ〜』

北上が茶化すも何やかんやここは吹雪が搔つ攫つてしまったので次に移動する。

少し、いや、それなりに歩いた。街灯が照らし出す一つのベンチをカメラが捉える。ちよつとばかり草臥れた感じなのが哀愁を誘っていた。

「あー、このベンチさあ、夜に通り掛かった時に隣の木製の電柱が人に見えてさ、誰か座ってるんじゃないかって錯覚したのよねえ」

「何か雰囲気は凄いいあるね。電柱もそうだけどベンチも木だからかな」

陽炎と時雨が少し近付き懐中電灯で照らした。陽炎の言う通り木製の電柱がパツと見で人に見えなくもない。

「んー。みんなちよつと下がってさ、あそこが片目の隅に来るぐらいの角度になってみ？」

北上が急に何かを言い出す。取りあえず言われた通り、両目どちらかの隅にベンチと電柱が来る角度になってみた。何だと言うのだろうか。

『ホクジヨウさん霊能者説？』

『俺も画面越しだけで片目の隅になる角度やってみる』

「あれさー、何だっけ。アメリカの凄く身長高くて手足の長いお化け」

『もしかしスレンダーマン？』

『スレンダーマン？』

「ああそれぞれ。何かそれっぽいのが居るように見えない？」

言われて見ればそれっぽく感じるようにも思える。木製の電柱に街灯がぶら下がっているのが主な要因かも知れない。

『見えなくもない』

『つぼいかも』

『俺には分からん』

「そっかー、みんなは？」

「スレンダーマンって何ですか？」

「誰か居るようには見えるけどそのお化けが分らないです」

「よく分かんない」

時・吹・敷がそう言った。他のみんなも人っぽいのが居るようには見えるがスレンダーマンが分らないので何とも、な感じらしい。

「いい事思いついた。G田さんちよつとあのベンチに座ってみて」

「何じやい急に」

「いいからいいから」

白露が急に変な事を言い出した。促されるままベンチに腰掛ける広樹。

「そこで項垂れてみて」

上半身を前に倒して項垂れる。作業服を着て地蔵マスクを被った謎の人物が街灯に

照らされるベンチで項垂れていると言う不可思議な映像が出来上がった。

『何だこれwww』

『画面が面白いwww』

『G田さんの正体は鎮守府に潜む怪異だった!?!』

『首だけこつちに向けてみて』

姿勢はそのままで地藏マスクだけがカメラの方を向いた。

『怖www』

『やべえ、収容違反だ』

『目が合うと襲ってくるタイプの死神w』

夜中だからゲラゲラ笑えないが全員静かに笑っていた。撮れ高にはなったようなので次に向かう。

『何やらすんじゃもう』

『ごめんごめん』

『さすがG田さんやでえ』

『これでもうかげろんはあそこを怖がる事もないな』

『それとこれとは別問題です』

最後の場所に到着。北上が書いた倉庫の近くまで来た。

「ここで最後になります」

この辺は倉庫地帯だ。白露のアナウンスで到着を告げる。

「どの倉庫ですか？」

「ん〜……あの3つめ」

陽炎が聞くと、北上は十字路の角から数えて3つめを指差した。そこまで歩く。

「ここだね〜。あそこに窓があるっしょ？」

上の方にある窓を全員が見る。カメラもそこを映し出した。

「夕方だったかなあ。ここを通った時にさ、あそこに誰か居たように見えたんだよねえ」

「でもあの窓って採光用で足場とかないですよね」

白露が衝撃的な事を口走った。

『昔そこで首を吊った人とか』

『いやシキミンがその手の噂は無いって言ってたじゃん』

敷地内の何所に誰がどんな感情を持っていたとしても、その手の噂が無いのは本当である。この鎮守府自体がそこそこ新しいので当然と言えば当然だ。

「う〜ん、見間違いか勘違いだと思っただけだよあ、2〜3回くらいそんな事があつてねえ」

「因みに他の所でそういうのを感じた事がありますか？」

「無いんだよねえ。だからどうも不気味でさ〜」

時雨によつて気味の悪い事実も発覚した。少しずつ嫌な空気が漂い始める。

『ようやく本格的なホラーっぽい感じになったな』

『家に居るけど何か寒気して来た』

『怖E』

「ちよつと窓の辺りを照らしてみよつか」

白露が窓の所へ懐中電灯の光を向ける。特に何も見えはしない。

「今日は何もないみたいだね〜、それならそれでいいんだけど」

「G田さんちよつとあそこに」

「無理」

『www』

『即答www』

これで全てを回つたので企画は終了、正門まで戻つて解散を宣言。白・陽・吹の順番で喋つた。

「今日の生配信はこれで以上となります。ご視聴ありがとうございましたー」

「動画版は2週間以内にアップロード予定です。よろしくお願ひしまーす」

「……ありがとうございます」

『フブお休みー』

『もう声が限界っぽいwww』

『動画版待ってるで』

「こんな時間に集まっていたいただきありがとうございます」

「みんなお休みー」

「良い子は早く寝ようね〜」

『またねーしぐしぐ』

『シキミンシキミン』

『おやすみー』

「お疲れ様でしたー」

『G田さん乙』

『次はいつ出るですか』

「さあ今年はまだ出ないかも知れませんね」

「ではこの辺で失礼させて頂きます。ありがとうございます」

最後に提督が締めて配信を終了。時刻は深夜2時付近だ。それぞれ寮に戻り始める。広樹は仮眠室を借りていたのでそこへ行き、提督は直帰した。

アップロードされた動画版はチャンネルとして初の1万回再生を記録。特に広樹がベンチに座ってる例のシーンはリプレイ回数が多い所になり、コメント欄もそこそこ盛り上がりを見せた。

因みに北上の言う倉庫のシーンは、何名か「視える」とのコメントが書き込まれたが、
真実は定かではない。

旧棟・内部調査1

某日 午前9時

旧棟内部調査初日。初日？ 出来れば今日で終わらせたいがしかし……

「あー……遭遇しないといいなあ」

画面越しでもアレとは出くわしたくない。そう思いながら車を走らせた。当然だが鎮守府が見えて来る。

「おはようございます」

「おはようございます」

鎮守府関係者用出入口口にハイエースを近付ける。例の読み取り機で確認が終わり、そのまま敷地内に車を進め、駆逐艦寮に横付けした。

「……おや？」

何かがアスファルトの上に落ちているのが見えた。拾い上げると紙のようだがこれは……

「……………漫画？」

いや、正確には鉛筆か何かでざっくり書いた下書きっぽい。どうしてこんな所にこん

な物が？

「落とし物……でいいのかこれ」

敷地の外から飛んで来た可能性は低そうだ。このぐらいの時間帯は海から風が吹く。仮に町の方から来たとしても、山で遮られて何所かで落ちる筈だ。

「んー……あんまり人目に見られたい物じゃないだろうな。一旦これは車に置くか」

ハイエースの助手席に安置する。施錠して駆逐艦察に入った。

駆逐艦察・裏側の廊下 旧棟正面出入り口付近

長テーブル1つ。椅子3つ。テーブルの上にはノートPCが3つ。その内の1つ、中央のPCから伸びるHDMIで繋がれた少し大き目のモニター1つ。ドローンのコントローラー1つ。後は何か、色々と機材が周囲にある。これが本日の拠点だ。

メンバーは俺、夕張さん、提督さん、以上。

「では旧棟の内部調査を実施致します。よろしく願います」

「お願いしまーす」

「夕張、ドローンは最悪の場合、破棄しても構わんからな」

「あー大丈夫です。安物を手に入れたので今日はそれを使いますから」

前回の打ち合わせで言っていたのを実行するようだ。まあもし何かあっても回収す

る必要がないなら有難い事である。

「じゃあちよつと機材周りの説明をしますね」

3人でテーブルの方に近付く。

「まずこのHDMIで繋がれたPCは私が使います。目の前のモニターにドローンの映像が出ますから、それをご覧になって下さい。左右のPCでも同調した映像が見られますけど、3D化した図面データにドローンの位置が連動して、現在地の分かるソフトが入ってますのでメインはそちらのリアルタイムデータを見てもらう事になります」

すげえなあ、こんな事が出来るのか。今の技術って凄まじいですね。

「二応、紙の図面もありますから参考程度にどうぞ。特に質問が無ければ始めますけど」
「そのリアルタイムデータが見れるソフトは間違つて閉じた場合に何か特別な設定はありますか？」

これは聞いておいた方がいいだろう。やらかしそうだし。

「えーとですね」

スリープ状態のPCを呼び起こして解説が始まる。デスクトップには既にそのデータが見れるソフトが立ち上がっていた。

「今、デスクトップにはゴミ箱と映像を見れるソフト、そしてこのリアルタイムデータが見れるソフトの計3つしかアイコンを置いてません。もしこれを閉じてしまった場合、

この上から3つ目をクリックして下さい。全部立ち上がると自動的に図面が展開されます。下の方に展開終了と表示が出たら、左上のファイルをクリックして、その中の同調をクリックして下さい。それで勝手に同期してくれます」

ひゃー、ハイテクや……

「分かりました、大丈夫です」

そんな訳で旧駆逐艦寮の内部調査が始まった。外に置かれているドローンが飛び上がり、そのカメラから送られて来る映像がモニターに映し出される。

「ではまず1階。炊事場以外の探索を始めます」

ドローンが前進する。高さは人の視線ぐらいだ。

大体15分が経過。最初に入った時の記憶と内部の状況は大差ない。例の糞もほぼ干からびていたが、新たな糞は確認出来なかった。

「糞の主は草を刈ったから異変に気付いて近付かなくなった可能性がありますね」

「そうみたいです。裏のカメラってまだそのままですか？」

「今日が終わったらチェックする予定です」

「夕張、廊下の方を頼む。業者さんに仮で塞いで貰っている窓を見たい」

「はい」

移動開始。ドローンはビニールシートで覆われている窓枠の外れた所を映し出す。

「異常は無さそうだな」

「ここはどうされる感じですか？」

「新しい窓を入れて貰います。ただ……」

「……何か」

「業者の方がこの作業をした際に立ち会ったんですけど、何かの気配を感じるとずっと言っています」

何かの気配。恐らくそれは連中の事だろう。よく分からんが、通常のGらしからぬ知性のようなものを感じる。未だにあいつらと戦う手段は思い付かないままだ。

「進めていいですか？」

「ああ、頼む」

「お願いします」

1階は例の炊事場を除いて全ての探索が終了。2階へ続く階段がモニターに映り込む。

「2階に上がりますね」

「前は確か、上がり切った所で異変に遭遇したんでしたか」

「そうですね。お陰で2階は全く見れていません」

紙の図面で見ても分かる通り、2階はほぼ全てが当時生活していた艦娘たちの部屋の

ようだ。しかしここが昔の小学校であった事もあり、部屋は教室を改造して衝立によって無理やり個室を作り出した仕上がりになっている。

ドローンが2階に到達した。近い所から見て行く。

「ドアが閉まっていますね。ここはパスかな」

「その窓が開いてませんか？」

「窓……これ入れるかな」

廊下側に窓のあるタイプの教室だ。その窓が1つだけ開いている。しかしドローンの大きさに入れるかは微妙だ。

「……………ゆっくり、ゆっくり」

次の瞬間、画面が大きく揺れた。プロペラが当たってしまったらしい。

「あー！ やっぱー！」

いかん、余計な事を言つてドローンを壊してしまったか!?

「大丈夫か？」

「自動で水平になる機能があるんで多分」

「ここはやめましょう、すいません余計な口出しを」

「入れそうだったんですけどねー、まあ他の所を見ましようか」

隣の教室に移動する。幸いドローンはまだ無事なようだ。

「こつちは開いてますね」

中に進入。まず目に飛び込んで来たのは、鳥の巣だった。何の鳥かまではちよつと分からない。提督さんがその映像を食い入るように見つめた。

「鳥の巣か、卵か雛が居ると厄介だな。近所で毎年キジバトがやって来る所がありました」

「あー、あいつら同じ所に来ますよね。変な所に巣を作つて卵落としても毎年やって来て同じような事を繰り返してるの、よく見ます」

カメラが巣にズームする。しかし卵も雛も確認出来なかった。

「使われてるかどうかは微妙ですね。もしかすると何かしら対策が必要になるかも知れません」

これはメモっておこう。一部の鳥類は同じ巣をずっと使い続けるらしい。もしここが予定通りに駆逐艦寮の一部として復活すれば、巣を使っていた鳥が中に入って来ようとする可能性は高い。

「うーん、個室のドアは全部閉まっていますね。これじゃ中はちよつと」

「無理はしないで先に進みましょう。まだ上もありますから」

取りあえず2階の探索は終了。ドローンは3階に続く階段の上を飛んで行った。

「3階は……半分が部屋で残りは物置みたいですね」

「確か備品置き場にしていた筈だ。新棟が完成した時にある程度の物は移した記憶がありますので、そんなに大量の荷物は残ってはいないかと」

「……って事は違う何か（意味深）が居る可能性はある訳だ。」

と、ここで提督さんの携帯が震え出した。チラツとディスプレイが見えたが「執務室」とある。あそこに直通番号なんてあったのか。

「ちよつと失礼します」

提督さんは立ち上がって少し離れる。電話中もこちらは探索を続けた。数分後、電話が終わったらしく提督さんは戻って来る。

「申し訳ありません、1時間ばかり席を外します。夕張。もし終わってしまった場合は連絡を」

「はい」

「こちらは続けますので気にされなくて下さい」

「ありがとうございます。では失礼します」

2人にされてしまったが気にしない。お仕事お仕事。しかし、ここである事に気付いた。

（はて……視線を感じる）

首を回すついでに左右を見るが、今自分の近くには夕張さん以外に誰も居ない。何なのだろうかこの感覚は。

そして、曲がり角から2人を見つめる人影が1つ。

「ん……：パリさんの隣に居るのは誰なのか」

髪を高い位置で結っており、青いリボンが特徴的な艦娘が居た。曲がり角から凝視している。

「もしかしてそういう関係？　パリさんも隅に置けないですなあ」

「何してんのよアンタ」

「悪い事はあかんで」

後ろから声を掛けたのは陽炎と黒潮。咄嗟に振り替える。

「ねえねえ、パリさんって彼氏出来たの？」

「は？　彼氏？」

「居るかどうか知らんけどここで会うとるのは変と違う？」

「いやでもホラ、あれ見てあれ」

陽炎と黒潮は曲がり角の向こうを見た。顔見知りになって久しい人間が居るのを確認。

「あー、あれは仕事中よ」

「ちようどええわ、あんたまだ挨拶してへんやろ？ 行こか」

「え？ 行く？ 何所に？」

2人に引つ張られて彼女は広樹と夕張の所に向かった。

3階の探索が始まって数分後。陽・黒に声を掛けられた。

「お疲れ様でーす」

「毎度おおきに」

「お邪魔しております」

「お疲れー」

2人がモニターを覗き込んで来た。後ろで気まずそうにしている娘はどなたですかね。

「これ、あの中の映像？」

「真つ黒いのは何所に潜んどるんやろなあ」

黒潮はこの中で唯一、あの時に移動する暗闇を見た仲間だ。話が通じるだけで何だか嬉しくなる。

「階段がそもそも中央の1つしかないのに我々を掻い潜って2階に居たつてのが解せな

い」

「ウチらが他のところ見とる間に上へ行つたんやろうけど、にしてもあの待ち伏せ感はやわ」

「それ嘘じゃなかったのね。さすがにちよつと信じられなかったけど」

「あのー、連れて来といてからの放置プレイは勘弁してくださいませ？」

「気まずそうにしていた娘が喋つた。声がちよつと低いけど耳通りはいい。」

「あーごめんごめん。ご紹介致します、末妹の秋雲先生でございます」

「何やつけ？ サークルみたいなん」

「秋ちゃん冬のイベントは出れそう？」

「その辺は他言無用でオネシヤス!!!」

うーん、若い娘たちのやり取りにおじさん付いていけません。どう反応したらいいんでしょうかね。笑つとけばいいですか？

「つてかそれじゃ何の紹介にもなつてないじゃん。えーと、秋雲です。みんなと服装が違ふけど陽炎型の末っ子です」

「言われてみれば確かにそうだ。陽黒と着ている服のデザインが違う。」

「後藤田です。害虫害獣駆除の業者やつてます。ちよいちよい来てますが気にせんで下

さい」

「あ、思い出して来た。何かたまに来てる人ですね」

「数日置きに来てた時期もあったなあ。まあ、敷地内の車両通行許可証も貰ってるので不審者ではないと断言しておきます。よろしくどうぞ」

「そういやアンタ珍しく寮に居るわね。休みの時はよく遠出して行くせに」

「あー、ちよつと探し物を」

「何か落としたん？」

「建物の中だといいんだけどな」

「落とし物？　もしかしてアレ？　いや、違うか？」

「あれ、おつかしいなあ」

「夕張さんが何かに気付いた。どうしたのだろうか。」

「何か居ました？」

「んー……さつきそこの壁が黒一色だったのに、カメラが違う所を見てる間に色が変わったんですよ」

「カメラの問題じゃないの？　どこぞのメーカーかも分からない安物はダメですよバ
リさん。少し高くても信頼性のあるヤツじゃないと」

「ねえ、今の何？」

「陽炎が引き攣った顔でそう言った。目も見開いていて、何か恐ろしいものを見たよう

な表情だ。

「え？ どれの事？」

「上の方に何かが一斉に移動したのよ。大きな影みたいなのが」

黒一色。一斉に動く。大きな影みたい。このキーワードが叩き出す答えは1つだ。

「……後藤田はん」

「……あれはやっぱり現実だったのか」

「も、もしかして？」

「え？ もしかして？ 何が？」

「あー！ ちよつと何よこれ！」

夕張が叫ぶ。全員が見たのは、さっきまで映っていたモニターの映像が消えて「NO SIGNAL」とだけ映し出されていた光景だった。ドローンから送られて来る映像の信号が途絶したらしい。

「……何か見えました？」

「上から急に黒い幕みたいなのが下りて来たと思ったら信号が切れたって表示が」

俺はここでノートPCの位置連動ソフトを見た。ドローンの位置情報が消失した、と表示されている。横からその画面を見た黒潮が呟く。

「やられたんやな、恐ろしい連中やわ」

「ただのGじゃないって訳ね……」

「え？ G？ あのー、少し説明して貰えると有難いんだけどさ」

「さて、ドローンはやられてしまったようだ。次の一手をどうするべきか。もう少し内部の情報が欲しい所だがしかし……」

旧棟・内部調査2

衝撃的な出来事が起きて2〜3分が経過。何だか嫌な空気が漂い出す。

「……ちよつと休憩入れますか」

「ですねー」

「あれ、本当はGやのうて何かもつと別の生き物やったりして」

「まあ私らだつてあんなの深海棲艦の見てる訳だし」

「ねーつてば、おい説明しろー」

陽炎と黒潮が何か買って来てくれるそうなので、俺は例の存在について秋雲先生に説明を始めた。

「あの旧棟を使うようにするつて動きは知ってる？」

「何かちよつと聞いた気もするかな」

「中の様子を見に行つたとある3人組が何かを叫びながら泣いて帰つて来た事は？」

「……それは知らない」

3人組の言う要領を得ない言葉によつて呼ばれた事。神風型と共に様子を見に行つた事。炊事場の出来事。黒潮を含めた5人で再び旧棟に足を踏み入れ、2階で取り囲ま

れた事を話す。

「……………本当にゴキブリ?」

「1匹1匹は確かにそうだった。でもあれが集団を組んだ状態だと、まるで意思を持った何かのように動き回るんだよなあ」

「ドローン。1つ予備ありますけど、続けます?」

「何も考えないでやると多分、さつきと同じ事になる気がします。ちよつとアプローチの仕方を変えないといけないかも知れませぬね」

「ここで陽炎と黒潮が戻って来た。ビニール袋を1つずつ持っている。

「戻ったわよー」

「適当に選んでな〜」

お茶・ジュース・カフェオレ等々が並べられる。小袋のお菓子もあった。それらを手に作戦会議を始める。

「1階はどうにも安全な気がするんだよなあ、あの炊事場以外は」

「2階の空気は上手く言えへんけどいや〜な感じしたわあ」

「黒潮がそう思うなら確かなようね」

「例えば、階段を一時的に塞いで1階の安全を完璧にするってのはどうですか?」

階段を塞ぐ? そんな事が出来るのだろうか。

「どうやります?」

「そういう業者に来て貰うしかないんですけど、防火扉を増設するんですよ。こういう感じになります」

夕張さんのスマホで画像を見せて貰う。役所や学校でよく見る防火扉だ。しかしこれの取り付けとなると費用が嵩む可能性がある。それに間仕切りのような使い方をしているのかも分からない

「これ、消防法とか大丈夫ですかね」

「んー……確かに」

「一度相談する方がええんちゃう? こっちが動きやすい場所が増えるんやったらそれはそれでええ事やし」

「拠点を作れるもんね。それこそ、こんな所で店を広げなくていいようになるかも」

「いや、敵地の中で落ち着ける気はしないな。気付いたら包囲されてたりして」

う、それは嫌だ。ふと周りを見たら黒一色なんて受け入れたくない最後である。しかし連中を1階から2階へ追い込むにはどうすればいいのか。

「……試しに、出入り口周辺を掃除してみますか。それで暫く居座つてもし動きがあるようなら、予備のドローンで2階に誘導出来るかの実験をする。これが上手くいけば、防火扉を設置した後でも連中を2階へ誘い込んで1階との移動を遮断出来る、かも知れ

ません」

今日は何も道具がないので深入りは出来ない。でもこれぐらいなら可能な気がした。

「威力偵察つて事です。確証は持ってませんけどやつて見る分にはいいと思います。皆どう?」

「せやな。けどもう少し人数が居らんと」

「ちようどいいわ。1度その姿を肉眼で拝んでやろうじゃないの」

「あー、私はここでバリさんと一緒に」

「い く わ よ ね?」

「アツハイ」

「じゃあちよつと提督に連絡しますねー」

連絡の結果、GOサインが出た。つて訳で人数集めが始まる。因みに提督さんは急に出する事になったので今日はもう戻つて来れないらしい。全ては俺に委ねられてしまった。ロビーに行くど何人が屯していたので声を掛ける。

運悪く居合わせた吹雪&朝潮はどうやってるのか分からないが死んだ目付きで正面を向きつつ棒立ちのまま後ろへ猛スピードで下がり廊下の奥へ消えた。

「ほう、例の移動する暗闇とな。噂は聞いておつたぞ。かつて旧棟で暮らしていた者としては、見過ごせん存在じゃ」

「以前のアレですね。お供致します」

「Понял、随行しよう」

「この浜風、虫ごとき恐れはしません」

「前とは違う奴らか。面白い。僕も行こう」

初春・綾波・響・浜風・初月が賛同してくれた。はて、響は前と容姿が少し変わったような？

「何か……前と感じが違うような気がするけど？」

「ああ、改二の改装を受けたんだ。名前も変わったが、言い難いようだったら前のままでいい」

「因みにどんな名前？」

「ヴェールヌイだ」

ぶえ……うん？

「……悪いけど前の方で呼ばせて貰うかな」

「構わないさ。以前の私が消え去った訳でもない」

何か小難しい事を言うようになった気がする。まあ、深くは触れないでおこう。そこへ掃除用具を引っ提げた陽炎と秋雲が現れた。

「パワハラ〜、姉の権限を使ったパワハラ〜」

「アンタ24時間あそこで息を潜め続けるRTAやる？」

「どう足掻いてもオワタ式じゃんそれ〜」

あーるていーえー？ おわたしき？ 何の事だろうか。おじさんにはちよつと分からないです。

「総勢8名か。取りあえず4人1組になって貰えるかな。前にアレを見た2人は一緒にならないでくれると有難い」

「ほな浜はこつちや。悪いけど姉妹の方が動きやすいし」

「でしたら、残りは私が纏めますね」

こうして黒潮を筆頭に陽炎・浜風・秋雲のグループと、綾波をリーダーとする初春・響・初月のチームが出来た。夕張はドローンで遊撃&監視を行う。

「1つ、深追いは厳禁です。2つ、自分の守備範囲を意識する。3つ、誘いには乗らない。取りあえずこれを念頭に行動しましょう」

「誘い？ 彼奴らにはそこまでの知能があると言うのか？」

「普通じゃない事は確かなのでもしもそんなのを感じたら絶対に無視して下さい」

「手強い相手のようですね。秋雲、遅れを取ってはいけませんよ」

「何で浜姉までそんなやる気なのさ……」

総勢9名はゾロゾロと旧棟正面出入り口に到着。後ろを振り返ると夕張が窓ガラス

越しに手を振っているのが見えた。全員がハンズフリーのイヤホンを装着している。

「テストテスト、皆聞こえるー？」

「後藤田です、聞こえます」

「ぼつちりや」

「聞こえるわ」

「はい、聞こえますよバリさん」

「問題ありません」

陽炎型軍団 + α (広樹) は問題なし。

「こちらも大丈夫です」

「通話に手が塞がらないとは便利な代物じゃない」

「よく聞こえるぞ」

「D a p」

綾波組も大丈夫なようだ。

「取りあえず私は1階をグルグル回ってますね。異変を見つけたらすぐ報せます」

「お願いします。では行きましょう」

モップ・水入りバケツ・箒・雑巾・マスク・ゴーグル・ゴム手袋を持った軍団は正面入り口から突撃を開始した。

「まず土埃やらを外に出します。上から順に掃除開始」

古い小学校の下駄箱が目の前に広がる。思わず懐かしい気分になるが浸っている場合ではない。

「うえつ、すつごい埃」

「脚立あつた方がいいわねこれ」

中央にある下駄箱の上へ箒を伸ばした秋雲が余りの埃に辟易した。それを見た陽炎は脚立云々と言い出すも、みんなスカートなので倫理的な問題が生じる。

「あー、持って来てくれたら上の方はやるよ。危ないし」

「ほなウチと秋雲で持って来るわ。行くで」

「何か扱き使われてる気がすんだけど」

「ええからええから」

脚立の到着まで玄関口から奥の廊下部分を掃除するに留める。5分もすると脚立が来たので広樹は下駄箱の上を掃除し始めた。他の皆は4人1組で廊下側と下駄箱側に別れて作業を続行。

「よーし、下駄箱の上は終了つと」

次は左右の下駄箱の上だ。その前に壁の掃除も必要であるが、まず現状確認。

「何か異常は？」

「大丈夫やでー」

「特に無いでーす」

まだ連中に動きは無いようだ。どれぐらいで変化が起きるのかは分からない。今ここでやっている行動を敵対的なものとして見るか、まだどうでもいいと見るか、向こう次第だ。

しかし何もまままま時間は過ぎ、玄関から廊下に繋がる部分の掃除も終わりそうになる。

「このままだと終わってしまうな。奥の方へ手を伸ばすか？」

「誰も殺虫剤を持って来ていないんだ。深入りして襲われたら手段が無いさ」

初月と響が炊事場の方を見ながらそう言った。ここまでして動きが見られないのは少し不安にもなるだろう。

「後藤田殿、どう致す」

「これ以上の行動に出るのであれば相応に準備が必要と判断します」

「でも、アレが近くに居ないから何も起きてない可能性もあると思います」

浜風の言う通りこれ以上踏み込むのであれば一度店に戻った方がいい。だが綾波が言うように、アレが炊事場周辺かそもそも一階に居ない可能性も考えられる。

「今日はこの辺にしておいた方がええんとちゃう？ ぼちぼちお昼やし」

「そう言われるとお腹空いて来たな」

「午後に仕切り直す？」

まず全員のスケジュールを確認した。みんな午後は空いているらしい。もしかすると人数を増やせるかもしれないとの事だ。

「取りあえず少し早いけど昼にしましょう。午後については考えます」

一旦、解散となる。道具は正面入り口の所に積んでおいた。さて午後をどうするか……「ドローンでもう一度だけ上階を偵察して貰うか……或いは炊事場にちよつかいを掛けるか」

考えが纏まらない。と、ここで旧棟の裏に置いてあるカメラの事を思い出した。まずそっちの回収をしまおう。

すっかり草の刈られた旧棟裏。見晴らしは抜群である。そんな一画に佇む三脚に乗ったカメラがあった。電源を切って三脚ごと持ち上げ、土を少し掘り返してここが定点だった事の目印を残す。

「何か映ってるのかただの静止画同然か2つに1つと」

バッテリーを交換して映像を確認。サツと見た程度では目ぼしい物は映っていない。朝が夜になってまた朝になる繰り返した。

「外れか……まあいいや、昼にするべし」

食堂に向かい、日替わりを頂いた。車に戻って作戦を考える。

「どうしてくれようか……」

1・半数を率いて2階に上がり手近な所を肉眼で確認

残り半数は1階で警戒（殺虫スプレーは在庫を使用）

2・店に戻って道具を持って来てから作戦を再開

3・全員に出入口で警戒して貰ってる間に1人で炊事場を探索

ドローンも随行

そもそも中の様子をただ探るだけの予定が思わぬ展開になった本日。夕張の提案する1階と2階を遮断する方法を基に、連中を誘導出来るか試す行動に出た訳だが、肝心の連中が現れない事で頓挫してしまった。

「……思い切つて3番を試すか」

初回の面子が全員揃つていれば1番を選んでもいいのだが、今回は黒潮と綾波しか居ない。2番だともう自分のスイッチが切れてしまいそうな気がする。

「よし、即決即断即行」

車から降りて駆逐艦寮に入った。管理人室にはさつき姿を消した吹雪と朝潮が居て、部屋の奥へ逃げられる。

「い、嫌です。私は嫌です」

「お断りしますー！」

朝潮ちゃんそんな大きな声で宣言しないでおくれ。変な意味じゃないけど外に聞こえるから。

「待つて待つて、在庫の殺虫剤何個か持つて行くだけだから。危ない目に合うのも俺だけだから」

あー、やばい。傍から見ると宜しくない光景になっている。こういう時にあ荒の娘潮とかあの娘村2に見られると面倒な事態を引き起こしかねない。

「取りあえず9個持つて行くから記入しといて。次に来た時に補充するから。よろしく」

勝手に深読みしてある事ない事を言い出す前にドアを閉めた。そして後ろに感じる気配。振り返るとそこには……

「…………ふ、不審者ですか」

陽炎型の制服を着ている。髪は黒くて後ろは背中に掛かるぐらいの長さ。知らない娘ですね。

「……………違います」

「否定するのは不審者だからですね。こんな所に作業服を着た男の人が居るのはおかしいじゃないですか」

うーん、今度から腕章か何か用意しようかな。こういう事を回避出来そうな気はする。とか思っているけどドアが開いた。吹雪ちゃんが顔を出す。

「お、親潮ちゃん。その人は怪しい人じゃないから」

「でもさつきそこに押し入ろうとしてましたよね」

「あれ、何してるのよ親潮」

「どないしたー?」

陽炎と黒潮が戻って来た。この状況を見て何となく察したらしい。

「親潮、その人が後藤田さんや」

「あんた早とちりして何か言っただけでしょーね」

「え……後藤田……さん?」

「どうも、不審者の後藤田です」

2人が「あちゃー」と言う顔をした。これぐらいの事はしてもいいだろう。

「すんまへんなあ、普段から話はしてるんやけど」

「親潮、午後に戻って来るんだったわね。それを見越して伝えとけばよかったわ」

「まあまあ。こつちも次から見た目で分かるように何か工夫するよ」

「し、失礼しました。陽炎型4番艦の親潮です」

「ウチの直ぐ下の妹や。ちーとだけ融通利かん所あるけどな」

そんなこんなで事案化は回避された。まだ全員揃っていないのでもう少し休んで貰おう。

旧棟・内部調査3

不審者呼ばわりされたけど俺は気にしません。気にしません。大事な事なので2回
言いました。

「戻りましたー」

「やっぱりないなく、後でまた探すかあ」

夕張&秋雲が戻って来た。まだ全員じゃない。

「浜風、戻りました」

「午後はどうするのじゃ」

「全員揃ってからお報せします」

それから10分ぐらい掛けて全員が揃った。午後の作戦を説明する。

「ここに殺虫スプレーが9個あります。1人1つ持って貰います。夕張さんは午前同様にドローンの操縦をお願いします。それで――」

一呼吸入れる。さて……

「皆には出入口周辺で壁や天井を見張って、移動する暗闇の出現に備えて貰います。自分分は1人で炊事場の中を探ります。ドローンは近くに居て貰って死角を警戒。もし遭

遇したら全速力で逃げますが、ドローンは事前の通り陽動を開始。もし食い付けば成功。食い付かない場合は仕方ない。こんな感じで行こうかと」

「チャレンジャーやなあ。下手すると飲み込まれてまうでえ」

「前より走る距離は短いから逃げ切れないって事はないと思う。多分だけど」

「何となくですけど、建物の外までは出て来ないような気がします」

綾波の言う事は自分も感じていた。どうにも奴らはあの中だけが行動範囲のように思う。それが何かを意味しているのかまでは分からないが。

「確かに、外へ出て来ないのならドローンが2階へ行く事でそちらに引つ掛かる気もするが」

「全ては仮説でしかない。行動するのが一番早いと私は思う」

「同感です。危険はあるでしょうが、ここは踏み出すべきかと」

「予備もジャンク品なんで壊す勢いでやっちゃいましょう」

初月・響・浜風ともに概ね反対意見はないようだ。ここで親潮を見やる。

「んーと……参加する？」

「皆さんが何をしていてこれから何をするのが分からないんですが……」

「説明したげるわね」

陽炎がここまでの経緯を一通り説明。顔の上半分が次第に青くなり出した。

「……あそこにそんなのが潜んでいるとは」

「無理に混ざる必要はないよ」

「いえ、見学だけでも」

「何かあつたらすぐ逃げや？」

「1人増えたので殺虫スプレーも1つ追加する。総勢10人で再び旧棟に足を踏み入れた。」

「親潮ちゃん聞こえるー？」

「はい。大丈夫です」

ハンズフリーのイヤホンも同様に1つ増やし、夕張さんとの情報共有も出来るようになった。まず問題はないだろう。

「そうそう後藤田さん。今回はドローンの映像をPCでキャプチャーしてますから後で確認出来ますよ」

「キャプチャー？」

「画面を録画して映像に残してます。あれでしたらデータのコピーもいいですよ」

「録画、そんな事が出来るんですか」

「生配信とかで使われてる技術ですねー。そんな難しいもんじゃないです」

「すげー、俺には縁のない技術だ。でもちよつと勉強してみようかな。」

「んじやあ本日3回目探索と行きましよう。こっちは大丈夫でーす」

「では追従をお願いします。皆はここで待機。もしも遭遇したらすぐ逃げる事」

9人の駆逐艦を残して俺だけ炊事場に向かった。ドアを前に深呼吸する。

「……よう」

炊事場の引き戸を開けた。前はここで僅かな光から逃げるスス〇タリを見たのだが、今回は遭遇しなかった。まず一步だけ踏み込む。

「いつもの食堂に比べたらこじんまりしてるなあ」

当時ここに居た駆逐艦はこれぐらいで十分な人数だった事が窺える。誰から誰までがここで生活していたメンバーだったのか少し気になるが、それを聞き出すのは無粋だろうか。

「ここは開けっ放しでいいな。さすがに勝手には閉まらんでしょ」

目の前で起きているのは心霊現象の類ではない。それだけが救いでもあった。

「後ろ、大丈夫ですか?」

「今の所はって感じですね」

後方を見張って貰えるのは有難い。遠隔操作でも背中合わせなのは実感出来る。でもそれで惚れたりはいしない。

「……テーブルのある区画はクリア、と」

まだ何も起きていない。それよりも連中の糞がこの辺に無い事がおかしい。奥の調理区画だろうか。行きたくないが行くしかない。

「先に進みます。あの奥は下手するとアマゾンの奥地かそれぐらいの何かと思ってもいいかと」

「地獄の一丁目ですか、拝んでやりましょう」

恐らくだけど食事を受け取るであろうカウンターがあつた。横にある通用口から調理区画に足を踏み入れる。昨今の小学校で給食調理場がある所は少ないと聞くが、ここは昔の設備がそのまま残っているようだ。

「……お、糞がポツポツとあるな」

黒い米粒のようなのが無数にある。正しく連中の排泄物だ。しかし不思議な事の一つとして、何を食べているのか気になる所だ。まあ雑食だから木でも食っている可能性はある。となればだが、下手するとかかなり高額なりフォームが必要？

（俺が気にしても仕方ないな。取りあえず調査続行）

大きな寸胴。それを凌ぐ超巨大鍋。様々な調理器具。どれもこれも糞だらけだ。ここを復活させるなら再利用せずに捨てて新しいの買う事をお勧めする。

（つてなれば建て直した方が色々安全だよな……まあ俺が口を挟む事ではないけど）

何だか自分に言い訳をしているようだが実際問題として口を挟める立場じゃないのは事実だ。そもそも部外者だし。

「アレ、居ませんねー」

「上の方に何か美味しい物でもあるんですかね」

「映像だとそれらしいのは見えませんでしたけど、あそこに何かあるかは書類を作つてなかつた気がしますから何とも……」

その気になればすぐ見に行ける場所だったから作つてないのも無理はない。こんな状況になつてるなんて予想も出来ないから仕方ないでしょう。

「おや……この糞は」

最初にここへ入った時に見たのと同じに見える。すっかり干からびているのでかなり日数が経っているようだ。

（アレが居ない時間帯にここへ忍び込んでいるのか……何らかの棲み分けが存在するか）

と思つている所へ響の声がイヤホンに入り込んで来た。

「聞こえるかな。今、どの辺に居るんだい？」

「今は……奥の調理区画に入った所」

「そこからもつと奥にドアがあるのは分かる？」

「もつと奥？」

奥には業務用の大きな冷蔵庫が何台か並んでいるからドアは見えない。でもあの並び方だと奥に空間があるのが分かる。左の方からその先に行けそうだな。

「業務用の冷蔵庫で見えないけどその先がありそうだね」

「今、私たちは炊事場の出入口がある廊下の奥を見ているんだ。天井から何か黒いのがその奥のドアに流れ込んでいます。戻って来てしまったみたいだよ」

「あれは本当に虫かの？」

「やっぱ別の生き物やろあれ」

「うわあ、あれが全部G？」

初春・黒潮・陽炎の声もした。本当に全員でその光景を見ているらしい。

「……戻るか」

「あ、今、奥の方で何か動きました」

冷蔵庫を注視した。何か分からないが冷蔵庫のふちに沿って黒いのがゾワゾワと蠢いている。後ずさりを始めた次の瞬間、冷蔵庫だけでなく他の調理器具や調理台を飲み込みながら一気に近付いて来た。

「退避！」

「はい！」

全力疾走で炊事場から脱出。ドアから出た瞬間に左を見ると、向こうからも別の集団がこちらに迫りつつあった。

「皆も逃げろ！ 早く！」

「私は予定通りこのドローンを2階に上げますね」

移動する暗闇の衝撃を目の当たりにした彼女たちも大急ぎで正面出入り口に向けて走った。しかし、ここでアクシデントが発生する。

「ひい！」

「あ、ちよ！ 親潮姉！」

「親潮姉さん！」

想像を絶する光景を見た事で完全にパニックへ陥った親潮は一人で反対側の奥へ逃げてしまった。それを浜風と秋雲が追い掛けていく。

「親潮！ そつちはダメよ！」

「秋、浜！ こつちや！ はよ戻りい！」

「追い付かれる！ 行つてはいかん！」

「早く出ないと飲み込まれます！」

3人を追い掛けようとした陽炎と黒潮は初春&綾波に抑えられる。そこに合流した広樹も陽炎と黒潮たちを外に押し出そうとする傍らで廊下の奥へ逃げた3人を視界の

隅に収めた。元々は職員室だった所を再利用した会議室に飛び込む所までを見届ける。「引つ掛かりました！　あまり多くないですけどこのまま引き摺り回してみます！」

移動する暗闇の大体3分の1がドローンの陽動に引つ掛かる。更に3分の1が奥へ逃げた親・浜・秋を追い掛け、残り3分の1が広樹たちに迫った。

「まず外に出る！　早く！」

何とか建屋の外に出た。玄関先まで追つて来た集団は急にUターンしてまた炊事場の方へ消える。その行動原理が不明な所が怖い。

「3人を追わなきゃ！」

「落ち着くのじゃ、今入ればまた彼奴等が現れる」

中に戻ろうとする陽炎に初春が釘を刺す。確かにもう1度踏み込むには早すぎる。

「そつちから窓を開けて3人を外に出せないか？」

初春が外側の窓を見て言った。会議室までの距離は左程ではない。つてか、旧棟を正面に見て1階右側にズラーっと並ぶ窓は全て元々が職員室の所である。

「手っ取り早い方法だね」

「中にもう1度入るよりは安全だと思えます」

響と綾波もそのやり方に賛同。俺も賛成だ。

「夕張さん、状況は」

「2階をグルグルしてます。そろそろ3階の方に行こうかと」
「そのままお願いします」

一方 会議室へ逃げ込んだ3人

「秋雲、そつちの窓が開いてるから閉めて！」

「かつたいんだけどこの窓！」

廊下側の窓が幾つか中途半端に開いている。錆か立て付けが悪くなったかで動かない。

「あー！ 駄目だ浜姉、すぐそこまで来た！」

窓から見える廊下が黒く埋め尽くされ始めた。このままでは危険である。

「下がって！」

秋雲が離れた瞬間に僅かな隙間から続々と侵入して来た。自分たちが入って来たドアの部分は完全に覆われてしまう。

「ど、どうしよう浜姉！」

浜風は辺りを見回す。こんな数に殺虫剤をやっても焼け石に水。長テールブルではどうにも出来ない。ソファも同様。衝立を投げ付けても大した意味はない。あとは青くなつた秋雲としゃがみ込んで震える親潮だけ。

「あの奥に入って！」

視界に映つたのは部屋の隅にある防火扉だった。他は木造だが防火扉は鉄製に見える。その周辺も金属で作られているらしい。

「あれ!? 入れんの!?!」

「分からないけど早く! 親潮姉さんを立ち上がらせて!」

防火扉まで走る。ドアノブを捻ると重苦しい音と共に開いた。中には何らかの配管が通っているがスペースは広い。採光用らしい窓もある。もうここに入るしかなかった。

「親潮姉! 立って!」

「あれ幻よね、そうでしょ」

「ところがどっこい夢じゃないの! 立ってお願い!」

「姉さん早く!」

浜風も混ざり2人で親潮を肩車して防火扉の中に入った。内鍵も閉めたから入って来ない筈だ。隙間があつたらどうなるか分かつたものではないが……

「…………どう?」

「静かに」

耳を澄ませる。特に音は聞こえない。

「……………大丈夫、かも」

「でも袋小路じゃくん。どうしようか」

「ごめんね、2人とも」

「取りあえずその窓を開けましょう」

親潮を座らせた浜風は採光用らしき窓を開けた。しかしそこには鉄格子が姿を現す。窓のサイズは大きいがこれでは外に出れない。ため息を付きかけた所へ黒潮がやって来た。

「あ、無事やんな？」

「はい。まだ無事です」

広樹以下、全員も到着した。広樹が鉄格子の状態を確認する。

「何の鉄格子かと思つてたけど配管室とかだったのか。太さは10センチぐらいかな。中も空洞っぽいいけど錆があんまりないから手で切るのは……………」

「何か工具探してくるわね」

「せや、物置に消火斧あつたわ。あれなら壊せるんちゃう？　ここやと電源もないし」

「取りあえずそれを持って来て欲しい。何人か中に入って連中の気を引いてくれるかな」

「任された。廊下に引きずり出したらあとは外に出るだけで十分じゃろう」

「Заметаю」

「急ごう、早くしないとここに入つて来てしまう」

「切斷した所に手を触れると危険です。厚手のタオルか何かを持つて来ますね」

初春・響・初月はまた中に戻つて後ろから移動する暗闇の気を引くべく向かつた。綾波は現駆逐艦寮に行つて脱出時に使う厚手の布類を探す。陽炎と黒潮も消火斧を取りに行つた。

旧棟内部 会議室前

「宜しいか」

「後ろは見張つてる」

「踏み込もう」

初春と響が中に入った。足をドンドン鳴らして気を引き付ける。

「こつちじゃこつち」

”自主規制”

響が何を言つたか定かではないが、防火扉に迫っていた移動する暗闇はまんまと陽動に引つ掛かつた。そのまま出入口まで引き摺り出される事になる。会議室の方に戻つたらまた中に入つて同じような事を繰り返した。

陽動が3回目になった頃、陽炎・黒潮・綾波が戻つて来た。消火斧を広樹に手渡す。
「よし、皆こつち側の壁に背をつけて」

3人は言われた通り外に面した壁に背中をつけた。これで破片も飛んでは来ない筈。
「せーの！」

鉄格子の下部分に向けて消火斧を叩き付ける。一気に数本がへし折れた。

「もいつちよ！」

2〜3回で下は全部切れた。残りは上だけ。同様に叩き折る事に成功。

「早く外に！」

綾波が予備の毛布で千切れた鉄格子の下を覆う。これで怪我もしないだろう。

「秋雲、先に」

「んじゃその次は親潮姉だね。引つ張るから押し出して」

最初に秋雲が外に出た。続いて親潮を外側と中側から同時に押したり引つ張りして外に出す。

「浜姉も早く！」

「腕伸ばして」

「お願いします」

中から外に押し出す力がない状態で引つ張り出すのは少し骨が折れた。浜風は窓枠

の所に膝を置いたが、勢い余つて飛び出す形になった。広樹に思いつきりぶつかる。「す、すいません、失礼しました」

「OK OK、何とかなつた」

一安心である。でも広樹は、その”感觸”に暫く苛まれるのだった。

「夕張さん、そつちどうですか」

「壁にぶつけてダメにしちゃいました。でも誘導出来るつてのが分かつただけでも幸いかと」

「分かりました。今日はここまでにしましょう。今後の事はまた打ち合わせで」
「はーい、了解です」

収穫：移動する暗闇は誘導が可能（つばい）

炊事場奥の廊下（行き止まり）付近に連中の抜け道らしきものあり

アクシデントもあつたが、取りあえずでも欲しい情報は集まつたので今日は解散となる。しかし抜け道をどうにかしないと一階の安全確保は難しそうだ。この辺も何か対策が必要になるだろう。

あなをほる 1

旧棟内部調査から少し時間が経った。次の打ち合わせもまだ決まっていないうが提督さんより別件の依頼が舞い込む。な訳で今日も鎮守府にやって来ました。関係者用出入口から我が物顔で入って司令部棟に車を付けそのまま執務室へ。

「後藤田です、失礼します」

中に入る。そこには提督さんともう1人、見た事のない人物が居た。青い迷彩服と何かこう、紋章の入った帽子を被った人も居る。

「どうぞ、こちらへ」

「はい」

促されるままソファに座った。見た事のない人も自分から見ても斜め右に座る。更にその隣りへ提督さんも座った。

「この間がありますとうございました。それで旧棟の事が片付かない内に別件のお願いで申し訳ないんですが、まずお話を」

「はあ」

視線を隣に向ける。新たに気付いた事として、肩から腕に掛けてこれは何だろう、腕

章のような物を着けていた。そこには漢字で「守警」と書かれている。どういう意味だ？

「鎮守府警備隊を預かっている武田たけだと申します。いつもお世話になっております」

警備隊を預かる？ うん？ 門の人たちの上司？ え、鎮守府警備隊長？

「……いえ、こちらこそ」

「実はちよつと困ってる事がありまして。こちらをご覧下さい」

タブレットを渡された。恐らくこれは備品の筈。落としたら拙い。

「再生してみてください」

「はい」

ディスプレイの再生ボタンを押す。高感度カメラのようだが、角度的に監視カメラの類ではないらしい。地面に水平に置いた状態なのがそれを物語っていた。映っているのは何所かのフェンスだろうか。

「……おっ」

暫くすると地面から何かが出て来た。顔は細くて特徴的な模様がある。タヌキのような体だが耳はかなり小さい。コイツは……

「……………アナグマっぽいですね」

「やはりですか」

本来はまあまあ標高の高い所に住む動物である。しかし昨今は平野部にも進出して巣を作り、家の軒下や基礎の所に穴を掘って住み着くパターンもあるようだ。

「実は敷地を覆っているフェンスの所の下に穴を掘られまして、こうやって忍び込んで来ている状態なんです。残念ながら野生動物を撃退出来る装備類がないもので」

うん、正門の人たちは普段から自動小銃を持っているがあれで撃つ訳にもいかんでしょう。

「何か実害は出ていますか？」

「今の所は何も。ただ、保安上の観点からあまり宜しくないと判断した次第です」

そりゃあ鎮守府の敷地内に穴を掘って住み着かれるのは良くないし、埋めるとなってもそう簡単にいく話でもない。それにコイツ、いや、野生動物全般に言える事だが病気を媒介させる可能性も高いのだ。

「そうですね、鳥獣保護法の枠に入っている動物ですので、駆除並びに捕獲となると少し時間が必要になります。そこを目指しつつ、超音波の類で遠ざけるのも試してみましよう。本当は電気柵か何かで1度痛い目に遭わせれば手っ取り早いんですが、あれは準備も費用も馬鹿になりませんので」

「引き受けて下さいますか」

「片手間になってしまうのはご理解下さい。そもそも、罨を用いた狩猟は待つしか出来

「ませぬので」

「契約成立。まず現場を見せて貰う事になった。場所は倉庫群の裏である。」

「()ですね」

敷地と森を区切るフェンスが長い列を作っていた。その一部の所、地面にポツカリと穴がある。向こう側にも出入口っぽいのが見えた。散乱する土が証拠だ。

「……因みに他にあつたりは」

「まだ()だけです。見回りも定期的にやっておりますが、何せ向こうは手つかずの自然ですから分け入るだけでも大変で」

「向こう側の森の密度はかなり濃い。記憶が正しければ旧棟の裏もこの方向に面している筈だ。となれば、鎮守府の外から森に入つてここまで来るのはそれだけ骨が折れる。無駄に疲れる作業になつてしまうだろう。」

「そう言えばアレが入り込んでいてるって事に誰が気付いたんですか？」

「巡回中の者です。タヌキのような動物がノソノソと歩いていたので追い掛けるとここに辿り着いたと」

確かにタヌキっぽくもあるがアナグマはイタチ科だ。目があまり良くないらしくて動きがとても遅い。足の速い人なら逃げるアナグマに追い付ける可能性もある。

「後日、機材を持ち込ませて頂きます。念のためゴミ置き場なんかの監視をお願い出来

ますか。雑食性で基本的には何でも食べる動物なもので」

「分かりました」

まずやるべき事は自治体への申請だ。続いて罠の準備。アライグマの時に使った折り畳み式の箱罠を持って来る事にしよう。申請が通るまでは何所かに置かせて貰うとして、超音波発生器での撃退を試す。

どうでもいい事なだけどアナグマの顔の模様がチャバネールの模様に似てて何となくだが嫌悪感を覚えていたりもする。多分これは俺だけの筈。

あとは伝手を頼って同業者に話を聞いてみるのもいいだろう。

害獣専門業者

とろい。ただ罠に入るとそれなりに抵抗するから気をつけろ。

ハンター（二種銃猟）

警戒心が薄すぎて近寄って来るんだよなあ……

ハンター（一種銃猟）

人間慣れしちまうのが悪い所だ。思いつきりビビらせないと棲み分け出来ん。

話を聞く限りではある意味でやり易く、ある意味で厄介な存在のようだ。人に慣れた野生動物は棲み分けが出来なくなつて餌を求めて近付いて来る。観光地なら少し話は変わつて来るが、そうでない所はお互いの線引きを脅かす事になり、悪い結果を引き起

こす要因にもなる。この辺は難しい部分だ。

「さてと、役所に申請は出したから取りあえず超音波器具を揃えるか」

アライグマの時にも折り畳みの罨はメンテしてるからいつでも使える。コイツをハイエースに積み込み取り寄せた超音波撃退アイテムも持参。これを設置する傍らで下準備をするため鎮守府に向かった。

「お疲れ様です」

「お疲れ様です。停止位置までどうぞ」

ハイエースを規定の所まで進める。例の読み取り機で確認が終わったので車を奥に進め、倉庫群までやって来た。当然だが罨を置かせて貰う許可は取ってある。

「この辺でいいかな」

穴がある所から少し距離を取った。嗅ぎ慣れない匂いで警戒されるのを防ぐためだ。

「よっこいせー」

いくら折り畳みの軽量タイプとは言えそれなりに重い。持ち込んだのは2つ。作戦としては、穴の近くに1つ。もう1つはアナグマが通っている道を見つけてそこに置く予定だ。目が悪くても動物の嗅覚は鋭い。道を見つける作業もあまり時間を掛けたら匂いが残ってそこを通らなくなる可能性も考えられる。

「ビニールシートで包んで、張り紙してと」

張り紙には「罨在住 触らないで下さい 後藤田プロテクトクリーン」と書いた。続いて超音波器具の設置に向かう。

「えーと……ここに置いてみるか」

穴から一番近い倉庫の基礎の所を少しだけ掘り返し、そこに超音波器具を軽めに埋める感じで設置した。電池式でひと月は持つらしい。完全防水ではあるようだが、もし大雨が降ったら確認した方がよいな。効果範囲は約150mとも書いてある。

「次は、通り道をさがしましょうかね」

地面によく目を凝らして足跡を探す。アナグマの足跡はタヌキに近いそうだ。日義さんの手伝いで山に入った時にタヌキの足跡は何回か見ているから多分分かると思う。

因みにアライグマの足跡は他の動物と明らかに違うから分かりやすい。指が長く長いに、前足は殆ど人間に近いのだ。

「……………これ怪しいな」

フェンスを背にしてすぐ右にある倉庫の脇道に入った所、それっぽいのがあった。ここから敷地の中に向けてずっと続いている。踏み潰してしまわないようガニ股気味で道を抜ける。その先は当然だがアスファルトなので、足跡は途絶えていた。しかしよく見ると境目のブロックに土が付着している。ここを使っているのは間違いなさそうだ。

「向こう側にカメラを置かせて貰って、使っている道かどうかを見極めるか」

これは後でお願いしよう。お次は各寮を回って聞き込みをしておく。今の所、警備の人たちから報告はないのでゴミの類を漁ってはいないようだが、何所で何を食っているか分からないのでやっておこう。

あと不審者扱いを警戒して腕章も作ったから付けておく。

駆逐艦寮

今日の当番は睦月&如月だった。

「アナグマが入り込んでるんだけど見た事は？」

「どういう姿なの？」

「こんなやつ」

携帯の画像を見せる。

「ほおお、もこもこしててかわいいにゃしい」

「モフモフねえ」

うーん、そこで和まれると駆除ってのはちよつと言ひ辛い。

「その感じだと見た事はないんだね」

「ごめんなさい。ちよつとここを空けてて、昨日戻って来たばかりなの」

「すんごい疲れたのですう」

「じゃあ仕方ないか。皆にも聞いてくれると助かる。それじゃ」
続いて軽巡、重巡と回ったが収穫は無し。お次は潜水艦寮だ。

潜水艦寮

「ごめんくださいーい」

「はーい」

「この声は大鯨さんですね。」

「あら、暫くです」

「どうも。この動物を見掛けた事はありませんか?」

画像を見せた。5秒ほどで首を捻られたので見た事はないのだろう。

「申し訳ありません。私はちよつと」

「分かりました。もし見掛けたら提督さん経由で一報をお願いします」

そこへ、聞き慣れない声が近付いて来た。不審者扱いされませんように。

「大鯨さん、ただいまー」

「も、戻りました」

「はーいお帰りなさい。あ、お会いした事は……」

「初めてですね」

「ですよ。2人とも、害獣害虫駆除業者の後藤田さんよ」

振り向くと、まあその、スクール水着っぽいのを着た艦娘が2人居た。明らかに潜水艦なのでしょうね。頭に被っているのがとても特徴的である。

「後藤田です。週に何回か来ていますのでよろしくどうぞ」

「お、噂の後藤田さんだね。伊号潜水艦の伊14、イヨだよ」

「えっと、伊号潜水艦、伊13です。ヒトミ、です」

潜水艦とはあんまり絡みがないので少し取っ付きにくい。

「2人にもちよつと聞きたいんだけどこの動物を見た事はあるかな」

アナグマの画像を見せた。すると、イヨの方が反応する。

「あー、この前だったかな。戻って来た時に堤防の近くで何かウロウロしててさ、何だろうなって見てたら森に消えてったんだよ。これかも」

「そうなの？ 私は、ちよつと気付かなかったけど……」

「堤防かあ。見に行きたいけど向こうは別の許可証が居るんだよなあ」

俺が出入りしているのは港湾施設より手前側だけだ。ハイイロゴケグモの時みたい
に、あの辺へ行くのは違う許可証が必要になる。

「じゃあ私から聞いてみますね」

大鯨さんが執務室に電話を掛ける。付き添いに許可証を持たせて向かわせるから、

待って貰うようにとの事だった。

15分後……

「やつほー、お待たせー」

わー、伊勢さんや。話しやすいから有難い。

「お疲れ様です」

「暇だったからいいよー。動物相手なら私戦艦の方がいいだろうって事でね」

「すいません、ありがとうございます」

「んじゃあこれ、許可証」

イヨを先頭にアナグマらしき動物を見た所まで案内して貰った。港湾施設の方へ向かう。

「そう言えばハイイロゴケグモはどうになりました？ 自分もすっかり忘れてて申し訳ないんですが」

「定期的に薬撒いて夕張がドローンで天井の辺りとか見てるよ。今の所は問題ないかな。でも季節が一周するまでは何とも言えないよね」

「まあそうですね。完全に居なくなったかどうか判断するのは時間が掛かりますから」
海の匂いがして来た。港湾施設周辺に足を踏み入れる。ちよつと久々に来たなあ。

「えーとね、あの辺かな」

イヨが指差す先を見る。そこは岸壁が終わる部分で、地面との境目でもあった。あとはひたすらに森が広がっているだけだ。

「ちょうど境界線の辺りか」

近付いて地面に足跡がないか調べた。すると、倉庫の隙間で見たのと同じ物がある。

「……正解っぽいな」

「本当？ あれがそうだったんだ」

「警備の人たちが言ってたヤツね。ここまで入り込んでるんだ」

「夜行性みたいですけど昼間も普通に活動してるって聞きますからね。何をしようとしてるかまでは分かりませんが、行動範囲は意外と広い可能性が——」

ガサガサと音がする。顔を上げると、森から出て来たアナグマが堂々と前を通ろうとしていた。歩きながらこつちを一瞥してそのまま歩き続けるも、10歩くらいで停まってもう1度こつちを見た。「ヤベツ」とでも言いたげな仕草で森に走って引き返していく。

「……………居たね」

「居ましたね」

「そうそう、あれあれ」

いや、野良猫を見掛けたような空気を出している場合じゃないだろ。にしても呑気な動物だな。

「ちよつと追い掛けて見ましょう」

「イヨ、あんたは戻つてな。ヒトミが心配するから」

「はーい」

伊勢さんと2人で森に分け入った。こうなると小さい方が有利だけど、行ける所まで追跡してみよう。

あなをほる2

アナグマを追い掛けて森に入った。中途半端に大きい木々を掻き分けて進む。

「いでー」

押し退けた枝が手から外れて顔に当たった。地味に痛い。

「いったー！」

後ろの伊勢さんも細かい枝が当たっているらしい。ズボンじゃないから尚更だろう。

「大丈夫ですか？」

「平気平気、どうって事ないよ」

しかしまあこれは視界が利かない空間だ。足元も悪い。

「あれ、どこ行った」

見失った。流石にこの状況は動物の方が有利である。無理に進んでも怪我するだけだ。

「すいません、見失いました。戻りましょう」

「あちゃー。でもまあ、変なのに遭遇してもあれだしね」

イノシシでも出て来られたら逃げるしかない。さっさと退散するのが吉。

って訳で執務室にやって来た。許可証を返すのと一応の報告を兼ねている。

「堤防の付近を見させて貰いましたが、実際に遭遇しました。森の中へ逃げて行ったのを少し追い掛けましたけど、見失ってしまったので戻った次第です」

「そんな所まで入り込んでいるとは……」

「何かこう、餌を探してるって言うよりは散歩してる感じだったよね」

「今日もいい天気だなく霧囲気はありましたね」

正直言うと、放っておいてもいいような気がする。まあ仕事なのでそれなりの業務はさせて頂きますが。

「許可証の方は一報下さればお渡し出来るようにしておきますので何時でもどうぞ」
「ありがとうございます」

カメラの件もOKは貰えた。今日は持って来ていないので設置はまた今度にしよう。

後日、旧棟の打ち合わせついでにカメラを持って来た。倉庫の正面が映るようにセツトする。隣には「調査のため撮影中 移動厳禁」と両面に書いた立札も立てた。

「まあこれでいいでしょう。さて、打ち合わせ打ち合わせ」

「っしやー！」

急にタツクルされた。何なんですか畜生。

「奇襲成功、油断したね」

「あー、久しぶり？」

「出張が重なって居なかつたからねー。元気？」

「あんまり」

「どして」

「旧棟」

「……うん」

久々に白露嬢に絡まれた。ここ最近見掛けなかつたのは不在だったからの模様。

「んで、何か用？」

「そうそう、後藤田さんライン教えてー。鎮守府防除連絡網つての作つたから招待する

ね」

「……え、個人の端末？」

「そうだよー。仕事用と個人用で2台持ち。仕事用は経費だけど個人用はみんな自分の

お金で使ってるから」

いつだかに携帯のゲームはキャリア決済だのと言つた夢の無い話を聞いた気がする。

特定の艦娘はかなりの通信料を払ってそう。俺と親父も仕事用と私用で2台持ちだ

が、今回は仕事用の方を出す。当然でしょ。

「えーと……QRを読むんだっただか」

「こそ」

普段は使わないから分からん。ガラケーだったらカメラモードで読み込めた気がするがどうやるんだっけ？

「……カメラで読めないだど？」

「 구글렌즈使わないと」

何それ、美味しいの？

「ちよつと貸して」

スマホを奪われた。手慣れた動作で登録されてしまう。最近の若い子は凄いですね
(三十路手前並感)

「はいオツケー、何か適当にコメントしといて」

「適当……」

【鎮守府防除連絡網】

後「後藤田です。招待されてしまいました」

しぐ「姉がすいません」

ひびきん「Z d r a v s t v u j t y e」

吹「旧棟以外ならお手伝いします」

佐々波「(*・ω・)っ亘」

アヤナミ「お疲れ様です」

何だろう。女子中学生のライングループに1人だけ三十路手前の男が居る滑稽なこの感じ。担任の先生かな？

「やばそうな動物とか虫を見掛けたら皆ここに書き込むからよろしく」

「これは何、どういう用途？」

「普段からそういう情報が見れば便利かと思って」

そりや便利ですがね。まあでも、彼女たちの間での情報共有って側面もあるのだろう。こつちも何をいつどれくらい見掛けたか分かればその頻度によって対処の優先順位を付けられるかも知れない。かも知れない。

「……有効に活用させて頂きます」

「はい。んじゃ」

「ここで別れて旧棟の打ち合わせに向かった。防火扉の件について話を詰めていく。」

2日後……

「さーて映ってるかな」

映像の確認に来た。取りあえず電源を1度切ってバッテリーを交換する。武田さんからは特に何処そこで見掛けたとの話もない。連絡網でもアナグマの目撃情報はなかった。

「……お、居る居る」

やはり倉庫の間を道として使っているようだ。そこから出て来て数時間後にまたそこへ入って消える。

「つて事は、奥の方に罠を置いておけばいいか」

問題は捕獲出来るかである。既に自治体からの許可は下りたのでいつ始めてもいいが、罠に仕掛けるための餌がない。一旦店に戻って取って来るとしよう。

「行つて戻つて1時間かな。どれさつさと」

「あー、済まない。急ぐ所か？」

振り向くと長門様がいらっしやった。今日もイケメンですね。

「……内容によりますね」

「ここ2、3日、寮の近くで蛇が出るんだ。偶然にも写真に撮れたから見て欲しいんだが」

「分かりました。拝見します」

「ママシかな？ ヤマカガシかな？ 取りあえずスマホの写真を見た。」

「……………シマヘビですねこれは。毒はありませんので放つておいても大丈夫です」

「そうか。因みに何所で他の蛇と見分けたいんだ？」

「えーと……………シマヘビは首の付け根から尻尾の先まで一本の線が幾つか走ってるんですよ。これはママシにもヤマカガシにもない特徴です。ヤマカガシは全体的に毒々しい感じで朱色に近い斑点が特徴ですね。これは大人になると薄くなってしまう事があるんですが、顎の下が全体的に白っぽいのもヤマカガシだけです。そこで見分けられると思います。ママシもそういう個体が居ますけど、ママシは規則的な模様が体全体にあるので分かりやすいかも知れません。模様の方に規則的に分け目のような色が入ります。因みにアオダイショウは魚の鱗みたいな模様をしていますのもっと見分けやすいかと」

「……………なるほど」

「しまった。長門様の頭上に「？」が浮かんでおられる。情報が多すぎた。」

「……………近々で何か資料を持って来ますので、それを寮の方に張りますね」

「申し訳ない。取りあえずこの蛇については毒がない事を周知させておく」

「ああは言ったが、蛇の見分けはキノコと同じで簡単に判断出来ない。個体によって色

も変わったりする。

因みに沖縄では在来種のハブと特定外来生物のタイワンハブが交雑してやべーのが勢力を広げているとか何とか。交雑つてのは米で言う所の品種改良だが、野生動物になると話が変わって来る。生態系への影響が懸念されるのだ。

と、講習会で習いました。以上。店に戻って餌を取って来ます。

後藤田プロテクトクリーン

「戻りましたけどまた出ますよー」

「広樹ー、来週の子ども会のお祭りで助っ人して来い。金物店の伊藤さん事故つてーか
月入院だとさ」

親父から聞きたくない事を聞かされた。面倒くせえなあ。

「……何で俺が」

「正規の労働人口で最年少だから」

「小中の同級生何人か居ますよね」

「全員お仕事」

人身御供か畜生。

「……へーい」

「んじや会長には連絡しとくから」

こう考えると、次期経営者が独身つてのはこの商店街においてデメリットになるような気がする。結婚相手？ 彼女も居た事ありませんが何か。

「そいじやもう1度出ます」

餌を取つて出発。来週の事は考えないようにしよう。旧棟に比べりやまだマシだし。

マシだよな？

つて訳で鎮守府に戻る。罨を組み立てて奥に運んだ。フェンスの下に掘られた穴の近くに仕掛けて餌も取り付け準備完了。もう1つは倉庫の隣の隣に置いた。

「こんなもんかな。あとは祈るだけだ」

実際、祈るしかないのだ。マタギのような追い込みは出来ない。

「今日はこれでお終いと。立札は回収して……」

罨を仕掛けた事を武田さんに報告しておく。定期的に見てくれるそうなので罨に掛かれば連絡があるだろう。しかし時間が余ってしまった。次の打ち合わせはまだ決まっていない他に案件もない。このまま帰つてもいいがそれも何だか寂しい。

「……おやつでも食うか」

間宮さんの店に足を向ける。何か新商品に出会えるだろうか。

また久々に客として訪れた。暖簾を潜ると伊良湖ちゃんと遭遇する。

「あ、いらつしやいませ」

「どうも。今日は仕事関係ないです」

「はい。お好きな席へどうぞ」

こうでも言わないと何かあったと思われる。そんな人間になってしまったのがちよつと辛い。

「……くるみのお汁粉?」

何だこれは、新メニューか。頼むしかないだろ。

「くるみのお汁粉を」

「はーい、ありがとうございます」

数分後。白い餡に餅が浮いたお汁粉がやって来た。優しい甘さが美味しかったです。

「ふう………これいいな」

こういうのはレギュラーメニューではないから1度しか食べられない可能性が高い。罫を口実にもう1度食べに来ようかな。

なんて思っている所で携帯が鳴った。あれ、武田さんだ。

「お疲れ様です、後藤田です」

「お疲れ様です。さつき巡回の者がアナグマを見つけまして、倉庫の間に入って行ったそうなんです」

「……その後は何かありましたか」

「ガシャーンと大きな音が2回したと」

2回？ どういう事だ？

「えーと……見つけた時は何匹でしたか？」

「1匹と報告を受けています。まだ裏の方には行っていないそうなんです、如何されますか」

見つけたのは1匹で音が2回？ 箱罟は入ったら基本的には一方通行だ。仮に脱出に成功したとしても2回連続つてのは考えにくい。

「……今から向かいます。まだ巡回の方は残ってますか？」

「倉庫の前で待機しています」

「分かりました。自分が行くまでは動かないようにお伝え下さい」

「承知しました」

通話を切つて携帯を仕舞う。2回つてのが解せないが何なのだろう。

「すいません、お勘定お願いします」

「はい。お仕事ですか？」

「アナグマが罨に掛かったみたいですよ。そう言えば間宮さんは」

「今日は食堂で鳳翔さんと新メニューの考案をしています。良ければご賞味下さい」

「タイミングが合えば是非。では失礼します」

店を出て倉庫の方に急いだ。青い迷彩服に防弾チョッキ、ヘルメットに自動小銃と言
う出で立ちの2人が視界に入る。

「お疲れ様です。警備隊の伊藤いとうです」

「同じく高橋たかはしです。アナグマはこの倉庫の間に入って行きました」

「ありがとうございます。音が2回つてのは本当ですか？」

「ええ。何秒かの間を置いてでした」

やはり2つの罨を数秒間隔で切り抜けたとは思えない。もしかして2匹居た？

「……分かりました。奥に行つて見ましよう」

「先行します。我々の後にどうぞ」

「もし他の野生動物が居ると危険です。安全の確認を待つて下さい」

わー、何かの映画みたいだ。そんな事を思いつつ倉庫の間を進む2人の後に続く。

「クリア」

「クリア。アナグマは2匹居たようですね」

「え？」

2つの罠にアナグマが1匹ずつ掛かっていた。何だこれは。番か何かか？

「……まあ、同時って事はこれでお終いだろ」

と言った所で視線を感じる。フェンスの向こうを見ると、1匹のアナグマがこっちを見ていた。「やつべーあいつら捕まっちゃったよ」的な雰囲気を感じる。

「……………カッ！」

野生動物のように威嚇したらそいつは森の奥へ逃げて行った。穴を塞いで超音波器具をもっと増やせばもう来なくなるだろうか。なればいいな。

「……明日にでも超音波器具を増やします。目の前で仲間が捕まれば学習すると思いますから近付かなくなる可能性が高いかと」

「分かりました、ありがとうございます」

「流石ですね。2匹も居たのを見抜いていたとは」

「いやこれは偶然ですよ」

1つ目を無視された時の保険でもう1つ仕掛けていたが、まさかこんな結果になるとは思っていなかった。こいつらは行政に連絡を入れて引き取って貰う事になる。自分で全部の捕獲計画を提出すればトドメ刺しと解体まで出来るが、今回は旧棟の件もあるので労力を抑えたかった。それに1人でトドメ刺しと解体はまだ敷居が高い。日義さ

んに教えて貰わないと。

「罨はこのままでお願いします。明日にでも役所の人間が来ると思っていますので」

翌日、引き取りまでを見届けて罨を回収した。穴の方は埋めてくれるそうなのでお任せする。自分がやるべきは超音波器具を増やす事だ。あれで学習すればもう来ないと思いが果たして……